

HAPPY きんいろモザイク

nao gran

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

イギリスでホームステイをしていた大宮忍に、帰国からしばらく経った高校1年生のある日1通のエアメールが届く。差出人はイギリスで出会った少女、アリス・カータレット。なんと今度はアリスが日本に来るといふ。アリスと忍、クラスメイトの日本少女、小路綾と猪熊陽子、そしてクラスメイトの日本少年、香川圭太と白川浩輔、さらにもう1人のイギリス少女、九条カレンも加わり、7人は金色に輝く日々を過ごしていく。

作者『こつちも投稿しますのでもし良かったら見て下さい。』

# 目次

Episode 1 「ふしぎの国の」	1
Episode 2 「ちつちやくたつて」	15
Episode 3 「どんなトモダチ出来るかな？」	54
Episode 4 「あめときどきあや」	85
Episode 5 「おねえちゃんといっしょ」	117
Episode 6 「金のアリス金のカレン」	153
Episode 7 「はらぺこカレン」	193
Episode 8 「今日はなんの日？」	224
Episode 9 「ねないこだれだ」	254
Episode 10 「すてきな七にんぐみ」	292
Episode 11 「どんなにきみがすきだかあててごらん」	325
Episode 12 「きんいろのとき」	355
Episode 13 「はるがきたっ」	

- 386  
 Episode 14 「プレゼント・  
 フォー・ユー」 421
- Episode 14・5 「圭太とアリス」 458
- Episode 15 「あなたがとつても  
 まぶしくて」 468
- Episode 16 「雨にもまけず」 697
- 501  
 Episode 17 「おねえちゃんとお  
 そぼう」 532
- Episode 18 「きになるあの子」 760
- Episode 19 「マイ・ディア・ヒー  
 ロー」 602
- Episode 20 「もうすぐ夏休み」 629
- Episode 21 「とつておきの一日」 664
- Episode 22 「海べのやくそく」 697
- Episode 23 「ほんのすこしの長  
 いよる」 725
- Episode 24 「なによりとびきり  
 好きだから」(最終回) 760
- 「Pretty Days」 797

『HAPPYきいろモザイク』 T h a  
n k Y o u | 886



## E p i s o d e 1 「ふしぎの国の」

あの日から数年流れた。忍達は高校生になった。新しい朝を迎えた。

忍の部屋では、ホームステイの思い出の写真が飾られてた。

忍の母「忍ー、起きなさいー！遅刻するわよー！」

忍「はいい……」

母の声で眠たそうに起きた。するとまた2度寝した。そこに母が部屋のドアを開けた。

忍の母「しーのぶ。」

また熟睡している。

忍の母「忍！学校！」

その後起きた忍は制服に着替えて靴を履く。

忍「行ってきまーす。」

すると忍は一通のエアメールを見付けた。エアメールを持って登校する。

松木さん「おはよう忍ちゃん。」

忍「あ、おはようございます。」

犬「ワンワン!!」

忍「お、おはようございます。」

犬に吠えられても挨拶する忍。

その頃別の場所では、陽子と綾と圭太と浩輔が忍を待っていた。

陽子「そしたらさー。」

忍「おはようございます!」

そこに忍が遅れて到着した。

圭太「お!」

綾「やっと来た。」

陽子「しの遅い。」

忍「すみません、手紙を読んだら。」



陽子「手紙？」

浩輔「それエアメールじゃねえか！」

綾「もしかして、昔イギリスにホームステイした時の？」

忍「はい！アリスからです！」

陽子「凄え！ふしぎの国か！」

圭太「イギリスだぞ陽子。」

忍「全部英語で書かれてて、読めなくて困ってるんです。」

陽子「読んでたんじゃないのか、ちよつと見せて。」

エアメールを読む陽子。

陽子「おお！本当に英語だ！Dear Shinobu・・・」

忍「私は大宮忍ですよ。」

陽子「おい、もう高校生だぞー。」

すると通り掛かった女性がクスツと笑った。綾は赤面をした。

綾「2人とも後にして！」

気を取り直して登校する。

圭太「手紙来たの初めてなんだな。」

忍「はい。何が書いてあるんでしょう?」

綾「仕方無いわね、見せて。」

エアメールを読む綾。

綾「えっと、日本に来るって書いてあるわ。多分・・・」

忍「凄ーい!綾ちゃん英語読めるんですか!?何時来られるって書いてありますか!?!」

陽子「しのの期待を裏切るな?」

綾「う、うるさい陽子!」

浩輔「頑張れ綾。」

綾「もう浩輔もうるさい!」

上履きに履き替えて廊下を歩く。綾がエアメールを読む。

綾「あなたの学校・・・嬉しい・・・ユニフォーム・・・」

陽子「嬉しいユニフォーム?」

圭太「何だそれ？幸運の服でもあるのか？」

綾「しの靴!!」

忍「ん？」

無意識に忍が外履のまま廊下を歩いてた。

忍「あ！すみません、ちよつと待ってて下さーい。」

急いで下駄箱へ向かった。それと同時に。

???「あの一、そこの方。」

4人「ん？」

目の前を見る4人。そこには、目が青色でウエーブが掛かったような金髪ツインテールの少女が佇んでいた。よく見るとツインテールの左側には黄色い箸と茶色い箸2本を挿していた。

陽子「うわ！金髪少女！」

圭太「俺達の目の前に!？」

少女「シノブと言う女の子を知りませんか？」

陽子「え？しの？」

少女「最近の写真が無くて申し訳無いのですが、この人形にそっくりな子です！」

そう言って何故かこけしを取り出した。

陽子「失礼だなおい！」

そこに、教員の烏丸さくら先生が少女を見付けた。

烏丸先生「あ！居た居た、カータレットさんこっちですよー！」

カータレット「はい！失礼しました。」

カータレットと名乗る少女は、烏丸先生に付いて行った。

綾「カस्ताネット？」

浩輔「カータレットだ。間違うなよ。」

陽子「何か楽しそうな名前だな！」

丁度そこに上履きに履き変えた忍が戻って来た。

忍「お待たせしました。」

その後1—Bのクラスに入った5人。陽子と綾は窓際の席で、圭太は陽子の隣で浩輔は綾の隣の席に座り、忍は教卓の目の前の席に座った。

綾「気になる。」

陽子「うん。」

綾「さっきの子、うちの制服を着てた。」

陽子「いや、そんな事よりしのがこけしにしか見えないのだけど・・・」

綾「そっち!？」

圭太「そっちかよ!？」

そこに、烏丸先生が教室に入室した。

烏丸先生「おはようございます。」

忍「先生！おはようございます!!」

突然忍が元気良く挨拶した。

烏丸先生「大宮さん。今日も元気ね。」

忍「はい!!」

浩輔「圭太、忍って烏丸先生の事になると元気が増すよな。」

圭太「ああ、他の授業でもあれくらい元気でやれば良いのに。」

烏丸先生「いらつしやい。」

すると教室に1人の生徒が入って来た。すると周りが驚いた。

陽子「あ!」

綾「さっきの!？」

圭太「あの子!？」

浩輔 「マジか！」

忍 「アリス・・・？」

入って来た生徒は、先程4人が会った金髪の少女だった。すると少女が忍を見て喜んで抱き付いた。

少女 「シノブ！シノブ！」

忍 「お久し振りです！本当に来てたんですね！」

少女 「うん！シノブに会いに来たよ！」

忍 「アリス日本語!？」

少女の名前は「アリス・カータレット」。かつて忍がホームステイした時に出会った少女。そしてアリスが日本語で喋ってる事に忍が驚いた。

アリス 「勉強したよー。」

忍 「凄いです！でもどうしてここへ？」

烏丸先生 「カータレットさん。まず自己紹介からね。」

アリス 「あ、ごめんなさい。」

HRで自己紹介をする事に。黒板にアリス・カータレットと書かれてる。

アリス「初めまして。アリス・カータレットと申します。イギリスから編入して来ました。」

忍「……………えー！？」

綾「気付くの遅！」

圭太「鈍！」

アリス「手紙に書いたよ？」

忍「英語だったので……」

アリス「そう思って、2枚目はローマ字で書いたよ。」

綾「ええ!？」

陽子「綾。」

圭太「やっぱローマ字だったのか。」

綾「圭太知ってたの!？」

圭太「知ってたけど、綾なら読めるかなと思って黙ってた。すまん。」

アリス「皆さん！宜しくお願いします！」

その後自己紹介を終えたアリスは、忍のクラスメイト達と話した。

陽子「高校入学早々、外国の子が編入して来るなんてなあ。」

綾「髪も瞳もお人形さんみたい。」

忍「分かります！ドレスを着せてシヨウケースに入れてー日中眺めたいですよね！  
なーんて。」

アリスがドン引きして震えてた。

忍「あれ？ジョークですので笑って下さい！」

陽子「本気だと思ってた・・・」

浩輔「完全にサイコパスだな忍。」

陽子「はい。書いたよ。」

アリス「あ、ありがとう。」

自己紹介のメモを受け取った。

アリス「コミチ、アヤ。」

綾「宜しくね。」

アリス「イノクマ、ヨーコ。」

陽子「猪と熊で猪熊！ちよつと強そうで格好良いでしょ！あれ？」

突然アリスが怯えた。



アリス「ワ、ワタシ・・・タベテモ、オイシクナイノデ・・・」  
陽子「片言!？」

アリス「カガワ、ケイタ。」

圭太「俺の名前だ。宜しくなアリス。」

アリス「シラカワ、コースケ。」

浩輔「白川浩輔とは俺の事だ!これから宜しくな!」

夕方になり、下校する6人。

陽子「その簪可愛いなあ!」

アリス「これは、ホームステイの時忍がくれた物なの。」

忍「は!あの時の物を今も大事に!でも私、簪って挿す物だと思ってました。人を。」

陽子「怖ええ。」

圭太「殺す気かよ。」

綾「仕事人?」

陽子「日本に居る間は何処に住むの?」

綾 「1人で来たのよね？」

浩輔 「何処かへ居候するの？」

アリス 「うん。えつと忍の家に。」

忍 「アリス!!」

5人 「ん？」

忍 「そんな・・・たった1人で住む所無く・・・私の所に来てても良いんですよ!!何も無い家ですが！」

アリス 「あ、あのそのつもりで・・・」

陽子 「あはは面白いコンビだな！」

綾 「はあ。」

圭太 「忍の奴、幸せ者だな。」

浩輔 「ああ。」

その後、アリスは大宮家でホームステイする事となった。

アリス 「アリスと申します。お世話になります。」

座布団に座り、お辞儀をする。

忍「お母さん、アリスが来る事を知って内緒にしてたんですよ。」

忍の母「驚かせようと思って黙ってたの。ごめんなさい。それにしても日本語上手ねー。」

忍「正座も上手です。」

アリス「日本の事沢山勉強したよ。それに1度だけ着物を着た事があるよ。正座も苦しいけど、着物は重くて暑くて辛かった・・・十二単の重さは、凡そ10kgにもなると言う・・・これに耐えたら、大和撫子になれると信じて・・・」

忍「苦しいんなら我慢しなくて良いのですよ!?!」

プルプル震えてるアリス。既に足が痺れてる。

忍「どうぞ、くつろいで下さい。遠慮は無用ですよ。」

アリス「あの、お土産ですが。」

紙袋からお土産を探る。

忍「まあご丁寧に。」

取り出したのはどら焼きだった。

アリス「空港で買ったどら焼きです。」

忍「日本産!?!」

「桜の咲く頃、忍の家にイギリス人少女がやって来ました。」  
「END」

## Episode 2 「ちつちやくたつて」

その後リビングで朝食を食べる2人。アリスは和食、忍は洋食の朝食を頂いてた。

アリス『大宮忍。シノブはおっとり優しく、大和撫子の鑑だよ。』

すると誰かがアリスの頬を突つついた。

勇「良いなく。色白もち肌。」

忍の姉の大宮勇だった。

アリス「イサミおはよう。」

勇「おはよう。」

忍「お姉ちゃん、今日仕事でしたっけ？」

勇「そう。午後から。」

アリス『イサミはモデル。2人は姉妹だけど、あんまり似てない。こんな感じ！』

勇を舞妓で忍をこけしに例えた。

アリス・忍「行ってきま〜す！」

朝食が終わった後、登校する。

アリス「わーい！あっ！」

途中で松木さんを見て、アリスは少し怯えた。そして忍の後ろに隠れた。

忍「おはようございます。」

松木さん「おはよう。忍ちゃん、アリスちゃん。」

アリス「コンニチハ……」

2人は再び登校。

忍「アリスは人見知りですね。」

アリス『大人と話すのは、まだ緊張します。後あの犬！』

犬「ワンワン!!」

あの犬と会って、2人は怯えてた。

忍「アリス、まずはご挨拶からです……！」

アリス「怖い……!!」

その頃綾は、待ち合わせ場所で忍達を待っていた。

忍「おはようございます綾ちゃん。」

丁度忍とアリスが来た。

アリス「おはようアヤ。」

綾「おはよう。」

忍「陽子ちゃんは？」

綾「日直で先行ったわ。」

忍「圭太君と浩輔君は？」

綾「圭太と浩輔も先に行ったわ。」

忍「すみませんお待たせして。」

綾「早く行きましよ？遅刻しちゃう。」

アリス『小路綾。アヤは頭が良くてしつかり者。だけど時々……』

忍「綾ちゃん！タイツ履き忘れてますよ!？」

綾「え？……あ!!」

下を見ると、タイツを履いてなかった。

忍「わ、私の靴下を！」

綾「しのが裸足になっちゃうじゃない！あ！確か・・・」

カバンの中を探る綾。

綾「あつた！」

中に運良くタイツが入ってた。

アリス『凄く、おつちよこちよい。』

学校に到着して教室に入ると陽子が居た。

陽子「おっはよー！」

アリス『猪熊陽子。ヨーコは明るくて元気。』

綾「おはよう。」

アリス「おはよう。」

陽子は何故か弁当を食べてる。

綾「朝ごはん食べてなかったの？」



陽子「え？食べたけど？」

綾「その、何か？みたいな顔やめて。」

アリス「いっぱい食べるのは良い事だよね。」

圭太「よう皆揃ったか。」

アリス「おはようケイタ。」

圭太「ようアリス。」

アリス『香川圭太。ケイタはシノブ達のクラスメイトで凄くクール。』

綾「浩輔は居ないの？」

圭太「彼奴トイレ行ってる。」

そこに圭太が戻って来た。

浩輔「よう皆、おはようさん。」

アリス『白川浩輔。ケイタ達の親友で、陽子と同じ明るい。』

圭太「そう言えば陽子、お前また早弁か？」

陽子「お腹空いちやって。」

浩輔「胃袋の消化が激しいのか？」

そしてHR。

陽子「起立！」

全員起立する。

陽子「礼！」

全員「おはようございます！」

礼して挨拶。

アリス『アリス・カータレット。今日も目一杯日本の高校生活楽しみます！』

休み時間。

忍「アリスは、今年で幾つになるんですか？」

アリス「え!?!皆と同じ高校1年生だよ！同じクラスでしょ!?!」

忍「そうでした。」

2人は立って背比べする。

忍「でもその割には小さいですね。私が155センチですので、アリスは50センチ

くらいですかね？」

アリス「それは無いよ!？」

圭太達と会話する。

陽子「背が引くのがコンプレックス？」

アリス「うん。」

圭太「確かにアリスは小さいしな。」

陽子「何で？小さいの可愛いじゃん。」

忍「そうですよ。」

浩輔「そうそう。小さい女の子は可愛いしな。」

圭太「おいロリコン野郎。」

綾「心配しなくても、これから伸びるわよ。」

アリス「でも私、小学生の時から3センチくらいしか伸びてなくて……」

それを聞いた途端、忍と陽子と綾と浩輔が逸らした。

綾「それはもう……」

忍「はい……」

陽子「ダメかも……」

浩輔「もう手遅れだ……」

アリス「そんな!? そんな事無いって言ってー!!」  
ガツカリしたアリスは崩れた。

圭太「お前らちよつと大袈裟なんだよ。」

陽子「そんなに落ち込む事か?」

アリス「ヨーコ・・・」

心配しそうな顔でアリスを見る陽子。アリスは陽子の胸を見て、陽子の耳元に語った。

陽子「え? 背が小さいから胸も小さいって?」

アリス「うん・・・」

浩輔「え? そこかよ?」

陽子「アツハハ、それは身長関係無いって。」

綾「そうよ。それこそ気にしなくても。」

陽子「良い例がここに。」

例えを綾に指した陽子。綾は怒って陽子を揺らす。

綾「どうせ無いわよ悪かったわね!!!」

陽子「冗談! 冗談なのにー!!!」

すると予鈴が鳴った。

浩輔「おい授業が始まるぞ。」

忍「やったー！1時間目英語です！」

アリス「シノブ英語好きなの？」

陽子「からすちゃんが好きなんだよねー。」

アリス「からす？」

綾「烏丸先生よ。担任の。」

圭太「ほら、メガネ掛けてるだろ？」

アリス「あー、メガネの。」

忍「そうです！優しくて美人で、英語ペラペラで、大人でジャージで！あんな人になりたいです！」

綾・圭太「ジャージは良いの!？」

英語の授業。黒板に英語を書く烏丸先生。

烏丸先生「つと、ここはこうなります。ん？」

アリスはずっと烏丸先生を見ていた。

烏丸先生「本場の方が居ると緊張しますね。先生の英語はどうかしら?」

忍「先生の日本語は日本一です!!」

突然忍が立って高らかに言い放った。

烏丸先生「まあ! ありがと!」

浩輔「忍の奴、烏丸先生好き過ぎるだろ?」

圭太「しかもあのセリフ、シュトロハイムの日本一ver?」

アリス「(ラ、ライバル!!) はい!!」

突然アリスが立った。

烏丸先生「アリスさん。」

アリス「Miss Karasuma, Your English sounds

Little awkward (ミス・カラスマー! あなたの英語はちよつとだけ変です)

!!」

全員「おおお!!」

烏丸先生「凄いわアリスさん! 皆さん、アリスさんがお手本を見せてくれますよ。」

アリス「え!」

周りから拍手されてアリスは赤面する。

烏丸先生「それでは、40ページの最初から。」

アリス「あ、はい！」  
教科書を持つ。

アリス（な、何でこんな事に!?!）

英語の授業が終わった後、アリスは日本人形のパペットを動かしてた。

陽子「凄いなーアリス。手上げて。」

綾「やっぱり本物の英語は違うわね。」

アリス「えへへー。」

浩輔「俺英語分らないからお手本になってくれよ。」

アリス「え？」

圭太「おい何でアリスだ？烏丸先生でも良いだろ。」

忍「先生も喜んでました。」

アリス「え？」

陽子「しの、教科書あった？」

忍「ありました。」

綾 「しの、筆箱は？」

忍 「あ!!」

陽子 「しのー。」

忍 「すみません……」

授業道具を持って移動する。

アリス 「ケイタ、シノって何？」

圭太 「あだ名だよ。」

アリス 「あだ名？」

圭太 「簡単に言うと、仲良し同士が呼び合う名前だ。」

アリス 「でもケイタとコースケは忍って呼んでるよね？」

浩輔 「俺達はその方がしっくりくると思って忍って呼んでるのさ。」

アリス 「仲良し……」

すると目の前に烏丸先生が歩いて来た。

圭太 「お！烏丸先生！」



アリス（これだ！）

烏丸先生「顔がいっぱい重なってー♪」

アリス「先生ー!!」

烏丸先生「ん？」

アリス「私シノブの事を、シノブって呼びます！」

突然周りに静かな空気が漂った。烏丸先生は嬉しい表情をした。

烏丸先生「まあ、仲が良いのね！」

忍「嬉しいです！」

周りの空気が和やかになった。

アリス「あれ!? 何この反応!？」

圭太「アリス大丈夫か？」

恥ずかしくなってしまうアリス。

その後教室で。アリスがパペットで遊んでいた時。

陽子「アリス萌えー!!!」

後ろから陽子が抱き付いて来た。

アリス「モエって何？」

陽子「可愛すぎて萌える!!」

浩輔「陽子が熱く燃えてる!!」

綾「馬鹿ね。字が違うわよ。」

と言つて綾が黒板に書いた漢字は、草かんむりの下に月と古の漢字を書いて意味が分からない漢字だった。

綾「あれ!?何か違う!？」

もう1個書いた漢字は、菲だった。もう1個は、崩だった。

陽子「見れば見る程分からなくなる!!」

すると忍が黒板に萌えくくと書いた。

忍「これは当て字なんですよ。」

陽子「そうなの？」

忍「はい。元はピューンみたいな効果音が語源です。」

綾「またあからさまな嘘を。」

浩輔「擬音かよ。」

忍「本当は、可愛い物を見た時の効果音。」

陽子「成る程！萌えくが変化して萌えになったのか！誰が考えたんだ？」

忍「私です！」

浩輔「お前かよ!!」

圭太「萌えの意味は、ある物や人に対してもつ、一方的で強い愛着心・情熱・欲望などの気持ちるを言う俗語。必ずしも恋愛感情を意味するものではないと言う意味だ。」

陽子「成る程！」

浩輔「流石圭太博識だな。」

圭太「そうか？」

ある休日の日。綾は誰かを待っていた。

陽子「ごめん、遅れちゃった。」

圭太「待たせたな綾。」

浩輔「来たぜ。」

綾「遅い！」

陽子「10分だけじゃん。」

綾「だけ？だけって何よ！私なんか1時間も前からここに居るのに！」

陽子「真面目だな・・・」

圭太「ずっと居たら疲れるぞ？」

浩輔「ん？忍とアリスは来てないのか？」

綾「そうなのよ。心配だわ、何処かで事故にでも遭っていたら・・・」

陽子「この差は何だ？」

浩輔「心配性が人一倍だなお前。」

忍「ごめんなさい！遅れました！」

綾「あ！」

圭太「来たか。」

丁度忍とアリスが来た。だがしかし。

陽子「何だあれ!？」

忍がメイド服なのかゴスロリなのか分からない服を着ていた。

陽子「しの、それは私服か？」

忍「はい！似合いますか？」

アリス「シノは何かの物真似をしてるんだよ。」

陽子「成る程コスプレか。えっと、メイド？」

綾「ゴスロリとか？」

浩輔「あるいは萌え？」

圭太「不思議の国のアリスか？」

忍「ブブー！正解は外国人でした！」

圭太・浩輔・陽子・綾「ざっくり！！」

一行はゲーセンにきた。クレイニングゲームコーナーで熊のぬいぐるみを見てるアリス。

圭太「アリス、取ってやろうか？」

アリス「え？良いの？」

圭太「まあ見てろよ。」

100円を入れてアームを動かして、アームがピンポイントでぬいぐるみを掴み、全く落ちないままゲット出来た。

圭太「ほらアリス。」

アリス「うわー！ありがとうー！」

ぬいぐるみを持って喜ぶアリス。

綾「上手いのね圭太。」

圭太「これくらい楽勝さ。」

浩輔「なあ圭太、その勢いで俺が欲しい景品ゲットしてくれるか？」

圭太「自分で頑張れ。」

次は文房具店。綾が取ろうとしたペンを、陽子が取った。綾は赤面した。次はインテリア。忍の目が輝いている。次はペットショップ。忍とアリスと陽子と綾が子犬を見て、2人が子猫を見ている。外に出てベンチで休憩する。すると綾は何かを見た。

綾「あら？外国人の方が居るわ。」

目の前に外国人の男女が立っていた。

アリス「旅行かな？」

忍「何か困ってるみたい、私行つて来ます！」

綾「え!?!ちよつとしの！」

外国人の方へ走る忍。

忍「ハロー。」

外国人は、忍に英語で尋ねた。

忍「アリスく!!」

アリス「え!?!あうん！」

英語が理解出来なかった忍は、アリスを呼んだ。アリスが外国人に話し掛ける。

陽子「何で行ったんだ彼奴？」

圭太「出来ると思つて行つたんだろ。でも忍は英語が疎かだから無理がある。」

翌日、学校で陽子と綾と圭太と浩輔が忍に疑問を抱いてた。忍は新聞を読んだ。

陽子「最近、シノの外国好きがマニアの位置に達してる。」

綾「昔からホームステイするくらい好きだったのね。」

圭太「まあでもその内英語も喋れる様になれるかもなうって英字新聞!？」

なんと忍が読んでる新聞は英字新聞だった。そして忍の目は白かった。

綾「でもあの顔は絶対理解してない！」

浩輔「目が死んでるぞ彼奴！」

新聞を見て忍はふむふむと頷く。

アリス「シノはヨーロッパが好きなの？」

忍「え!?!ヨーロッパ?好きなのはイギリスとかフランスとか。」

アリス「ヨーロッパだね?」

忍「え？ヨーロッパ・・・イギリス・・・何かよく分からなくなってきました！ちよつと紙に書いておきます！」

ペンの開けて、ノート1ページにでかい丸を描いた。

忍「私達の住む星は地球！」

綾・浩輔「そこから（そっから）!?!」

放課後になると外は夕方になってた。圭太達6人は教室に居た。忍と綾はアリスの髪をブラシで整えてる。

忍「あ、私卒業したら髪の毛染めようかなって思ってるんです。」

陽子「へえ、どんな色？」

忍「金色です！」

4人全員ドン引きし、寒気を感じてた。

綾「えつと、金はちよつと・・・」

忍「金って言うか、金に近い茶です。」

陽子「変わらねえよ・・・」



圭太「お前の髪グラデーションにする気かよ・・・」

浩輔「それこそ寒気を感じるわ・・・」

綾「でも、案外似合うかも！」

圭太・浩輔・陽子（綾!?!絶対思ってないだろ!?!）

心の中で3人同時にツッコんだ。そこにアリスが起きた。

アリス「シノ、金髪にするの？」

忍「はい。アリスとお揃いですね。」

アリス「似合わないよー!!」

綾「ハツキリ！」

陽子「流石！」

圭太「同感！」

浩輔「正論！」

シヨックを受けた忍は窓の外を見て憂鬱になった。

忍「やっぱり金髪は変なんですわ・・・」

アリス「シノごめんね、そんなつもりじゃ・・・」

忍「でも私が金色にすると、似合わない過ぎてモザイク掛かっちゃうかも・・・」

アリス「え？何の話？」

綾 「まあまあ、似合う似合わないは人それぞれよ。」

そこに綾が元氣付ける。

アリス 「そうだよ！シノ、昨日の服は凄く似合ってたよ！」

綾 (え?)

陽子 (そうか?)

圭太 (服かよ!)

浩輔 (ぶべら!)

忍 「本当ですか!？」

アリス 「うん！あんなに可愛く着こなせるのはシノ以外ないよ！」

忍 「ありがとうございます。あの服には金髪が似合うと思うんですよ。だから金髪に。」

アリス 「NO金髪！」

即拒否したアリス。

忍 「アリスの金髪はとっても綺麗です。」

アリス 「ありがとう。」

忍 「でも、私の方がもつと綺麗ですけどね。」

目の前に金髪の忍が居た。

アリス「にやー!!」

泣きながら叫んだアリス。どうやら夢を見てたらしい。

陽子「どうしたアリス、怖い夢でも見たか? しの顔でも見て落ち着きなよ。」  
忍を連れて来た。

数日後。

烏丸先生「進路希望の紙、明日までですよ。」

忍「はい! 先生! 質問良いですか?」

烏丸先生「何? 大宮さん。」

忍「先生はどうして教師になろうと思ったんですか?」

烏丸先生「先生は、そうね、気付いたらなつてたわ。」

アリス(参考にならない・・・)

浩輔「先生それはどうかと思いますが。」

烏丸先生「でも学生時代が一番楽しいわよ。学生で大変な事と言えば・・・睡魔との戦い・・・」

話す途中に睡魔が烏丸先生に襲って来た。

アリス（今も眠そう・・・）

忍「先生！こつち見て下さーい！」

烏丸先生「はい・・・」

休み時間、進路希望を考える。

アリス「進路なんて考えた事無いよ・・・」

忍「そんなに迷わなくても大丈夫ですよ。自分がどうなりたいか考えれば良いんです。」

アリス（シノ凄いい！）ハッキリとは決まってるけど、人の役に立てる人間になりたいな。」

忍「成る程々。ちよつと良いですか？」

アリスの進路希望の紙を借りて書く。

忍「つまりこう言う事ですね。」

第一希望に人間と書いた忍。

アリス「大事な部分が抜けてるよ!!」

陽子が進路を考えてる所にアリスと忍が来た。

アリス「書けた？」

陽子「ん？うん、そうだな・・・」

アイドルになった自分を想像する陽子。

陽子「アイドルになって武道館でライブかな？なんて。」

アリス「凄い！ヨーコならきつと叶うよ！私も応援するからね！」

陽子「え？アハハ！嘘だよ！ジャパニーズジョーク。」

アリス「あ！」

ジョークだと知ったアリスはシヨボンと落ち込んだ。

圭太「おい陽子、ジョークにも程があるだろ。」

陽子「ごめんごめん。しのは書けたの？」

忍「はい。書けました。」

陽子「早！」

忍「小さい頃からの夢があるので。」

綾「何て書いたの？」

浩輔「俺も興味あるな。」

忍 「通訳者です！」

陽子 「あー、宇宙人の。」

浩輔 「あるいは地底人。」

忍 「外国人ですよ!?!最近アリスに英語習ってるんです。」

陽子 「おー。それじゃあアリスの英語通訳してみて?」

忍 「良いですよ。」

今から忍はアリスの英語を通訳する事に。

アリス 「It、s been a few weeks since I arrived in Japan and I am getting used to the life here It、s great I could come to Japan Japan is such a suitable place for living and everyone is just so kind」

忍 「略す前にどンドン喋らないで下さい！」

通訳出来なかつた忍。

4人 「えー!?!」

圭太 「忍はまだまだだ。アリス、今の英語もう1回言ってみろ。」

アリス「うん。It、s been a few weeks since I arrived in Japan and I am getting used to the life here. It、s great I could come to Japan Japan is such a suitable place for living and everyone is just so kind。」

またさっきの英語を言うアリス。

圭太「よっしゃ。『日本に来て数週間が経ちました。生活にも慣れてきました。私は日本に来られてとても嬉しいです。日本はとても住みやすいです。周りの皆は優しいです。』と言ってるな。」

アリス「凄いよケイタ！全部合ってる！」

陽子「圭太英語分かるの!？」

圭太「まあ俺暇になると何か調べる癖あるからな。」

忍「そんな・・・私よりも学力が高いなんて・・・」

浩輔「そう落ち込むなよ忍。」

アリス「そう言えば、ケイタとコースケは何て書いたの？」

浩輔「俺は、掃除屋かな？結構綺麗好きだし。」

アリス「ケイタは？」

圭太「俺はまだ考え中だ。」

浩輔「そう言えばこいつ、この前街中でスカウトされてたな。」

綾「スカウト？」

浩輔「芸能界にだ。この前渡された名刺を俺に見せてたんだ。なあ圭太、将来俳優になつたらどうだ？」

圭太「あーそうだな、まあ卒業したと同時に困らないだろ。」

アリス「今度から一語ずつ話すね。」

忍「いちご？苺はそのまま食べるのが好きです。」

アリスと忍は自分の席へ戻って行く。

綾「先は遠いわね。」

圭太「ああ。この先が思いやられそうだな。」

陽子「綾はお嫁さんとか書きそうだな。」

浩輔「何で？」

綾「か、書かないわよ・・・」



陽子「消してるじゃん。」

浩輔「書いてんのかよ。」

すると綾は陽子に消しゴムを見せた。

綾「消すわよ消しゴムだもの！誤字を消す為の道具だもの！」

机に両腕で“バンツ”と叩いた。

綾「もう！だったら何て書けば良いの!？」

陽子・浩輔「開き直った!!」

綾「はぁ・・・理想のプロポーズとか悩まずに書けそうなのに。」

陽子「どうした？乙女モード全開だな。」

綾「私は男らしく、ストレートに言うのが良いと思うのよ。」

陽子「どうしよ・・・絡み辛い・・・」

圭太「綾戻って来い。陽子、何か言ってやれ。」

陽子「何かって・・・ん？例えば！」

綾に顎クイをして陽子がこう言った。

陽子「俺の嫁になれ！とか？」

綾「っ!?!やめてよバカ!!」

言われた綾が赤面して陽子を叩いた。

浩輔 「キマシタワー。」

圭太 「おいこら。」

その後、アリスは廊下から外を眺めていた。忍達は隠れながらアリスを見ていた。

陽子 「アリスが物思いに耽っている・・・」

綾 「進路で悩んでるのかしら？」

浩輔 「いや、あの視線の先は・・・」

忍 「イギリス？」

4人 「ホームシック!?!」

圭太 「そげなバカな。」

アリス (眠い・・・)

だがアリスは、ホームシックでは無くただ眠いだけだった。

忍 「あんなに小さいのに、外国で独りぼっち！」

陽子 「そりゃホームシックになるよ！」

綾 「私達が守ってあげなきゃ！」

浩輔「圭太、俺3人の意見に賛同してアリスを守るぜ！」

圭太「好きにしな、俺の手には負えねえよ。」

その後、アリスは教室で席に座っていた。すると机の隅に置かれたハムスターの消しゴムが落ちた。

陽子「私が拾うよ！」

次は古典の授業。アリスが当てられた。

アリス「春は・・・あげ、ぽよ・・・」

陽子・綾・浩輔「!?!」

そこに綾が立った。

綾「その問題はアリスには難し過ぎます！私に答えさせて下さい！」

そして夕方の放課後。日誌を書き終えたアリスに圭太が寄って来た。

圭太「アリスお疲れさん。」

アリス「ケイタ、お疲れ様。」

圭太「職員室へ一緒に行こうか？俺烏丸先生に用があるんだ。この進路希望用紙を出さなきゃな。」

アリス「うん。」

2人は職員室へ向かう。廊下に4人が居た。

忍「アリス！圭太君！何処へ!？」

綾「私達と一緒に!」

4人は2人を追い掛ける。

アリス「職員室に行くだけだよー!」

浩輔「圭太お前!アリスを取ろうとしてんのか!？」

圭太「んな訳無えだろ！俺も職員室に行くんだよ！」

その後何とか振り切つて職員室に入った。

アリス「先生、日誌。」

圭太「先生、これ進路希望を持って来ました。」

烏丸先生「アリスさん、丁度良い所に。」

アリス「ん？」

烏丸先生「アリスさんは、猫だと思う？うさぎだと思う？」

アリス「え？う、うさぎ？」

烏丸先生「じゃあ香川君、アリスさんは、猫だと思う？うさぎだと思う？」

圭太「俺もですか？えつと・・・うさぎですかね？」

烏丸先生「やつぱり！うさぎよね！」

そこで烏丸先生がアリスに被せたのは、うさ耳だった。

アリス（何これ？）

圭太「先生何被せてるんですか？」

烏丸先生は喜んだ。相当喜んでる。日誌と進路希望の用紙を拝見する。

烏丸先生「はい確かに。香川君、今後も頑張つてね。」

圭太「はい。」

烏丸先生「アリスさんの字、とっても綺麗ね。」

アリス「え？あ、ありがとうございます・・・」

烏丸先生「日本の学校にも慣れたみたいで良かったわ。お友達も沢山出来て。」

アリス「友達？」

烏丸先生「ええ！」

アリスは忍達が言つてた言葉を思い出す。

忍『アリスは今年で幾つなんですか？』

陽子『凄いなアリス！手え上げて！』

綾『その問題はアリスには難し過ぎます！』

浩輔『圭太お前！アリスを取ろうとしてんのか!？』

アリスは憂鬱になった。

烏丸先生「違うの？」

職員室から出た2人は教室へ向かう。

圭太「アリス、俺も居るから安心しろ。相談なら彼奴らだけじゃなく俺にも相談しろよ?」

アリス「そ、そうだね。」

うさ耳を外す。

アリス「ケイタ、皆私の事どう思ってるんだろう?」

圭太「あ、まあ様子を見れば分かるかも知れないな。」

その頃教室では。

忍「ハムスターだと思えます!」

4人がアリスのポジションについて話あっていた。

陽子「え?うさぎじゃん?」

浩輔「もしくは猫とか。」

アリスと圭太はこっそり見ていた。アリスは心配してる顔をして、圭太はドン引きし

ていた。

忍「あ！戻って来ました！今日は帰りに寄り道しようって話で、皆でまたペットシヨップに・・・」

圭太「おい黒板に書いてあるハムスターとうさぎと子猫は何だ？」

浩輔「アリスのポジションを書いてたんだ。」

圭太「いや何で小動物なんだよ？アリスはベットじゃねえよ。」

アリス「シノ！」

忍「え？」

アリス「正直に答えて！シノは私の事をどう思ってるの!？」

忍「どうって・・・(まさか告白!?) 急に言われても困ります。」

告白されてると勘違いしてる忍。アリスはガーンとなつて教卓の下でシユンとなつた。

圭太「忍お前、勘違いしてね？」

忍「でも、アリスは大事なお友達ですよ。」

アリス「え!?! 本当!?!」

忍「はい！」

アリス「うさぎやハムスターよりも？」



陽子「ん？」

忍「勿論です！」

アリス「良かったー！」

忍「良かったですねー。」

綾「何が？」

陽子「ホームシックが治ったって事か？」

浩輔「おい圭太、説明してくれるか？」

圭太「あの時廊下でアリスが外を見てただろ？あれはホームシックじゃなく、ただ眠たかったってアリス言ってた。」

3人「え!？」

とんでもない勘違いしてしまつて恥ずかしくなつた3人。

その後下校する。

綾「そう言えば、アリスは何で日本へ留学しに来たの？」

アリス「シノと同じ高校に行きたかつたからに決まつてるよー！」

綾 「そんなお手軽な理由で良いの!？」

陽子 「どんだけ愛されてるんだよしの!？」

浩輔 「愛着され度半端無い！」

圭太 「愛着され度って何だ？」

忍 「私もずっとアリスに会いたかったです。」

アリス 「！」

忍 「大人になつたら、もう一度イギリスに行きたいと、アリスが会いに来てくれたので、夢が叶っちゃいました。」

アリスは嬉しくなつて微笑んだ。

綾 「あ、飛行機雲。」

空に飛行機雲が現れた。

アリス 「あの飛行機、イギリス行きかな？」

飛行機にアリスが指差す。

綾 「あれは多分東京行きよ。方向的に。」

陽子 「え!?! 空気読めよ！」

圭太 「良い雰囲気か台無し！」

浩輔 「ダメだこりゃ。」

更にアリスとの友情が深まった5人であった。

後日、英語の小テストの結果の日。

烏丸先生「小テスト返しまーす。アリスさん！」

アリス「はい！」

呼ばれたアリスはテストを受け取る。

烏丸先生「アリスさん凄いわー。100点よ。」

全員「おー！」

烏丸先生「見てここ！特別に花丸あげちゃいましたー！しかも旗付き！」

アリス（担任のミス・カラスマ。ちよいちよい子供扱いします。）

「END」

# Episode 3 「どんなトモダチ出来るかな?」

後日、電車から降りた忍達4人は、駅を出た。

圭太「おー来たか。」

浩輔「待ってたぜ。」

そこで待てった圭太と浩輔と会った。6人で学校へ向かう。

綾「最近よく外国人を見掛ける気がする。」

忍「アリスが来てから、意識するようになったかもですね。」

陽子「そう言や、この間もこの辺りで金髪少女に会ったよ。」

浩輔「本当か?」

陽子「うん。」

忍「え!?その話詳しく聞かせて下さい!」

陽子「う〜ん、背はそんな高くはなかったな。ユニオンジャックのパーカーを着てて、

サラサラの金髪ヘアー、灰色の瞳、そうそう、丁度こんな感じで。」

ベンチに座ってる金髪少女を見せる。

綾「て言うかその子本人じゃないの!」

忍「うわ〜！金髪の美少女です！」

アリス「え!?!カレン!?!」

カレン「ん？アリス！アリスアリス!!」

するとカレンと名乗る少女はアリスに抱き付いた。

アリス「カレン!?!」

忍が2人を抱いてる。

カレン「誰？」

陽子「しのは関係無いだろ！」

圭太「今すぐ離れろ！」

少女は6人に自己紹介する。

カレン「九条カレンと申すデス！」

少女の名は「九条カレン」。アリスの幼馴染みの少女。

綾「あー！写真に写ってたアリスのお友達？」

陽子「おー！ハーフって言ってたな！」

浩輔 「その友達が目の前に!？」

アリス 「カレン、何で日本に来たの？」

カレン 「ブーン、ブーン！」

飛行機の真似をしてそこらを走り回る。

アリス 「乗って来た乗り物じゃなくて！」

カレン 「話せば長い話デス。」

それは、カレンがまだイギリスに居た頃。この時アリスは日本に留学に行ってる。カレンはアリスの家に行ったがアリスは居なかった。

カレン 『え、アリス居ないデスカ?』

アリスの母 『ごめんね、アリスは日本に留学に行ってるの。』

カレン 『日本?』

その後、日本の本を見て、父親に質問した。

カレン『パパ、日本ってどんな所？』

カレンの父『アハハ、日本は良いぞ。パパの故郷だからな。よし、しばらく皆で日本に住んでみるか。』

そして九条家一家は、日本へ引越した。

カレン「と言う訳です。」

綾「そんな簡単に!?!」

圭太「恐るべしだな。」

忍「金・・・髪・・・」

カレンに見惚れてしまった忍を見てアリスは落ち込んだ。

アリス「シノ、そろそろ学校へ行かなきゃ。」

忍「そうですね。」

カレン「私も今日からご学友デース！」

アリス「あ！制服！」

圭太「よく見たら俺達と同じ学校の制服じゃねえか。」

カレン「その通りデス！編入して来ましたデース！」

こうしてカレンと一緒に登校する。忍はカレンのを見て完全に心奪われてしまつて  
る。

アリス（シ、シノが・・・）

教室で、カレンの事について話をしてる。

陽子「カレンは隣のクラスで残念だったな。」

綾「後で会いに行きましょう。」

忍「お昼休みが楽しみです。」

だがアリスは落ち込んだ。圭太はアリスを見てる。

圭太（アリス、忍の事で悩んでるんだな。）

忍「あれ？アリス何だか元氣無いですね。」

アリス「そ、そんな事無いよ!?!」

忍「ん？」



疑問に思う忍。するとそこに聞き覚えのある声が響く。

カレン「アリス！」

忍「あ！」

カレン「アリスキター！」

廊下の方を見るとカレンが手を振ってた。

教室に入って皆と会話する。

アリス「カレン日本語上達したね。」

カレン「毎日勉強頑張ったデスよー。」

綾「カレンはイギリスで育ったの？ハーフにしては片言だけど。」

カレン「うん。普段はパパも英語で喋ってたから、アリスみたいに日本語ペラペラになりたいたデス。」

忍「片言が良いんですよ！可愛いじゃないですか！」

アリス「ワタシモ、マダマダデス。ニホンゴムズカシイデス。」

浩輔（アリス、わざとらしいぞおい。）

陽子「そう言えばさ、ハーフの子って、日本名でも外国名でも通じる名前の子が多い

よね。リサとかナオミとか。」

浩輔「後、マリアとかアンナとか。」

カレン「パパが名付けてくれマシタ。漢字では、可憐な花の可憐と書くデス。ノートに可憐の漢字を書く綾。」

綾「綺麗な名前。」

圭太「確かにカレンにはピッタリな名前だな。」

忍「きつと可憐な女の子に育つようにつて願いを込めて付けたのですよ。」

アリス「シノ！私は!？」

忍「アリスは、リスのように小さく可愛らしくと言う意味ですね。」

アリス「リスかあ。そっか〜！」

綾「あ、リス！じゃないわよ。」

圭太「アリス、普通に納得しなくても良いぞ。」

するとカレンは、忍達を指差した。

カレン「ケイタ、コースケ、ヨーコ、シノブに、えつと・・・」

綾「綾よ。」

カレン「アヤヤ?」

綾「一文字多いわよ。綾よ。」

カレン「……アヤヤー！アヤヤー！」

陽子「アヤヤー!!」

カレン・陽子「アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！アヤヤ！」

綾「や、やめて……」

圭太「てい。」

陽子「痛！」

カレン「OH！」

陽子とカレンの頭に軽くチョップする圭太。

圭太「呼びたいだけだろお前ら。」

忍「カレン、私の事はシノと呼んで下さい。仲良しのあだ名です。」

アリス「あ……」

急にアリスが落ち込んだ。

カレン「シノはニンジャ？壁歩ける？」

陽子「あー、忍しのびな。」

忍「それはちよつと……」

カレン「えー？出来ないデスか？」

アリス「そんな事無いよ！シノは凄いから何でも出来るよ！」

全員 「え!?!」

アリス 「さあシノ! 壁を歩いて!」

忍 「無茶振り!?!」

綾 「どうしたの アリス? 様子が変よ?」

アリス 「え? 変ってどんな風に?」

陽子 「アリスはカレンに妬いてるんだよな。」

浩輔 「そうなのか?」

アリス 「あ!」

忍 「そうなんですか? 確かにカレンは身長が平均的ですし、アリスより喋り方が外国人らしくて魅力的です。でも、アリスにはアリスの良い所がいっぱいありますよ! 自身持つて下さい!」

だが忍はアリスの良い所を一言も言っていない為アリスは落ち込んだ。

綾 「全くフオローになって無いわしの・・・」

浩輔 「お前アリスの良い所言っていないだろ。」

圭太 「アリスは日本が好きで、日本語が流暢に話せる。そこがアリスの良い所だ。」

アリス 「ケイタ・・・」

その後綾は、廊下で会話しているアリスとカレンを見つけた。

綾「アリス？カレン？」

アリス「カレン、何も言わずに日本に来てごめんね。どうしても日本で勉強したくて、後シノに会いたくて・・・」

カレン「私心残りあったデス。」

アリス「え？」

カレン「小さい頃の約束、だからアリスを追い掛けて日本に来マシタ。」

アリス「約束？」

カレン「そうデス。」

そう言つてアリスに渡したのは、鉛筆だった。

カレン「アリスからずっと借りっぱなしだった鉛筆、返したくて。」

アリス「あ・・・ありがと・・・」

綾「激しくどうでも良いわ!!」

本当にどうでも良い話だった。

放課後。

カレン「お家こつちデース。」

陽子「そつか、じゃあな。」

綾「また明日ね。」

忍「また・・・」

カレン「また明日。」

するとカレンは忍の頬にキスをした。アリスは激しくショックしてしまった。

陽子「外国人！外国人だ!!」

浩輔「あら〜。」

圭太「お前何微笑んでんだよ!!」

アリス「カレン!! 日本人の挨拶は手を振ってさようならだよ!! もー!!」

忍はキスされてふわふわしていた。

カレン「Oh分かりマシタ。」

綾「アリス・・・」

陽子「あははは・・・」

浩輔「なあ圭太、彼奴があの子にキス受けたらどうなると思う？」

圭太「鼻血出しながらぶっ倒れるかもな。」

翌日、アリスとカレンが英語で会話していた。5人はその光景を見ていた。

忍「2人がお話しする時は、時々英語なんですな！」

陽子「おお！凄え！何かこう、オーラが違うな!!」

忍「分かります!!有名人才オーラを感じます!!」

浩輔「だったらサインでも貰いに行くか!?!」

忍「私も!!」

綾「何で？」

浩輔「まあでもしかし、英語は素晴らしいな。」

綾「そうね。」

ここで2人の会話を聞く事に。

カレン「Hey, I discovered something really cool. Oh may god. Did you know that although there is octopus inside teko yakiteriyaki has no seafood in it? (最近凄い事を見つけたよ。たこ焼きの中にはタコが入っているけど、たい焼きの中には鯛が入ってないんだよ。)」

アリス「That's common sense . . . (そんなの常識だよ . . .)」  
 カレン「What? you've tried teriyaki already?  
 ? cool, you are already an expert japan (え? アリスはたい焼き食べた事あるの!? 凄いね。日本上級者だね。)」

頭の中で英会話を翻訳した圭太は呆れていた。

圭太(たい焼きとたこ焼きの話をしてたのかよ . . .)

忍「何話しているのでしょうか?」

陽子「格好良いな!!」



その後、午前の授業が終わった。カレンは机に伏せて寝ていた。

カレン「よく寝たデース・・・」

背伸びをする。するとカレンは周りを見た。友達同士で会話をする生徒が多い。するとカレンは隣を見た。そこにはカレンを見ている少女が座っていた。少女は立ち上がったって教室から走り去った。

弁当を7人で食べる。カレンは6人に悩みを打ち明けた。

カレン「実は、クラスの子と仲良くしたいけど、上手く出来ないのデース・・・」

陽子「まだ転校して来たばかりだもんな。」

忍「外国の方ってだけで、話し掛け辛いのもかもしれません。カレンはハーフですけど、見た目は外国人オーラがバンバン出てますし。」

アリス「あれ？シノ、私は？」

忍「動物に例えるとカレンは、そう、まるで鹿の群れの中にライオンが居るみたいで。」

カレン（ライオン）『がおー！』

忍「ヒツ!!逃げなきや・・・」

綾「シノ、その例えは間違ってる。」

浩輔「他に例えは無えのかよ。」

忍「あ!そう言えば、綾ちゃんは転校経験者なんですよ。」

陽子「中一の時にこつちに引越して来たんだよな。」

綾「う、うん・・・」

カレン「Oh!先輩デース!クラスの子と仲良くなれるアドバイスお願いシマース  
!」

綾「そ、そうね・・・一番大切なのは・・・空気を読む事!!」

カレン「Oh!風見鶏デスネ!!」

綾「風じゃないわ。空気よ。」

中一の頃、綾は席に座って1人になってた。そこに。

忍『大宮忍と言います。』

綾に話し掛けて来たのは、忍だった。

忍『綾ちゃんって呼んでも良いですか?』

綾『え、ええ、お好きにどうぞ。』

忍『学校、案内させて下さい!一緒に行きましょう!』

綾『お、お気遣いなく!先生に校内の地図貰ってますので!』

忍『え!』

シヨックして困ってる忍。

綾『あ、あの、別に嫌だとかでは無くて・・・』

そして現在。綾は震えていた。

綾「ふ、古傷が・・・」

忍「綾ちゃん、どうしたんですか?」

綾「ごめんなさい、全然参考にならなくて。」

忍「あの後確か、陽子ちゃんが無理やり校内案内に引っ張って行ったんですよ?」

そして中一の頃、陽子綾を見付けた。

陽子『綾!!』

机の上に座る陽子。

陽子『1人で何やってんだ?』

綾『あ、あの・・・』

陽子『あ!ごめんごめん!自己紹介がまだだったな。私、猪熊陽子!陽子って呼んでくれて良いよ!』

綾『あ、はい・・・』

陽子『宜しくな!』

そこに2人の男子が陽子を発見した。圭太と浩輔だった。

圭太『陽子お前、小路が困ってるだろ?』

陽子『えー?良いじゃん。』

浩輔『陽子は全く、俺達も遊ぶの誘えよ!』

陽子『そこかよ!』

圭太『俺香川圭太だ。こっちがアホの白川浩輔だ。』

綾『よ、宜しく・・・』

陽子『あ！そうだ！折角だから学校案内してやるよ！行こうぜ！』

綾の腕を掴んで走り出した。

浩輔『俺達も行こうぜ圭太！』

圭太『俺もかよ。』

2人も走り出した。

綾『え!?!』

陽子『今日とか暇?』

綾『え・・・ちよつと・・・』

陽子『綾ん家、遊びに行つて良い?』

最初は戸惑っていたが、次第に仲良くなった。

そしてまた現在。

圭太「それで次第に仲良くなったんだ。」

陽子「そうそう。学校に慣れるまで、ずっと私の側に居てさ。」

また中学の頃、綾はずっと陽子の後ろに付いて歩いてた。教室でも、廊下でも、さら  
に下校の時もずっと付いて歩いてた。陽子が家に帰ろうとすると、綾は陽子を見つめて  
いた。それに気付いた陽子は綾を見た。綾は悲しそうに陽子を見ていた。

陽子「何かもう、捨てられた子犬状態で。」

この時の陽子はため息をした。

綾「嘘よ！デタラメ言わないで！」

陽子「本当だろ？なあ圭太に浩輔？」

圭太「ああ陽子、お前記憶力が半端無いな。」

浩輔「しかも子犬状態って、俺は子猫状態が良いかもな。」

圭太「子猫って。」

綾「浩輔!!」

忍「2人は仲良しさんなんですよ。」  
カレン「分かりマース。」

数日後、アリスとカレンは四字熟語を言った。

アリス「報恩謝徳。」

カレン「愉快適悦。」

圭太「百花繚乱。」

浩輔「雲外蒼天。」

忍「何ですかそれ!？」

陽子「私達も日本人の意地を見せるんだ!えつと・・・焼肉定食。」

忍「平安時代?」

アリス「うふふ。」

カレン「あるある。」

忍「余裕の微笑み・・・」

陽子「負けた・・・」

その後、カレンは烏丸先生を観察していた。周りには女子生徒達が先生に質問していた。次は忍を観察。忍は3人と会話していた。

忍「うっかり12時間寝ちゃいました。」

綾「寝過ぎよ。」

次は圭太と浩輔を観察。

浩輔「なあ圭太、最近俺学力低下してる気がするけど、お前はどんなんだ？」

圭太「俺は普通だけど？」

浩輔「マジかよ俺だけかよ・・・は!!これはまさか!神の悪戯!?!」

圭太「宗教じゃなくて現実に目を向ける!」

その後カレンは中庭のベンチに座って鏡で自分の顔を映してた。



忍「何してるんですかカレン？」

そこに忍が声を掛けた。

カレン「ああ、シノ。」

そこでカレンは忍に悩みを言った。

忍「そうですね、クラスの子とまだ打ち解けてないのですね。」

カレン「釣り目だから話し掛け辛いのかな？つて、シノは穏やかで話し掛けやすいで良いですね。」

忍「分かり合うには時間が掛かりますよ。カレンは笑顔がとっても素敵。友達100人も夢じゃないですよ！」

カレン「皆優しくて大好きだけど、シノは特別な感じするです。」

忍「えへへ、照れますね。」

そんな2人を見てシヨックしてる人物が居た。アリスだった。

陽子「おいアリスー！」

横では陽子が声を掛けて来た。

忍「アリス居たんですか？」

隠れてるのがバレた。アリスは縮こまった。

圭太「おいアリス、今更隠れても無意味だぞ？」

アリス「う、うん・・・」

圭太と浩輔と陽子とアリスが廊下の自販機で飲み物を買った。

外で皆がカレンの悩みを聞いた。

綾「カレンならきつとすぐクラスに馴染めるわよ。」

カレン「だと良いです。」

忍「フアイトです!」

陽子「何何?何の話?」

忍「カレン、そのパーカー可愛いですね!」

カレン「お気に入りです!」

綾「それって校則違反じゃ?」

陽子「そういや、カレンは部活入らないの?」

カレン「部活ですか・・・アリスは何処か入ってマスか?」

忍「私達は帰宅・・・」

アリス「シノ部だよ!!」

綾「え？何それ!？」

アリス「シノとお話したり、お弁当食べたりする部活だよ!!」

カレン「うわー！それ私も入りたーい!!」

アリス「部長は私だからね!!」

忍「そうなんですかー。」

綾「えつと・・・つまり単なるファンクラブ?」

浩輔「シノ部かあ、アリスお前上手い事言ったな。」

圭太「何処がだ！ってか俺達も部員の一員か?」

カレン「何か元気が出て来ました！今日はクラスの皆に思い切って話し掛けてみるデス！きっと仲良くなれると思うデス！」

忍「カレン!」

綾「頑張つて!」

浩輔「失敗したらまた相談に乗ってやるぜ。」

圭太「ガツンと行って来い!」

カレン「はいデス!」

そして放課後のHR、その時が来た。

先生「以上です。他に委員会からの連絡など、伝えたい事はありませんか?」

カレン「ハイハイハイ!」

そこにカレンが挙手した。

先生「え? 九条さん? どうぞ。何かしら?」

指名されたカレンは立ち上がって皆の前に立った。

カレン「え?」

周りは皆カレンを見てちよつと驚いてた。

カレン「大丈夫デス! 丸腰でゴザル!」

気を取り直して。

カレン「私はイギリスから来マシタけど、皆と同じ高校生デス! 皆と仲良くなりたいデス! お気軽に話して下さい! 私も頑張るデス!」

満足したかのように一息。だが周りはシーンとしていた。

カレン「あれ?」

これは失敗だと思ったカレン。するとあの時の少女が拍手した。それと同時に周りの皆もカレンに拍手した。カレンは大いに喜んだ。

カレン「皆さん!!」

隣のクラスでは、拍手の音を聴いていた。

陽子「うわーやるなー!」

綾「うん!」

忍「カレンって凄いですね!」

その時アリスは、昔カレンから聞いた事を思い出した。

アリス「うん! 凄いなだよカレンは!」

圭太「カレンの悩みは消え去ったか。」

浩輔「これで誰とでも馴染めそうだな。」

カレン「や! どーもどーも! 宜しくデース!」

そして放課後、カレンが皆と帰ろうとすると。

少女「あの、カレンちゃん。」

カレン「ん？」

後ろからクラスメイトの『松原穂乃花』が声を掛けて来た。

穂乃花「バイバイ。」

カレン「バイバイ！また明日！」

穂乃花は手を振ってテニス部へ向かった。

カレン「皆話し掛けてくれました！良かったデス！」

陽子「良かったな！」

圭太「にしても良くやったなカレンは。」

アリス「カレンは昔からハッキリした性格なんだよ。でもそこがカレンの良い所で好

きな所だよ！」

カレン「ありがとう！私もアリス大好き！」

嬉しくなりアリスに抱き付いた。

忍「あの私は？」

カレン「勿論シノも大好き!!」

今度は忍に抱き付いた。

アリス「ちよつとカレン！ハッキリし過ぎ！」

陽子「あ！アリスがまたやきもち焼いちやっただぞー！」

浩輔「アリスちゃん可愛いー！」

アリス「やきもちなんて焼いてないよー！」

陽子「分かった分かったー！」

その後の帰り道。

アリス「バイバイ！」

陽子と綾と圭太と浩輔にバイバイするアリス。陽子達は一緒に帰る。

綾「ねえ、私も中学生の時もう少しハッキリしていたら、カレンみたいに皆とすぐ仲良くなれたのかしら？」

陽子「うーん、でもそんな風にさ、冷静に考えて反省出来る事は綾の良い所だよ。」

綾「え？私の・・・」

赤面になった綾。

圭太「綾ってこう言う反応の時はハッキリしてるよな？」

綾「う、うるさい！」

陽子「しかしあの時の綾は本当に初々しかったなー。」

浩輔「そうだったなー。あの時可愛かったなー。」

綾「もう!言わないで!!」

それは中学の頃、あの時4人で帰宅途中、綾は3人の後ろを歩いてた。すると陽子は止まって、綾を優しく前に歩かせた。

後日、カレンはある自慢話をした。

カレン「私昨日、大人の階段登っちゃったデスよ。」

陽子「へえ、おめでとう。」

カレン「もつと興味持つて!食い付いて!」

やる気のない返事。陽子と綾と圭太と浩輔はジエングをしていた。綾がブロックを抜いた。

圭太「大人の階段つて昨日何したんだ?」

カレン「実は昨日、1人でラーメン屋に行ってラーメンを食べたのデス。」



この発言で3人が驚いた。浩輔はジェンガのブロックを取るのに集中してた。綾「1人でラーメン屋に!? 大人だわ!」

陽子「私なんて行けてもファーストフードだよ!」

圭太「俺はファーストフードでもラーメン屋でもどつちも行けるけど。」

昨日の昼、カレンは1軒のラーメン屋に来店した。

カレン「ハイ大将! ラーメン1つ!」

大将「ラーメン一丁!!」

カレン「ホットでお願いしマス!!」

そしてラーメンをすすると食べる。

綾「ある意味凄い!」

陽子「恐れを知らない!」

するとガシャンと音が響いた。浩輔がブロックを取る事に失敗してジエンガが崩れてしまった。

浩輔 「ギャー！！」

圭太 「浩輔の負けだな。」

浩輔 「この俺が・・・」

「END」

## Episode 4 「あめときどきあや」

昼休憩。弁当を食べ終えた忍とアリスはほっこりしてる。

綾「しの、お誕生日おめでとう。今日でしょ？」

忍「はい！ありがとうございます！」

今日は忍の誕生日だった。綾は忍にプレゼントを渡した。

陽子「マジかあ、そろそろだと思ってたけど。ほんじゃあ、ジュースあげるよ。」

忍「ありがとうございます！」

浩輔「俺からはこの子猫のぬいぐるみをプレゼントだぜ！」

カバンから子猫のぬいぐるみを取り出した。

圭太「早いもんだな。俺はこのイギリスの大全集だ。お前これ欲しがってただろ？」

カバンから分厚いイギリス大全集を取り出した。

忍「ありがとうございます！」

するとアリスが立って、黒板の前に立った。

アリス「私、何もあげる物が無いから、歌を歌うよ！」

忍「歌を？」



膝付いて俯せ状態になった。

忍「ダメですアリス、私はやっぱり若さが無いのです・・・」

圭太「自虐になってしまった。」

アリス「そんな事無いよシノ！」

陽子「何だ何だ？」

アリス「実は今朝・・・」

それは、朝食を食べてる時の事だった。

勇『そう言えば、あんた今日誕生日よね？』

忍『はい。』

アリス『え？』

勇『おめでとう。確か今年で36歳だったわね？』

忍『違いますよ！』

アリス『シノそうだったの!?!』

忍『違います！もう酷いですお姉ちゃん・・・』

勇『ごめんね。だって忍ったら若さが足りないから。』

アリス『教えてくれたらプレゼントしてあげたのに。』

忍『私も忘れてました。』

勇『プレゼントかあ、私も忍にピッタリな物をプレゼントするわ。』

忍『何ですか？』

勇『う〜ん・・・盆栽？』

忍『初老じゃないですか!!』

そして現在。忍は涙を流していた。

綾「そんな事が。」

圭太「姉貴イジるの上手過ぎだろ。」

陽子「盆栽は酷いな。」

浩輔「確かに。」

アリス「でも盆栽って凄く高価なんだよ！羨ましいよ〜！」

忍「盆栽なんて貰っても困りますよ・・・」

アリス「所で若さが足りないってどう言う意味？」

陽子「えつとつまり、老けてるって意味だよ！」

忍「老けてないです!!」

アリス「私若さ足りてるかな？」

陽子「アリスは若いぞ！とても高校生には見えない!!」

圭太「陽子お前、アリスを小学生として見てるだけだろ？」

浩輔「なあ圭太、俺は若いか？」

圭太「俺に質問するな。」

綾「喋り方のせいじゃないかしら？シノって誰にでも敬語でしょ？」

忍「成る程！ではもう少し崩してから喋ってみます！女子高生っぽく！」

敬語から離れて私語で話してみる事に。

忍「エツフェル塔の高さって知ってる？324メートルなんだって。うっそーマジで

!?みたいなの？」

綾「何か違う。」

陽子「勇姉の方がよっぽど女子高生っぽいぞ？女子高生だけだ。」

忍「……………」

陽子「同じ血を引いてるんだから、シノにもモデルの素質あるかも！」

忍「ですが、お姉ちゃんは母親似、私は父親似で……………」

浩輔「よっしゃ！だったら写真撮ってみよう！そこに座ってくれ！」

忍「はい。」

綾が用意した椅子に座る。

忍「どっこいしょ。ん？」

その瞬間気不味い空気が漂って来た。

忍「何か？」

陽子「でも、写真撮るなら水着にならないと！」

浩輔「グッドアイデア陽子！」

圭太・綾「何故!？」

陽子「だってグラビアってそうじゃん？」

忍「お姉ちゃんはファッションモデルです！水着は着ません！」

陽子・浩輔「チツ。」

綾「チツ？」

圭太「舌打ちすんな。」



陽子「身体のラインを見るのが好きなんだよ私は！綾だって脱げば少しは・・・」  
携帯のカメラを綾に向けた。

綾「こ、この！変態!!」

陽子「え？何で？」

気を取り直して忍の写真を撮る事に。殆ど良い笑顔ばかり。

陽子「良い笑顔だ〜」

アリス「うん。」

綾「モデルは無理だけどね。」

アリス「やっぱり私も何か形に残る物をプレゼントしたいな〜」

忍「良いんですよ気持ちだけで。」

アリス「え？」

忍「私にとってアリスと一緒に居られる事が最高のプレゼントですよ。」

アリス「シノ！」

浩輔「良い話だ。」

忍「でも、どうしても言うなら髪の毛一本欲しいですけど・・・」

目をクラクラさせながらアリスに近寄る。

アリス「何か怖い!!」

圭太「お前呪われるぞ。」

その夜、勇が忍に渡すプレゼントを取り出した。

勇「プレゼント買って来たの。」

忍「え？良いんですか？ありがとうございます！」

早速プレゼントを開ける忍。プレゼントの中身は。

忍「スノードーム！」

クリスマスツリーのスノードームだった。

忍「良いんですか？こんな高そうな物を！」

勇「百均よそれ。」

忍「良く出来てる!？」

勇「はい。アリスにも。」

アリス「あ！盆栽!!」

盆栽をアリスにプレゼント。

勇「置物だけ。」

アリス「良いの？私誕生日じゃないのに？」

勇「アリスが喜ぶと思って買って来ただけだから。」

アリス「イサミくありがとう！」

勇「あらあら。」

嬉しくなったアリスは勇に抱き付いた。

その頃忍は、綾に電話してた。

綾「え？アリスを取られた？」

忍「お姉ちゃんには敵いません・・・」

翌日、忍が本を読んでも綾が話し掛けて来た。

綾「シノはパソコン持つてる？」

忍「お姉ちゃんがノートパソコンを持っていますよ。でもパソコンにはウイルスがあるので私には触らせてもらえないんです。」

綾「え？」

陽子「アハハ！触ったら感染するの？何だよそれ？」

忍「お姉ちゃんが言っちゃいましたよ？」

すると笑ってる陽子が固まった。

陽子「ほ・・・本当に・・・？」

圭太「おい陽子、本気で思ってるのか？」

綾（シノにパソコンを与えたら・・・）

パソコンを使ってる忍を想像する。

忍『うわあ！金髪少女の画像！！凄い！私の金髪少女のフォルダが夢と金色でいっぱい！！』

想像を終えた綾。そして忍はアリスとカレンに近寄る。

綾（勇さん流石ね。）

陽子（扱いを分かってらっしゃる。）

浩輔（まさに忍の飼い主だな。）

圭太（何の例えだそれ？）

ある休日、アリスとカレンがデパートのベンチに座っていた。

アリス「シノ喜んでくれるかな？」

カレン「勿論！」

すると。

女性A「あの子達姉妹かな？」

女性B「可愛い！」

2人の女性がアリスとカレンを姉妹だと思っていた。

アリス「日本では私達よく姉妹に間違われるね。」

カレン「きつとアリスがちっちゃいからデスネ！ 同い年に見えないデス！」

アリス「何言ってるの!? お姉ちゃんは私だよ！」

カレン「えー？ アリスは妹デスよ。」

アリス「違うよ！ 私がお姉ちゃん！」

カレン 「妹デスよ！」

アリス 「お姉ちゃん！」

カレン 「妹！」

アリス 「お姉ちゃん！」

後日、アリスは皆に悩みを話した。

陽子 「多分、誰に聞いてもアリスの方が妹って答えると思うな。」

アリス 「え!？」

綾 「そうね、可愛い妹みたいなの？」

忍 「全世界の妹・・・」

アリス 「全世界の!？」

カレン 「ほら！妹デス！」

圭太 「まあアリスの方がカレンより背が低いから、周りにはアリスが妹ってそう思ってるんだろ。」

アリス 「だって、だって昔は、昔は泣きながら私の後ろを付いて来たのに！」

それは幼い頃、カレンは何時もアリスに懐いてた。ティータイムの時も、一緒に遊んでる時も何時もアリスに懐いてた。

アリス「こんなに大きくなっちゃって!!」

カレン「ん？」

浩輔「カレンは牛乳飲み過ぎたんじゃないのか？」

その後アリスは図書室へ言って読みたい本を取ろうとするが、背が低くてギリギリ届かない。そこにカレンが来た。

カレン「アリス私が。」

アリス「いいよ！自分で取れるから！」

カレン「だから私が肩を貸すんですよ。」

そう言つてアリスを乗せて肩車した。

カレン 「これで取れマス！」

アリス 「ちよつと危ない!!」

そこに綾が来た。

綾 「どの本？」

アリス 「あの、右から3番目の。」

綾 「ああ、先戻つてて良いわよ。」

アリスとカレンが戻つた後、綾がアリスが読みたい本を取ろうとするが、ギリギリ届かない。

陽子 「綾、取れないの？」

そこに陽子がタイムイングよく来た。

綾 (あ！肩車フラグ!?)

陽子に肩車される自分を想像する。

綾 「じ、自分で取れるわよ！肩車なんかしなくても！」

陽子 「肩車？」



その頃アリス達は机で勉強していた。

忍「英語では姉も妹シスターって言いますよね？」

カレン「そうデス！」

アリス「文化の違いかな？あまり年齢も気にしないんだよ。」

忍「へえ、でもアリスとカレンだったらやっぱりアリスは妹ですよね？」

アリス「もう、何度も言うけど私は姉だよ？」

忍「え？でもさっき気にしないって。」

アリス「私の方がお姉ちゃんだよ。」

圭太「アリスが可笑しくなってる。」

カレン「アリス、勉強教えて下サイ。」

アリス「良いよ。何の教科？」

カレン「英語。」

アリス「えー!?!」

驚いたアリスは大声だしてしまった。

浩輔「アリス声が。」

アリス「あ！す、すみません・・・」

カレンの英語のテストを見る。

アリス「19点・・・」

圭太「カレンはハーフだろ？何で英語が低いんだ？」

カレン「最近日本語に慣れ過ぎて英語が片言なんデスよ。」

浩輔「あーあるある。」

アリス「カレンったら、折角合ってるのに解答欄ずれて答え書きちゃってるよ。」

忍「アリスは頭良いですよー。この間のテストも100点でしたし。」

カレン「アリス凄ーい！」

アリス（成績は私の方が上・・・！）

突然アリスの顔がダークになった。

圭太（アリスがカオスになってる・・・）

忍「カレン、私と同じ点数ですね！」

カレン「シノ、私と同じ所を間違ってマス！」

忍「本当ですね！」

アリス「しゅん・・・」

忍を取られてアリスがしゅんとした。そこにカレンが耳元で話した。

カレン「アリス、あれ何時渡すデス？」

アリス「あ、うん！」

その後廊下で、アリスとカレンが忍にプレゼントを渡す。

アリス「実はね、昨日シノにプレゼントを買って来たの。」

カレン「誕生日プレゼントデス！」

忍「えー!? そんな! ありがとうございます！」

アリス「私は扇子だよ。」

扇子をプレゼントした。

忍「うわー! 素敵ー！」

カレン「私は外国の切手デス！」

外国の切手をプレゼント。

忍「うわー! カレンどうして欲しい物が分かったんですか!? エスパーパーみたいですよ!!」

この鬼畜。アリスはガツカリしてしまった。

アリス（ずるい、私超能力なんて使えない・・・）

忍「は! すみません! 舞い上がってしまっ！」

アリスはプルプル震えてる。

忍 「アリス？」

アリス 「シノは、カレンの方が好きなの!？」

忍 「え!?! えっと・・・」

遂にアリスは泣いてしまった。他の4人は隠れながら見ていた。

綾 「え!?!」

陽子 「何だこの修羅場？」

圭太 「忍、彼奴・・・」

浩輔 「何だろう、この空気？」

そしてアリスとカレンが忍の取り合いをした。だが忍はほっこりしてる。

陽子 「見ろ! あ顔!」

綾 「まさに台風の目だわ!」

カレン 「アリス、朝の事まだ気にしてるデス? 私が妹でもOKデスヨ?」

アリス 「そう言う問題じゃないの!」

すると忍が前に出て2人に説教する。

忍 「2人共! 喧嘩はダメですよ! アリスはアリス! カレンはカレンです! 皆違って、皆良いんです!」

アリスとカレンが忍から放たれた金色のオーラに魅了された。

忍「カレンはアリスを追って日本に来たのですし、アリスがカレンが大好きな事も私知ってます！」

アリス「シノ・・・あ！」

するとアリスは昔を思い出した。カレンがずっと一番の友達で居ようと言ったあの頃を。

アリス「(そっか、私2人にやきもち焼いてたんだ。)シノも好きだけど、カレンも同じくらい好き！」

カレン「アリス！私もアリス大好き!!シノの事も大大大大好き!!」

アリス「大が多いよ!？」

カレン「えー?」

忍「喧嘩する程仲良しさんですね。」

こうして3人の絆は深く結ばれた。

その後アリスとカレンが廊下を歩いている。そこに。

烏丸先生「アリスさん！カレンさん！」

後ろから烏丸先生が走って来た。

烏丸先生「何だか2人が一触即発な雰囲気だから癒しのアイテム作ったの！受け取って！」

癒しのアイテムは猫耳だった。カレンが猫耳を着けた。

カレン「私達、とつくに仲直りしてるデスヨ。」

烏丸先生「あら!?!」

その後、A組は英語の授業、カレンが穂乃花に言った。

カレン「あの、教科書見せて下サイ。」

穂乃花「良いよ。」

机をくっ付けて教科書を見る。すると穂乃花はカレンの金髪を見た。

穂乃花（綺麗な金髪、て言うか近い！外国人のスキンシップって奴かしら？）

だがカレンは寝ている。

穂乃花「カレンちゃん!?!」

するとカレンは目を覚ました。

カレン（そう言えば、アリスに言いたい事があつたデス。授業終わつたら良いに行こー。あ！終わるまで覚えてる自信無い！そうだ！メモって置くデス！）  
するとカレンがまた眠ってしまった。

そして時間が過ぎて英語が終わった。予鈴が鳴つたと同時にカレンが起きた。

カレン「終わったデス、アリスの所に行かなきゃ。」

メモしたノートを見ると。

カレン（のりのつくだに？）

数日後、今日は雨。忍が風邪を引いてしまった。

アリス「本当に大丈夫？」

忍「お母さんが居ますから、大丈夫です・・・ほら綾ちゃん達を待たせてしまいます

よ……」

アリス「うん、行ってきます。」

忍「お隣の松木さんに会ったらちやんとご挨拶して下さいね。」

忍の部屋から出て学校へ向かう。だがアリスはまだ心配していた。

学校に着いたアリス達。

綾「そう言えば調子悪そうだったわ。」

アリス「本当？休んで看病してあげたかったんだけど。」

綾「病院には行ったんでしょ？1日寝れば良くなるわよ。」

アリス「で、ででも、学校に居る間もしもの事があつたらと思うと！」

綾「心配し過ぎよ。」

圭太「アリスって心配性なのか？」

陽子「綾！どうしよう聞いて!!春が来たーっわっほーい!!!」

突然陽子のテンションがMAX状態になつてる。

綾「どうしたの？熱でもあるの？」



浩輔「もしや変な物でも食ったのか!？」

陽子「違う!これ見て!」

手元に1通の手紙があつた。

綾「手紙?」

陽子「バカ!声がデカイよー!それ下駄箱に入つてた!」

綾「それつてラブレ・・・」

陽子「バカー!声がデカイよー!」

圭太「そう言つてる陽子の声がデカイけどな。」

カレン「あー!love letter?」

陽子「ナイス発音!」

アリス「ラブレター!?!凄いね陽子!モチモチだね!」

カレン「モチモチ?」

陽子「エツヘヘ、何か照れるなー!」

カレン「(モチモチつてどう言う意味デス?えつと、モチモチと同じ種類の言葉デスカ

?OH!きつとそうデスネ!) 凄いデス陽子!モチモチデスネ!」

陽子「それは褒めてるのか?」

圭太「カレン、モチモチは非常に人気があると言う意味だ。」

カレン「Oh! ケイタ物知りデス!」

綾「中見てないでしょ? ラブレターかどうか分からないわよ?」

陽子「えー? でも下駄箱だよ? 他に手紙で伝える事ってある?」

綾「色々あるじゃない!」

陽子「例えば?」

綾「例えば、そう……不幸の手紙とか?」

アリス「今すぐその手紙燃やしてー!!」

綾「例えばの話よ! とにかく中を確認すれば分かる事だわ。」

圭太「まあその方が効率良いな。」

綾が手紙の中を見ようとするが。

アリス「アヤ、ダメだよ! 陽子に当たった手紙なんだから勝手に呼んだらダメだよ?」

綾「あ! それもそうね、ごめんなさい。」

陽子「じゃあ後でこっそり読むよ。」

だが綾は手紙を手放さない。

陽子「離して欲しいんだけど。」

綾（気になる気になる気になる気になる気になる!!）

その後も綾は陽子を観察する。陽子が弁当食べてる時も、職員室から出る時も、自販機で飲み物を買ってる時も。綾は気になってしょうがない。

その後教室で陽子が綾に話した。

陽子「何？」

綾「何が？」

カレン「ラブレター誰から？」

そこにカレンが来た。

陽子「あー、まだ見てないんだ。」

カレン「早く見るデス！」

陽子「名前書いてないんだよね。」

カレン「女の子からかもデスねー。」

浩輔「確かに陽子って女子でも男子でも人気ありそうだな。」

陽子「私にだって女らしい一面はあるよ！この間体育で野球した時、スライディングしたら足捻ったし。」

綾「それが何？」

陽子「か弱さアピール！」

圭太「陽子、か弱い女子がスライディングなんて普通するか？」

陽子「うーん、私ももう少しお淑やかにならないとなー。」

綾「お淑やかかってキヤラじゃないでしょ？」

陽子「綾はお淑やかで女らしいよなー？」

綾「え!？」

陽子「よし決めた！私綾っぽく振舞ってみるよ！」

圭太「まーた嫌な予感がするな。」

すると陽子は髪留めを使ってツイントールにして教科書を読む。圭太は唾然としてる。

圭太「陽子、お前……」

すると圭太のペンが落ちた。陽子が拾った。

陽子「圭太君、シャーペン落としたわよ。」

圭太「ああ、すまない……」

陽子「良いのよ。気にしないで。お互い勉強に励みましょ？ウフフ。」  
すると綾が陽子に怒鳴った。

綾「私そんなじゃない!!」

陽子「ええ？似てると思ってたんだけど。」

浩輔「どうだ圭太？さっきの陽子は？」

圭太「シユール過ぎた。普段の陽子がしつくり来る。」

その後英語の授業でも綾は手紙が気になってる。

綾「今の時間まで陽子が手紙を読む素振りは一切無し、一体何時になったら・・・別に陽子がどう返事しようが、私には関係無い。だけど、この気持ちは何なの？」

烏丸先生「それじゃあこの問題を小路さん。ん？」

だが綾は顔を隠して泣いてた。

陽子「え!？」

綾「分からない！何も分からないです!!」

烏丸先生「どうしたの小路さん!？」

英語が終わって放課後。綾はまだ座っていた。そこに5人が来た。

陽子「綾ー帰ろうぜー！」

綾「え？手紙は？」

陽子「手紙？あー忘れてた。」

綾「え!？」

浩輔「忘れてたのかよ。」

陽子「何か大事な事書いてあるかもしれないし、一応読んだ方が良いか。」  
遂に綾が気になつて手紙を陽子が見る。すると綾は涙を流した。

綾「お、おめでとう！」

陽子「何が？何か勘違いしてない？」

綾「え？」

陽子「手紙は嬉しいけど、最初から断る気にいるよ。」

綾「どうして？」

陽子「相手が誰であっても、綾の方が好きだからさ！」

すると綾は赤面した。

綾「とつとと開けなさいよ！」

浩輔「凄いな陽子、見事に口説いた。」

カレン「何の話してるデス？」

陽子「ん？友達って良いなって話。じゃあ読むよー。」

手紙に書かれてる内容は。

陽子「『お久し振りです。忍です。イギリスはどうですか？日本の天気は晴れです。アリスは元気で小さいです。ではまた。』を、英語で訳しなさい。」

綾「何これ!？」

手紙を送った主は忍だった。

陽子は忍に電話する。

忍「アリスのご両親とお話したくて、アリスに英訳をお願いしようとして手紙に書いておいたのですよ。下駄箱に入れたらラブレターぽいかなって思いました。」

陽子「私の所に入ってたけど。」

忍「それはそれは！陽子ちゃんドキドキしちゃいましたか？」

陽子「ガツカリしたよ・・・」

忍「あれ？」

浩輔「期待して損したわ！」

手紙の事は解決して6人で帰る。

陽子「元氣そうだったな。」

綾「明日には出て来られると良いわね。」

アリス「うん！」

カレン「居ないとつまらないです。」

圭太「どうした浩輔？」

浩輔「こっそり期待した俺がバカだった・・・」

陽子「今日1日シノの悪戯に振り回されたけどな。」

綾「まあ良かったじゃない。よく考えれば陽子にラブレターなんてありえないしね。」



浩輔「まあ言えてるな。」

陽子「カチーン！何だって!？」

カレン「アヤヤ、ご機嫌デスネー。」

アリス「何でだろう？」

途中でカレンと別れる。

カレン「BYE！」

陽子「じゃあねー！」

その後陽子と綾と圭太と浩輔がアリスと別れた。

アリス「またねー！」

家に帰って忍の看病をする。

アリス「行きも帰りもちやんと挨拶出来たよ。」

朝、家から出ると松木さんに会った。

アリス『お、おはようございます！』

そして帰りには、あの犬が吠えてるが、傘を使った。

アリス 『さよなら！ さよならー！』

忍 「良かったです。一人で平気かなってずっと心配してました。」

アリス 「うん。大丈夫だったよ。でもやっぱりシノと一緒に良いよ。あ。」

途中で忍が寝てしまった。

アリス 「おやすみ。」

後日忍が無事に元気なったとき。

「END」

## Episode 5 「おねえちゃんといっしょ」

教室に戻っても忍はまだ恥ずかしくなってる。

浩輔「それは災難だな。俺でも恥ずかしいな。」

綾「誰にでも1度や2度くらいはあるわよ。」

圭太「そうそう。お前だけじゃないんだ。元気だせよ。」

カレン「ヨウコとシノブはたまに姉妹に見えマース。」

陽子「付き合いいからねー。圭太と浩輔も。」

アリス「そうなの？」

陽子「私達とシノは小学校からの幼馴染みなんだ。」

圭太「確か小学校に入学して間もない頃だったなー。」

小学校時代、陽子は忍が何をしてるかを見ていた。忍の顔が真っ青になってる。そこに陽子が忍に近寄った。

陽子 『忍ちゃん何してるの？』

忍 『お姉ちゃんを探していません。』

陽子 『居ねえよそこには!』

ゴミ箱の中を探ってた。

仕方無く姉を探す事になった。

陽子 『迷子になってたのかー。しょうがないなー。』

圭太 『おーい陽子ー!』

途中で圭太と浩輔と出会った。

陽子 『やつほー! 圭太に浩輔ー!』

圭太 『何やってたんだ?』

陽子 『忍ちゃんのお姉ちゃんを探してるの。』

浩輔 『そつかー。俺達も探してやるよ! 一緒に行こう!』

こうして4人は忍の姉を探す。

忍 『あ!ここです!お姉ちゃんのクラス!』

姉が居るクラスに到着した。忍の姉の勇が出て来た。

勇『あらまあ、忍を連れて来てくれたの？えっと、陽子ちゃん？それと圭太君に浩輔君？学校に居る間妹の事お願い出来る？』

陽子『え？』

浩輔『俺達が？』

勇『この子ほんやりしてて危なっかしいから心配で。そうだ！いさと言う時はこれを鳴らして。』

取り出したのは防犯ブザー。

勇『すぐ飛んで行くから。』

陽子『使い方間違ってる!!』

学校からの帰り道、4人で帰る事に。忍は陽子の手を繋いで猫じやらしを持ってぼーっと歩いている。

陽子『確かにぼーっとしてるなー。』

圭太『誘拐されたら大変だなー。』

忍『陽子ちゃんはお姉ちゃんみたいですねー。』

陽子 『お姉さんの代わりに私達が守らないとー。』

すると浩輔が何かの気配を感じてた。

浩輔 『陽子、誰かが付いて来てるぞ?』

陽子 『え?』

それに察した陽子。

陽子 『つけられてる!!』

ランドセル付いてる防犯ブザーを鳴らした。

陽子 『防犯ブザーの正しい使い方!!』

すると出て来たのは。

勇 『何事!?!』

陽子・圭太 『お姉さーん!!』

忍の姉の勇だった。

陽子 「と言う訳で今に至る、何か途中で勇姉の話になった気がするけど。」  
アリス 「へえー。」

カレン「そうだったんデスカー。確かにヨウコは……」  
陽子の肌を突つつく。

カレン「えつと……」

アリス「姉御肌？」

カレン「そう！それデス！アヤヤは……」

今度は綾の肌を突つつく。

綾「何？」

カレン「アヤヤ肌？」

綾「アヤヤ肌って何よ！」

圭太「あの時が懐かしいなー。」

浩輔「小学校時代からのツツコミ役の陽子、これぞまさにロリツツコミ！」

圭太「上手い事言ってるじゃねえよ。」

その後の休憩時間。

忍「綾ちゃん、勉強教えて下さい。」

綾 「良いけど、シノさっきのテストどうだった？」

忍 「それが、あんまり良くなくて。」

数学の小テストの点数は0点だった。

綾 「0点!? あんまり良くないって・・・これより差の点数は無いわよ・・・この点数は信じられナス！」

忍 「ナス？」

綾 「何でも無いわよ。ほあそこ座って。」

前の席に座って勉強を始める。

綾 「追試があるから、私の言った所を覚えれば大丈夫よ。頑張りましょ。」

忍 「はいナス！」

数分後。

綾 「ここはXⅡ5でしょ？」

忍 「はいナス！」

さらに数分後。

綾 「まずはこの計算をして。」



忍「はいナス！あ、解けてましたナス！」

綾「もう！ちよつと噛んじやっただけでそんな何回も言わなくても！」

忍「え!?!テストに出るんだと思って。」

圭太「出ねえよ！」

綾「余計な事を覚えなくて良いから！」

アリス「ねえ！私にも教えて！」

綾「あ、良いわよ。」

陽子「あ、私も。」

浩輔「俺も俺も。」

カレン「私もお願いシマース！」

綾「じゃあ、皆で勉強会しましょうか。」

休日。忍の家で勉強会をする事に。陽子がインターホンを鳴らす。

綾「何だか緊張するわ。」

陽子「綾は勇姉に会うの初めてだっけ？」

綾「雑誌は何度も見た事ある。」

陽子「そっかー。私ファッション雑誌とか見ないからなー。」

浩輔「勇さんに会うの久し振りだな。」

圭太「姉貴元気にしてるかなー？」

カレン「YES！女子高生との絶大な人気を誇るファッションモデル！イサミに憧れる女の子は多いデス！サインは何枚までOKデスカネ！」

陽子「カレンが日本に来たのって最近だよね？」

忍の家に入った。

5人「お邪魔します。」

そこに勇が出迎えてくれた。

勇「いらっしやい。今日は何の集まり？」

陽子「やつほー勇姉。今日は勉強会をしに来たよー。」

綾「あの、これ皆さんで食べて下さい。」

差し入れを渡す。

勇「あらあらご丁寧にどうも。」

カレン「九条カレンと言います！勇さんの事は雑誌でお見掛けしてすぐファンになりました！宜しければサインを頂きたいと。」

陽子「カレンの日本語が流暢になってる!？」

綾「何で!？」

サインを貰ったカレンは元気にはしゃいでる。

圭太「外国人は日本の影響を受けやすいからな。」

勇「圭太君、久し振りね。」

圭太「そうだったな姉貴、久し振り。」

浩輔「勇さん！俺も忘れないでくれよ。」

勇「そうだったわね。浩輔君も久し振りね。」

忍の部屋で勉強会を始める。忍の私服はメイド服だった。

忍「あ、綾ちゃんこの問題・・・」

綾「ここはこの公式を当て嵌めて。」

陽子に勉強を教えるのに夢中だった。

忍は勇にお願いしに行く。勇はリビングで雑誌を読んでいた。

忍「お姉ちゃん、ここ教えて下さい。」

勇「良いけどタダじゃ教ええないわよ？」

忍「お金ですか!？」

勇「何か頂戴よ。宝物とか。」

忍「仕方がありません。それでは。私の宝物の一つ！ベネチアの仮面を差し上げます

！

勇「いらないわそんなの。」

即却下された。

忍「私の宝物をそんなの呼ばわり!？」

その後も勉強会は続く。時間は12時20分を過ぎていた。

浩輔「圭太、これでどうだ？」

圭太「ん？」

浩輔の解答を見る。

圭太「大分合ってるな。お前この調子で勉強やったらどうだ？」

浩輔「俺にはやる事が山程あるんだ。」

圭太「山程？」

浩輔「それは……皆でパラダイス！」

圭太「アホか。」

綾「そろそろお昼だけど。」

すると綾の腹が鳴った。

陽子「綾、今お腹鳴った？」

綾「私じゃないわ、陽子でしょ？」

陽子「えー違うよ。」

綾「だったらアリスね！そうでしょ？」

アリス「わ、私じゃないよ……」

悲しい顔を見て綾は反省する。

綾「わー！ごめんなさい嘘です！私のお腹が鳴りましたー！」

リビングで昼を食べる事に。

忍「綾ちゃんがお弁当作って来てくれました。」

綾が作った弁当を出した。

アリス「わー！凄ーい！」

勇「自分で作ったの？お料理上手ねー。」

綾「え!?!」

陽子「綾は良いお嫁さんになれるなー。」

綾「そんな、そ．．．そんな事無いわよバカー！」

陽子「何で笑顔なんだ!?!」

笑顔で否定する綾。

全員「いただきます！」

だがしかし。

陽子（ん？見た目完璧だけど味はあんまり、と言うか味付け薄！しかしこの笑顔、傷付ける事は言えないな．．．）

満面な笑顔の綾。

綾「どう？」

陽子「えっと、美味しい．．．」

アリス・カレン「これ味薄いよ（デス）。」

陽子「お前ら！そこは思いやりをだな!!」

圭太「素直に言いやがったこの金髪コンビ。」

その後弁当を完食。

全員「ご馳走様ー！」

皿を片付ける綾に勇が言った。

勇「綾ちゃんは和服似合いそうね。」

綾「え？この服似合わないでしょうか？」

勇「そんな事無いわ。自分に似合う服を選んで着れてると思う。やっぱり似合う服を着るのは一番だと思うわ。」

忍「あ。」

すると忍は照れた。

陽子「照れてる!?!」

トイレから出たカレンが勇の部屋を覗いた。

カレン「失礼するデス。」

机に置かれてるカメラを見付けた。

カレン「わあ、格好良いカメラデス。」

勇「カレンちゃん？」

後ろから聞こえた勇の声でビビったカレン。

勇「何してるの私の部屋で？」

カレン「す、すみません！勝手に・・・！」

勇「別に良いけど。」

すると勇のスマホが鳴った。

カレン「NO！警察は！警察だけはご勘弁を!!」

勇「友達からの電話よ。」

友達からの電話だった。

通話を済ませてカメラをリビングに持って来た。

勇「撮られるのは嫌いじゃないけど、撮る方はもつと好きなの。」



圭太「姉貴の自前のカメラかあ。」

勇「誰か被写体に・・・」

すると勇は被写体を綾にした。

勇「はい。綾ちゃんポーズ。」

綾「え!?!私!?!」

被写体にされて戸惑ってる。勇がシャッターを押した瞬間、綾は一瞬にして陽子の後ろに隠れた。

勇「あれ?」

浩輔「この速度、まさに忍者だなおい。」

カレン「あの、私もモデルみたいに撮って欲しいデス。」

勇「良いわよ。ここじやなんだし、近くの公園にでも行きましようか。」

浩輔「よっしゃ!早速レッツゴー!」

圭太（あれ?勉強会はどうした?）

近くの公園に到着した。

勇「懐かしいです。小さい頃、お姉ちゃんとよくここで遊びました。」  
アリス「そうなんだー。」

勇は、小さい時に忍と砂場で遊んでた頃を思い出した。昔を思い出した勇は忍の頭を撫でた。

勇「忍も大きくなったわね。」

忍「何ですか突然!?!」

そしてカレンを被写体にする。

勇「それじゃ、準備は良い?」

カレン「はい! (毎日鏡の前で練習した成果を今)!」

1枚目は、カレンが男らしく膝に腕を乗せる。2枚目は、両手で指鉄砲をする。

勇「もつと自然体で……」

カレン「そんな!?!」

勇「ん?」

すると勇は違う方へシャッターを切った。撮れた写真は圭太が右手を頭にさせてるポーズだった。

勇「圭太君、良い写真撮れたわ。」

圭太「え? 何時の間に?」

勇「凄くクールに撮れたわ。」

圭太「これが俺の自然体か。流石姉貴だな。」

陽子「勇姉も一緒に撮ろうよー！」

勇「良いわよ。忍、シャッターお願い。」

忍「はい。」

カメラを忍に渡して、被写体を勇と陽子と綾と浩輔の4人に向けた。

忍「良いですか？」

陽子「ちよつと待ったー！」

一旦中止。陽子と綾が考案中。

陽子「モデルと並ぶと顔の大きさが目立って恥ずかしいな。」

綾「私達はちよつと下がりましたよ。」

浩輔「出来るだけ下がろう。」

気を取り直して撮影再開。

忍「では撮りますよ。」

陽子「オーケー！」

浩輔 「何時でも撮れるぞー。」

3人は勇より大幅に下がっていた。

勇 「おーい。」

圭太 「遠!!」

夕方になった。

5人 「今日はありがとうございました。」

勇 「出来た写真は忍に渡すわね。」

カレン 「良かったらモデルの撮影をしているカメラマンさんに見せてもらいたいと!」

アリス 「イサミ、何卒宜しくお伝え下さい!」

カレンとアリスが目をキラキラさせながらおねだりする。

勇 「そうね・・・」

アリス・カレン 「イサミー!」

陽子 「お前らな・・・」

翌朝、勇は同級生の白川湊と登校してる。湊が昨日勇が撮った写真を見てる。

湊「この子が勇ん家でホームステイしてるイギリスの子？」

勇「そう。」

湊「日本語が喋れるって言っても同居ってどう？もう慣れた？」

勇「うーん・・・妹が2人になったみたいで可愛いわ。」

湊「あんたなんだかんだでシスコンよね。しかもうちの弟この時のはっちゃけてるわね。」

ある日の休日。

勇『小さな頃、忍は何時もぼんやりした子で大丈夫かな？ってよく心配したものだけど、最近は熱中出来る物を見付けたからか、昔に比べるとすっかりしてきたように思う。』

忍「次はこつちを着て下さい！その次はこのドレスを！さあ！」

部屋で忍がアリスを着せ替えしてる光景を勇がこっそり見てた。  
「勇『妹の将来が心配です。』」

ある日、陽子と圭太が窓から入って来る風に煽られてる。綾は陽子の胸元を見た。

綾「陽子、今更だけど制服ちゃんと着なさい。」

陽子「本当今更だな。式の時とかちゃんと着てるじゃん。」

圭太「式だけかよ。」

綾「普段からビシツとすべきだと思うの！」

制服を整える綾。

陽子「ボタン苦しい・・・！」

綾（は！な、何かこれって・・・）

察した綾が赤面した。

陽子「何で赤くなってるの？」

圭太「多分綾は察してるかもな。」

陽子「察してる？何を？」

綾「圭太！言わないで！」

圭太「すまんすまん。」

そして陽子をきちんとした服装にさせた。

陽子「どう？」

綾「良いわね！こんな陽子入学式以来だわ！」

忍「凄くしつかりして見えます！」

浩輔「普段より可愛く見えてるな。俺こつちがしつくり来るかも。」

陽子「普段の私って……」

圭太「まあでも良いんじゃないか。」

カレン「ちよつとヨーコに聞きたい事が。」

アリスとカレンが来た。

陽子「何？」

アリス「あれ？ヨーコは？」

カレン「ヨーコ何処デス？」

アリス「ヨーコ？」

カレン「何処デース？」

目の前に陽子が居るのに全く見る気配は無いこの2人。

陽子「そんなバカなー!？」

浩輔「普段の陽子にしか目が無いのかこのコンビは？」

圭太「ある意味鬼畜だなおい。」

その後アリスは陽子にお願いをする。

アリス「ヨーコ！腕相撲で勝負だよ！」

陽子「アリスと？」

圭太「唐突だな。」

右手を掴んで構える。

圭太「じゃあ行くぞ。Ready・・・GO!!」

腕相撲スタート。アリスが力いっぱい陽子の腕を倒そうとするがビクともしない。すると陽子は笑い、わざと力を抜いてアリスに勝たせた。

アリス「あ、勝った・・・勝ったー!!」



陽子「わー、負けたー(棒)」

圭太(陽子、アリスにわざと負けたのか。)

アリス「ふう・・・これで熊と出会っても戦えるよ！」

陽子「私、熊じゃないからな!!」

圭太「陽子は熊じゃないからな!!」

次はボクシングでジャブをする。

アリス「こんな感じ！」

陽子「何の構えそれ？」

圭太「ボクシングかよ。」

アリス「せい！」

その頃カレンは思い荷物を運んでた。だがあまりにも重すぎてバランスが崩れそうにフラフラしてる。

陽子「大丈夫カレン？」

浩輔「倒れそうだな。」

そこに陽子と浩輔が声を掛けた。

カレン「ヨーコ、コースケ。」

陽子「教室まで運ぶの？手伝ってあげる。」

カレン「ありがとうデス。助かりマス。」

だが陽子は少々怒ってた。

カレン「それではお願いシマス。」

重い荷物を持つてるカレンをお姫様抱っこされてる。

陽子「おい。」

浩輔「軽々と持ち上げたな陽子。俺も手伝うぞ。」

そして教室まで運び終えた。

カレン「ありがとー！ヨーコとコースケはここぞと言う時に助けてくれるなくてはならない人デース！」

陽子「それはどうもー。」

浩輔「何か照れるなー。」

カレン「何時もはひっそり微笑んでるけど、ちゃんと私達の話聞いてくれて、暗

い夜道出会えたらそれだけでホッと出来る、そう！まるでコンビニのような存在!!」

陽子「褒めてないだろそれ。」

浩輔「なあカレン、それは貶してるのか？」

教室に戻った2人は、悩んでる忍を見た。

陽子「シノ、その紙の山は何？」

忍「海外旅行のチラシです。実は昨日、危うくお姉ちゃんに捨てられる所だったんです！側から見ればただの紙切れですが、私にとっては宝物で！」

カレン「折り折りー♪」

浩輔「なあ忍、言いたい事は分かるが、お前の宝物が弄ばれてるぞ。」

何時の間にかカレンがチラシを折り紙にしていた。

忍「うわー!!!」

その頃綾は咳をしていた。

綾「コホッ、コホッ……」

圭太「どうした綾？お前具合悪いのか？」

綾「ちよつと風邪っぽくて……」

陽子「大丈夫？熱は？」

熱を確かめようと綾に手を差し伸べる。すると綾は陽子の手を叩いた。

綾「ね、熱が上がったらどうするのよ!!」

陽子「えー!?!」

カバンからマスクを取り出した圭太。

圭太「だつたら綾、マスクすれば少しは落ち着くぞ。」

綾「ありがと……」

するとカレンは陽子を見て微笑んだ。そして陽子の背中をツンツンと突つついた。

カレン「肉まん1つー!」

陽子「コンビニから離れる。」

お陰で陽子是不機嫌になってしまった。

陽子「はあ……私つて皆からどう思われてるのかな？自分の事つて分からん……」

忍「では、グラフで表してみましよう！こんな感じに!」

小さい、金髪、可愛い、簪、ツインテが書かれたアリスのグラフを見せた。

陽子「おー！」

忍「そうですね、陽子ちゃんと言えば・・・」

思い付いたグラフを一気に書き記した。

忍「こうなりました!!」

グラフは全部ツツコミに埋められた。

陽子「私の存在って!!」

その後、カレンは陽子を観察してる。クラスメイトと会話してる時も、廊下に居る時も、水を飲んでる時も、そして全てを観察したカレンは早速グラフで表す。

陽子「ちよ!?!何書いてんの!?!凄え気になる!!」

カレン「ふむふむ、陽子グラフ改訂版です!今日1日陽子を観察してみました、このグラフは正しくないです!」

陽子「つまり、私はただのツツコミキャラでは無いと!?!」

カレン「そこでこの改訂版。そしてこれはシノが書いたグラフ。お分かり頂けただろ

うか？」

改訂版のグラフと忍が書いたグラフを黒板に貼った。クラス内の全員が注目する。

浩輔「あれが陽子のグラフか。」

圭太「随分改訂されてんな。」

陽子「やめろ！皆見てる!!」

改訂版を陽子に見せる。半分やさしいで半分ツツコミ。

カレン「このように、陽子の半分は優しきで出来てマス！」

陽子「えー？なんだよもう、照れるじゃん！」

アリス（それでも半分はツツコミなんだね・・・）

圭太「あれで納得すんのかよ陽子。」

カレン「因みにアヤヤのグラフも作ってみマシタ！」

綾「私のも!？」

グラフにはデレ屋とかしこいと巨大な空欄が記入されてる。

綾「ん？この一番大きな部分は何がしめてるの？」

カレン「そこはヨーコデスヨ！」

すぐに自分のグラフをクシャクシャにした。

陽子「綾のグラフ？見せて見せてー？」

綾「ぜ、0%とは言わないけど、しめでも5%だけなんだからね！」

陽子「何が？つてか、やっぱ熱があるのか綾は？」

綾「全然熱じゃないから！勘違いしないで！」

浩輔「ツンデレの典型だな綾は。」

忍「確かに、陽子ちゃんには優しさを感じます。例えるとお母さんやお姉ちゃんのようにな。」

陽子「シノの母ちゃんになった覚えは無いよ。」

綾「そう言えば、確か陽子をお姉ちゃんつて間違えて呼んでたわね？」

圭太「あーあの時言つてたな。」

カレン「ヨーコはお姉ちゃんっぽいですネ。」

陽子「そう？」

カレン「私は一人っ子デスから、お姉ちゃんつて憧れるデス。」

綾「私も一人っ子だけど。」

アリス「私もー。」

浩輔「俺は姉ちゃんが居たな。」

圭太「俺も一人っ子だからな。」

浩輔「なんだよ圭太、お前の母さんお姉ちゃんみたいなテンションだろ？」

圭太「あんなテンションは元からだけだな。姉ちゃんのテンションってどんな風か分かんねえよ。」

アリス「ヨーコみたいなお姉ちゃんが欲しかったよー！」

陽子「何か嬉しいなー！」

するとアリスは陽子に抱き付いた。

アリス「ヨーコお姉ちゃーん！」

陽子「何だい妹よ？」

浩輔「あら〜。」

圭太「何だ？この違和感無い雰囲気は？」

綾「お、お姉ちゃん・・・」

カレン「じー・・・」

綾「あ!!」

英語の時間、忍が烏丸先生に質問する。

忍「質問です！先生は兄弟居るんですか!？」



烏丸先生「せ、先生は末っ子なのよ。上にお兄ちゃんが2人居て・・・」  
全員「お兄ちゃん？」

皆がお兄ちゃんと連呼してる。烏丸先生は恥ずかしくなつてた。

烏丸先生「あ、兄が2人です！授業に戻りますよ！」

浩輔（烏丸先生の意外な一面が見れたな。）

英語の授業が終わり、忍が職員室に向かう。

陽子「シノ、職員室行くの？」

忍「はい。」

陽子「もう学校内で道に迷わないんだなー。」

忍「もう、小学生じゃないんですから。陽子ちゃんに手を引かれなくても1人で大丈夫ですよ。」

そう言つて職員室へ向かう。陽子はただ立ってる。

綾「どうかした？」

後ろに綾と圭太と浩輔が立っていた。

陽子「何か切ない気持ちになってしまった。高校生になって、特にアリス達が来てからシノは変わったと思って。」

目の前で忍がアリスとカレンと会話してる。

陽子「3人並ぶと、あのシノが姉ちゃんに見えるんだもん。」

3人を見つめてる綾。

綾「捕らえられた宇宙人に見えた。」

浩輔「俺もそう見えた。」

そう見えた綾。

陽子「台無しだよ！」

圭太「ロズウエル事件のリトル・グレイかよ。」

綾「心配しなくても、シノは1人でやっていける子だと思うの。」

カレン「私もそう思うデス。」

アリス「私も。」

浩輔「俺も。」

綾「例えば砂漠の真ん中に放り出されても、何食わぬ顔で帰って来そうだし。」

アリス・カレン「うんうん。」

綾「無人島に漂着しても逞しく生きて行きそうだし、エベレストに遭難しても。」

アリス・カレン「うんうん。」

圭太・陽子「お前から忍（しの）を何者だと思ってるんだ!？」

綾「陽子がシノを妹みたい思ってるって事は分かったわ。」

陽子「小学生の時からそうだったからねー。でも私は長女だから本当は姉ちゃんに憧れるなー。弟も妹も可愛いけどさ。」

圭太「あー、あの2人か。」

アリス「ヨーコはイサミの事を勇姉って呼ぶよね?」

浩輔「そう言えば圭太も、勇さんの事を姉貴って呼んでたよな?」

陽子「うん、まあね。」

圭太「まあそうだな。」

小学生の頃。

勇『陽子ちゃんも妹みたいなものよ。それに圭太君は弟みたいなものよ。』

陽子『本当?』

圭太『俺も?』

勇 『可愛いわ。』

陽子 『じゃあ、勇姉って呼んで良い？』

勇 『勿論！』

陽子の頭を優しく撫でる。

陽子 『勇姉！』

圭太 『じゃあ俺は、姉貴って呼んでもいいか？』

勇 『ええ勿論。』

圭太 『宜しくな！姉貴！』

その頃忍達が進んでる別の高校では、勇と湊が弁当を食べてる。

湊 「今は何時？」

勇 「えつとね・・・」

スマホで時間を見る。

勇 「12時55分。」

すると画面がアリスと忍の2ショットに変わった。

湊「あんたシスコン度上がってない？」

勇「んー？そっかなー？」

放課後、忍とアリスが下校してる。

忍「お姉ちゃんはスカウトされてモデルになったんですよ。」

アリス「凄ーい！」

忍「丁度この辺りで声を掛けられたそうですよ。」

何時もの集合場所に止まった。

アリス「じゃあ、私達ももしかしたら声掛けられるかも！」

忍「スカウト待ちって奴ですね。」

こうして2人はスカウト待ちをする。

時間が過ぎて夕方。スカウトは来なかった。そこに綾が来た。

綾 「2人共、先帰ったんじやなかったの？」  
結局スカウト待ち失敗。

「E N D」

## Episode 6 「金のアリス金のカレン」

季節は遂に夏になった。教室で陽子とカレンと浩輔が扇いでる。綾と圭太は平然としてる。

陽子「あちー……」

カレン「デスー……」

浩輔「気力が低下中……」

そこに忍とアリスが来た。

忍「来週から夏休みです！皆で何処か遊びに行きたいですね！」

浩輔「それ良いな！皆何処行きたい？」

陽子「はいはい！」

浩輔「じゃあ陽子！」

陽子「海行こうよ海！」

圭太「海か。バカンス気分を味わうには丁度良いな。」

カレン「えく？山が良いデス。」

海と山に分かれ、カレンと陽子が睨み合う。

陽子「山手線ゲーム！夏に行きたい所！」

圭太「やんのかよ。」

陽子「海！」

カレン「山！」

陽子「海！」

カレン「山デス！」

両手を掴み合う。

カレン「山ー！」

陽子「頑固か！」

綾「2人共喧嘩はやめなさい！は！ここは間を取って、家って事でどうかしら!？」

陽子「何処と何処の間だよ!？」

圭太「インドアかよ。忍とアリスはどうなんだ？」

忍「私は涼しい所なら。」

アリス「皆と一緒になら何処でも楽しいよ。」

陽子「えく？海行こうよ海く。」

綾「嫌よ、焼けるし。」

浩輔「なあ圭太、昔みたいにかんがり焼こうぜ。」



圭太「また猪のステーキやるのか。」

浩輔「嫌味な野郎だな。」

綾「陽子は水着が似合いそうで良いわね。」

陽子「何だよ？言つとくけど私は普通だからな。」

カレンが陽子の胸を見る。綾は不機嫌になった。

綾「それが普通なら、私は・・・！」

陽子「面倒くさいなおい！」

するとカレンがアルバムを出した。

カレン「海はこの前行ったデス！ハワイー！」

写真を見ると、ハワイの風景が写ってた。

陽子「おー！青い空白い雲！」

忍「楽しそうです！」

カレン「土日でピューンと行って来マシター！」

圭太「凄いな九条家は。」

綾「背は私の方が高いのに・・・」

カレン「ん？なーんだそんな事！パッドを入れればバッチOKデスヨ！」

取り出したのは、マウスパッド。しかもマウス付き。

カレン「さあ！早く突っ込むのデス！」

陽子「何で持って来てるの？」

圭太「それ学校のじゃないだろうな？」

アリス「決まらないねー。」

忍「今何の話でしたっけ？」

カレン「こうしましヨウ！トランプで勝負して、勝った人の言う事を聞くデス！」

陽子「望む所！」

結果、陽子の勝利。カレンは泣いてしまった。

浩輔「陽子ってババ抜き強えな。」

圭太「カレン大丈夫か？」

カレン「山が良いデス・・・山が良いデス・・・」

陽子「仕方無いなー。じゃあ山で良いよ。」

圭太「陽子優しいな。」

カレン「富士山ー！」

圭太・陽子「それはちよつと！」

こうして夏休みに入った。山へ行く準備を済ませた圭太達。忍とアリスとカレンはまだ来てない。綾は麦藁帽子を被っており、圭太はキャップを被ってる。

綾「暑い・・・忘れ物無い？」

陽子「おう！」

浩輔「問題無し！」

陽子「水筒！雨具！虫除けスプレー！水着は置いて来ました・・・」

綾「宜しい！」

忍「お待たせしましたー！」

4人「うわ!？」

忍を見て4人が驚いた。

忍が森ガールファッションを着ていた。

綾「しの！暑くないの!？」

陽子「どう見ても山に行く服装じゃないぞ!？」

圭太「それってコスプレか!？」

忍「森の妖精、ですよ．．．はあ．．．はあ．．．」

あまりの暑さに息をはあはあと漏らす。

浩輔「何言ってるんだお前？大丈夫か？正気か？」

忍「森ガールです。」

綾「どうして山ガールじゃないの？」

忍「森の方が可愛いからです。」

圭太「そんな理由かよ！」

アリス「シノ可愛いよ！妖精にしか見えないよ！」

忍「そうですか？はあ．．．はあ．．．」

陽子「こんな苦しそうな妖精いやだ。」

圭太「逆に呪われそうだな。」

忍「女の子はオシヤレの為ならちよつとの我慢は厭わないのですよ！お姉ちゃんが  
言っていました！」

その頃勇は。

勇「あつっー。」

家でスイカバーを食べてた。

陽子「良いけど倒れるなよ？」

忍「はい。」

綾「それにしてもカレン遅いわね。」

アリス「パパと来るはずだけど。あ！来たー！」

丁度そこに1台の巨大キャンピングカーが到着した。

陽子「何だ何だ!？」

圭太「キャンピングカー!？」

キャンピングカーの窓が開いた。中からカレンが手を振った。

カレン「ハイ！皆乗って下サイ！」

陽子「お前何者だ!？」

綾「お嬢様・・・？」

圭太「なあアリス、改めて聞くけどカレンって何者だ？」

アリス「資産家のお嬢様だよ。」

圭太「通りで。」

キャンピングカーに乗った一行は山へ向かう。

アリス『夏休み！富士山じゃないけど、山登りです！』

そしてキャンピングカーから降りた。

カレン「山デース！ヤッホー！！」

叫びながら走り出したカレン。

浩輔「カレンのテンションがMAXに達してる。」

陽子「暑い・・・」

綾「日焼け止め、汗で流れそう・・・」

忍「うへえ・・・」

アリス「ふうーふうー。」

忍「息切れですか？」

アリス「おでんとか食べる時、ふうーふうーつてするでしょ？」

忍「成る程！空気を冷ましてるのですね！」

2人はふうふうして空気を冷まそうとしてる。

綾「何してるの2人共？」

浩輔「なあ圭太、この暑さは尋常じゃねえぞ・・・」

圭太「浩輔はだらしねえな。俺みたいに元気を出せ！」

陽子「圭太もテンション高いな・・・」

圭太「俺は夏好きなアウトドアな男だ。」

数分後、遂にカレンを見付けた。

カレン「皆遅いデス。」

圭太「悪い悪い。」

忍「もうすぐですか？」

陽子「登り切ったら達成感ありそう！」

綾「そうね！」

アリス「頑張ろー！」

6人は右の道を歩む。

カレン「Hey！そっちじゃないデスヨ！」

看板を指す。上に溪流が書かれてた。

圭太「溪流？」

一行は溪流に到着した。綺麗な水が流れてる。

カレン「Hey皆さん！ここでは溪流釣りが楽しめマス！釣りの準備も用意してマス！パパが！」

陽子「こつちが目的だったのか。」

圭太「いいじゃねえか。じゃあ釣りやろうぜ。」

それぞれ竿を持つ。

アリス「釣りの事なら任せて。イギリスに居た頃はちよつとブイブイ言わせてたんだよ。」

忍「ブイブイ？」

カレン「釣った魚で昼ご飯デス！大きいの狙いマス！」

アリス（シノに格好良い所見せなきゃ！カレンには負けられない！）

忍「アリス・・・暑いです・・・」



燃えてるアリスを圭太が苦笑いしてる。

圭太「アリス、張り切ってるな。」

浩輔「おーい圭太ー！あっち行ってみようぜー！」

圭太「良いだろう！」

そして釣り開始。

カレン「わーい！」

1 匹目を釣ったカレン。

カレン「また釣れマシター！」

2 匹目を釣ったカレン。

カレン「大物GET！」

3 匹目を釣ったカレン。アリスの竿にはまだ反応無し。

忍「カレン凄いです！」

カレン「釣りは小さい頃から得意だったデスー。」

アリス「うわー！ー！」

突然アリスが川に入った。

忍「アリス!？」

アリス「待っててシノ!今すぐ美味しい魚捕まえるから!」

忍「その気持ちだけで十分ですよ!」

そして釣り終了。釣れた魚で昼食。

全員「いただきまーす!」

焼き魚を食べたカレンは満族した。

忍「美味しいですねアリス。」

アリス「うん・・・」

さっきの事でまだしょんぼりしてる。

浩輔「いや〜美味しいなー!」

圭太「それにしてもまさかブラックバスがこんなに釣れたとは。」

綾「あ!そうだ。皆にお弁当作って来たの。良かったら。」

陽子「わーい。」

棒読みで喜ぶ陽子。

綾「何よ、少しは上達してるんだから。」

弁当の中は、卵焼きやおにぎり、唐揚げなど入ってた。

忍「美味しそうです！」

唐揚げを見てる陽子は味が薄いのかと思ってる。意を決して食べる。

陽子「本当だ！美味しい！」

味付けは丁度良かった。

陽子「綾は私のアレになって欲しいなー！」

綾「アレって何よ？」

陽子「えっと、お母さん！お袋の味！」

その頃カレンのパパは釣りをしていた。

アリス「虫いっぱいだね。」

忍「そうですね。」

アリス「あ！シノ！危ない！！」

虫が忍の頬に止まったのを見てアリスがピンタした。

忍「アリス・・・？」

アリス「ご、ごめんね・・・蚊が・・・蚊がー！」

陽子「綾！」

突然陽子が綾の腕を掴んだ。

陽子「お願いだ！私、綾と一緒にならなんでも出来る気がするんだ！」

綾「え!?何よ突然!?!」

陽子「だから飛び込もう！」

綾「行ける訳無いでしょ!!」

滝を見て飛び込もうと言った陽子。川を見て残念がる。

陽子「あくあ、やっぱり水着持って来れば良かったなー。」

綾「そんなに泳ぎたいの？」

するとカレンが川に入った。

カレン「ここは、水遊びで我慢しまシヨウ！青春ほいデス！」

水を陽子と綾に飛ばした。

陽子「よーし！」

靴を脱いで川に入った。

陽子「わー！冷たー！ほら綾！気持ち良いぞー！」

またカレンが陽子に水を飛ばした。

陽子「やったなー！」

カレン「隙ありデス！」

2人が遊んでるのを見てる綾も、靴を脱ぐ。

綾「少しだけよ……」

その頃アリスと忍は岩場に居た。アリスが小さい石を退けると、小さい蟹が居た。

アリス「シノー！蟹居たー！」

忍「わー！蟹さんですかー？見たいですー！」

スカートの丈をちよつと上げて、アリスの所に向かう。だがしかし足を滑らせてしま  
い、川に落ちてしまった。

アリス「シノー！」

その頃圭太と浩輔は釣りを楽しんでた。

浩輔「こつちに大物釣れたぞー！」

圭太「やるな！こつちだつて獲つたどー!!」

その頃カレン達は水遊びを楽しんでた。

カレン「行くデスよー！」

水を陽子に当てた。

陽子「やったなー！これならどうだー！」

バケツに水を入れてカレンに当てた。

カレン「反則デス！」

綾は不安になりながらも川に入る。

陽子「綾ー！早くー！」

綾「ちよつと、待って。あ！」

下を見た綾。

忍が流れて来た。

綾「え？」

アリス「シノー！」

奥からアリスが走って来た。

アリス「シノー！」

すると流れてる忍が何かに引っ掛かって上げられた。圭太の竿の針だった。

圭太「浩輔、忍が釣れた。」

浩輔「何だって!?!じゃあ早速……」

圭太「食おうとすんな。」

引き上げられた忍は無事だった。だがしかし、服が水を沢山吸ってしまい、忍が泣いた。

忍「水を吸って凄い重さに……」

アリス「シノー！怪我は無い!?!」

だがアリスが足を滑らせて忍に当たった。次にカレンに当たり、綾に当たり、陽子に当たり、バランスを崩した

5人「うわー！！」

川に落ちてしまった。

圭太「落ちた!?!」

浩輔「大丈夫か!?!」

綾「もう!」

アリス「ごめんね皆……」

カレン「アハハ!」

陽子「あはは、まあ夏だしすぐ乾くよ!」

忍「でも、汚れてしまった服は戻らないです……」

陽子「そんな服着て来るから!」

アリス「服なんか無くてもシノは妖精だから大丈夫だよ!」



浩輔「これはこれで彼奴ら楽しそうだな。」

圭太「忍が愁傷状態になってしまったな。」

そして山登りから帰ったアリスは日記を書いた。

アリス『沢では沢山魚が釣れました。シノは私の焼いた魚を美味しいって言って食べてくれました。今度は富士山に登ってみたいです。』

気付かれないように忍が後ろからアリスの日記を見る。

忍「ほほえまー。」

アリス「シノ何時から居たの!？」

ある日、何故か陽子と圭太が森の中を歩いている。

忍「アリス！カレン！どうしましょう・・・2人が・・・2人が・・・」

湖の畔に行くと、忍が泣いている。すると目の前の湖が金色に光った。中から女神の綾

とアリスとカレンが出て来た。

綾「あなたが落としたのは金のアリスですか？金のカレンですか？」

忍「そんな！私には選べません！とても選べない！」

こつそり見てた陽子と圭太が震えてた。

陽子「何だこれ・・・？」

圭太「カオス過ぎる・・・」

ある日、忍は金髪少女倶楽部と言う雑誌を見ていた。

忍「はあ、金髪・・・！」

カレン「シノは本当に金髪が好きデスネ。こんなのはどうデス？」  
取り出したのは、まんがタイムきららだった。

忍「わあ〜！色んな髪の色があるんですね！」

ゆゆ式のページを見て30分後。

忍「あ、青髪も良いかも・・・！」

アリス「ダメー！シノを変な色に染めないでー！」

金髪と青髪に興味を持ってしまった。

夏休みが始まって数日後。忍の部屋でアリスが浴衣を着ていた。カレンも部屋に居た。

カレン「アリス、可愛いデス！」

忍「私のお下がりですが、はい出来ました。」

アリス「ありがとうシノ！」

忍「カレンも持つて来ました？」

カレン「Yes！」

忍がカレンに浴衣を着せる。

カレン「日本の祭り始めて！」

アリス「私も！大きい侍が乗った山車を皆で引っ張るんだよね？」

カレン「ダシ？ミソ？」

アリス「やーやーど！」

青森のねぶた祭りを楽しみにしてるアリス。

忍 「それは青森の祭りです。今日行くのは地元の夏祭りなので。」

アリス 「え!?!じゃあ大文字とか宮入りとかは?」

忍 「多分無いかと・・・」

アリス 「そうなんだ・・・」

しよんぼりしてしまったアリス。

カレン 「アリス! 持ってたー!」

アリス 「ん?」

カレンの浴衣の帯を持つアリス。

カレン 「よいではないかよいではないかー! あーれー!」

帯回しを体験してるカレン。

アリス 「え!?!」

忍 「金髪に浴衣。これはこれで。」

アリス 「シノは何着るの?」

忍 「私は・・・」

その頃駅では、浴衣姿の綾が待っていた。

陽子「お待たせー。」

丁度陽子が来た。

綾「陽子。」

陽子「ん〜。」

綾「何よ？」

陽子「浴衣、似合うじゃん！」

綾は恥ずかしかった。

陽子「やっぱ黒髪だからかな？」

綾「よ、陽子も……。」

浩輔「ヤッホー！」

丁度そこに圭太と浩輔も来た。2人は何時もの私服を着ていた。

陽子「ヤッホー！」

圭太「2人の浴衣結構似合うな。」

陽子「そうかな？」

すると今度は。

忍「お待たせしましたー！」

陽子「ん？」

忍とアリスとカレンが来た。忍の浴衣は浴衣ドレスだった。

陽子「邪道だ。」

圭太「邪道だな。」

そして一行は夏祭りに到着した。

アリス「提灯！鳥居！法被！」

カレン「Happy？」

忍「ハッピーな時に着るんですよ。」

浩輔「何か寒気が……」

綾「また嘘を付いて。」

圭太「法被は、日本の伝統衣装で、祭りなどで着用する着物だ。」

???「お兄ちゃん！」

すると聞き覚えのある声が聞こえた。烏丸先生だった。

忍「烏丸先生ー！」

烏丸先生「あら皆！」

陽子「からすちゃん迷子？」

綾「お兄さんと逸れてしまつたんですか？」

烏丸先生「え?!いえ・・・そんな事は・・・1人で来ましたから・・・」

圭太「でも先生、イカ焼き3本持つてますが。」

烏丸先生「え!?!これは・・・その!1人で!食べるんです!」

そう言いながら去つて行つた。

陽子「太るよー!」

気を取り直して夏祭りを堪能する事に。アリスとカレンはワクワクしていた。

カレン「何から行くデス？」

アリス「最初はこなもの？」

カレン「焼いたのも良いデス!」

アリス「綿あめやデザートだよね!」

カレン「チョコバナナもデザートデス!」

忍「迷つちやいますよねー。」

陽子「まずは1週して食べたい物やりたい物チェックだな！」

カレン「えー!？」

5人「ん？」

カレン「もう食べたいデス！」

陽子「お腹いっぱいになった時に、あ！これ食べたかったのにー！とか、お小遣いが足りない！なんて事になるよ？」

浩輔「流石陽子、解釈が上手いな。」

綾「ありがちね。」

カレン「Oh・・・それは・・・」

アリス「考えて食べなきゃいけないね。」

忍「たこ焼き！美味しいですよ！」

既にたこ焼きを買った忍。

陽子「もう食べてる!？」

圭太「早いなおい！」

カレン「Hey大将！たこ焼き一つ！」

大将「はいよ！あ！え、あ・・・スリー百円。」

カレン「Oh！300円デスネ！」



忍「アリスは良いんですか？」

アリス「うん。」

忍「お一ついかがですか？」

アリス「良いの？ありがとー！」

たこ焼きを一口食べる。するとアリスが固まった。

忍「熱いので気を付けて下さいね。」

アリス「先に言ってー！」

浩輔「忍が段々鬼畜になってしまった。」

圭太「焼きそば美味いなー。」

焼きそばを買って来た圭太。

浩輔「お前もかよ!？」

圭太「ふーふー。」

焼きそばを冷ます。

圭太「アリス、焼きそば食うか？熱いから気を付けるよ?。」

焼きそば一口をアリスに食べさせる。

アリス「美味しい！」

圭太「良かった。」

2人は互いに微笑む。

忍「圭太君！私のアリスを取らないで下さい！」

圭太「お前はアリスの親か。」

陽子「それじゃあ改めて行きますか！」

カレン「GO！GO！」

浩輔「レッツパーテイ！！」

圭太「元気だなあ。」

ヨーヨー、デザート等様々な店を歩き回った。するとカレンがお面の店を見つけた。

カレン「あ！これ欲しいデス！」

綾「カレン、ちよつと鏡見た方が良いと思う。アリスも。」

アリスとカレンは、既に多くのグッズを買っていた。

陽子「はしゃいでんなー。」

圭太「楽しければ良いじゃん。」

次は金魚すくいに来た。

カレン「勝負デス！」

陽子「望む所！」

金魚すくい対決。陽子は余裕で金魚をすくいまくる。

綾「上手いものねー！」

当のカレンは、ポイがいきなり破れてしまつて金魚すくいが不可能になつてしまつた。するとカレンがお椀ですくおうとした。

カレン「これならー！」

陽子「おい!!」

そしてアリスがすくつた数は2匹。

アリス「バイバイ。」

すくつた金魚を逃がした。

忍「折角すくつたのに。」

アリス「キャッチアンドリリースだよ。」

浩輔「いやーりんご飴美味いな。」

圭太「お前結構金使つてるだろ？」

りんご飴を食べてる浩輔とホットドッグを食べてる圭太。

次に来たのは、カタヌキだった。陽子が慎重にカタヌキをするが、力が入り過ぎて割れてしまった。

陽子「うわあー！惜しい・・・」

カレン「CLEARデス！」

見事にカレンはカタヌキをクリアした。

忍「私も出来ました。」

陽子「うわ!?何だそれ!?!」

忍「エツフェル塔です！」

何とエツフェル塔のカタヌキを見事に成功した。

カレン「負けまシター。」

圭太「エツフェル塔を見事に成功した忍、かなりの精神がいるなこれ。」

アリスもカタヌキをするが、割れてしまった。

忍「残念でしたね・・・」

すると太鼓の音が鳴り響いた。

カレン「何デス!?!火事デス!?!」

アリス「お祭りの音！」

浩輔「太鼓だ！踊りが始まるのか！」

早速その場所へ行くと、盆踊りしてる人が沢山いた。

カレン「Oh！私達も入れて欲しいデス！」

するとカレンが忍とアリスを引つ張って行つた。

アリス「ちよつとカレン!？」

浩輔「待てー！俺もー！」

それに続いて浩輔も走る。

陽子「あーあ。」

圭太「行つちやつたな。」

綾「陽子も行けば？」

陽子「綾は？」

綾「うーん、ここで見てる。」

綾はベンチに座つた。すると陽子が綾の足を見て気付いた。

カレン「ヨーコー！アヤヤー！ケイター！」

浩輔 「ヤッホー！」

4人は櫓の上に立っていた。

綾 「あそこ、太鼓叩く人しか登っちゃいけないんじゃない？」

圭太 「櫓に登ってやがる。」

陽子 「自由だなー。」

圭太 「フリーダムだな。」

櫓の上でカレンが踊る。

カレン 「どう踊れば良いデス？」

忍 「確か、よよいのよい！」

手拍子して顔を下にして両手を左右に伸ばす。

カレン 「よよいのよい！」

さっきのと同じ踊りをする。

忍 「そうそう。」

浩輔 「じゃあ俺も！」

カレン・忍・浩輔 「よよいのよい！よよいのよい！」

3人同時に踊りだした。アリスは踊ってる人達を見て微笑んだ。

こうして夏祭りが終わった。

カレン「楽しかったデス！後は花火デスカー、花火は何時上がりマスか？ドーン！ドーン!!」

綾「残念だけど。」

陽子「花火大会じゃないからなー。」

カレン「えー無いデスカ？花火ー花火ー！」

忍「ありますよ。」

浩輔「俺もあるぜ！」

5人「え？」

アリス「花火あるの？」

忍「はい。打ち上げ花火には及びませんが。」

圭太「浩輔持って来たのか？」

浩輔「ああ。この前大量に買って来たぜ。」

公園へ移動して手持ち花火を楽しむ事になった。カレンが手持ち花火で楽しんでる。

カレン「Yay!!」

手持ち花火をぐるぐる振り回す。

綾「振り回さない！」

忍「綺麗ですねー。」

アリス「うん。」

陽子「綾ー。」

そこに陽子が何かを買って戻って来た。

綾「何処行つてたの？花火やらないの？」

陽子「はい。」

袋から出したのは絆創膏だった。綾の足を見る。

陽子「何時から痛かったんだ？」

綾「駅で待ち合わせしてる時・・・」

陽子「最初かよ！何で言わなかったんだ？」

綾「だって、水差したくなかったし・・・」



陽子が綾の足に消毒液を掛ける。

綾「うっ!!」

陽子「放つて置いたから染みるの。次からはちゃんと言う事。」

膨れっ面になつてる綾に消毒液を向ける。

綾「分かつたから!」

浩輔「まるで夫婦だな。」

綾「浩輔!!」

圭太「浩輔、これをプレゼントするぜ。」

浩輔「何をだ?」

圭太が浩輔にプレゼントしたのはネズミ花火だった。既に回っている。

浩輔「ちよ!?!ネズミ花火かよ!!」

ネズミ花火から逃げ回る浩輔。全員が笑う。

???「良いなー花火。」

また聞き覚えのある声が聞こえた。

陽子「勇姉!」

圭太「姉貴!」

忍の姉の勇だった。

陽子「勇姉もやるー?」

勇「私は良いわ。」

アリス「イサミー! 何買ったの?」

勇「スイカ。」

スイカを持つてた。

カレン「スイカ!」

圭太「スイカか。」

浩輔「Water Melon!」

忍「さつき皆でお祭りに行つて来たんですよ。お姉ちゃんにお土産です。」

焼きそばやたこ焼きやりんご飴や綿あめを勇に差し出す。

勇「全部食べるのは無理かなー?」

その後勇は土産を持って家に帰つて行つた。全員はその後も花火を楽しんでる。

アリス「シノ、お祭り連れてつてくれてありがとう。」

忍「どうでした?」

アリス「すつつつごく楽しかったよ！」

忍「私も今までで一番楽しかったです！」

アリス「そうなの？何時もと違った？」

忍「うーん、強いて言えば、アリスと一緒にだったからかもしれません。」

アリス「シノ！」

するとアリスと忍が持ってた線香花火が切れた。

アリス「あ！」

忍「終わってしまいましたね。」

アリス「夏、終わっちゃうね。」

忍「まだまだ花火はいっぱいありますよ！」

アリス「うん！」

浩輔「もう花火が終わる寸前か。」

カレン「Oh！打ち上げ花火あるじゃないですか！」

打ち上げ花火をカレンが見付けた。

綾「ダメよ。そう言う物はもっと広い所やらないと。」

カレン「ん？」

打ち上げ花火の導火線に火が着火された。

陽子「うわ！もう点いてる!!」

綾「こつち向けないで!!」

浩輔「やばい！皆逃げろ!!」

3人が逃げる。それに続いてアリスと忍も逃げる。

忍「避難ですー!」

カレン「どうすれば良いデスカー!？」

圭太「カレン！俺に貸せ！」

カレンが持つてる打ち上げ花火を持って走る。

綾「圭太!？」

圭太「ここだ!」

打ち上げ花火を広い場所に素早く置いて退避した。すると同時に上に花火が上がった。

カレン「Oh！綺麗デス！」

圭太「ふう、危機一髪だったな。」

綾「圭太大丈夫？」

圭太「心配無い。無傷だ。」

アリス「綺麗だねー。」

忍「はい。」

こうして楽しい夏祭りと花火を満喫した7人だった。

その後、陽子が怪談話を始めた。

陽子「その少女は夜、1人で机に向かって行った。静かな部屋に、コチ、コチ、コチ、コチ。時計の音だけが、不気味に響いてる。コチ、コチ、コチ。そして、午前0時、9月1日、：夏休みの宿題はまだ一つも終わってない!!」

4人「きやーーーーー!!!」

怖がつて叫ぶ4人。そこに綾と圭太が電気を点けた。

綾「他人事じゃないわよ?もう8月31日よ。」

圭太「お前ら宿題はどうした?」

5人「きやーーーーー!!!」

この5人、宿題が終わってなかった。

「  
E  
N  
D  
」

## E p i s o d e 7 「はらぺこカレン」

職員室で烏丸先生が風に煽られてる。

烏丸先生「とうとうこの季節がやって来た。」

先生「何かあるんですか？」

烏丸先生「ええ。毎年この時期なんです。秋になってようやく。」

そう言つてジャージを着た。烏丸先生はほっこりした。

烏丸先生「あく！このフィット感安心する〜！」

先生「烏丸先生、何か悲しくなりますよ？」

その頃教室ではアリスが女子生徒から日本語を教えて貰つて手帳にメモしてる。

女子生徒「つてこう言う意味だよ。」

アリス「成る程〜！」

そこに綾がアリスに聞いた。

綾「アリス、何メモしてるの？」

アリス「学校で聞いた難しい日本語、後で忘れないように書いて置くんだよ。」

綾「成る程ー、メモしてたら忘れないわね。」

するとアリスは、綾が持つてるバッグを見た。

アリス「ん？綾何持つてるの？」

綾「ジャージだけど？次体育だから。」

アリス「忘れたー！」

綾「バッチリメモしてるけど。」

手帳にジャージとメモしてあった。

アリス「忘れないように玄関の目の付く所に置いてあったのに……」

ジャージを忘れてしまったアリスはシヨボンとしてしまった。

綾「アリスも結構ドジなのね。」

陽子「しのは気付かなかったの？」

忍「あーそう言えば、アリス体育なのにジャージ持つてないなって思いました。」

陽子「確信犯!？」

相変わらずの鬼畜。

忍「でも中に着てるのかと思いました。」



陽子（水着じゃないんだから・・・）

心の中で突っ込む。すると陽子は何かを閃いた。

陽子「アリス大丈夫だ！」

駆け足で教室を出た。烏丸先生を連れて来た。

陽子「こう言う時の為にからすちゃんのリゾートがあるんだ！」

アリス「え!?でも先生だし・・・」

烏丸先生「大丈夫よ!デザインはほぼ当時のままだから、バレないバレない!」

アリス「いや先生・・・」

更衣室で着替える。ジャージは借りれたが、下のジャージが無かった。

アリス「上は貸して貰ったけど、下が無いよ・・・」

陽子「大丈夫!無くても行ける!シャツ一枚的なの?」

綾「ええ!違和感ゼロだよ!」

アリス「え!?大丈夫じゃないよ!」

忍「あ!私夏用の短パン持ってますよ。」

陽子「それだー！」

早速着替えてグラウンドに来た。

体育教師「はーい全員集合ー！」

全員「はーい！」

アリス「さ……寒い……」

外はかなり寒いのでアリスはガクガク震えてる。

綾「体育なんて科目、この世から無くなれば良いんだわ。」

1人ぼつんと座った綾が呟く。

陽子「何言ってるんだよ、見学するなよ。」

浩輔「なあ圭太、何でアリスは短パンなんだ？」

圭太「陽子に聞いたらジャージ忘れたって言ってた。」

柔軟体操をするが、綾はとても硬かった。

綾「痛い・・・痛い・・・やめて・・・！」

陽子「変な声出すな。」

綾「私体硬いんだから、あんまり力入れないで！」

背中伸ばしをするがこれでも硬かった。

綾「痛たたたた!!！」

何故か関節技を綾に食らわす。陽子は容赦ない。

綾「ギブギブ！これ柔軟じゃないー！」

陽子「五月蠅い。」

圭太「陽子が珍しく鬼と化した。」

次は持久走。綾は既に疲れてる。

綾「1000メートル・・・そんなに走ってどうするの・・・？何か良い事あるの・・・？」

陽子「綾は見掛け通り遅いなあ。先行くよー。」

余裕で綾を追い越す陽子。浩輔が綾の横に並ぶ。

浩輔「陽子速いなー。俺もう限界、悪いけど綾、先に待ってるぜー。」

一気に浩輔が綾を追い越す。今度は圭太が綾の横に並ぶ。

圭太「綾頑張れ。自分のペースで走るのが持久走だ。頑張れよ。」

激励を綾に送った圭太は追い越した。

綾「そ、そう言えば、しのとアリスは・・・？」

後ろを見ると、忍とアリスはもうバテてる。

綾「遅!!」

だが忍は汗一つもかいてない。

綾「しの!?!遅いけど息一つ切らしてない!!」

忍は余裕の表情をしながら綾に追い付いた。

綾「しの・・・」

忍「あ、綾ちゃん。」

綾「余裕があるなら圭太が言ってた自分のペースで走って行った方が疲れないわ。」

忍「いえ、これ以上は速く走れません。最高速度です。」

綾「え?でも全然疲れてないけど?」

忍「うーんそうですねー、2、3時間なら走り続けれます。」

綾「何その持久力!？」

アリス「シ……シノ……」

忍「はい？」

アリス「わ……て……先に……行つて……」

忍「大変綾ちゃん!アリスが!英語で何かを伝えてます!」

綾「わ。ワンモアプリーズ?」

アリス「ち……違う……」

忍「そうだ!アリスに疲れを軽減する呪文を教えます。」

アリス「え?そんな物が……?」

忍「運動部でよく言われている掛け声ですので、きつと効果あります!えーっと、何でしたっけ?ふわ……ふわ……あ!ふわふわ!そうです!確かふわふわだったはず!」

アリス「ふわふわ……?」

忍「私に続けて言ってみて下さい!ふわふわー!」

アリス・綾「ふわふわー。」

忍「ふわふわー!」

アリス・綾「ふわふわー。」

陽子「何だ？あのふわふわした連中は？」

浩輔「もふもふ的な雰囲気醸し出してな。」

やつと3人は持久走を終えた。アリスは倒れ込んだ。

陽子「疲れ過ぎだろ？」

浩輔「綾、結構辛かったろ？」

圭太「アリス大丈夫か？」

アリス「きつと・・・こう言う時にこの言葉を使うんだと思う・・・合ってる？」

メモを圭太に見せた。ヤバスと書かれてあった。

圭太「ああ、大体合ってるな。後でカイ口渡すわ。」

6人が体育の授業をしている同じ頃。カレンのクラスでは英語の授業をしている。だがカレンは気持ち良さそうに寝てる。穂乃花と香奈が寝てるカレンを見てる。

烏丸先生「この問題分かる人。」

ほぼ全員が手を挙げた。それと同時にカレンが起きて周りを見て自分も手を挙げた。穂乃花・香奈「え!？」

その事を6人に話した。

カレン「こう言う時分からなくても手を挙げるんデスケドー。」

陽子「いやダメだろ!!」

綾「分からなかったらどうするの?」

カレン「大丈夫デス。そう言う時は、一発芸のチャンスデス!!」

陽子「問題を答えろー!」

その後昼になり、6人で弁当を食べようとしたが、陽子は悲しんでいた。

陽子「お昼ですが早弁したのでお弁当がありません・・・」

圭太「お前その癖直した方が良いぞ?」

陽子「唐揚げ1個頂戴!」

圭太「聞けよ！」

綾「はあ、しょうがないわね。」

仕方無く唐揚げを譲るその時。

女子生徒「はい。あーん。」

横を見ると、女子が男子に食べさせてた。

男子生徒「美味しい！」

それを見た綾は赤面した。

綾「ああ、ああ、ああああああああ！」

陽子「何!？」

圭太「綾が壊れたか。」

浩輔「あのリア充め！」

圭太「妬むな。」

そこにカレンが来た。

カレン「お昼ーお昼ー！お邪魔するデス！」

陽子「そう言えばカレンって、何時も来るの遅いよね？何してんの？」



カレン「クラスの友達とお弁当食べてから来てるのデ〜。」  
持ってたパンを机に置いた。

陽子「じゃあこのパンとかお菓子は何？」

カレン「お地藏さんに果物とかお菓子とかあげるデスヨネ〜？」

綾「お供えね。」

少し前。

穂乃花『カレンちゃん、お菓子あげる。』

香奈『これ手作りなんだけど〜。』

カレン『ありがとう〜!』

穂乃花『どういたしまして。』

そして現在。

カレン「あれと同じような物デス。」

陽子「つまり全部貰い物か!？」

綾「可愛い動物にエサを与える感覚なのかしら？」

陽子「ちよつとは遠慮しなよー。」

カレン「エー!? ミンナトテモヤサシイ! ワタシウレシー! ミナハッピー!」

片言で誤魔化する。

陽子「おい! 片言がわざとらしいぞ!」

浩輔「もしかしたらカレンに笠や手拭いをあげたら幸運が来るかもな?」

圭太「かさこ地藏かよ。」

アリス「カレン、何か日本に来て太った?」

カレン「え!? そんなバカナー!」

アリス「毎日それだけ食べれば太るよー。」

すると忍は何かを書いてカレンにあげる。

忍「カレン、これを。」

カレン「What?」

食べ物を与えないで下さいと書かれたプレートをカレンに差し出した。

カレンを痩せさせる為にダイエット作戦を開始した。

アリス「ダイエットしなきゃ！」

カレン「私ダイエットした事ないデス。」

アリス「うーん、誰か参考になる人居ないかな？」

職員室に行くと、烏丸先生が椅子に座りながら両足をまっすぐにしていた。

アリス「先生？」

烏丸先生「は!!」

2人は烏丸先生にダイエットについて話した。

烏丸先生「ダイエットに無理は禁物なのよ？気付いた時に体を捻ってみたり、足を高く上げて歩いたり。」

カレン「成る程く、それなら簡単そうデス。でも先生はお尻大きいデスネ。ちよつとだけ。」

烏丸先生「え!？」

アリス「もう、カレンったら失礼でしょ？安産体型って言うんだよ！今度からそう言うべき！」

烏丸先生「それもどうかと・・・」

その後皆で話し合う事に。

綾「陽子はよく食べるけど、体型は変わらないわね。」

陽子「ほぼ毎日走ってるからねー。食べてもその分動けば良いんだよ。」

カレン「じゃあ！私も陽子と一緒に走るデス！どの位走るのデスカ？」

陽子「えっと、ランニングで10キロ程度？」

カレン「じゃあ私は10センチ程度。」

陽子・圭太「無意味!!」

浩輔「それってダイエットにならねえだろ。」

忍「女の子はちよつと太ってる位が良いんですよ。前にお姉ちゃんが言っていました。」

以前忍は勇に話した。

忍『私もお姉ちゃんみたいになりたいです。』

勇『え〜？忍はそのままが良いのよ。丸くてぼんやりした所が十分可愛いじゃない。』

そして現在。

忍「あんたが痩せたら、寡れたカピバラみたいよって。」  
陽子はドン引きした。

綾「それってつまり、しのはカピバラだって事じゃない！」

圭太「姉貴は重度なシスコンだな。」

全員が保健室へ行って体重計で体重を計る。

綾「まず、今の体重を知る事が重要よ。私から計るわね。」

最初に綾が体重計に乗る。そして今の体重を見る。

綾「あら？この体重計壊れてる？」

陽子「ん？そんな事ないと思うけど？」

綾「じゃあ服のせいね。そうよ、絶対そうだわ！」

そう言つて制服を脱ごうとする。

陽子「現実を見ろ！そして脱ぐな！」

圭太「俺に裸を見せんな！」

結果、綾の体重は前より増えてしまっていた。次はカレンが乗る。

カレン「あれ？変わってない。」

アリス「本当に？」

浩輔「て事は、見た目は太って見えても体重は変わってないって事か。」

カレン「もう、アリスが太ったなんて言うからー。」

綾「何キロ？」

カレン「うひゝ!?!教えるのデスカ!?!恥ずかしい・・・」

綾「耳打ちでも可。」

カレンが綾の耳に体重を言った。すると綾が泣き出した。

綾「うわあああああ!!!私の方が全然重いー!!」

泣きながらそのまま保健室から出て行った。

浩輔「おい綾!?!」

アリス「アヤ!?!何処へ!?!」

カレン「これで今までどうり、皆から食べ物貰ってもOKデスネ!」

アリス「それは良くないよ。遠慮は日本の心だよ。カレンも見習って。後、お菓子

ばっかりは体に良くないし、明日のお弁当は私が作ってあげるから。」

忍「アリスのお弁当私も食べたいです!」

アリス「ぜ、全力で作るよ!シノの為に!任せて!」

カレン「私は?」

圭太「アリス、どつちに食べさせるんだ？」

帰り途中、アリスと忍はマーケットに寄った。

忍「お母さんと同じ時間に起きるんですよね？」

アリス「うん！」

忍「起きれますか？」

アリス「大丈夫だよー。」

忍「5時起きですよ？」

そう言われたアリスが固まった。そしてカップラーメンを手を取った。

アリス「これで良いかな・・・」

忍「いきなり手間要らずに!？」

翌朝の5時、なんとかアリスが早起きてリビングに入った。

アリス「おはようございます・・・」

忍の母「おはようアリスちゃん。まし？」

そして完全に目を覚まし、弁当を作る。

アリス（そうだ！ご飯の部分をイギリスの国旗にしよう！）

海苔をハサミで切って形を作る。

忍の母（何作ってるのかしら？）

忍「アリス、そろそろ学校へ行かないと。」

アリス「後3分待って！」

そして弁当が出来上がった。

その後お昼の時間になった。

忍「今日のお弁当はアリスが作ってくれました。」

陽子「お！何だキャラ弁か？」

そして弁当の蓋を開けると、ご飯の上に海苔で米の文字が出て来た。

アリス「青い部分が表現出来なかったけど、一応イギリスの・・・」

忍「米！」



綾「米？」

陽子「米！米の上に米！」

イギリスの国旗なのに米と勘違いされてアリスがっかりしてしまった。

浩輔「なあ圭太、何で米なんだ？」

圭太「いやこれ、米じゃなくてイギリスの国旗だろ？アリスはイギリス人だし。落ち込むよアリス。立派なイギリス国旗だ。」

アリス「ケイタ・・・」

圭太「そうだ！今度俺が良い弁当を作れるアドバイスを教えてあげるぜ。」

アリス「良いの？」

圭太「ああ。」

アリス「わあ！ありがとう！」

落ち込んだアリスが一気に元気を取り戻した。

綾「圭太って口説き上手ね。」

圭太「失礼だな。俺はアリスを元氣付けたいだけだ。」

忍「もう圭太君！アリスを取らないで下さい！」

圭太「お前な・・・」

そしてその後、廊下から外を見る。

忍「秋ですね〜。」

陽子「秋と言えば？」

忍「芸術の秋。」

陽子「食欲！」

アリス「紅葉！」

カレン「スポーツ！」

浩輔「睡眠！」

圭太「行楽！」

カレン「アヤヤは？」

綾「勉強の秋。」

陽子「えー？綾は真面目だなー。もっと楽しい事を考えようぜ？」

浩輔「折角の秋だからこそな。」

綾「皆来週からテストだけど大丈夫なの？」

5人「あ。」

圭太「そう言えばそうだったな。」

陽子「しまったすっかり忘れてたよー！やだなー！」

カレン「私はテスト好きデスよ！」

陽子「え!?!何で!?!仲間だとばかり・・・」

カレン「テスト期間大好きデス！静まり返った教室、ペンを走らせる音、お昼寝に最適！」

陽子「問題解けよ！」

忍「私もテスト好きです。」

陽子「え？」

アリス「テスト前では、シノが問題出してくれるんだよ。」

忍・アリス「ねー。」

綾「しにはそう言う余裕は無いはずよ？この間も赤点だったでしょ？」

忍「うう、何故それを・・・どうやら私の座右の銘を教える時が来たようですね！ケセラ・セラくなるようになる♪ですよ！」

アルフレッド・ヒツチコック監督の作品「知りすぎていた男」の主題歌の「ケセラセラ」をくるくる回りながら歌う。同時に持ってたノートを落とす。ノートからこの前の英語のテストが出て来た。綾がそれを忍に見せる。点数は6点だった。

綾「なってないから言ってるのよ！」

圭太「ケセラセラって、お前ヒツチコツクに懂れてるのか？」

その後7人は図書室でテスト勉強する。

浩輔「圭太はテストどうなんだよ？」

圭太「帰ったらテスト勉強と俺の中でそう言った思考を持つてる。この前のテストは平均点超えてるし。」

浩輔「流石だなおい……」

忍「勉強していると、意識が飛ぶのですが……」

綾「それって知らない内に寝てるのよ？寝ちやダメよ？」

浩輔「睡魔か。俺も睡魔がzzzz……」

そう言ってる間に浩輔が寝てしまった。

綾「そう言ってる浩輔も寝ちやダメよ？」

圭太「起きろアホ。」

浩輔「ぶべらー！」

圭太が浩輔の頭にゲンコツする。

忍「はあ、一度で良いからアリスみたいに90点取ってみたいです・・・」

アリス「シノ・・・分かったよ！私も協力する！私の答案カンニングして良いよ!!」

忍「アリス！」

陽子「いやダメだろ!!」

綾「勉強しなさい！」

圭太「0点確定かよ！」

放課後、忍が烏丸先生に日誌を持って来た。

忍「先生、日誌持って来ました。」

烏丸先生「はうい。大宮さん、テスト勉強は捗ってる？」

忍「はい。ぼちぼち。あの先生、私将来通訳者になれますよね？」

通訳者を将来にする忍を見て烏丸先生が突然涙を流した。

烏丸先生「せ、先生は信じてますよー！！」

忍「先生！泣いてる!?!」

その頃教室では、6人がテスト勉強をしていた。

カレン「テスト範囲何処ー？」

綾「そこから!？」

そこに忍が職員室から戻って来た。

アリス「シノ！おかえり！あれ？どうかしたの？」

戻って来た忍は何時もと雰囲気が変わっていた。

忍「アリス、私に英語を教えてください。」

5人が真剣な忍を見て驚いた。

陽子「しのが突然やる気に!？」

綾「あんな顔見た事無いわ！」

カレン「シノ!？」

浩輔「珍しい展開！」

圭太「いや寧ろ、誰だ!？」

そしてテストの日が訪れた。駅で圭太達5人がアリスと忍を待つてる。

アリス「おはよー皆ー!」

綾「おはようアリス。」

カレン「おはようゴジヤイマス!」

アリスと忍が来た。だが忍は普段と違ってた。

忍「Hello, goodbye・・・Que sera sera・・・」

真剣な顔をしながら英語を読む。

浩輔「忍が、勉強に熱心してる・・・」

陽子「だ、大丈夫か?」

綾「勉強の成果を見せる時が来たのよ!」

アリス「頑張つてシノ!」

忍「Je t'aime!」

陽子（フランス語だど!?)

綾（これは期待出来ない・・・!）

圭太（災難しかない・・・）

カレン「ん？」

そしてテスト前の教室。

アリス「シノ！頑張ろうね！」

忍「はい。私もやるだけの事はやれました。今ならなんだって出来る気がする。アリスのお陰です。」

アリス「(な、何だか、シノがシノじゃないみたいだよ！) あ！彼処に金髪のお姫様が！」

忍「え!?!」

金髪に反応してしまった忍が我に返ってしまった。

忍「あれ?・・・覚えた単語・・・忘れ・・・」

アリス「うわああああ!!ごめんシノ!!」

我に返った忍が、今まで覚えた単語の記憶が消されてしまった。



そしてテスト開始直前。

綾「陽子はあまり勉強してる感じじゃなかったけど、大丈夫なの？」

陽子「家ではしたよ。でも私の頭にも限界があると言うか、そこで考えた！前の席の綾を見て答えを透視する！名案！」

綾「そ、そんな事が出来るの!？」

陽子「気合だよ！気合！」

浩輔「それは名案だな陽子！俺もやるぜ！」

陽子「じゃあ一緒にやろうぜ浩輔！」

浩輔「おー！」

圭太「それカンニングとほぼ変わんねえ気がする。」

烏丸先生「始め！」

そしてテストが始まった。陽子は後ろから、浩輔は横から綾をじーつと見る。

綾（凄く視線を感じる・・・意識しちやダメよ！集中しなきゃ！集中！集中！）

陽子・浩輔（全然分かん。）

勿論分かる訳ない。

そして英語のテストが終わった。陽子が泣いていた。浩輔は暗い顔をしていた。

陽子「悪い点取ったら綾のせいだから・・・」

浩輔「俺も悪かったら責任取ってくれ・・・」

綾「こっちの台詞よ！」

そしてテスト2時間目。カレンのクラスでは英語のテストをしてた。だがカレンは分からないまま考え込んでた。すると教室に鉛筆が落ちる音が何回も響いた。全員集中出来ない。

穂乃花（この音は！）

そして同じ頃、アリスは忍を見る。

アリス（勉強していた事が頭に入っていたら、良い点が取れるはず！シノ頑張つて！失われた信頼を取り戻すチャンスだよ！）

烏丸先生（皆頑張れー）。  
端っこに座ってる烏丸先生が小さい旗を持って静かに応援する。

そして予鈴が鳴り、テストが終了した。

陽子「終わったー！テスト後の開放感好きー！」

浩輔「俺もこの感じ好きだぜー！」

綾「もう明日もあるのよ？」

圭太「それまで勉強やれよ？」

アリス「シノー！お疲れー！あ！」

忍は反応しなかった。何故なら静かに燃え尽きてしまってた。

アリス「シノが、抜け殻に!？」

陽子「一気に老け込んだな。」

綾「こら！気にしてるのよ？」

そしてテストが終わって数日後。英語のテストが返された。忍の点数は、何と96点だった。

5人「おー!!」

陽子「本当に良い点取った!」

アリス「シノ凄ーい!!」

浩輔「勉強の成果のお陰だな!」

綾（私より良い・・・）

圭太（俺の負けだな。）

忍「ありがとうございますアリス!こんな点数初めて!」

アリス「ううん、シノの努力の成果だよ!」

烏丸先生が泣いてしまった。

忍「あれ!?先生泣かないで下さい!」

その後、数学のテストが返された。

アリス「数学は80点かぁ。シノどうだ・・・た？」

だが忍は落ち込んだ。英語の点数は良かったが、逆に数学の点数が8点と言う悪い点数を取ってしまった。するとアリスは赤ペンで忍の点数に何かを書いた。

アリス「これでお揃い！」

8の隣に0と書いて80点にした。

忍「アリス！」

綾「何時ものしのだわ。」

浩輔「何時もの方がしっくり来るから良いだろ？」

圭太「80点にしても8点だから変わりはねえだろ。」

「END」

# Episode 8 「今日はなんの日?」

翌日の職員室。烏丸先生は男性教師から話を聞いてた。

男性教師「最近教師にも笑いが必要なんですよ。面白い先生は好かれますからね。」

その後も烏丸先生は先程言われた事が頭から離れない。

男性教師『1発ギャグとか。』

烏丸先生（1発ギャグ、1発ギャグ・・・は!!）

すると両手を広げてギャグをする。

烏丸先生「トータムポール!!」

それを綾と圭太に見られてしまった。

圭太「せ、先生?」

綾「あ、あ、あの先生・・・?」

烏丸先生「はい?」

綾「学校祭の申請書です。衣装の方も皆で分担して。」

烏丸先生「へえ、楽しそうね。あの、所で小路さんに香川君？」

綾「はい？」

圭太「何でしょう？」

烏丸先生「良かったら、突っ込んで良いんですよ？」

綾「え!? (今のギャグだったの!?)」

圭太(突っ込みにくい……)

烏丸先生「さあ！」

突っ込んで欲しい烏丸先生が2人に接近する。

綾「先生にツツコミなんてそんな！」

圭太「そうですよ！先生気を確かに！」

烏丸先生「遠慮しないで！」

綾「あ！そ、そうだ！ツツコミならもつと適任者が！」

圭太「それだ！案内しますよ！」

烏丸先生を案内した場所は教室だった。

圭太 「おい陽子！」

綾 「陽子〜！」

烏丸先生 「猪熊さくん!!」

陽子 「え!? 何何!?!」

その後どうなったかは知らない。

ある日、台所で忍が金太郎飴を切っていた。アリスは微笑んだ。

忍 「これは金太郎飴。切っても切っても金太郎の飴ですよ。ん? 珍しいですか?」

アリス 「シノがいっぱい! 日本の物は皆シノにそっくりだね!」

忍 「きんたろー・・・」

そして学校祭の準備が始まった。それぞれ準備がスタートした。

女子生徒 A 「ちよつと丈回そうか。」



アリスは甘味処の和服の試着をしていた。

忍「アリスー！」

女子生徒B「うん。もう良いよ。」

アリス「ありがとー。」

忍に呼ばれ、急いで駆け寄る。

アリス「何？」

忍「私達はメニユーの制作担当です。」

アリス「うん！私達が考えたメニユーだよね！」

女子生徒C「一番近いのって何処だっけ？」

女子生徒D「北口のホームセンターじゃない？」

陽子「おーい！綾ー行くぞー！」

綾「あ！待って！」

アリス「アヤ何処行くの？」

綾「うん。材料の買い出し。」

陽子と綾が買い出しに出掛けた。そこに圭太と浩輔が忍とアリスの所に寄って来た。

圭太「どうだ？準備は順調か？」

忍「はい。今メニユー制作です。」

アリス 「ケイタとコウスケはどう?」

浩輔 「俺達は看板の貼り付け担当だからこっちも順調だ。」

男子生徒 「香川ー! 白川ー! こっち手伝ってくれー!」

浩輔 「おう! 今行くぜー!」

圭太 「じゃあお2人さん、またな。」

その頃陽子と綾は女子生徒ホームセンターで買い出しをする。

陽子 「じゃあお茶の方宜しく。」

女子生徒C 「うん分かった。」

二手に分かれて買い出しする。

綾 「バリチョコ、茹で小豆、白玉粉。」

陽子 「今日はハンバーグが良いなー!」

綾 「あのねえ。」

女性「今日は何する？」

男性「うくん、ハンバーグとか？」

カツプルの会話を聞いた綾は赤面した。

綾「私とあなたはただの友達だから！」

陽子「何だ突然!?!」

その後、白玉粉、茹で小豆、バリチヨコをカートに入れた。その途中。

陽子「あれ？からすちゃん？」

烏丸先生「あら？見付かっちゃった。」

偶然烏丸先生と会った。

烏丸先生「学校祭の買い出し？」

綾「はい。烏丸先生は？」

烏丸先生「ちよつとおやつをね。」

陽子「こんな時間に食べたら太るぞ？」

烏丸先生「大丈夫よ。お豆腐だから。」

陽子（豆腐っておやつ？）

綾（わざわざ醤油まで・・・）

その後女子生徒2人と合流して買い出しから戻った。

陽子「ふいふ。ただいま〜！」

アリス「おかえり〜！」

忍「お疲れ様です！」

買い出しの材料を机に置く。

女子生徒A「小路さん！」

女子生徒B「一応衣装のサイズを確認して置いて欲しいんだけど。」

2人はメイド服を綾に見せた。

綾「え？私和服の方じゃないの？」

女子生徒A「え？だって。」

女子生徒B「猪熊さんと大宮さんが。」

陽子「どう考えても綾はそれだろ！」

忍「似合うと思いますよ？」

綾「ちよ！勝手に！」

女子生徒A「後白川君も小路さんはメイドって言ってたわ。」

綾「浩輔も!?!」

そこに圭太と浩輔が戻って来た。

圭太「買い出しお疲れさん。」

浩輔「よう皆ー！」

綾「浩輔！あなたも私をメイド服にしたの!?!」

浩輔「え!?!だって綾はメイド服の方がしっくり来ると思ってたよ。」

圭太「浩輔お前、俺とお前は綾は和服が良いと思ってたのによ。」

浩輔「実は陽子と忍と一緒に決めてたんだ。お前が知らない内に。」

圭太「ハメやがったな！このクソつたれ！嘘つきみい！」

そして遂に学校祭の準備が終わった。後は開催日を待つのみ。

その夜、忍とアリスが寝る準備をしてる。

忍 「準備は大変でしたけど、楽しみですですね。」

アリス 「うん! 所でシノ、明日は何の日か覚えてる?」

忍 「学校祭ですよね?」

アリス 「ううん、それとは別に。」

忍 「別に? えつと・・・(祝日じゃないですし、誰かの誕生日、でもないですし・・・)するとアリスがカレンダーを見せた。16日に記念日と書かれてた。

忍 「(記念日?) 何の?」

アリス 「覚えてないの?」

忍 「ああ! いいえ! 覚えてますよ! アリスにとって大切な日ですよね?」

アリス 「うん。」

忍 「えつと・・・なんでしたっけ・・・あれです! アリスが初めて喋った日!」

アリス 「違うよ。」

忍 「初めて海に行った日!」

アリス 「違うく!」

忍 「アリスの・・・アリスのあんよが・・・えつと・・・えつと・・・」

アリス 「もういいよ!」

記念日が何なのか覚えてない忍に対してアリスが怒って拗ねてしまった。

忍（私が覚えてないせいで、アリスがいじけてしまいました。）  
もう1回思い出さそうとするが思い出せない。

忍（ああ、早く思い出さなくては・・・寝るまでに何とか！）

一方アリスは拗ねたままだったが、機嫌を直して忍に教えようとする。  
アリス「あのねシノ、明日は・・・」

だが忍は思い出そうとしてる途中に寝てしまった。

そして翌日、遂に学校祭の日が訪れた。

忍「おはようございます。」

だがアリスは挨拶しないで膨れっ面になって怒ってた。

綾「どうしたのアリス？タコみたい。」

アリス「!!」

カレン「アハハ、Octy!」

陽子「タコとか失礼だろ? 怒ってるんだから。」

綾「あ、そうね、ごめんなさい。イカみたいね!!」

陽子「タコもイカも変わんねえよ!」

圭太「アリスがあんなに怒るなんて珍しいな。何かあったのか?」

忍「私アリスの記念日を覚えてなかったせいで、昨日からご機嫌斜めで。」

圭太・浩輔・陽子・綾「記念日?」

忍「アリス! 降参です! ごめんなさい! 私がバカなばかりに!」

アリス「あ! いいよ! ごめんね私の方こそ!」

忍「そうだ! 1 発殴って下さい! ショックで思い出すかもしれません!」

アリス「ええ!」

忍「さあ早く! 一思いに!!」

アリス「シ、シノ、もう良いから!」

圭太「ショックで思い出すつか、ショックで記憶吹っ飛ぶだろ。」

その後2人は和解し、アリスが忍に記念日の事を教えた。

アリス「今日はね、シノがホームステイに来た日なんだよ。」



忍「それが記念日なんですか？」

アリス「そうだよ。うちでは毎年パーティだよ！ご馳走作って、ディナーの話の中心はシノの思い出話。うちではシノ記念日って呼んでるんだよ。」

忍「照れます！」

陽子（毎年つて、話話題そんなに無くね・・・？）

圭太（愛が重いだろ・・・）

忍「まさか私の記念日だったとは。恥ずかしいですけど、嬉しいです！」

アリス「あの、それでね！」

カレン「良いなー、私も記念日欲しいデス！」

陽子「女優デビューを記念したら良いんじゃない？名付けてカレンのデビュー記念

日！」

カレン「良いデスねー！」

綾「女優じゃないでしょ？」

浩輔「まあでもカレンは女優になりそうな感じ。」

忍「アカデミー賞受賞記念日とかは？」

綾「スケール大きくなってるじゃない！」

圭太「それこそ無理だろ！」

アリス（今日中に渡せれば良いか。）  
忍に差し出すプレゼントを隠す。

そして学校祭が開催された。アリスと陽子は和服に着替え、忍はメイド服に着替えた。

忍「ビクトリアアンメイドです！」

綾も着替えたが恥ずかしがっていた。すぐに出て、忍の後ろに隠れた。

忍「綾ちゃん似合う！」

アリス「可愛い！」

陽子「可愛い！」

綾「やめてー！」

浩輔「やっぱ綾はメイド服が似合うな。」

綾「もう浩輔！」

陽子「何で2人が居るの？」

圭太「いや、烏丸先生からここの警備員役って言われたんだ。役割分担のスペースが

無くなつたらしくてな。」

アリス「ティーカップに日本茶！」

忍「湯飲みにコーヒー！」

アリス「ケーキにあんこ！」

忍「お団子にチョコレート！まるで私達のような喫茶店ですね！」

アリス「そうだねー！」

陽子「カオスな喫茶店だな。」

女子生徒A「アリス達！お客さん来るから準備してー！」

忍「はい！」

アリス「はい！」

女子生徒B「じゃあ香川君と白川君、警備宜しくね。」

圭太「よっしゃ。」

浩輔「イエッサー！」

2人は何故か伊達眼鏡を掛ける。

全員「いらっしやいませー！」

お客様が来店した。

アリス「あれ!? 大人の人達が来てるよ!?!」

忍「一般のお客様ですよ。いらっしやいませ。お好きな席にどうぞ。」

アリス「い、イラッシャイマセ! ニッポンゴムズカシイネ!」

その頃裏では陽子と綾が居た。

陽子「メイドなんだから、ご主人様! って言わないとね!」

綾「うう・・・」

陽子「ほらほら! 客来た!」

綾「仕方無いわね・・・」

緊張しながらお客様に接客する。

綾「いら、い、いらっしやいませ・・・ぐ、ぐ、ぐ、ゴゴゴゴゴゴゴ・・・」

陽子「何の効果音だ!?!」

浩輔「圭太、綾から何か感じるか?」

圭太「感じねえよ。スタンドか波紋でも出てるのか?」

その後、烏丸先生が来店した。

忍「烏丸先生！いらっしやいませ！愛のこもったお団子食べて下さい！」

烏丸先生「まあ美味しそう！いただきます。」

団子を食べる。するとその時烏丸先生が涙を流して顔を隠した。

忍「わー！先生！どうかしたのですか!?!」

烏丸先生「何だかこれ・・・辛いわ・・・」

すると忍はちよつと前の事を思い出した。

忍『1個だけわさびを入れてみました。』

陽子『おま！何て事を!!』

忍「一体誰がこんな事を！」

陽子「おい！」

カレン 「キターー！」

そこにカレンがやって来た。

アリス 「カレン！いらっしやい！」

カレン 「良いなー Waitress！可愛いですねー！」

陽子 「カレンは接客とか得意そうだな！」

接客するカレン。

カレン 『いらっしやいませ！ご注文は何に致しますか？お団子？おケーキ？Oh!!おつとお客様！私は商品に入りませんデスよ！』

陽子 「うぜー。」

カレン 「ん？」

圭太 「陽子お前何想像してんだ？」

カレン 「Oh！ケイタにコースケ！」

その頃廊下ではある2人が歩いていった。それは勇と友人の湊だった。勇は眼鏡と帽子で変装していた。

湊「うちの学校とはまた随分雰囲気が違うものね。」

勇「あ、ここよ。」

湊「へえ、和洋折衷？」

2人は忍達が居る喫茶店に来店した。

女子生徒B「いらっしやいませ。ご主人様。」

そして席についてオーダーする。

女子生徒B「お茶とコーヒー、あんこケーキにチョコ団子をお一つですね。」

湊「へえ、可愛いじゃん！」

すると勇は忍達を見付けた。

勇「うふふ、居る居る♪」

バッグから自前のカメラを取り出した。カメラで気付かれないように綾と陽子と圭太を撮影する。浩輔はトイレへ行ってる。

勇「私的には綾ちゃんは和服で陽子ちゃんはメイドなんだけどなく。」

湊「え!? あんた怪しいよ!」

勇「綾ちゃん! 綾ちゃん!」

呼ばれた声に反応した綾が振り向く。それと同時に勇がシャッターを押した。

綾「よ、陽子……」

陽子「もう、私がビシツと行って来る。圭太、もし私が手に負えなかったら協力して。」

圭太「任せろ。」

勇に注意する陽子。

陽子「あの、撮影の方はちよつと。」

すると勇が眼鏡と帽子を取った。

陽子「うわ!」

綾「あ!」

陽子「勇姉!」

圭太「姉貴!」

勇「じゃーん。」

アリス「イサミ!」

忍「あ! お姉ちゃん! 来てくれたのですか!?!」

カレン「イサミ!」



勇「アリスの和服可愛いのね。」

アリス「えへへ。」

可愛いと言われてアリスが照れた。

忍「お姉ちゃん、私は？」

勇「何時も通り？」

忍「ガーン！」

湊「いや可愛いよ？」

綾と陽子を見る勇。

勇「2人は逆でも良かったんじゃない？」

綾「わ、私もそのつもりだったんですけど・・・」

陽子「いや、綾はやっぱりこっちでしょ！」

カレン「私も着てみたいデス！」

勇「カレンちゃんのクラスは何やってるの？」

カレン「劇デス！そうだ！イサミ私の劇観ていて下サイ！私を是非、そのカメラで！」

陽子「また女優の顔に！」

カレンを撮影する勇。

圭太「湊さん、久し振りだね。」

湊「あ！誰かと思ったら圭太君だったのね！久し振りね。」

圭太「まあ伊達眼鏡掛けてるだけなんだけどね。」

湊「浩輔は何処？」

圭太「俺達ここの警備員の役割なんだけど、浩輔はさっきトイレに行ってるんだ。」

丁度浩輔がトイレから戻って来た。

圭太「おい浩輔！湊さんが来てるぞー！」

浩輔「あれ？姉ちゃん！」

湊「浩輔、あんたもここの警備員？」

浩輔「まあな。」

圭太「それに浩輔は、綾はメイド服がしっくり来るって言うってたな。」

湊「あんたそんな事言ってたの？」

浩輔「勿の論だ。」

時間が流れて昼が来た。

忍「そろそろ交代時間です。」

アリス「もう?」

圭太「やつとか。」

浩輔「立つてるだけで足が疲れた・・・」

圭太「お前は運動不足なんだよ。」

綾「後は学校祭を見て回りますよう。」

男の子「あ!金髪だ!」

お婆ちゃん「ありがと。美味しかったよ。」

アリス「ありがとございました!」

男の子とお婆ちゃんにお礼を言われたアリスが感謝した。

そして7人は学校祭を見て回る。漫才、写真部、途中で食べ歩き、手芸部、琴の演奏、お化け屋敷(カレンが逆にお化けを驚かしてる)、途中で穂乃花と香奈に会ったカレンが劇の準備に向かう。そして外に出て、忍はたこ焼き、アリスは焼きそば、陽子はフランクフルト、綾はおでん、圭太はチョコバナナ、浩輔は唐揚げを食べる。更にぜんざい、クレープ、トウモロコシ、そして綿あめを堪能する。

忍「どうですかアリス? 学校祭楽しいですか?」

アリス「うん! 凄く美味しい!」

陽子「だよねー!」

浩輔「学校祭で食べる物は格別だな!」

綾「私達さつきから食べてばかりね。」

圭太「まあ良いじゃねえかたまには。学校祭は楽しむもんだ。」

綾「そうね。」

忍「あ! もうすぐカレンの劇が始まります! 演目は白雪姫です!」

陽子「ベタだな!」

アリス「カレンは何の役かな?」

綾「私、白雪姫大好きなの!」

陽子「恋愛物全般が好きなんだよ。」

全員が体育館に入った。勇と湊も来ていた。するとブザーが鳴った。アリス「あ！始まったよ！」

幕が開いた。白雪姫役は穂乃花。小人役には香奈と女子生徒。

香奈「白雪姫が・・・」

女子生徒E「死んじやった・・・」

圭太「もうクライマックス？」

カレン「待たれい！」

そこに何故か侍姿のカレンが現れた。

カレン「私とその者の魔を断ち切ってしんぜヨ！」

刀を抜く。この時皆の反応は啞然としてた。

カレン「はあーっ!!やーっ!!」

穂乃花が眠ってるベッドの上に乗り、刀を振る。そしてジャンプして降りて刀を鞘に納めた。

カレン「つまらぬ物を切ってしまったぜヨ！」

アリス（何・・・これ？）

白雪姫が大好きな綾は愕然としていた。

浩輔 「カレンが五右衛門なら大泥棒と組ませようぜ。」  
圭太 「ルパンか。」

そして夕方になり、学校祭が終わった。ほとんどの客達が帰って行く。忍達も片付けをしてる。

綾 「何だかちよっと寂しいわね。」

陽子 「だね。」

浩輔 「学校祭が終わっちまったな。」

圭太 「そうだな。何かあつと言う間だったな。」

アリス (あ! そうだ! あれ渡さなきゃ!)

その後アリスは忍に渡す物を渡そうとするが緊張してる。壁から忍を見てる。

アリス 「し・・・」

忍が廊下を歩いてる時も。

アリス「し・・・」

階段に登ってる時も。

アリス「し・・・」

声に気付いた忍が振り向くとアリスは一瞬で隠れた。悍ましい気配を感じた忍が怖気付いた。

急いで陽子に相談する。

忍「何だか・・・さつきからずっと死、死、って幻聴が聞こえるんです・・・」

陽子「何それ怖！」

その頃アリスは。

アリス「うわあああ！もたもたしてたら学校祭終わっちゃった!!」

そこに忍がゴミ箱を持って寄って来た。

忍「アリスー！一緒にゴミ捨て行きましょー！」

一緒にゴミ箱を持ってゴミ捨て場へ向かう。

アリス（チャンス！）

忍「あら？アリス、その手に持つてるのは？」

アリスの手に持つてる箱を見付けた忍。アリスは気付いたと思つて喜んだ。だがしかし。

忍「ゴミですか？なら一緒に捨てましょう。」

ゴミだと思つてる忍。またアリスが拗ねてしまった。

忍「わー！！私はまた何か失言を！！」

アリス「シノ！」

忍「は、はい！！」

また怒られると忍が覚悟してる。アリスは忍に渡す箱を差し出した。

アリス「これ・・・う・・・うけ・・・受け取って！」

忍「プレゼント？・・・私に？」

アリス「う、うん！シノ、以前お土産につてこの簪くれたでしょ？お礼がしたいってずつと思つてたの！」



忍がプレゼントを受け取る。

アリス「気に入ってくれれば嬉しいなー。」

すると忍がアリスを天使に思えた。

忍「天使が・・・金髪の天使が・・・！」

アリス「シノ！しっかりして！」

何とか正気を取り戻した忍。そしてプレゼントの中を見る。入ってたのは赤いリボンだった。

忍「可愛いリボン！アリスが毎日簪を付けてくれるので、私も付けてチャームポイントにしますね。」

リボンを身に付ける。

忍「どうですか？」

アリス「可愛いー！凄く似合ってるよ！」

その後2人は教室に戻った。

忍「お待たせしましたー。」

アリス「お待たせー!」

陽子「遅いぞー!」

浩輔「待ち草臥れたぜ。」

5人「ん?」

その時5人は気付いた。忍の頭にリボンを身に付けてるのを。

忍「ん?」

だがリボンで髪留めしてるせいで丁髷に見えてしまってる。

綾「しの・・・」

陽子「何だその頭は? ツツコミ待ちかー?」

カレン「アハハハ! チョンマゲー!」

リボンを取り外す。

忍「このリボン、観賞用?」

アリス「どうして!?! 可愛いのに!!」

圭太「お前ら・・・」

後日、アリスと綾は会話する。

アリス「最近、凄く好きな日本語があるの！」

綾「何？」

アリス「ドンマイ！だよ。落ち込んでても元気になれる。魔法の言葉だよ！」

綾「そう・・・」

圭太『因みにドンマイの由来は d o n、t m i n d。その意味は、私は気にしませ  
んよ。私は構いませんよの2つの意味を持つ。ドンマイはその和製英語であり日本の  
言葉ではない。ここチエック！』

アリス「日本語凄いなー！」

ドンマイを日本語だと思ってるアリスであった。

「END」

# Episode 9 「ねないこだれだ」

その後圭太と浩輔も来た。そしてようやく陽子が来た。

陽子「お待たせ〜！ごめんごめん、コンビニ混んできた。」

カレン「お菓子!!」

アリス「わ〜い！」

忍「私達もさつき来たばかりですよ。」

アリス「綾のお部屋可愛いね！」

綾「そ、そう？あ！カレンそこはダメ!!」

タンスを開けるカレン。

カレン「ヘソクリ？」

綾「じゃなくて、えっと・・・」

陽子「そこは下着が入ってるんだよ？」

綾「はっ！どうして知ってるの!？」

陽子「え？何となくそうかなって・・・」

綾「透視ね!!」

陽子「いや・・・」

浩輔「俺も透視能力欲しいなく。綾の中も透視出来る程に。」

圭太「バカか。」

台所に移動し、夕飯を作る事に。

綾「晩ご飯作るわね。」

忍「私達も手伝います。」

アリス「私も〜！」

カレン「ガッテンダーデス！」

圭太「俺も手伝うぜ。」

浩輔「俺も俺も！」

陽子「何作るの？」

綾「えつと、肉じゃがと・・・」

忍「あ！何か忘れてる気が・・・」

アリスとカレンと忍がエプロンを着けた。

そして調理開始。炊飯器でお米を炊く。

綾「さてと。」

鍋にはジャガイモと人参を入れて沸騰させる。

陽子「味付けどうすんの？」

綾「まず醤油大さじ2杯入れて。」

陽子「よし来た！」

醤油をドバドバ投入する。

綾「あ！ちゃんと計って!!」

陽子「え？良いんだよこんなのは目分量で。」

綾「私がやるから！」

醤油を取り上げる。

綾「もう！陽子の長所は「大らかな所」だけど、短所は「大雑把」だわ！」

陽子「褒めてるのか!?!貶してるのか!?!」

テーブルにボールを置く。

綾「この中に卵割ってくれる？」

カレン「OK！そう言えば、この間、頭で割っている人見たデス。」

アリス「あ！私も見た事ある！」

忍「アリス、カレン、卵割れましたか？」

だがアリスとカレンは頭で割ってしまったって黄身と白身が頭に乘って「ぐちやつ」となってしまった。

忍「きやあああ!!」

陽子「頭で割るのは生卵じゃなくてゆで卵だ。」

浩輔「俺も試したがぐちやつてなまってしまったな。」

陽子「そりやそうだろ。」

綾が2人にバスタオルを渡した。

綾「2人共、お風呂沸いてるから入って。」

カレン「私バブルバスが良いデス！」

綾「泡？ごめんなさいそう言うのは無いの。あ！入浴剤ならあるわ。」

タンスから入浴剤を出す。

綾「お花の香りとか、どれが良い？」

アリス「私檜風呂が良いな。本物の奴。」

綾「それもちよつと・・・無理ね。」

その頃圭太は卵を片手で割ってボールに入れて掻き混ぜる。

陽子「圭太は本当に上手いもんだな。」

圭太「昔から母さんの手伝いをしてるんだ。それに料理出来る人は得だからな。」

アリスとカレンの風呂を忍が想像する。

忍「金髪少女のお風呂って、凄く芸術的・・・」

圭太・陽子「何処だよ!?!」

風呂から上がったアリスとカレン。カレンがドライヤーでアリスの髪を乾かす。

カレン「あ! トリートメントがありマス! アヤヤのデスカね? ちよつとだけお借りシ

マス! サラサラデス!」

トリートメントをアリスの髪に吹き掛ける。

アリス「冷たっ!」

カレン「あ、これ育毛剤デシタ。」

吹き掛けたのは育毛剤だった。



アリス「酷い！わぎとでしょ!？」

カレン「違うデス！漢字だから分からなかったデス!!」

アリス「も〜！む〜！」

そして夕飯が出来上がった。肉じゃがにサラダ。そして茹でた蟹が今日のメニュー。

全員「いただきま〜す！」

夕飯を嬉しそうに食べる。

忍・アリス・陽子・カレン「美味しいー！」

圭太・浩輔「美味ええ!!」

綾「良かった。」

ホツとしたかのように胸を撫で下ろす。

その後夕飯を完食した。

全員「ご馳走様！」

綾 「お粗末様でした！」

浩輔 「食った食った。」

圭太 「久々の満腹だ。」

アリス 「そう言えばシノ、さっき何か大事な事を忘れてる気がするって言ってたけど、思い出した？」

忍 「それがまだ・・・あ！そうです！思い出しました！お母さんが夕食のおかずにごじゃが作ってくれたんです！どうぞ！」

綾 「タイミング悪い！」

圭太 「献立がダブったなおい！」

浩輔 「まあ食おうぜ？俺また腹減った。」

圭太 「消化早!!」

その後全員は綾の部屋に集まった。

綾 「皆、今日は泊まりに来てくれてありがとう。皆のお陰で楽しかった。きつと一人だったら、夜も眠れなかったと思う！」

圭太「そうか。」

アリス『きやー!!』

陽子『アハハハ!』

だが部屋に居るのは綾と圭太の2人だけだった。他の皆は隣の部屋で怪談話をしてた。

カレン『怖い〜!』

圭太「彼奴ら、綾に相手する気無さ過ぎだろ?」

怒った綾と圭太が隣の部屋に入る。

綾「どうして皆怖い話なんか好きなのよ!?!」

圭太「お前ら綾の気持ち分かってのかわ!?!」

陽子「あれ? やっぱ仲間に入る? 怖い話大会?」

圭太「いやそういう事じゃなくてな・・・」

綾「入る!!」

圭太「ええ!?!」

翌朝、アリスとカレンが目を覚ました。

アリス「おはよう・・・」

カレン「おはようゴジヤイマス・・・」

綾「おはよう。」

忍「おはようございます。」

圭太「おはようさん。」

既に綾と忍と圭太が起きて朝食の準備をしていた。

綾「朝食の支度出来てるわよ。」

カレン「Oh!!美味しそうデス！」

アリス「わーい！卵焼きだー！」

そこに陽子と浩輔が起きてリビングに来た。まだ眠気が完全に抜けてない模様。

陽子「おはよう・・・」

浩輔「おっは・・・」

綾「おはよう。(あ！寝癖が・・・)」

陽子の寝癖を直そうとするが、逆に陽子が綾の頭を押さえた。

綾（なっ!!）

陽子の手を払い退ける。

綾「何!?!」

陽子「何って、寝癖凄いんだけど・・・」

綾の方が陽子より寝癖が凄かった。

浩輔「zzzz・・・」

圭太「起きろ寝坊助野郎。」

立ったまま寝てる浩輔を圭太がパンチで覚ます。

浩輔「フガッ!?!」

後日、アリスが烏丸先生に質問する。

アリス「先生、早口言葉言える?」

烏丸先生「なまみゆぎなまごめにやまたま・・・あ!」

アリス「やっぱり、英語に慣れてる人には言い辛いんだよ。」

カレン「先生外国人デス?」

烏丸先生「ガクンツ!!」

外国人扱いされてショックしてしまった。その後も烏丸先生は早口言葉の練習をするが上手く出来ない。

綾「先生、ここの発音教えて欲しいんですけど・・・」

烏丸先生「先生に早口言葉のコツ教えて欲しいんですけど!」

綾「え!?!」

烏丸先生「小路さくん!!」

その頃カレンは忍達と会話していた。

カレン「日本の制服凄く可愛いデス!」

忍「やつぱりセーラー服とか珍しかったりするんですか?」

カレン「学ランデス!黒猫みたいで可愛いデス!」

陽子「学ランは男子の制服だよ?」

圭太「ここに学ランを着てる俺と浩輔が居るけど。」

カレン「え〜?どっちが着ても良いと思うデス。」

浩輔「いやそれはちよつとな。」

カレン「もつと自由に！個性大事！ドーン！」

陽子「十分着崩してるけどな。」

圭太・浩輔「それな。」

翌日、7人で登校してる。

忍「何だか旅行みたいで楽しかったですね。」

アリス「シノがうちに来た時を思い出したよ。」

カレン「今度はうちに来て下サイ！」

この時陽子は綾を気に掛けていた。

忍「はい！カレンのお家行ってみたいです！」

カレン「1人1部屋デスよ？」

浩輔「1人1部屋ってそりゃ凄いな！」

圭太「一人暮らし始めたい時に最適だな。」

その後学校の廊下で綾は溜息していた。

カレン「あれ？アヤヤ？何か悩み事デスか？今日も良い天気デスね!!」  
悩んでる綾をカレンが元気付けようとする。

綾「カレンは何時も元気ね。素直でフリーダムで羨ましいわ。」

カレン「Oh! FREEDOM!」

綾「そうよ！良い事思い付いたわ。」

この時綾はある作戦に出た。

綾「カレン！いいえ師匠！私を弟子にして欲しいの！」

カレン「What!？」

綾「初めて会った時からカレンに憧れてたの！カレンみたいになるにはどうしたら良いのかしら!？」

カレン「面白そう！今日は私、アヤヤの師匠デスね！」

綾「宜しくお願いします！」

カレン「ではー。」

するとカレンがユニオンジャックのパーカーを脱ごうとする。



綾「こ、公衆の面前で何を!？」

カレン「ん？」

パーカーを綾に差し出す。

カレン「形から入った方が良いと思って。」

パーカーを綾が着る。

綾「これを着てもカレンにはなれないわ。」

カレン「デスよね、じゃあまず、喋り方を真似するデス!」

綾「片言? わ、分かったデス・・・」

カレン「ダメデス! もっと流暢に!」

綾「こ、コウデスカ? 片言なのに流暢ってどう言う事!? 可笑しいわ!」

カレン「気にしちや負けデス! 次授業中に実践デス!!」

そして英語の授業。

烏丸先生「この問題を、小路さん。」

綾「はい、こ・・・ゴメンナサイ! ワカラナイデス!!」

大声で片言で言い放った。

浩輔「綾どうしたんだ？」

次は理科の授業。フラスコに入ってる液体を細長いフラスコに1粒入れると黒い煙が舞い上がった。

綾「ああ!!」

アリス「綾大丈夫!?!」

綾「Oh my god!!」

アリス「お、落ち着いて!!」

圭太「綾の様子が可笑的い。」

浩輔「一体何があつたんだ？」

その後、カレンに相談する。

綾「師匠、何かが違う気が……」

カレン「NONO! 良い感じデスよ!」

陽子「綾ー!」

綾「陽子!」

すると綾がカレンを押しして陽子から遠去かる。

カレン「鬼ごっこデスか?」

綾「別に逃げてる訳じゃ……」

陽子「あれ……?」

次は体育の授業。体育館でA組とB組の合同授業。バレエでカレンが綾と組んでる。

カレン「アヤヤー! 行きマスよー!」

ボールを上に向けて。

カレン「ソオイッ!!」

勢い良くスパイクする。これには綾もビビる。

綾「カレン……もう少し優しく……」

カレン「ダメデス。今日の私はアヤヤの師匠、鬼コーチカレンと呼ぶのデス!!」  
綾「師匠じゃなくて!?!」

師匠から鬼コーチヘレベルアップした。この時陽子は綾を心配そうな顔で見てた。

忍「陽子ちゃん! 今日には綾ちゃんと組まないのですか?」

陽子「うん、何か今日は避けられてる気がするんだよね・・・」

アリス「気のせいだよ。」

忍「では私達と一緒にやりましょう!」

陽子「円陣バレーだな!」

アリス「蹴鞠だよ?」

陽子「え?」

アリス「足で蹴るの! とう!」

陽子「よし! 私が一から教えてやる!」

一方圭太と浩輔はバレーしながら会話してた。

浩輔「なあ圭太、最近の綾片言が多過ぎる気がするんだけど。」

圭太「俺もお前と同じ事を考えてた。此奴は何か裏がありそうだな。」

その後放課後になり、綾は限界に近付いてる。

綾（慣れない事は疲れるわ・・・）

カレン「じゃあ次は、弓道部へ遊びに行きまショウ！ 的の真ん中に当てるゲームデス！ この間遊ばせて貰ったデス！」

綾「えー!? 無理無理！」

圭太「カレンはこの学校のマスケットなのか？」

アリス「カレンはスポーツ系の勝負ごとに強いんだよ？ ルール知らないのに上手く出来ちやつたり。」

浩輔「マジかよ・・・隠れた才能持ってやがる・・・」

綾（そんなの真似出来ない・・・カレンって、凄く天才肌なんだわ・・・）  
心の中でそう言いながら綾はがっかりした。

綾「や、やっぱり私・・・カレンみたいにはなれない・・・」

カレン「アヤヤは、どうして私になりたいデス？」

綾「それは……」

カレン「私もアヤヤの古風な所、憧れてるデスよー？」

綾「え!？」

カレン「やっぱり、何時ものアヤヤが一番デスよ!」

綾「カレン……」

カレンは綾に笑顔を見せる。すると綾はカレンを見て泣いてしまった。

カレン「アヤヤ!？」

アリス「どうしたの!？」

忍「綾ちゃん!？」

浩輔「おい綾!？大丈夫か!？」

圭太「悩みなら俺達に乗ってやるよ?」

綾は泣きながら5人に悩みを打ち明ける。

カレン「ヨウコとケンカ?」

綾「うん……と言うか、私が酷い事を言ってしまった……何時も素直になれなくて、良く悪口を叩いてしまうもん……」

カレン「あらまゝ。」

アリス「ツンデレだね。」

カレン「私だったら仲直りするデス！アヤヤ！これが今日最後のMissionデスよ！」

綾「え!? ミッションって!?!」

カレン「GO! アヤヤー!」

圭太「綾頑張れ!」

浩輔「応援してるぜー!」

3人から激励を受けた綾は決心してミッションを開始した。

教室に入って陽子を呼ぶ。

綾「陽子!」

陽子「綾。」

綾「は、話があるの!」

陽子「何?」

綾「ノートを買いたいから文房具屋さんに付き合ってくれる?」

陽子「良いよ。」

すると綾はしやがみ込んで顔を隠した。

綾「違う……」

陽子「な、何だ!？」

そしてその後2人は文房具屋に寄る。

陽子「私も新しいノート買おうかな？」

綾「あの、陽子……今朝はごめんなさい！」

陽子「え？何が……？」

綾「だって……」

それは以前、陽子の手を払い退けてしまった事を。

綾「酷い事をして……」



陽子「えく!?そこ!」

綾「だって・・・」

陽子「いや、本当全然気にしてないからさ。」

綾「そう、なの?」

陽子「なくんだ、てつきり綾に嫌われたのかと思ってたよ。」

綾「え!?違うわ!」

陽子「じゃあ仲直りにお揃いのノートを買お?これとかどう?」

ピンクのラインと花柄が入ったノートを綾に差し出す。

綾「可愛い・・・花柄なんて趣味じゃない癖に・・・陽子ったら・・・カレンだった

ら・・・」

カレン『Wowヨウコ!可愛い!ありがとうデス!!』

綾「陽子!」

陽子「ん?」

綾「あ・・・ありがとう!!」

すると陽子は微笑んだ。綾も微笑んだ。すると何処からか拍手の音が聞こえた。

綾「え?」

後ろからカレンが拍手をしていた。忍達も見えていた。

綾「きゃー!!」

圭太「ただの友達かと思ってたけど、もっと深い仲だな。」

浩輔「友情ってのは良いもんだよな。」

その後ノートを買った2人は5人と一緒に帰る。

忍「じゃあ綾ちゃんは、カレンの真似をしていたのですね？片言可愛かったです！」

カレン「アヤヤはまだまだデス！私が見事にアヤヤのモノマネをしてあげるデス！」

綾「え!？」

カレン「私はコミチアヤ！勉強の事なら何でも掛かれ！デス！」

綾のモノマネをするカレンだが。

陽子「ただのカレンだな・・・」

忍「カレンです！」

アリス「カレンだよ。」

圭太「カレンじゃない。」

浩輔「紛れもなくカレンだな。」

カレン「Oh no！」

綾のモノマネをしたカレンは自分で笑った。それにつられて皆も笑った。

その夜、綾はノートに何かを書く。

そして翌日、なんと陽子が昨日買ったノートが濡れてしまってる。

圭太「おい陽子!? ノートどうした!?!」

陽子「いや、昨日お茶溢しちゃってさ。」

綾「陽子のバカー!!」

陽子「バカって何だよ!?!」

アリス「アヤ、それじゃあ昨日と同じだよ。」

カレン「弟子失格デスね。」

浩輔「でも何時もの2人がしつくり来るな。」

圭太「まあそうだな。珍しくお前の考えに異議無い。」

放課後、突然カレンが。

カレン「hide and seekしまシヨウ！」

陽子「ハイデイ？」

綾「えーつと、かくれんぼ？」

カレン「日本に来てから絶対やりたいと思つてたデス！」

陽子「おー！良いね！やろう！」

浩輔「俺もやりたい！」

カレン「OK！範囲は学校内全部デス！」

浩輔「庭でもOK？」

カレン「OKデス！Let、play!!」

全員「ジャンケンポン!!」

陽子がパーで他の皆はチョキを出した。

陽子「じゃあ30秒数えるよー！」

教卓に顔を伏せて陽子が数える。

圭太「ん？」

外にある何かを見付けた圭太。

その隙に全員が一斉に隠れる。カレンのロッカーの中に隠れる。

カレン（まさか、スタート地点から動かないとは思いますが！デス！かくれんぼマスターカレンの実力を思い知るが良い！！）

だがしかし。

カレン「わああ!!??」

陽子「はい。カレン見つけ。」

実力終了。

その頃浩輔はA組のクラスの教卓の下に隠れてた。

浩輔「（ここに隠れてれば、陽子に見付かる事はなしと見た。ここで最後まで隠れてやる・・・しまった！鼻がムズムズする・・・）は・・・は・・・ハックション!!」

カレン「コースケ見付けマシター！」

浩輔「あちゃー！見付かっちゃったー！」

その頃綾は図書室に隠れてた。

綾（学校内全部って、隠れる所いくらでもあるわよね。あ！そう言えば小学校の時、私だけ見付けてもらえなくて、気付いたら皆帰ってしまった事が・・・）

昔のトラウマを思い出してしまい、綾が泣いてしまった。するとドアの音が聞こえた。綾はすぐに隠れる。

カレン「悪い子は居ねえかー!?!」

陽子「カレン、その鬼違う。後図書室では静かに。」

浩輔「放課後の図書室って妙に不気味だな。」

綾（カレンに浩輔!?!まさかもう見付かったの!?!）

陽子「どうやらここには居ないみたいだな。」

カレン「OK。じゃあ他を探しまシヨウ。」

浩輔「さて皆は何処だく?」

綾「（え!?!そんな!もつとちゃんと探して!!ああ・・・行ってしまうわ・・・待って・・・）

私はここよーー!!!!」

陽子「ええ!?!」

カレン「自ら!?!」

浩輔「自首した!？」

自分から出てしまった綾。

その後4人で搜索する。

綾「邪魔して悪かったわね・・・」

陽子「何が？」

カレン「次はアリスとシノとケイタデス！」

その頃アリスは美術室に隠れてた。机の上でアリスがお絵描きをしていた。やる事が可愛いアリス。

アリス「はあ、シノと一緒に隠れてれば良かったな。ふあく・・・眠い・・・」  
欠伸をしてそのままアリスは寝てしまった。

その頃4人は中庭に居た。

陽子「アリスは兎も角、しのは手強いぞ？」

綾「そうなの？」

浩輔「ああ。」

陽子「昔よくかくれんぼしたけど、しのは気配を消す事が出来るんだ。音も無く隠れる様を見て、前世は忍者ではないかと思つた程だ。」

浩輔「それに見付けるまで5時間経つた事があつた。」

綾（そんな真顔で・・・）

すると綾は何かを閃いた。

綾「カレン、そのハンカチ可愛いわね。」

カレン「これデスか？エヘヘ。これは私がイギリスで買ったお気に入りデス。」

すると突然忍が何処からか現れた。

浩輔「のわっ!？」

忍「カレン！そのハンカチ触らせて貰つて良いですか!？」



陽子「どっから降って来たんだ!」

浩輔「まあ忍見つけ。」

忍「はっ!」

浩輔「綾ナイス。」

一方廊下では、烏丸先生が歌を歌いながら歩いてた。

烏丸先生「顔から羽が生えて♪あら?美術室のドアが開いて・・・は!!」

美術室で寝てるアリスを見付けたが烏丸先生が驚いた。

烏丸先生「アリスさん!!どうしたの!?!これは・・・!!」

紙に『シノ♡』と書かれた文字を見付けた。

烏丸先生「ダイイングメツセージ!?!」

ダイイングメツセージだと思った。

烏丸先生(ダメよさくら!気が動転してるわ!生徒を信じないでどうするの!?)

犯人は忍だと思ってる。するとアリスが起き上がった。

アリス「先生・・・?」

パニックになった烏丸先生を落ち着かせて事情を話す。

烏丸先生「寝ただけ!? ごめんなさい、先生早とちりしちゃったわ。お詫びに先生も一緒に隠れます。」

アリス（ええ!?! 実は早く見付けて欲しいとは言えない状況に・・・!!）

その頃5人はアリスと圭太を搜索中。

陽子「居ないなー。」

忍「アリスー。圭太くーん。」

浩輔「そんな飼い犬探すみたいと呼ぶなよ。」

5人は美術室を見付けた。

カレン「ここはまだ探してないデス。アリスは小さいから見付け辛いデスね。」

その言葉を聞いたアリスは怒ってしまった。

烏丸先生「アリスさん落ち着いて。」

忍「あ!!」

すると忍が烏丸先生を見付けた。

忍「烏丸先生! 何してるんですかこんな所で!?!」

烏丸先生「え? えつと・・・あの・・・(かくれんぼの手助け所か、私が見付かるなん

て・・・私ってなんてドジなのかしら・・・に・・・逃げて・・・アリスさんだけでも逃げてー!!!」

アリス「先生何でバラしちゃうの!?!」

そしてアリスを見付けた。残りは圭太一人。

陽子「後は圭太か。」

綾「でも何処探しても居なかったわ。」

浩輔「彼奴本物の忍者になったのか?」

綾「いや、それは違うと思う。」

忍「では、手分けて圭太君を探しましょう。」

その後6人は分かれて圭太を探す事になった。忍とアリスは教室を探す。

忍「圭太くん。何処ですかー?」

アリス「ケイター。」

その頃綾は自分が隠れた図書室を探索。

綾「圭太ー。何処なのー？」

その頃陽子は廊下全体を隈なく探索。

陽子「圭太ー！居るなら出て来ーい！」

その頃カレンは先程アリスが隠れた美術室の中を探索している。

カレン「ケイター！出て来て下サーイ！」

その頃浩輔は理科室を探索している。

浩輔「おーい圭太ー！何処に居るか返事しろー！うお!?人体模型怖え・・・」

だがしかし、圭太は何処にも居なかった。その後6人が教室に合流した。

アリス「何処にも居ない・・・」

綾「もしかしたら、先に帰ったのかもしれないわね。ん？」

圭太の机の上に手紙があつた。

綾「何かしら？」

『校門に怪しい荷物がある。』

綾「怪しい荷物？」

陽子「何だこれ・・・？」

カレン「行つてみるデス！」

6人は校門へ向かう。

カレン「ん？」

するとカレンは門の端つこに不可思議なデカイ段ボールを見付けた。

カレン「あれデスか？」

陽子「何？」

アリス「彼処に段ボールなんてあったのかな？」

綾「怪しい荷物ってあれかしら？」

カレン「開けてみるデス！」

陽子「ちよつと!？」

早速カレンが段ボールのガムテープを剥がした。中に入ってたのは。

圭太「ドキユン!!」

カレン「Noooooooo!!」

何と圭太が入ってた。開けられたと同時に立ち上がりカレンに威嚇射撃をして、カレンが尻餅付いた。

アリス「ケイタ!？」

圭太「やつと俺を見付けたか。」

陽子「何でここに？」

圭太「隠れ場所を探してる最中にデカイ段ボールがあったから隠れてたんだ。それで発見されないように門の端っこに待機してたんだ。さっきの手紙は逃げる前に置いたんだ。」

浩輔「でもどうやってガムテープを貼ったんだ？」

圭太「被ったんだ。裏にガムテープ貼ってあったからな。」

浩輔「成る程。」

圭太「あく……足痺れた……」

陽子「ていつ！」

圭太「がはっ!？」

痺れた足を陽子に蹴られ、圭太が痺れた足を抑える。

圭太「がつかつか……何しやがる陽子!!」

陽子「見付かり難い場所に隠れたからその罰だあ!!」

こうしてかくれんぼが終わり、7人で帰る。

忍「それにしても、隠れてる途中で寝ちやうなんてアリス可愛いですね。」

アリス「だ、だって・・・」

陽子「でも楽しかったなー！」

綾「まあたまには良いわね。」

圭太「今度は何処か隠れようかな？」

浩輔「見付け難い場所はやめてくれよな？」

圭太「屋根とか？」

浩輔「止めとけ！」

カレン「皆喜んでくれて私も嬉しいデス！じゃあ！次は鬼ごっこデス！私を捕まえて  
ごらんデス！」

逃げるカレン。しかし。

陽子「じゃあカレン、また明日〜。」

綾「暗くなる前に帰るのよ？」

カレン「Oh・・・成る程、また明日デスね！」

陽子「な！そう言う意味じゃない！」

忍「アリス、鬼ごっこって英語で何て言うんですか？」



「アリス「えつとね、『T a g』って言うんだけど。」  
「END」

# Episode 10 「すてきな七にんぐみ」

圭太「アリス、何見てんだ？」

その後アリスは、廊下で烏丸先生と忍の会話を覗いてた。圭太も2人を見る。

烏丸先生「ね？こう考えると分かりやすいでしょ？」

忍「はい！よく分かります！」

烏丸先生「うふ、良かった。ん？（見られてる・・・）」

アリスが此方を見てた。アリスの目はギラギラ光ってた。まるで獲物に狙いを定めるかのように。

烏丸先生（しかも、真っ向から・・・）

すると後ろから2人の人影が忍び寄って来た。そして。

陽子・浩輔「わ!!」

烏丸先生「わー!!!」

陽子と浩輔が烏丸先生を驚かした。烏丸先生はその場でフラフラしながら倒れた。

浩輔「先生がへこたれた!」

陽子「ごめんからすちやん! そんなに驚くとは……」

圭太「お前ら何やってんだ?」

そこにアリスと圭太が寄って来た。するとアリスは写真を見付けた。陽子と浩輔が驚かせた直後に出席簿から落ちたのだった。

アリス「先生、何か落としたよ?」

陽子「お! 恋人の写真!」

烏丸先生「ち、違います! ペットの写真よ?」

忍「うさぎです!」

アリス「可愛いー!」

写真に写ってたのは、うさぎだった。

圭太「先生ってうさぎ飼ってるんですね。」

烏丸先生「ええ。」

綾「名前は何て言うんですか?」

烏丸先生「え? えつと……それは……あの……な、内緒です!!」

綾（何故!?!）

陽子「えく? 怪しいなあからすちやん?」

烏丸先生「ああ怪しくないですよ!？」

浩輔「何て名前なんですか烏丸先生？」

そこにカレンが来た。

カレン「烏丸先生のあだ名はからすちゃん! うくん、もう少し呼びやすいあだ名があると良いデスね〜！」

綾「例えば？」

カレン「か、から・・・か・・・あ! からすみ!!」

圭太「ボラとサワラの卵巣かよ。」

からすみを聞いた烏丸先生が怯えた。

烏丸先生「そ・・・それはダメ・・・!!!」

7人（からすみに何か嫌な思い出が!?)

カレン「それはそうと、私にも何かあだ名が欲しいデス!」

綾「今更ね。」

カレン「Yes! アヤヤみたいな!」

綾「あややはカレンが勝手に呼んでるだけだけど。」

忍「私は忍なのでしのです。」

綾「そんな感じが良いわね。カ、カレ、カレ・・・」

浩輔「お！カレーはどうだ？食物のカレーと勘違いするかも知れない！カレー、カレー食べる？なんつって☆」

カレン「やっぱ、良いデス。」

その後忍は廊下の階段を登つてると。

烏丸先生「大宮さん、大宮さん。」

忍「はい？」

スカートにくっついてたゴミを取ってあげた烏丸先生。この時もアリスが隠れながら見てる。

烏丸先生「ほら、スカートにゴミが。」

忍「あ！ありがとうございます！」

するとアリスの目がまたギランと光った。烏丸先生が気配を察知した。

烏丸先生（また、見ている・・・ここは、はつきりと聞くべきだわ・・・）

そして勇気を出してアリスに尋ねる。

烏丸先生「アリスさん！先生の事きらい!?直して欲しい所があったら正直に教えて

！」

だがこれは烏丸先生のシミュレーションだった。

男性教師「烏丸先生？」

烏丸先生「よし！」

早速アリスに尋ねる。

アリス「え？先生の事？勿論好きだよ？」

烏丸先生「はあく。(良かった……)」

心の中でホツとした。

アリス「シノと仲良過ぎるのはちよつとダメなんだけど……」

烏丸先生「実はね、さっき言えなかったんだけど、うちのうさぎちゃんの名前『アリス』って言うの。アリスさんが可愛らしくて、思わず同じ名前を……」

だがアリスはドン引きしてた。

烏丸先生「つてあれく？ちよつと引いてる？」

その後、陽子は一枚の写真を皆に見せた。

陽子「よつと！実は、うさぎの写真の他にもう一枚落としてったの拾ったんだけどー！」

烏丸先生が落とした写真はうさぎのアリスだけではなかった。皆がその写真を見る。写つてたのは烏丸先生が高校時代の制服を着てる写真だった。

陽子「からすちゃんの昔の写真かな？」

忍「可愛いー！」

綾「何かでも、今と全然雰囲気変わってないけど？」

浩輔「此奴は何か裏がります。」

烏丸先生「ダメー!!」

猛ダツシユで烏丸先生が写真を取り返しに来た。

烏丸先生「それは・・・それは・・・忘年会のコスプレ大会で撮った物なのー!!」

綾「何やってるんですか先生!？」

圭太「何で持って来てるんですか!? 大事な物なら家に仕舞って下さい!!」

後日、忍とアリスは朝の占いコーナーを観てた。

女性キャスター『続いては、朝の占いコーナー！今日の1位は？おめでとうござい  
まーす！ふたご座のあなた！』

忍「わー！1位です！」

アリス「良かったねシノ！」

女性キャスター「そして、今日の最下位は？ごめんなさい、牡羊座のあなた。ラッキー  
カラーはブルー。」

牡羊座のアリスは自分の星座が最下位だったと言う結果にシヨボンとなってしまう  
た。

忍「行って来まーす！」

2人は登校する。アリスは忍の服を掴んで歩いてる。

忍「ん？どうしたんですかアリス？」



アリス「出来るだけ幸運な人の近くに居ようと思って！」

相変わらず可愛いアリス。すると忍はアリスを見て微笑んだ。

忍「占いなんて、そんなに気にしなくても大丈夫ですよ。」

気を取り直して登校する。だがその時。忍の頭が電柱にぶつかつた。

アリス「シノー!!」

今度は車が横切つたが、水たまりの水飛沫が忍に掛かりそうになつたがセーフ。

アリス「シノー!!」

すると今度は、電柱の上からスパナが忍の頭に落ちて来たが奇跡的に回避した。

アリス「シノー!!」

工事スタッフ「だ、大丈夫ですか!？」

忍「はい大丈夫ですー!」

怯えてるアリスと軽く返事する忍。

アリス（もしかして、私の悪い運が全部シノに!?!）

忍「あ!見て下さい!ほら!外国人の双子ちゃんですよ!可愛いー!」

遠くのバス停に金髪の双子を見付けた忍。

忍 「早速良い事ありましたね！」

アリス 「(シノ、なんてポジティブなの!?) 流石シノだよ!!」

その後、烏丸先生はD組で緊張していた。この前の失敗がならないように。

烏丸先生 「よし・・・」

そしてD組のクラスに入る。

烏丸先生 「こんにち・・・うわ!？」

突然クラッカーが鳴り出した。

全員 「先生おめでとー!!!」

女子生徒A 「え？」

女子生徒B 「烏丸先生？」

烏丸先生は泣いて怯えてた。

男子生徒 「やば!間違えた!？」

烏丸先生 「(、、)、こんな事では挫けません!ここは、教師として・・・) あ、あなた達

！こう言う心臓に悪い悪戯は!!」

女子生徒A「ごめんなさい！」

烏丸先生「え？」

女子生徒C「すみません、担任の先生が誕生日なのでサプライズをしようとして……  
ただの悪戯ではなく、今日が誕生日の烏丸先生へのサプライズだった。折角の良い雰  
囲気が暗い空気になってしまった。

烏丸先生「あなた達……」

生徒達を見て烏丸先生は微笑んだ。

そしてその後、持って帰ったクラッカーの残骸を男性教師に差し上げた。烏丸先生は  
泣いていた。

烏丸先生「良い生徒を持ちましたね。先生……」

男性教師「何ですか？これ？」

放課後、カレンが忍達のクラスに来た。何故かKの文字が入ってるキャップを被ってベースボールを持ってた。

カレン「草野球しましょうデス!!」

アリス「野球?」

カレン「Yes!!」

綾「良いけどルール分らないわ。」

カレン「そこはヨコとケイタとコースケが!」

圭太・陽子・浩輔「知らんのか!」

持って来たバッグの中に野球の道具が入ってた。

カレン「パパに道具を借りて来まシタ!バットにグローブ、ボールデス!ちよつと汚れてますが我慢して欲しいデス!」

陽子「それサインボール!」

圭太「誰のサインだよそれ!」

そして7人はグラウンドで野球をする事に。

陽子「私バッターやりたいな!」

圭太「じゃあ俺はピッチャーだな。」

浩輔「そんじゃ俺はキャッチャーやるわ。」

カレン「OK!じゃあ私は監督やりマス!アヤヤはマネージャー!」

綾「女子マネって奴ね。」

カレン「シノは応援!」

忍「はい!フレ!フレ!フレ!フレ!フレ!フレ!フレ!フレ!」

カレン「アリスは球場に居るマスコットキアラで!」

アリス「え?」

忍「球場に居る着ぐるみさんですね!」

カレン「それでは、かつ飛ばせ!!ヨーコー!!」

陽子「何を!」

浩輔「これって野球か?」

圭太「6人足りない。」

結果的に、打って遊ぶ事にした。

圭太「試合にならないから、投げて打って遊ぶ奴にしようぜ!」

アリス「私が打つの!」

忍 「フレー！フレー！アリス！」

カレンがアリスにハンドサインを出したが、アリスは理解出来ない。

綾 「女子マネは何をすれば良いの？」

カレン 「応援デス！」

陽子 「変わんねえよ。」

綾 「しのの応援とは何が違うの？」

カレン 「ステータスが違いマス！」

陽子 「どう言う事だそれ？」

圭太 「アリス行くぞー！」

アリスがバットを持って構える。そして圭太がボールをストレートに投げる。アリスがバットを振ったがストライク。

忍 「フレー！フレー！アリス！」

圭太 「アリスー！今度は軽く投げるねー！」

2 回目はストライク。アリスが後ろに倒れた。

カレン 「球を良く見るデス！」

3 回目もストライク、4 回目もストライク、5 回目もストライク。

アリス 「当たる気がしないよ・・・」

陽子「ドンマイドンマイ！ナイススイング！」

カレン「諦めるのはまだ早いデス！」

アリス「でも、今日運勢も最悪だし・・・」

朝の占いの事をまだ気にしてた。

忍「フレ〜！フレ〜！アリス！頑張れ頑張れアリス！頑張れ頑張れアリス！」

アリス「シノ・・・」

忍「打てますよ！大丈夫です！」

アリス「うん！」

やめずに自分を応援し続けている忍を見てアリスに勇気が湧いた。そして再びバットを持って構えた。

カレン「Play ball!!」

圭太「行くぞアリス！」

アリス（占いより、シノを信じる!!）

圭太「ソイヤ！」

投げたボールを見てアリスがバットを振る。

すると、ボールが当たり、高く飛んだ。

アリス「シノ・・・やったよ!!」

忍「凄いですアリス!!」

浩輔「こりやホームラン確定だな！」

綾「1塁に走らなくっちゃ！」

アリス「い、1塁? ってどっち!？」

忍「お椀を持つ方です！」

綾「違う! お箸を持つ方でしょ!？」

陽子「今のファールとは言えないな圭太。」

圭太「ああ。やったなアリス! 俺の負けだぜ！」

そして夕方になり全生徒が下校する。

カレン「帰りに本屋さんに寄って良いデスカ？」

綾「良いわよ。」

陽子「じゃあ皆で行こう！」



全員で本屋へ寄る。

陽子「カレン意外と本好きなんだな。」

カレン「好きな漫画の新刊が出るんデス！」

そして本日発売の新刊を見付けた。

カレン「これこれ！日本のアニメや漫画文化は素晴らしいデス！私も日本語覚えるのに凄く役に立ちマシター！国語の教科書も漫画にしたら良いと思います！Good idea!!」

陽子「それはどうだろう？」

その頃アリスはクロスワードの雑誌を読んでいる。

女子A「あ、外国の女の子！」

女子B「本当だ！何読んでるのかな？」

他校の女子生徒2人がアリスを見て言った。

アリス「子供っぽいかな・・・」

その後アリスは別の場所へ移った。そこに忍がアリスを見付けた。

忍「あ！アリス！何読んでるんですか？」

アリスが読んでるのは盆栽の本だった。

忍（え〜？）

その頃圭太は、ある本を読んでいた。それを見て浩輔が何故か怖がっていた。

圭太「何だ浩輔？俺の顔に何か付いてるのか？」

浩輔「いや、そう言う訳じゃなく・・・お前って、心霊マニアなのか？」

何と圭太が読んでたのは心霊写真集だった。

圭太「中学時代から何故か興味を持ってしまっただけ。この事は誰にも言うなよ？」

その頃綾はファッション雑誌を読んでいた。そこに勇が載っていた。

陽子「おー！勇姉載ってる！」

綾「この服陽子に似合いそうね。」

陽子「そっかな？あ！綾はこっちのひらひらしたの似合いそう！」

綾「そ、そうかな・・・？」

陽子「向こう見て来るねー。」

別の場所へ行った陽子。

綾「今月の星占いは・・・」

そこに忍とアリスが綾を見付けた。

忍「星占いですか？ふたご座はどうでしょう？」

綾「え？」

ふたご座を見ると、『星のめぐりがあまり良くありません。おとなしくして過ごしましょう』と掲載されてた。

綾「今月の占い、しのはあんまり良くないみたい・・・」

忍「え!?そうなんですか・・・？」

アリス「占いなんて関係無いよ！シノは凄くポジティブなんだから！」

忍「ありがとうございます！私はアリスが居るだけで幸せなんですよ！アリスはまるで魔除けのお守りですね！」

魔除け扱いされてアリスはしよぼんとしてしまった。  
アリス（何かやだ・・・）

翌日、烏丸先生が自宅で占いコーナーを観てた。

女性キャスター『今日の最下位は？ごめんなさい！天秤座のあなた！ラッキーカラーはオレンジです！』

クローゼットを開けてオレンジ色の服を探す。

烏丸先生「オレンジ？オレンジ色の服なんてあったかしら？」

そしてその後オレンジ色の物を見付けて、学校で授業する。

烏丸先生「えーでは、前回やった所から。」

忍「あのー先生？そのみかんは何ですか？」

教卓の上のみかんが置いてあった。

烏丸先生「オレンジです！」

見付けたオレンジ色の物はみかんだった。

その後英語の授業が終わって、陽子が綾に質問した。

陽子「綾ってA型だよね？」

綾「ええ。陽子はO型だったかしら？」

陽子「そだよー！A型とO型って相性良いって言うよねー！」

綾「そ、そうなんだ・・・」

忍「私もAです。」

アリス「私もAだよー。」

陽子「へえーそっかー！圭太と浩輔は？」

圭太「俺はAだ。」

浩輔「俺はO型だ。あ！圭太がAだったらO型の綾と相性良いかも使れないな！」

綾「え!？」

圭太「そう言ってる浩輔はA型の陽子と相性抜群じゃねえのか？」

陽子「あ！言われてみれば。」

浩輔「確かにそうかもな！」

とある休日。

アリス『休日のシノの朝は遅い。』

休日になると忍は何時起きないで寝てるばかり。

アリス「シノ！シノ！起きてー！」

忍「え、エリザベス・・・」

アリス「誰？」

そして忍が起きた。勇も起きた。2人は完全に目を覚ましてない。

アリス「2人共、寝起きはそっくりだね。」

勇「それってどういう意味？うーん、メガネメガネ・・・アリス、メガネ見なかった？」

アリス「イサミ！普段メガネ掛けてないでしょ!?!もう顔洗って来なさい！」

母親気分になってるアリス。そして2人は顔を洗って、リビングでコーヒーを飲む。

忍「エリザベスって言うのは、お店で見掛けた人形の事です。アンティークで高価な

んですよ?」

アリス「そうだったんだ!」

勇「忍は、アリスが店先に売られていたらいくらで買うの?」

アリス「どう言う事なの!?!」

忍「うゝん、それは難問ですねゝ。」

アリス「そんな!本気で悩まないで!!」

忍「うゝん・・・じゅ・・・10万円!!」

アリス「安い!!」

忍「え!?!10万って安いですか!?!」

アリス「や、安くないけど、私は人形じゃないんだよ!もうイサミ!」

勇「そうね、お友達はお金じゃ買えないよね。」

アリス「イサミの言う通りだよ!」

勇の言葉でアリスは勇に抱き付いた。

忍「お姉ちゃん・・・実は詐欺師ですね!?!」

勇「モデルよ?」

一方その頃外では、カレンが上機嫌に歌を歌いながらスキップしてた。

カレン「今日は何処に行きまシヨウかね？♪ドッコドッコドッコドッコ♪ん？」

途中で白い猫を発見した。

カレン「猫デス！ニャーニャー！」

すると猫は走り去った。カレンは逃げる猫を追い掛ける。そして猫は止まった。カレンが忍び足で近付き、猫を捕まえた。

カレン「捕まえマシタ！ん？ここ何処？」

何と港に着いてしまった。

その頃大宮家に1本の電話が鳴った。忍が受話器を取る。

忍「はい。大宮です。」

カレン『あ！シノ！』

忍「はいシノです！どうしました？」

カレン「猫見付けマシタ！白い猫デス！」



忍「わー！白猫ですか？」

カレン『Yes!!』

通話相手はカレンだった。

カレン「尻尾とヒゲが長くて可愛いデス！  
すると途中で猫が逃げた。」

カレン「あ！行っちゃいマス・・・」

忍『仲良くして下さいね。』

カレン「はい！See you！」

通話終了。

忍「カレンが白猫を見付けたそうです。」

アリス「え!?それだけ!？」

カレン「肝心な事を聞くの忘れたデス。ま良いかニヤー!」

その頃綾は部屋で宿題を終わらせた。

綾「宿題も予習も終わったし、暇だわー。」

携帯を開いて陽子に電話しようとする。だが綾は緊張してる。

綾「な、何緊張してるのよ・・・」

そして陽子に電話を掛ける。すると繋がった。

??? 「はい、猪熊です。」

綾「よ、陽子？私、ああやややだけど・・・駅前に行こうと思って！べ、別にしや

しよつてる訳じゃなくて！時間があつたらこれにやいかしら!？」

??? 「あの一、僕弟です。」

綾『!!』

通話相手は陽子の弟の空太だった。

空太「今姉に変わります・・・」

そう言ってる間に綾が電話を切った。

空太「あれ？切れちゃった。」

その頃陽子はリビングで妹の美月とゲームしていた。

陽子「どうしたの？」

美月「お姉ちゃん早く続きやる？」

陽子「2人で遊びなさい？君達強すぎて面白くないし。」

美月「えー？」

空太「俺達が強いのは、このゲーム作った人が俺達2人の本当の父親だから。」

陽子「え!？」

美月「このヒゲのおじさんそっくりな人よ？」

陽子「私達血の繋がった兄弟じゃなかったのか!？」

空太・美月「嘘だよ。」

その頃アリスは部屋で盆栽をしていた。

忍「アリスー。」

アリス「ん？」

忍「一緒におつかいへ行きませんか？」

アリス「行く行くー！」

忍「着替えるのでちょーっと待って下さいね。」

部屋で忍が着替えるのでアリスが部屋の前で座って待ってる。

アリス「そのままでも大丈夫なのに。」

そしてドアが開いた。今回は紫のドレスだった。

忍「お待たせしましたー！」

その頃圭太は街中を歩いてた。

圭太「休日は賑やかだな。まるで六本木のような。ん？」  
目の前に陽子と綾を見付けた。

圭太「おーい！陽子ー！綾ー！」

綾「圭太？」

陽子「あ！圭太！」

圭太「2人も散歩か？ん？綾どうした？」

綾「え？別に何も・・・」

その頃浩輔も街中を歩いてた。

浩輔「いや、ゲーセンで色々勝ちまくったなー！お？」

目の前に忍とアリスを発見した。

アリス「あ！コースケ！」

浩輔「ヤッホー！2人も遊んでるのか？」

アリス「私達はおつかいしてるんだよ？」

浩輔「おつかいか。所で忍、何だその格好は？」

忍「私の私服ですよ。」

浩輔「私服？制服より酷えぜ、目立ってしょうがねえわ。」

その頃陽子達3人は。

陽子「いい加減機嫌直しなよー。」

圭太「何かあったのか？」

陽子「ちよつとね。」

綾「べ、別に怒ってないわ・・・家に掛けたのは私のミスだし、それにその・・・」

陽子「ケーキ奢るからさ！」

すると綾が反応した。

綾（ケーキ！）

陽子（分かりやす！）

圭太（ケーキに弱いのかこの子は？）

陽子「綾みたいな妹なら可愛いよなー。ん？  
すると綾が赤面した。

綾「い、妹……」

陽子「あれ!?何か変な事言った!？」

アリス「あ！ヨーコとアヤとケイタだ！」

目の前にアリスと忍と浩輔が居た。

アリス「ヨーコ！アヤ！ケイタ！」

綾「おつかい？」

忍「はい！」

陽子「偶然だな！」

圭太「浩輔も偶然だな。」

浩輔「全くだな。」

アリス「3人も買物？」

浩輔「壊物？」

圭太「違えよ。」

カレン「シノー！アリスー!!」

そこに港から何とか戻って来たカレンと合流した。

綾「皆暇だったのなら誘えば良かったわ。」

忍「殆どゴロゴロしてました。」

アリス「今度のお休みは皆で遊ぶ？」

カレン「良いデスね！」

圭太「俺達これからケーキ食いに行くけど。」

カレン「ケーキ!？」

浩輔「いやカレンはまず風呂に入った方が良いと思うぞ？」

カレンの服は汚れてた。

綾「どう遊んだらそう汚れるの!？」

忍「私達はおつかいがあるので。」

アリス「また今度皆で行こ？ね？」

綾「ええ！」

そしてそれぞれ別れる。

陽子「じゃ、また明日！」

カレン「学校デー！」

浩輔「また会おうぜ！」

アリス「お休みの日に会うと変な感じ！」

忍「ですね！」

綾「あ！そうだ皆！」

忍「何ですか？」

綾「明日の小テスト、勉強して行かないと大変よ！」

圭太「きっちり勉強しろよー！」

陽子「嫌な事思い出させるな！」

忍「何のテストでしたっけ？」

アリス「英語だよシノ。」

忍「あ！忘れてました！」



陽子「からすちゃん泣くぞ?」

別の場所では烏丸先生が買い物から帰る途中。

烏丸先生「トータムポール♪トー、あら?」

目の前にカレンが見付けた白猫が居た。

烏丸先生「猫やーい。猫猫やーい。猫猫猫やーい。」

翌日の学校。

烏丸先生「羽ばたいてポール♪」

今日も歌を歌ってる烏丸先生。途中で外を見る。

先生「烏丸先生、どうしました?」

烏丸先生「あいえ、最近よく考えるんです。何時か皆卒業して、この学校を離れて行くんだなって。皆立派に、しなくて……」

話してる途中に烏丸先生が泣いてしまった。  
先生「先生の受け持ち、1年生ですよね？」

「END」

Episode 11 「どんなにきみがすきだかあててごらん」

と言う訳で6人は学校へ向かう。

陽子「楽しみだなークリスマスマス！」

アリス「日本のクリスマスは独特だよね。」

綾「イギリスのクリスマスはどんな感じなの？」

浩輔「俺も聞きたいな。アリスが体験したクリスマス。」

アリス「うちでは毎年教会へ行つて、家族と過ごすよ。イギリスのクリスマスは日本のお正月みたいな感じだから！日本では恋人と過ごすイベントって思ってる人が多いよね。そもそもキリストのお誕生日で……」

綾「あ……」

陽子「浮かれてすみません……」

圭太「イギリスの伝統のクリスマスかあ。俺も体験してみたいな。」

浩輔「また今年も日本中のリア充が過ごすのか……」

圭太「どんだけリア充を妬んでんだよお前は？」

そして6人は学校に到着した。

カレン「メリクリー！」

突然カレンが飛び出した。カレンはサンタの衣装を着てる。

カレン「どうしたデス皆さん？もうすぐクリスマスデスよ？もつと浮かれないと!!」

陽子「カレンは日本人の割合の方が多いのかな？」

カレン「浮つくのは日本人もイギリス人も一緒デスよ！でも一番浮ついてるのは、サ

ンタさんデスよね？赤い服を着て〜」

陽子・浩輔「お前だよ!？」

それぞれの教室にストーブが置かれてあった。教室に入ってコートを脱ぐ。

アリス「シノはクリスマス好き？」

忍「はい！とつても！皆と過ごすの楽しいですし！特に今年はアリスと一緒に本当に

嬉しいですよ！」

それを聞いたアリスは感動した。

アリス「シノ！日本のクリスマスはシノと過ごす日なんだね！素敵！」

忍「ん？」

カレン「クリスマスと言ったらPresent！私はとつくにお問い合わせ済みですよ！」

綾「何を頼んだの？」

陽子「何か過ごそうながする。」

浩輔「でも気になるなくカレンのプレゼント。」

圭太「何を願う済みだ？」

カレン「それは……勿論！愛ですよ！」

圭太・綾（予想の……）

浩輔・陽子（斜め上？）

綾「えつと、もう十分愛されてると思うけど？」

カレン「いいえ、もっとHyperな愛を私は所望シマス!!」

陽子「何その無理難題!？」

忍「イギリスでは、雪と一緒に愛も降ると言いますしね。」

アリス「え!? そうなの!? 見た事無いよ!？」

陽子「おい地元民！嘘だ嘘！」

圭太「愛が降るなんてありえねえよ！」

アリス「え？」

綾「素敵〜！お小遣いアップとかよりずっとロマンチック！私も今年のプレゼントは愛が欲しい！」

カレン「Yes!!」

綾とカレンがハイタッチした。

陽子「何だこれ？」

圭太「綾はそこまで愛を求めてるのか？」

その後アリスは烏丸先生にクリスマスについて質問する。

アリス「先生はクリスマス、恋人と過ごすの？」

烏丸先生「え？・・・先生、クリスマスは祈りを捧げる日って決めてるの。」

アリス（凄い！先生！教会へミサに行くんだ！）

烏丸先生が教会へ行ってる想像が思い浮かんだ。

アリス「イギリス式……」

烏丸先生「寒い……ジャージだからかしら……？」

だが先生は寒いだけだった。

そして数日後、大宮家ではクリスマスの準備が始まった。

忍「アリスー」

アリス「待つてシノー！」

庭で木にイルミネーションの飾り付け。玄関前に雪だるまを置く。そして準備が終わって夜になった。住宅街全部がイルミネーションで輝いてた。

アリス「うわー！」

忍「この辺りはクリスマスマスの飾り付けが盛んで有名なんですよ。綺麗ですよねー！」  
アリス「凄い！まるで御伽の国みたい！」

そして翌日。

カレン「ダジャレ難しいデス。教えて欲しいデス！」

綾「うーん、そうね・・・カレンが可憐な花を見付けた！この花は可憐！みたいなの？」  
だがカレンは理解出来てなかった。

カレン「今のはどう言う意味デス？もう一度お願いシマス！」

綾「ダジャレに意味なんて・・・！」

浩輔「あゝやつちまつたな。」

そしてクリスマスイブの夜。皆が大宮家に来た。

陽子「おー！凄ーい！頑張ったなー！」

綾「綺麗〜！」

圭太「イルミネーションが綺麗だなあ。」

浩輔「流石キラキラしてるぜ！」



そして家に入る。

勇「いらつしやーい！」

陽子「勇姉！何でモデルなのにサンタコスじゃないの!？」

勇「モデル関係ないし・・・」

浩輔「陽子の言う通りだ！勇さんがサンタコスだったらかなり見えるかもしれないのに！」

すると圭太が浩輔をビンタした。

浩輔「ぶべら!？」

圭太「姦しいなお前は。俺は却下。」

忍「陽子ちゃん、私を見て下さい！ほらほら！」

サンタコスしてる忍。

陽子「しのは見慣れてるし。綾は絶対似合うのに着てくれないしさ。」

綾「え!？」

忍「カレンもサンタさんですよ？」

カレン「メリクリー！」

陽子「もう見たよ。」

アリス「アヤ、どうしたの？」

カレンは既にお邪魔していた。そして皆でクリスマスを楽しむ。その頃アリスはイギリスに住む母親と電話していた。

アリス「Have a good holiday, Mum(よい休日をね。ママ。)」

忍「アリス、イギリスに電話ですか？」

アリス「うん。実は、クリスマスに帰って来れないか？ って言われたんだけど。」

忍「え?! 良いんですか!？」

アリス「でも、日本のクリスマスはシノと過ごすのがルールだから。えへへ。」

忍「そんなルールありませんよ!？」

アリス「今年は、日本流のクリスマスを体験出来て、とっても幸せだよ!」

忍「アリス・・・」

嬉し泣きする忍。

アリス「あ! そうだ!」

忍「え?」

アリスと忍は2階の部屋から綺麗な星空を見る。

アリス「雪、降らないかな?」

忍「まだちよつと早いですね。でもきつと、愛は降ってますよ!」

2人は笑い合ったが、隠れて聞いてた勇の体に寒気が走った。

そしてクリスマス会が終了した。カレンが走って外に出た。

カレン「寒いデス・・・！」

圭太「見事に冷えるな今年も。」

浩輔「早く帰ってこたつとみかんを頬張りたい。」

陽子「そんじゃ！」

勇「気を付けて。」

綾「ありがとう。楽しかった。」

忍「こちらこそ！」

アリス「素敵なお聖夜を！」

圭太「アリス達も良いお聖夜を。」

浩輔「また会おうぜ！」

カレン「お邪魔しまシタ！」

5人が一緒に帰る。

カレン「これから家族でパーティーデス！」

陽子「うちもかな〜？」

綾「家族でお祝いつてイギリス式ね。」

陽子「好きな人とロマンチックに過ごすなんて、一体何時の話やら。綾はやっぱりそっち派？」

綾「え!？」

陽子「あはは！全然想像出来ないな〜！」

浩輔「俺も全く想像出来ないな〜！」

圭太「考えたくないだけだろ浩輔の場合は。」

その頃忍とアリスは部屋で寝る準備をしてる。

忍「プレゼントは明日のお楽しみです。」

アリス「え・・・？」

部屋の電気を消灯して忍が寝る。だがアリスはプレゼントが気になって寝られない。起き上がって忍を揺らす。

アリス「シノ、もう開けて良い？」

忍「アリス・・・まだ真つ暗ですよ・・・」

そして翌朝、今日はクリスマス。

忍「念願のプレゼントタイムです！」

早速忍がプレゼントの袋を開ける。入ってたのはクマのぬいぐるみだった。

忍「可愛い〜!!」

早速アリスも開ける。だがアリスはドン引きした。入ってたのは石ころだった。

アリス「シノ・・・これは何・・・？」

忍「イギリスで拾った石です！私の1番の宝物です！」

アリス（どうしよう・・・いらない・・・でもシノからのプレゼントだし・・・）

イギリスの石がプレゼントと言う事は、この石はアリスの地元の石だからである。忍は相変わらずの鬼畜。

アリス「あ、ありがと・・・」

勇「アリス〜！昨日の写真いる？忍のコスプレ写真。」

アリス「いるー!!イサミありがとー!!」

石よりも忍のコスプレ写真を嬉しく受け取った。

忍「あれ？」

数日後、大晦日の夜。アリスは除夜の鐘の音を聴いていた。

忍「アリス、ずっと聴いてますね。」

アリス「うん！生で除夜の鐘を聴けるなんて感動だよー！」

忍「もうすぐ年が明けますね。」

そして大晦日の夜。正月になった時。

アリス「ニャーニャーニャーニャー!!!!」

正月の夜にアリスの悲鳴が響いた。

勇「何!?!今の悲鳴!?!」

悲鳴を聞いた勇が急いで駆け付けた。電気を点けるとアリスが寝てる忍の上に伏せて泣いてた。

勇「つて何事？アリスどうしたの？」

アリス「あ……悪夢を……」

勇「夢？なくんだもう、驚かせないでよ。」

アリス「ニャーニャーニャー！！！！」

またアリスが悲鳴を上げた。何故なら勇が木刀を持ってアリスに向けていたからだった。

そして冬休みが終わって3学期が始まった。学校では陽子達が初夢について話して  
る。

陽子「初夢覚えてる？私何時も起きた瞬間忘れるー。」

浩輔「分かるぞーその気持ち。俺も忘れちゃった。」

綾「私は陽子が出て来たわ。」

陽子「えー？」

綾「陽子は夢の中での出現率高いのよー。」

初夢の中で陽子がクールに出て来た。

陽子『どうした？元氣無いな。』

初夢終了。

綾「しかも美化されて出て来るの。感謝しなさい。」

陽子「それ多分私じゃない！じゃあ圭太の初夢は？」

圭太「俺の初夢は、何故か周りに女子高生達が俺を囲んでいてな、それを全力で逃げてる夢だったな。」

浩輔「羨ましいぞお前！」

圭太「夢だから良いだろ別に！」

カレン「あけおめ！ことよろ！」

学校で着物を着てるカレンが来た。

4人「うわー!?!」

綾「学校で着物はダメよカレン！よく見付からなかったわね。」

圭太「忍者にでもなったのか？」



カレン「後で着替えるデス。所で、初夢と言ったら私も見たデスよ！その夢ではアリスが大変な事に！」

忍「皆さん、おはようございます……」

今日の忍は元気が無い。

陽子「どうしたの？」

綾「何だか元気が無いわね。」

浩輔「何かあったのか？」

すると忍が泣いてしまった。

忍「実は、アリスが……アリスが……」

4人「え？」

そこにアリスが来た。だが何時もと雰囲気違った。そして制服も違ってた。アリス「Good morning。」

陽子「ん？どうしたアリス？今日はイギリス風だな。」

綾 「制服も違う!？」

カレン 「ま、まさか・・・正夢!？」

浩輔 「カレン!?! 正夢ってどう言う事だ!?!」

カレン 「私の見た夢では、アリスが記憶喪失になって、日本語を忘れてしまうデス!」

浩輔 「何だって!?! 本当か!?!」

アリス 「That's right (その通りです。)」

陽子 「マジか!?!」

綾 「でも日本語には返事してるわよ? もうからかつちやつて。」

冗談だと思ってる。だがしかし。

アリス 「The wind thorough London Bridge during winter was cold. The breeze brings the spring to my hometown in the Cotswolds. Crystal water stream through the small rivers along my gold-las-honey town when the winteria blooms would dance across the hill together with Poppy. (冬のロンドン橋に吹く風は冷たかった。地元コッツウォルズの春は風が運んで

来る。澄んだ水の流れる小川はハチミツ色の町並みを流れて行く。フジの花が咲く頃、私はポピーと共にあの丘を駆けるだろう。」

綾「授業のヒアリングとは訳が違うわ・・・」

アリスが全て英語で会話してる。冗談では無かった。

陽子「ここに来て、言葉の壁を感じるなんて・・・」

圭太「翻訳成功。」

浩輔「鋭い!」

陽子「圭太!アリス何て言ったんだ!」

圭太『『冬のロンドン橋に吹く風は冷たかった。地元コッツウォルズの春は風が運んで来る。澄んだ水の流れる小川はハチミツ色の町並みを流れて行く。フジの花が咲く頃、私はポピーと共にあの丘を駆けるだろう。』』って言ってるな。まるでポエムだ。」

綾「アリス、言葉を忘れてしまったの!」

陽子「わーん!ヨーコって言ってごらん!」

浩輔「コースケって呼んでくれアリス!」

圭太「忍、何か心当たりはあるか?」

忍「多分、初夢で悪い夢を見たのが原因だと思います。日本が大好きなアリスが、正月なのにテンションが低くて。」

回想・正月の日。

忍『アリス、お雑煮のお餅いくつ食べますか?』

アリス『Two (ふたつ)。』

お雑煮を食べる。その時忍が餅を喉に詰まらせた。

アリス『シノ!?! キヲツケテ! モチハノドにツマルヨ!!』

この時のアリスは片言で話していた。回想終了。

陽子「日本語じゃねえか!」

忍「からかってるだけですよね?」

アリス「N—No!!」

そう言つてアリスは逃げてしまった。忍が固まってしまった。

綾「もしかして、しのの英語がどれだけ上達したか試してるんじゃない?」

陽子「いや、そんな雰囲気じゃないけど・・・」

圭太「あの反応、嘘じゃないな。」

忍「確かに、可愛い服を着たアリスは最高ですが、これでは話が出来ない・・・試されてる！私、今凄く試されてます！」

その昼、アリスは窓の外を見上げていた。そこに忍がアリスの元に近寄る。

忍「アリス。」

アリス「My favorite food is my mum's Yorks hire pudding. (私の好物は母の作るヨークシャープディングだ。)」

忍「えっと・・・ハロー。」

圭太「おい。」

アリス「It was always the best part of a Sunday coast, and I always have it with honey. (サンデーコーストは決まってそれだった。私はよく蜂蜜をかけて食べていた。)」

忍「は、ハロー・・・」

圭太「またか。」

アリス「It is very difficult to find such  
a fluffy yet sticky taste from other d  
ishes. (あのふわふわでもちもちした食感は何物にも例えがたい。)」

忍「まさか、ハローで会話が成立しない!？」

陽子「それが普通だよ。」

浩輔「因みにさつきまでアリスなんて言っただけだ?」

圭太『私の好物は母の作るヨークシャープディングだ。』『サンデーローストは決まっ  
てそれだった。私はよく蜂蜜をかけて食べていた。』『あのふわふわでもちもちした食感  
は何物にも例えがたい。』って言ってた。」

浩輔「アリスの好物かよ!!」

陽子「カレンならなんて言ってるか分かるだろ?」

カレン「Okay, come on! 私に任せて下サイ!」

烏丸先生「先生もまーぜて。」

圭太「俺も協力するぜ。」

早速3人はアリスの英語を聞く。

アリス「But now, i always have natto for my breakfast. Perhaps, ve completely blended into the life here in japan. So, she, snow into a more British girl. (しかしいま、朝食は納豆と決めている。私は日本に慣れ過ぎたのかもしれない。彼女は他のブリテイッシュガールに夢中だ。)」

圭太（彼女はブリテイッシュガールに夢中って、彼女って誰だ？）

カレン「ほほう。」

烏丸先生「ほほう。」

カレン「成る程。」

忍「あの、アリスは何て？」

カレン「はい、これはシノが悪いデスね。」

忍「え!？」

圭太「あのアリスの言葉で!？」

烏丸先生「そうね。」

忍「何ですか!？」

カレン「浮気はダメデスよね？」

烏丸先生「ねー。」

忍「あ、あの、心当たりが全くないのですが、先生！答えを教えてください！」

烏丸先生「え？先生教師だからそれはちよつと……」

忍「そんな……」

カレン「シノ！これはきつとシノに課せられた試練なのデスよ！」

忍「試練？」

圭太「試練つて。」

忍「分かりました！私頑張つて通訳します！」

カレン「その意気デス!!」

早速忍はアリスの英語を通訳しようと頑張るが。

アリス「Poppy wraps around me with his furry like a warm blanket. After every time we wash poppy, his ears become so fluffy. (ポピーの毛は毛布よりも温かく私を包んでくれる。風呂上がりのポピーの耳はモフモフになって可愛らしい。)」

英語辞書を読んでも通訳出来なかつた。

忍「全然分かりません……アリスは、私の事嫌いになつたのですか……？」



アリス「あ!! I like you!!」

圭太「大好きか。」

陽子「あ、これは聞き取れる。」

浩輔「一撃必殺炸裂。」

アリス「ごめんねシノ・・・」

圭太「アリスが日本語に戻った。」

アリス「嫌われてるって思ったのは、私の方なんだよ。」

回想・アリスが体験した出来事。朝登校しようとした時。

アリス『玄関のしきんは踏んじやダメだよ?』

忍『そうなんですかー。アリスは何でも知ってますねー。』

アリス「日本に来てから何時の間にか、日本人より日本人らしくなっている自分に気付いたの。そして、事件が起こった。」

陽子「え?このナレーション何?」

そしてアリスの初夢の中。

アリス『今年も宜しくね!シノ!』

忍『はい！それはそうとアリス、はっ！アリスは日本に慣れ過ぎてダメです！』  
突然の暴言でアリスがショックして固まってしまった。

忍『私は他のブリティッシュユガールに夢中ですよ！』  
回想終了。アリスは涙を流してた。

圭太（彼女って忍の事だったのかよ。）

アリス「初夢から、縁起悪過ぎだよ・・・うわーん!!朝起きてすぐ宝船の絵を川に流したよ・・・!!」

陽子「何それ？」

アリス「縁起直しだよ・・・」

圭太「室町時代からの風習でな、悪い夢を見た時は、翌朝、宝船の絵を川に流して縁起直しをする風習だ。」

浩輔「となると、悪いのは忍自身ではなく、夢の中の忍だったのか。」

忍「事情は分かりました。アリスは凄いですよ！私も、アリスと英語で話せるように勉強頑張りますね！どんなに日本人らしくなっても、例え侍になっても、アリスはアリスです!!」

アリス「シノ……！」

忍「今更ですけど、今年も宜しくお願いします！」

アリス「こちらこそ!!」

こうして忍とアリスの友情が深まった。

陽子「良かったな！」

圭太「これで仲直りの絆が修復されたな。」

カレン「日本人らしくなると、侍になれるデス……? エへへへ、日本極めるデス！私。」

浩輔「侍になりたいのかこの子は？」

綾「カレンも相当日本慣れしてるわよ？」

カレン「え? そうデスか? でも喋り方とか。」

陽子「そろそろ普通に喋れないの？」

カレン「うーん、難しいデスね。これは癖なんデスよ。ほら! アヤヤがよくヨウコヨウコって言うてる瞬間に綾が掴んだ。」

そう言うてる瞬間に綾が掴んだ。

綾「何の話よ!!」

そして冬が去り、春の季節がやって来た。そして卒業式が訪れた。3年生全員が卒業する。中には泣いてる生徒も居た。

綾「何か、やっぱりちよつと寂しい気持ちになるわね。」

陽子「私達はまだまだ先になるわね。」

浩輔「びえーん!!」

圭太「浩輔お前絶賛号泣中だな。」

浩輔が号泣してる。卒業式に感動したらしい。そこにカレンが走って来た。

カレン「あーおーげーばー♪」

アリス「カレン、走っちゃダメだよ?」

忍「もうすぐ皆、お姉さんとお兄さんになれますね。」

陽子「え?」

忍「だって、春になったら2年生ですよ!」

6人「あ!!」

陽子「そっか!進級だ!!」

春休みのある日。綾の部屋でカレンを除いた6人が宿題をしてる。

陽子「暖かくなってきたなー。」

浩輔「そうだなー。薄い長袖だけで十分な暖かさだ。」

綾「あれ？アリス？」

忍「寝ちやいましたね。」

アリスは机に伏せて寝ていた。

圭太「可愛い寝顔だな。」

そしてアリスは夢を見た。

忍『おはようございますお母さん。』

綾『おはようしの。』

この夢の中では、忍が綾の子供と言う設定になってる。

陽子『おはよー．．．』

忍『あ！おはようございますお父さん。』

綾『何言ってるのしの。お父さんは3年前に蒸発したでしょ？ね。お爺ちゃん。』  
陽子『酷え!!』

この夢の中では陽子はお爺ちゃんと言う設定になってる。忍が娘、綾が母、陽子が祖父になってる。

陽子『いや、だから・・・』

圭太『おはよう。』

浩輔『おつはよーさん!』

綾『あら。おはよう浩輔、圭太。』

この夢の中では浩輔が忍の兄で、圭太が居候してる学生と言う設定になってる。

圭太『ちよと待てー! 何で俺が居候してる設定なんだ!?!』

アリス『ポジシヨンの、私はシノの妹だよね?』

忍『アリス、おはようございます。朝ご飯ですよ。』

アリス『わーい!』

缶詰が入ったお椀を床に置いた。

忍『はい。』

この夢の中では、アリスはペットと言う設定になってる。

アリス『あんまりだよー!!!!』

圭太『俺も居候のポジションなんてあんまりだ!』

そこに烏丸先生が起きて来た。学生時代の制服を着ていた。

烏丸先生『Good morning family!』

綾『あらあら、お寝坊さんね。』

この夢の中では、烏丸先生は長女つまり浩輔と忍の姉と言う設定になつてゐる。

陽子『でっけえ娘だな!』

浩輔『うわ本当にでけえな!うわ本当にでけえな!』

圭太『何で二度も言うのよ!』

浩輔『二度目はこまだ。中でほら。』

忍『お姉様!私こないだのテストで満点を取つたのです!』

烏丸先生『まあ!凄いわ!』

忍の頭の上にアリスが乗っていた。作者はこの時思った。『何だこの可愛い生き物は

?』と。

アリス『シノ・・・』

忍『アリス、ちよつと後にして下さい。邪魔です。』

するとアリスはカオスな夢から覚めた。

アリス「うわーーーーーん!!!」

起き上がった瞬間泣いてしまった。

忍「あ！起きました！」

圭太「泣いてる!?!」

アリス『夢オチでした。』

「END」



## E p i s o d e 1 2 「きんいろのとき」

2—A組に忍とカレンと綾と浩輔。

忍「カレン！同じクラスですね！」

カレン「シノ!!シノと一緒に凄く嬉しいデス!!」

2人は気分上昇していたが、綾はどよんとしてしまった。

忍「綾ちゃん!？」

カレン「ヨーコと離れたのがショックのようデス。」

その頃2—C組にアリスと陽子と圭太。だがアリスは綾と同じくどよんしてしまっていた。アリスの席は一番左前、陽子はアリスの後ろの席、圭太はアリスの右の席。

陽子「分かるぞー・・・しのと一緒に良かったんだな・・・」

圭太「でもクラスが分かれたのは仕方無えよ・・・」

アリス「・・・コノクラス、シノガイナインダケド、ドウシタライイノ・・・?」

陽子「どうしようも無いよ……」

圭太「何故片言……?」

アリスの顔が真っ青になってしまった。

陽子「おい、顔色悪いぞ? 保健室で休むか?」

アリス「そうだね……」

圭太「俺が送ってあげようか?」

アリス「大丈夫……ちよつと横になるね……」

陽子「うわ!?!」

机の上でアリスが倒れ込んだ。

圭太・陽子「しっかりしろー!!」

そこに忍達が入って来た。

忍「アリスー!」

カレン「ヨーコ! ケイタ! 遊びに来たデス!」

綾「お邪魔します。」

浩輔「あれ!?! アリスが寝転んでる!?!」

陽子「丁度良かった! アリスがさー。」

するとアリスが起き上がった。

アリス「シノー！」

元気になって忍に抱き付いた。

圭太「アリスの元気が戻ったな。」

そして綾は陽子を見ると何故か緊張が走った。

カレン「アヤヤ、アヤヤも！」

綾「え!? いいわよ！」

陽子「ん？」

その後アリスと綾はまたどよんとしてしまった。輝きを失った2人。

忍「朝の輝きが嘘のようです・・・ちよつと教室が離れちゃっただけですよ。」

浩輔「そうそう。そんなに気を落とすなよ。」

綾「ちよつとじゃないわ! この距離は日本と！」

アリス「イギリスから遠いんだよ！」

綾「アリス！」

アリス「アヤ！」

浩輔「何と・・・分かりやすい例えなんだ。」

カレン「未だ嘗てない意気投合デス。」

陽子「大袈裟だなー。」

平然と居る陽子と忍を見て2人は不機嫌になった。

綾「2人共、何時もと余計ヘラヘラしてる気がするわ！」

アリス「うんうん！」

陽子「ヘラヘラって、何時もこんな感じだよ？なあ？」

忍「はい。」

圭太「俺とお前も何時も通りだよな浩輔？」

浩輔「ああ。これが何時もの俺達さ。」

すると忍はカレンを見て更にヘラヘラする。

アリス「ほらー！」

綾「何時もより3割ましぐらいヘラヘラしてる!!」

陽子「驚きの面倒臭さ・・・ん？でもアリスは分かるけど、綾は2人も一緒だろ？良いじゃん。」

綾「陽子は離れ離れになっても寂しくないの？」

陽子「まあアリスと圭太と一緒だし。」

綾「ズルいわー!!」

怒った綾は走り去った。

カレン「アヤヤ!!」

陽子「そんなにアリスと一緒に良かったのか!？」

圭太（多分お前と一緒に良かったんじゃないのか？）

体育館で始業式。

校長「皆さんおはようございます。」

アリスは忍を見た。忍は平然としてる為、アリスはガツカリしてしまった。

烏丸先生（やっぱり、大宮さんと一緒に良かったのよね・・・あ！うさぎは寂しいと死んじゃうって言うけれど、あれって本当かしら!？）

うさぎになったアリスを想像するとゾツとしてしまった。

始業式が終わり、全校生徒がそれぞれの教室に戻る。フラフラ歩くアリスと一緒に歩

く圭太。

圭太「アリス、大丈夫か？」

烏丸先生「アリスさーん!!」

アリス「ん？」

烏丸先生「先生は、またアリスさんの担任だから甘えてくれて良いんですよ!!」

アリス「っ!?!」

圭太「先生、それフォローになつてます？」

陽子「じゃ。」

綾「ええ。」

陽子と綾は話をした後別れた。そこにアリスが戻つて来た。

アリス「ヨーコ、何話してたの？」

陽子「ん〜？」

教室の戻った綾は忍に話した。

綾「3人の事宜しくって言われたわ。」

忍「宜しくお願いします。」

カレン「宜しくデス！」

浩輔「宜しくな！」

自分の席に座った忍は前を見て微笑んだ。目の前の席がカレンだった為、金髪が目の前にあつたからである。

忍（丸で、ナイアガラ・・・）

綾「コラ。」

触ろうとした瞬間、綾が忍の頭を軽く叩いた。

忍「カレンの髪って、何でそんなに綺麗なんですか？」

カレン「そうデスカ？シノとアヤヤも髪質は似てるデス。」

綾「ストレートって事？は!!もしかしたら、髪質でクラス分けしたのかも!!」

カレン・忍「成る程。」

浩輔「それで納得するのかよ。」

その頃陽子は教室で空を見ていた。すると携帯に受信音が鳴った。メールを見る。

陽子「ん!？」

綾『陽子は私と違って犬っ毛モワモワヘアーね。』

陽子「まだ怒ってる!？」

するとアリスの呻き声が聞こえた。

陽子「しの達の所へ遊びに行く?」

アリス「ううん、大丈夫。」

圭太「本当に大丈夫か?無理するなよ?」

アリス「うん。心配掛けてごめんね。私、ヨーコとケイタと一緒に嬉しいよ!」

陽子「そう? (良かった。元気戻ったみたいだ。これからも宜しくな!」

圭太「宜しくなアリス!」

アリス「うん!宜しくね!」

机の上にくけしが置かれてあった。

陽子(うん、思ったよりダメーじ受けてる・・・)

圭太(この先が思いやられそうだな・・・)

陽子「カレンと一緒にじゃなくて平気なの?」

アリス「そしてら、同じクラスに金髪が2人って事になるよね?」



陽子「派手なクラスになりそうだな！」

圭太「そしたら忍が黙って居られないだろ？」

するとアリスは察した。自分よりカレンの方が目立ちそうになるかもって。

アリス「留学生同士は同じクラスにならないのかも。その方が良いかも！」

陽子・圭太「ん？」

そしてA組は放課後のHR。

忍「起立！礼！」

全員「さようなら！」

終わったと同時にアリスが来た。

アリス「シノ帰ろう！」

忍「早い!?!」

放課後、忍が日誌を書く。

アリス「今日は始業式だけなのに長く感じたね。」

綾「そ、そうね。」

カレン「大丈夫デスよ2人共。1年生の時間を思い出すデス。私は皆と違うクラスだったけど、寂しきなんて無かったデス！」

綾「そう言えば、カレンは違うクラスだったわね。」

陽子「常にうちの教室に居たからなく。」

浩輔「丸で家族ぐるみみたいないな感じだったなああの頃は。」

忍「終わりました。これ職員室に届けて来ますね。」

アリス「私も行く！」

2人は職員室に向かう。

忍「新しいクラスはどうですか？鳥丸先生が担任なんですよ？羨ましいです！A組の担任も素敵ですよ？」

アリス「シノは、あんまり寂しそうじゃないね・・・」

忍「え？だって、アリスは海を越えて来たんですよ？それに比べれば全然です！たったの教室1個分です！」

アリス「うん・・・うん！そうだよね！」

翌朝、アリスはご機嫌上昇していた。途中で松木さんに挨拶する。

アリス「おはようございます！」

松木さん「おはようアリスちゃん。」

忍の母「ほら勇も、大学。」

勇「うくん。」

そして勇は大学生になった。忍とアリスの部屋には、今までの思い出の写真が飾られてた。

その頃集合場所の駅では、陽子達が忍とアリスを待っていた。

アリス 「おはよー！」

カレン 「おはようゴジヤイマス！」

忍 「良い天気ですね。」

カレン 「晴れの日はテンション上がるデス！」

浩輔 「満開の晴れだ！カレン！もっとテンション上げるぞ！」

カレン 「Yes!!」

綾 「カレンは雨でも曇りでもテンションマックスよ。」

圭太 「浩輔もカレンと同じだな。」

浩輔 「そうか？」

アリス 「今日は楽しい事あるかな？」

そして7人は今日も楽しく学校へ向かう。

アリス 『1年前、シノに会いたくて日本に来た。あの時、思い切って海を越えたように、教室も超えれば良いんだよね！』

そして学校に着いた7人。だがアリスは忍の隣に座ってた。

アリス「先生、今日はA組で授業受けて良いですか？」

陽子「良い訳あるかー!!」

圭太「アリス戻って来ーい!!」

これは忍達がまだ高一の頃の話。カレンはまだ家に居た。

カレンのママ「Karen, you are going to be late  
if you don't hurry up. (カレン、のんびりしてたら遅刻する  
わよ。)」

カレン「Okey. (はい。)」

ソファアの上でカレンは漫画を読んでいた。

カレン「この漫画の主人公、格好良いデス!!」

その頃、皆はカレンを待っていた。

カレン「お待たせしまシタ!!」

遅れたカレン来た。しかし。

陽子「遅いぞー。つてどうした!?!」

カレンの顔に眼帯が。そして手には。

綾「あれは孫の手!?!」

孫の手が握られていた。

カレン「おはようゴジヤイマス!」

アリス「おはようカレン!」

忍「おはようございます。」

綾「お、おはよう・・・」

陽子「おはよう、つて物貰い?」

圭太「病院へ行くか?」

カレン「この左目が疼く時、世界は終焉を迎える!」

アリス「へえ〜!」

忍「格好良いです!」

通行人「クスツ。」

綾「カレン！後にして！」

浩輔「あれ？以前に見たこのデジャヴは？」

7人は学校に到着した。

綾「こう言うのは中二って言うのよ。」

陽子「高一だけどなー。」

浩輔「って事は、高一病か？」

圭太「何だそれ？」

アリス「これも？」

綾「徹底してるわ・・・」

カレンの左足に包帯が巻かれてあつた。

圭太「これも中二病か？」

カレン「あー、これは昨日転んで。」

陽子「紛らわしいわ！」

そして教室に移動した。

陽子「漫画の影響かー。」

カレン「このキャラは、左目に神の力を宿しているデス。」

陽子「へえ。眼帯には何の意味が？」

カレン「先の展開はこれから読むデス。まだ1巻の途中デス。」

陽子「俄かか！」

浩輔「それ俺の好きな漫画だ。今度貸してやろうか？俺最新刊まで持つてるんだ。」

カレン「本当デスか？是非お願いシマス！」

アリス「物語に影響される気持ち分かるよ。私も最近古典読んでるの。」

綾「難しいの読んでるのね？」

アリス「勉強になると思って、調べながらだから肩凝っちゃうの。」

忍「たまに肩揉みしてあげるんです。こんな風に。」



肩揉みしてる時を語る。

忍『お客さん肩凝ってますね。』

アリス『あくそこそこ。』

圭太「マツサージ師かよ。アリスが年寄りみたいな事言ってるな。」

忍「あ！そうです！アリスの撫肩の為にも、私が読み聞かせしてあげます！」

アリス「撫肩じゃないよ？」

早速古典の本を開く。

忍「どれどれ？これは難しいですね。まるで暗号のよう。か、肩が凝ってききました……」

アリス「シノ!? 一行も読んでないよ!?!」

圭太「早くも!?!」

忍「あ！瞼も下がって来ました!!まさかこれは!!」

カレン・忍・浩輔「呪われた書物!!」

陽子「意気投合すんな。」

圭太「浩輔も中二病に覚醒しやがったか。」

綾 「お話を作って読み聞かせするとか？」

忍 「あ！成る程！それなら！でも私お話とか考えた事ないです。」

陽子 「想像力があれば大丈夫じゃない？例えば・・・昔昔ある所にお婆さんがおりました。」

お婆さんを綾に見立ててる。

綾 「酷いわ!!」

陽子 「綾がモデルなんて言っていないのに!!」

カレン 「凄い想像力デス!!」

陽子 「お婆さんは川へ洗濯に。」

アリス 「あ！桃太郎！」

圭太 「おいお爺さんはどうした？」

綾 「それじゃ昔話でしょ？」

カレン 「ダメデスヨウコ、もっと妄想しないと。」

陽子 「妄想!？」

カレン 「身近な人で妄想するとか。私がヒーローとか!」

浩輔 「じゃあ俺はカレンの敵役で!」

陽子 「逆に難しいよ。浩輔は敵役で良いのかよ。」

アリス「カレン絶対、町とか壊しちゃうタイプだよね？」

カレン「え？」

綾は陽子を見る。陽子が見た瞬間逸らした。

陽子「綾？」

綾「違うわ！止めて！私の思考!!」

陽子「どんな妄想を!? あ！綾の事だから、白馬の王子様とか？」

綾「あ！そんなんじゃないわ！ロバよ！茶色の！」

陽子「ロバ？」

浩輔「何で？」

綾「陽子に白馬なんて似合わないわ。圭太の方が白馬が似合うわ。」

陽子「私なんだ。」

圭太「俺が白馬の王子かよ。」

綾「か、カレンが身近な人でって言うからよ!!」

陽子「別に良いけど。」

圭太「良いのかよ。」

綾「馬鹿く！もう!!」

忍「うくん、妄想ですか・・・知ってますか？アリスは私が作ったロボットなんです

！」

アリス「え!？」

陽子「あはは!それ面白いな！」

忍「本当です。その証拠に、アリスの背中にはスイッチが。」

浩輔「やる気スイッチが？」

陽子がアリスのカーディガンを捲って背中を見る。

アリス「ニャーニャー!!! シノ目が本気だから皆信じちゃってるよー!!!」

圭太「止めろー!!」

背中にスイッチがあるのは嘘だった。カレンが眼帯を外した。

圭太「全く忍は。」

浩輔「でもアリスの背中を見て俺興奮しちゃった・・・」

圭太「お前下手したら逮捕確定だぞ？」

忍「お話が出来ないよ、夜アリスを寝かし付けられません。」

アリス「何の話!？」

忍「あ!思い付きました！」

アリス「本当？」

カレン「どんな話デス？」

忍「ある所に、金髪の2人のお姫様がおりました。モデルは私とアリスです。」  
カレン「シノ！私は？私は？」

忍「待つて下さい。順番に話しますから。」

綾はちよつと引いてる。陽子は苦笑い。圭太は普通に聞いている。浩輔はうずうずしてる。

忍「では。2人は小さい頃から親友でした。」

そしてお話の中に。巨大な立派なお城があった。お城の後ろは海が広がっていた。お城の中では、お姫様2人が居た。モデルはアリスと忍。忍がアリスの髪を整えてる。

忍『はい。出来ましたよ。』

アリス『ありがとうシノ！お散歩行こ！』

そして2人は散歩へ行く。浜辺に着いて華麗に踊る。そしてミュージカルが始まった。

アリス『シノは本当に金髪が好きだね♪』

忍『ええ。宝物です♪アリスの宝物はなー？♪』

アリス『シノ!!♪』

忍『うふふ。』

だがそこに海賊船が現れた。

アリス『海賊!?!』

そこに海賊のカレンと穂乃花と香奈が現れた。

カレン『カレン船長と呼ぶデス! 宝物を寄越すデス♪』

忍『そんな! 金目の物なんて何処にも!』

カレン『宝物は?♪』

忍『金髪です♪』

カレン『宝物は?♪』

アリス『シノ!♪』

忍『きゃー!ー!ー!ー!!!』

そして忍が海賊に攫われてしまった。

カレン『野郎共! 船を出すデス!!』

アリス『シノ!シノ!シノ!ー!ー!ー!!』

海賊船を追い掛けるが、転んでしまった。

アリス「シノ……！」

忍「アリス！」

現実に戻って、アリスと忍が泣きながら抱き合う。

陽子「自分の考えた話で泣くな！」

カレン「シノはどうなるデス!? 海の水雲と消えマスか!？」

浩輔「やばい! この先気になる!」

綾「バッドエンド過ぎるわ!」

そしてまたお話の中。海賊船が夕日の海の上を進んでいた。

忍『どうして私を? 宝物なら他を探せばいくらでも……』

カレン『手に入りマス! 何でも手に入る。それはつまらないデス!』

そしてミュージカル再開。

カレン『世界中を旅するデス! 金銀財宝! ドキドキの毎日! でも今はドキドキしな

いー！我ら7つの海をー！支配する海賊だー！♪』

お尋ね者のカレンとその仲間達。

カレン『世界には果てがあると知ってーしまったー！！♪』

忍『果てなんかありません。世界は丸いんですよ！本で読みました！』

カレン『本の話デス！』

忍『確かめに行きませんか？まだ見た事の無い世界！きつとありますーよー♪』

カレン『あなたと一緒に見付かるかも知れない！あなたとーならー♪』

忍『シノで良いですよ。』

カレン『シノ・・・シノ！シノ！シノ！！一緒に航海をするデスー♪』

そして現実。

忍「でもその前に、手紙を書いても良いですか？私の親友に。」

アリス「シノ・・・」

途中でアリスが涙を流してた。

陽子「何だ!?この魂に語り掛けて来る喋りは・・・!」



綾「凄く引き込まれるわ・・・」

浩輔「やばい、猛烈に感動してそう・・・」

忍「3人は何の役が良いですかね？」

綾「私達も出るの!？」

浩輔「俺も!？」

陽子「綾は人魚とか？」

綾「え!？」

カレン「陽子は王子様デス！」

陽子「え!？」

アリス「うん!凄く似合ってる！」

浩輔「じゃあ俺は王子の手下で！」

忍「ではそうしましょう。コホン。カレンの海賊船が、嵐で転覆しました。」

カレン「Noooooooo!!」

またお話に戻り、カレンの海賊船が嵐で転覆してしまい、忍が海の中へ沈む。すると

人魚になった綾が忍を助けた。

忍『う……ん……ここは……うわ!? 足が付きませんか!?』

綾『大丈夫! しつかり捕まって!』

すると後ろに巨大な船があつた。

綾『あの船は……!』

その船の上に1人の人物が立っていた。

綾『もう一度、一目会いたかった! ずっと——手を伸ばせば届きそ——でも良い

の……ここから見つめるだけで——良い……♪』

忍『大好きなんですね。』

綾『ちよつと気になるだけよ。』

すると王子の陽子が綾の存在に気付いた。

陽子『もしかして君は、遭難した私を助けてくれた人だよね!』

綾『違うわ!』

陽子『ずっと思っていた! もう一度会いたいって! 思ってたよ!!』

綾『あ!!』

だがそこにカレンの海賊船が現れた。

カレン『シノを返すデース!!』

忍『カレン！』

陽子『出たな海賊!! 迎え撃て!!』

烏丸先生『はい！』

浩輔『了解です王子!!』

烏丸先生『砲撃準備!!』

浩輔『急げ!!』

船から大砲が現れた。そして海賊船からも大砲が現れた。

浩輔『撃てー!!!』

両者一斉に大砲を発射。両者が直撃するが、怯む事なく撃ち続ける。その頃忍は小型

ボートに乗ってる。

忍『カレン! 違うんです! カレン!』

綾『もう止められないわ!』

忍『どうして!?!』

綾『だって、私達に何が出来るの!?!』

すると渦巻きが発生した。更に海の中から巨大な魔女が現れた。役は勇だった。

勇『人間って愚かね!』

綾『深海の魔女!?!』

忍 『魔女のお姉ちゃん！戦いを止めたいんです！』

勇 『良いわよ？何でも叶えてあげる。ただし、あなたの大事な物と引き換え。』

忍 「私の、大事な物・・・あ！綾ちゃん！ハサミをお持ちですか!？」

綾 『え？ええ。』

忍に剣を渡す。

勇 『早くしないと皆無くなるわよ？』

忍 『アリス・・・』

その頃陽子はカレンと戦っていた。そして忍は意を決して金髪を切った。

忍 『差し上げます！戦いを止めて下さいー♪』

そして戦いが幕を閉じた。

忍 「こうして、お姫様は金髪を失い、世界は平和になったのでした。おしまい。」

こうしてお話は幕を閉じた。

アリス 「シノー！シノのお陰だよー！」

カレン 「うわーん！シノー！」

綾「私達の為にー！」

浩輔「忍に感謝しなきゃなー！」

この4人は忍のお話で泣いてる。

陽子「いや創作だから、しのじやないから。って何!？」

後ろでは生徒達が忍のお話を聞いていた。

圭太「忍凄いな。脚本家に向きそうな才能を發揮したな。」

陽子「って何感心してんだよ圭太！」

圭太「おっと！って後ろ凄いなこりゃ。」

そこに烏丸先生が歌を歌いながら来た。

烏丸先生「上がポールで下が♪あら？通して下さい。朝礼始めますよ？他のクラス

の人は戻って下さい。」

圭太「おい皆、朝礼だぞ。」

それぞれが席に座る。

アリス「ねえシノ、2人のお姫様はずっと離れ離れなの？」

忍「そんな事ないですよ。何時だって会えますし、ずっと友達です。私達みたい！」

アリス「あ．．．！」

忍「今の時代、飛行機を使えば一つ飛びです！」

アリス 「え!? 現代の話だったの!？」  
忍 「どうなんでしょうか？」

そして回想。アリスがまだイギリスに居た頃、忍が日本に帰る飛行機をずっと眺めていた。

アリス 『Japan・・・』

そしてアリスはすくすく育ち、遂に日本語の勉強を始める。

アリス 『School, School (学校、学校・・・)』

辞書を読みながら勉強してる。

アリス 『ガッコウ・・・』

そして数年経ち、アリスがエアメールを持って郵便局に足を運んだ。

アリス 『Hello。』

そして回想終了。

部屋でアリスと忍がエメールを見る。

忍「この手紙が始まりでしたね。」

アリス「そうだねー。」

忍の母「忍ー！アリスちゃん！」

忍「はい！行きましょう！」

アリス「うん！ヨーコ達もう待ってるかも！」

エアメールを置いて学校へ向かう。こうしてまた新しい日常が始まった。

『END』

# Episode 13 「はるがきたっ」

その頃忍達のクラス。カレンが雑誌を読んで目をキラキラさせていた。

カレン「アヤヤー！」

綾「ん？」

カレン「ブーン！チュー！！」

綾「え!? 何いきなり!？」

突然カレンが綾の元まで走って来てチューしようとした。

カレン「今流行りのアヒル口デス！」

綾「色々違うし、別に今流行りでもないと思うんだけど。」

穂乃花「カレンちゃん、お菓子あげる。」

カレンにクツキーをあげる穂乃花。

カレン「Oh!! ホノカ！ありがとデス！」

快く受け取る。

綾「ごめんね。カレンが貰ってばっかりで。」

穂乃花「ううん。」



カレン「1年生の時によくしてくれてたデス！」

綾「貰う事が当たり前になっちゃダメよ？」

浩輔「そうだ。カレンも松原に何かお返ししないとダメだぞ。」

穂乃花「そ、そんな、気にしなくても・・・」

カレン「Oh! そうデスね! チュー!!」

穂乃花にチューする。

綾「こらー!!」

すると担任の先生が入って来た。全員席に座る。

忍「起立!」

全員起立。

忍「礼!」

全員「おはようございます!」

忍「着席!」

全員着席する。担任の名は「久世橋朱里」。カレンは怯えていた。

久世橋先生「皆さんおはようございます。それではホームルームを始めます。」

その頃C組では、女子生徒達がアリスと会話していた。

女子生徒A 「アリスの髪って本当綺麗！」

女子生徒B 「ふわふわー！」

陽子 「おーいアリスー！」

アリス 「ん？」

陽子 「ちよつとここ教えてー？」

アリス 「うん、良いよ。それじゃあまた後でね。」

女子生徒B 「うん。また。」

陽子に勉強を教える。

アリス 「新しいクラスの皆と仲良くなれて楽しいね！」

陽子 「そっか！良かったな！」

圭太 「なら心配いらないな。」

アリス 「デモ、シノ、イナイ・・・」

陽子 「おおもう、頼むから早く慣れてくれよ・・・」

圭太「アリス元気出せよ・・・」

アリス「あ！そこ間違ってる！」

間違ってる所を指す。

陽子「あ、どうすれば良い？」

アリス「ヨーコ、九九を一の段から言える？」

陽子「アリス、ちよつとバカにしてるだろ？」

圭太「その笑顔で言われると怒りそうもないな。つてか鬼畜だな君は。」

そこに担任の烏丸先生が入って来た。

烏丸先生「はーい、朝のホームルーム始めますよー。」

全員が席に座る。

陽子「担任一緒だと学年変わった気がしないなー。」

圭太「分かる分かる。俺もそう思う。」

アリス「そう？担任が烏丸先生で嬉しいよ。」

圭太「まあそうだな。烏丸先生は生徒達の人気者だからな。」

そしてA組では古典の授業。

忍（アリスは今頃どうしてるでしょうか？そうだ！アリス、アリス！私の声が聞こえますか？アリス！）

綾（しのが大変だ！）

その頃C組では英語の授業。アリスが何かを感じた。

アリス「あ！今、シノの声が聞こえたような！」

陽子「マジで!？」

圭太「本当か!？」

アリス「うん！確かに聞こえた！」

陽子「そっか、何て言ってた？」

アリス「今日の晩御飯はグラタンですよって言ってた。」

陽子「しのじゃなくてお母さん!？」

烏丸先生「ん？」

圭太「ああ先生、お気になさらず。授業を続けてどうぞ。」

その頃綾は不安を抱いてた。

綾（3人は勉強が全然ダメだから、私がしつかり見てなくちゃ！）

そして浩輔は睡魔に襲われてた。

浩輔（ヤバイ、睡魔が俺の体を支配しようとしてる・・・いや諦めるな！睡魔との本当の戦いはこれからだ！）

すると忍は何かを見て微笑む。綾がそれを見ると。ドン引きした。寝てるカレンの髪型がツインテールになっていた。忍の仕業だ。

忍「良い感じですよ！」

今度はお団子ヘアー。

忍「これはこれで！」

これには綾は完全にドン引きした。

男性教師「では、次を九条さん。」

カレン「あ！はい！」

起きたカレンが立つ。だが寝ていた為、戸惑っている。

忍「綾ちゃん、伝言ゲームで伝えても良いでしょうか？」

綾「伝言ゲーム？」

忍「はい！」

すると忍は人差し指でカレンの背中をなぞって伝言する。

カレン「っ!?!アハハハハハハハハハハ!!!」

逆にカレンがくすぐられるかのように笑う。

浩輔「ヤバいぞこりや・・・」

綾「先生！大宮さんと私の席チェンジしても良いですか!?!」

浩輔「先生！俺からも頼みます!!」

忍「綾ちゃん!?!浩輔君!?!」

そして古典の授業が終わった。綾はカレンの後ろの席に固定し、忍が綾の後ろの席に固定した。忍は泣いている。

忍「何故・・・？」

綾「勉強出来る環境じゃなかったでしょ？」

浩輔「カレンに目が無えなお前は。」

カレン「今度こそ進級出来ないかもデス！」

忍「え!!？」

浩輔「次のテストの点数、マイナスになっても知らねえぞ？」

忍「マイナス!?!そんな事が!?!」

浩輔「圭太と綾に怒られても知らねえぞ？」

次の授業でも、忍はカレンをジッと見てる。

綾（これでようやく・・・何だか、1時間が長い・・・そう言えば、陽子とクラス離れたのって初めてだわ。あ!!何で陽子の事ばかり!!遠距離恋愛じゃあるまいし!）

それでも陽子の事で頭が一杯になってる。

そして授業が終わり、4人は急いでC組に向かう。

圭太「あ。」

アリス「!!」

陽子「ん？」

綾「アリスに会いに來ただけなんだから！勘違いしないでよー!!」

陽子「何が？」

理解が掴めてない陽子。

7人は外でお話する。

アリス「授業中、殆どシノの事考えてたよー。」

忍「離れていると余計考えてしまえますね。私達きつと今、心のシンクロ率マックスですよ！」

陽子「じゃあ、今食べたい物は？」

忍「えつと……」

アリス・忍「エビドリア！（みたらし団子！）」

アリス「あ！間違えたー、エビドリアみたらし団子添えって言おうと思ったのにー。」

忍「ありましたねー。」

綾「無理矢理……」

陽子「不味そう……」



圭太「食いたくねえ……」

浩輔「おえ……」

カレン「Oh……」

アリス「それでね、新しいクラスで自己紹介した時、皆にシノの事を紹介したよ！」

自己紹介の時。

アリス『シノはとっても素晴らしいです！』

忍「えー？ 恥ずかしいですー。」

浩輔「何で忍を紹介したんだ？」

綾「私達のクラスでもしたわ。」

忍「そうそう、カレンがいっぱい喋っちゃって、止めても聞かなくて、それで。」

浩輔「絶賛怯え中。」

カレン「反省してるデス……」

ガタガタ震えてるカレン。

アリス「カレン？」

カレン「トラに、会ったデス……」

アリス「トラ？」

忍「担任の久世橋先生に怒られちゃったんですよね。」

陽子「家庭科の先生だっけ？」

カレン「C組は烏丸先生が担任で羨ましいデス！」

綾「久世橋先生、真面目で私は好きだけど。」

浩輔「俺も久世橋先生を気に入ってるぜ。ちよつと厳しいけど、優しいしな。」

カレン「怖いデス！動物で例えるなら、まさにトラデス！生徒の何人かは、きつと既

に胃袋の中デス！」

途中で6人が怯えた。

綾「カ、カレン……」

浩輔「後ろ後ろ……」

後ろにカレンが振り向くと。

カレン「久世橋先生!？」

何時の間にか久世橋先生が立っていた。

久世橋先生「九条さん！今日提出のプリント出してないのはあなただけですよ！後居眠りが多い！制服もちゃんと着なさい派手過ぎます！長い髪は束ねる！」

カレン「で、でも可愛いデス！よね？」  
だが更に睨まれた。

カレン（食べられる!!）

陽子「あの、すみません、カレンに悪気は無いので・・・」

綾「いや100%カレンが悪いかと・・・」

カレン「（流石ヨーコ、堂々としてマス！はっ!!クマだから!?!クマとトラってどつちが強いデスカね!?) そうデス！グリズリーなら勝てる気がシマス！」

陽子「何の話だ同志社!!」

圭太 「ヒグマかよ！」

久世橋先生 「コホン、服装と授業態度気を付けて下さい。プリントは放課後まで提出する事。良いですね？」

カレン 「はい・・・」

久世橋先生はその場を歩き去った。

陽子 「良さそうな先生じゃん。」

圭太 「俺もそう思う。」

カレン 「えー!？」

綾 「カレンの事も注意してくれるし。」

カレン 「えー!？」

アリス 「うんうん。」

浩輔 「確かに良い薬になるな。」

カレン 「えー!?!?怒られるの怖いデス・・・実は、午後の家庭科も忘れ物しちゃつて・・・」

忍 「カレン。」

カレン 「ん？」

忍 「人間、忘れてしまう事はよくあります。話せばきつと、久世橋先生も分かってく

れますよ。」

カレン「シノ……！」

陽子「まあ、どつちにしても怒られると思うけどなー。」

圭太・浩輔「正論。」

カレン「Noooooooo!!!」

さっきの言葉でまた怯えてしまった。

カレン「良い事考えマシタ!!先生を尾行して弱みを握るデス!怒るに怒れない状況に

!!これで!!」

陽子「いや他にやる事あるだろ!?!」

圭太「まず忘れ物したって言いに行けよ!!」

その頃久世橋先生は廊下を歩いてた。

久世橋先生「こら、廊下を走らない。」

女子生徒「あ、はい。」

階段を降りる。気付かれないように久世橋先生を尾行する7人。

カレン「Target発見デス！」

アリス「尾行なんてやめようよー。」

忍「あ、行つてしまいますよ。」

久世橋先生は途中でゴミを拾つてゴミ箱に捨てる。

男子生徒「え!？」

階段に居る7人に驚く男子生徒。

その後廊下に貼られてるポスターを貼り直す。

カレン「弱みつてどうしたら握れるデス？」

忍「そうですねー。」

アリス「あ！」

久世橋先生「何か用ですか？」

完全にお見通しされてた。

カレン「ななな何もありますん！何もありません!!」

久世橋先生「なら良いのですが。大宮さん。」

忍「はい！」

久世橋先生「今日日直ですよね？終礼時に課題を集める事。事前に皆に伝えておいて下さい。」

忍「はい！」

すると久世橋先生が忍を睨むかのように見る。

忍「あの、その・・・成し遂げます！この命に代えても！いざ！！」

ダツシユで教室に向かう。

アリス「シノ！そっちはA組じゃなくて体育館だよー！！」

カレン「あ！待って下サーイ!!!」

アリスとカレンもダツシユして忍を追い掛ける。だが久世橋先生は何か悔しそうな表情をした。

午後の家庭科の授業。

久世橋（見てただけなのに・・・ううん！見詰められたら誰でも困るものね！でも、生徒が可愛くてついジツと見ちゃう・・・）

女子生徒「ヒイ!？」

見詰められて女子生徒が怖がる。

その後廊下を移動中。烏丸先生とアリスを見付けた。

烏丸先生「動かないで。暇にゴミが。」

アリスの暇からゴミを取り除く。

烏丸先生「はい。良いわよ。」

アリス「先生ありがとー。」

久世橋先生（同じ見てただけなのにこの違いは・・・!!）

その後の職員室。

烏丸先生「久世橋先生、何時もスーツで格好良いわ。」

久世橋先生「教師は生徒の手本にならないといけないので、だらしない服装は出来ません。」



烏丸先生「そうよね。そうよねー。ジャージはちよつとよねー。」  
ジャージを脱ごうとする。

久世橋先生「あ！烏丸先生はそのまま良いんですよ！？あの先生、生徒に好かれる為  
に何かアドバースとか無いですか？」

烏丸先生「え？」

久世橋先生「私、何時も生徒を怖がらせてしまつて、どうすれば良いかと・・・」

烏丸先生「そうねー、あ！うさ耳！あれを着けたらクラスの人気者に！可愛い！ね？  
やりましょ！」

久世橋先生「いやいや！私はそう言うの似合わないの！」

その後久世橋先生は手洗いをする。

烏丸先生『うさ耳はともかく、笑顔で接したら大丈夫ですよ。』

鏡の前で笑顔を作ろうとするが、出来なかつた。それをカレンが見ていた。

その頃アリス達は弁当を食べ終えてた。

アリス「シノは久世橋先生、どう思う？」

忍「うーん、私も居眠りが多いので、怒られないか心配で、でもちよつとお姉ちゃんに似てるかもしれない。」

陽子「勇姉に？」

アリス「分かるよ！目だよね！怒ったりからかったりするけど、目の奥には愛情で溢れてるんだよ！」

その頃勇は。

勇「へくちっ!!!」

クシャミをした。

浩輔「それはどうかと思うが。」  
そこにカレンが戻つて来た。

アリス「あ。」

忍「お帰りなさい。」

カレン「ただいまデス。」

陽子「おかえりー！」

アリス「おかえり！」

綾「どうだった？」

カレンは顔を横に振つた。

陽子「そっかー。」

カレン「でも、久世橋先生と仲良くなれる気がシマス。先生は私が、日本に来た頃に似てマス。皆と仲良くなれなかつた私に。きっと眉間のシワを伸ばそうとしてたデスねー！」

だが皆また怯えた。

綾「カ、カレン……」

カレン「あ……！」

圭太「……」

その後家庭科の授業で、カレンが忘れ物をした事を話す。

久世橋先生「九条さん！また忘れ物ですか!?全くあなたは何度言ったら！」

カレン「（大丈夫なはずデス！先生は優しい目をしたトラデス！）ドンマイ！次は忘れないデス！」

だがこれは逆効果だった。

久世橋先生「反省が足りないようですね！九条さん！」

最終的に廊下に立たされた。

カレン「Oh・・・トラはやっぱりトラでした・・・」

その後家庭科の授業が終わって、久世橋先生は、また鏡の前で笑顔を作ろうとするが、上手く出来なかった。女子トイレから出ると、後ろから、

??? 「久世橋先生。」

久世橋先生「？」

後ろに振り向くと、圭太が立っていた。

久世橋先生「香川君。」

圭太「前から思ってたんですが、先生何か悩みでもあるんですか？何時もキリツとした顔で接してますが。」

久世橋先生「え？いえ、悩みはありません・・・」

圭太「俺分かっちゃったんですよ、久世橋先生の悩みを。」

久世橋先生「え？」

圭太「この前から周りの生徒達をジツと見てる所を見て思ってたんです。きっと笑顔で接したら良いなとか思ってるかな？って。」

久世橋先生「・・・」

圭太「まあ何事も経験ですよ。人間誰しも最初から上手くない。少しずつ練習すれば良い成果を得られますよ。だから久世橋先生も頑張ってください。くれぐれも無理はないように。何か生徒が先生にアドバイスするって何かちよつと気不味いかなー？アハハ。」

久世橋先生「香川君・・・」

圭太「じゃあ久世橋先生、これで失礼します。」

その場を歩き去る。

後日、アリスは忍をこっそり観察していた。

アリス『大宮忍。出身国日本。正確は温厚。外国マニアで、将来の夢は通訳者。思考が読めず、少々謎めいた人物である。』

すると忍は壁にくっ付いた。

忍「冷た〜い。」

アリスはこっそり観察しながらノートに書く。

陽子「何やってるの?」

アリス「うわあ!?!」

カレン「とー!!」

アリス「あ!!」

カレンがアリスのノートの中身を見る。

アリス「見ちゃダメー!!」

即座に取り上げる。

陽子「しのの事を調べてるの？」

アリス「うう・・・番号!!」

陽子・綾「え!?!」

アリス「1!!」

カレン「2!!アヤヤとヨーコも！」

陽子「え!?!3!?!」

綾「4!?!」

カレン「ケイタもコースケも！」

圭太「5!?!」

浩輔「6!!」

綾「何でいきなり点呼を？」

アリス「私達、忍もといシノファンクラブの会員でしょ!?!」

陽子「入った覚ええないよ!?!」

圭太「何故俺達まで!?!」

綾「それでしのの何が知りたいの？」

アリス「・・・」

カレン「シノの事全部デス！私達皆とても仲良くなれたけど、シノだけは考えてる事

ちよつと分かりづらいデス。」

陽子「まあ確かに・・・」

浩輔「俺達でも検討が付かないな・・・」

綾「何時もにこやかだけど、実は裏では・・・」

忍『今まで騙してごめんなさい。私実は・・・悪の組織の一員だったのですよ  
!!』

陽子「格好良い!!!」

圭太「テロリストの典型だな。過激派も良い所だ。」

陽子「面白そうだな！協力するよ!!」

綾「ええ！」

カレン「それでは、シノ極秘調査開始デス!!」

6人「おー！」



こうして6人は忍を調査する事に。忍は教室に居た。アリスが問い掛ける。

アリス「Hello Shinno How are you?」

忍「あ！オーイエス！ハッピーハッピーです！」

アリス「あのね、シノつて外国好きだけど、他には好きな物つて無いの？」

忍「そうですね．．．私が好きなのは、アリスですよ！」

するとアリスはショートしてしまった。

アリス「もー！そうじゃないんだよー！嬉しいけどー！」

陽子「ダメだ！次！」

今度は綾がチャレンジ。自販機でジュースを買ってる忍に問い掛ける。

綾「しの、ちよつと良い？」

忍「はい？」

綾「何か悩んでる顔をしてるわ。私で良ければ相談に乗るけど？」

忍「そうですか？綾ちゃんこそ何か悩んでいませんか？」

綾 「え？」

忍 「クラス替えしてから元気が無いような気がして、私で良かったらお話聞きますよ？」

綾 「そうなの！聞いてくれる私の悩み!？」

陽子 「こらー！」

圭太 「忍は口説き上手のスキル持ってるのか？」

次はカレン。何故かホームズの格好で現れた。

カレン 「全く、皆不甲斐ないデス！ここは名探偵カレンに任せるデス！」  
女子トイレに忍を発見した。

カレン 「シノ！」

忍 「はい!？」

突然呼ばれてびっくりした。

カレン 「あなたの好きな柄は・・・ズバリ!!ドット柄デス!!」

忍 「水玉好きですよ？カレンが好きなのはユニオンジャック柄ですか？」

カレン 「な!?!何故それを!？」

陽子「皆知ってるよ？」

そして放課後になった。忍はゴミ捨て場でゴミを捨ててる。

陽子「えー、調査で分かった事、『好きな柄・ドット柄』『嫌いな物・強いて言えば虫。後吠える犬』。」

綾「それしか分からないなんて・・・」

浩輔「情報少ないな。」

陽子「もつと内面的な事が知りたいよね。」

カレン「シノの小さい頃にヒントが隠れてるかもデス！」

陽子「成る程ね！そう言えば昔・・・」

圭太「確か小学校の頃・・・」

小学生の頃、公園で陽子達4人が一緒に遊んでる時。忍はずっと空を見ていた。

陽子『今何考えてるか当てっこしよ?』

忍『はい!』

圭太『やるか!』

浩輔『よっしゃ!』

陽子『えーつと、お腹空いたなー!』

忍『違いますよ。』

圭太『空が青いなー!とか?』

忍『それも違いますよ。』

浩輔『良い事あれば良いなー。じゃないのか?』

忍『いいえ。今私が考えてたのは、世界平和についてです!』

3人『え?』

小学生の頃を思い出しても全く分からなかった。

陽子「あ、ダメだ・・・やっぱり私には理解出来そうにない・・・ごめん・・・」

圭太「すまん・・・俺もダメだ・・・」

アリス「諦めないでヨーコ！ケイタ！ちゃんと思い出して！まだヒントはあるはずだよー！」

綾「打つ手無しみたいね。」

カレン「残念デス、迷宮入りデスねー。」

アリス「ダメだよ!!私もつとシノの事知りたいの!!」

綾「アリス・・・」

アリス「シノと一緒に喜んだり、シノが困っていたら力になりたい！心の友に私はなりたい!!」

陽子「そこまで・・・」

カレン「アリスこの間も、もしかしたら自分と出会う前に、仲の良い別の金髪少女が居たのでは？と悩んでいたデス！」

アリス「違うよ！それとこれとは別でしょ！もうカレンったら！」

圭太「完全に浮気調査になっちまったな。」

アリス「!？」

綾 「どうしてそう思ったの？」

アリス 「・・・シノ、金髪が好きでしょ？」

部屋で金髪少女倶楽部と言う雑誌を読んでいる時。

忍 『素敵ですー！』

アリス 「よく考えてみたらね、シノとイギリスで初めて会った時。」

それは忍が初めてホームステイでアリスの家に来た時の事。

忍 『金髪！金髪少女!!』

金髪少女で興奮忍からアリスは逃げ回る。

アリス 「既に金髪が好きだったんだよ・・・」

それを思い出したアリスは泣きそうな表情になってる。

陽子 「しのは金髪が好きって言うより、外国が好きなんだよ。金髪も好きだけど。」

浩輔 「それは言えてるかもな。」

アリス 「うわああああん!!!」

カレン「シノが外国好きになった理由デスカ。」

綾「外国によりハマったのはホームステイからだと思うけど。それ以前となると……」

忍「それは、ユニオンジャックって可愛いなと思ひまして。」

全員「ん?」

アリス・陽子・綾・カレン「わあああああ!?!」

圭太「どわあああああ!?!」

浩輔「アイエエエエエ!?!」

何時の間にか忍がもう来ていた事にびっくりした。

忍「ん? お待たせしました。帰りましょう。」

7人で下校する。

忍「今日は皆が何だかコソコソしていて、私も仲間に入れて欲しかったです。」

アリス「あ！ごめんねシノ！」

カレン「極秘調査だったから！」

綾「ユニオンジャックが可愛いつて理由でホームステイまでしたの？」

忍「それもありますが、小学校の頃、駅で困ってる外国人のお婆ちゃんに出会ったのです。」

それは外国人のお婆ちゃんが忍に英語で訪ねてる時だった。

忍「でも言葉が全然分からなくて。」

するとそこに1人のお姉さんが英語ペラペラで外国人のお婆ちゃんに尋ねた。

忍「困っていた時に、英語ペラペラのお姉さんが助けて下さいました。それ以来私も言葉で人を繋ぐ人になれたらなと思ったんです。」

6人「おー!!」

陽子「何かしのらしいな！」

6人が忍に拍手する。

アリス「それで通訳者になりたいって私の家でホームステイしたんだね！」



カレン「アリス！良かったデスね！！」

アリス「うん！疑ってごめんね！シノは高空のように広い所の持ち主だね！！私の汚れた心が洗われるようだよ！感じる！感じる！感じる！マイナスイオンを！！」

カレン「空気が美味しいデス！！」

忍「どうしたんですか2人共？」

陽子「しこの事ちよつと分かったな。」

綾「ええ。しのは好きな物に正直で真っ直ぐ。何の裏表も無いのよ。」

圭太「俺も忍にちよつと見習おうかな？」

浩輔「金髪がどれ程良い物なのかを？」

圭太「馬鹿野郎。」

カレン「シノ！パーカー着てみマスか？」

忍「えー!?良いんですかカレン!?!」

カレン「私の温もり付きデス！」

アリス「もー！カレン!!」

怒ったアリスがカレンを止めようとするが避けられた。

カレン「捕まえてご覧なさいデス!!」

陽子「待てー！綾行くぞー！」

綾「えー!？」

陽子「エヘヘ!こら待てー!」

浩輔「俺も混ぜろー!」

3人がカレンを追い掛ける。だがアリスはちよつと膨れっ面になっていた。そんなアリスを忍は微笑んで見てる。

忍(でも通訳者になろうと本当に決意したのは、アリスと出会えたホームステイが切欠だったんですよ。)

アリス「ん?シノ?」

忍「うふふ。」

アリス「何?」

忍「何でもありませんよー!」

2人は走って4人の所へ向かう。

圭太「楽しい事がいっぱい起こりそうだな。」

それについて圭太も6人の所へ走った。

「END」

## E p i s o d e 1 4 「プレゼント・フォー・ユー」

職員室で鏡を見ながら髪を直す。

久世橋先生「九条さんの気安さは美德だけど、けじめは大切よね。」

そこに烏丸先生が挨拶する。

烏丸先生「おはようございます久世橋先生。」

久世橋先生「おはようございます。あ、あの烏丸先生、これ良かったら貰って下さい  
！」

カバンからクマのぬいぐるみを取り出した。しかも久世橋先生の自作。

烏丸先生「え!?!良いんですか!?!」

快く受け取る。

烏丸先生「可愛いわー！ありがとうございます！」

久世橋先生「実は、折り入ってお願いがありまして、全身を掌握する方法を教えてくださいませんか!?!」

男性教師「ええー!?!今まさにだよ！」

久世橋先生の事情を聞く烏丸先生。2人はHRへ向かう。

烏丸先生「成る程、生徒達に怖がられないようにしたいんですね。」

久世橋先生「はい・・・」

烏丸先生「気にしなくても、先生は今のままで魅力的ですよ?」

久世橋先生「いえ、めんども変わったし新しい自分を目指します! (今年こそ好かれる先生に! ん?)」

ベランダに穂乃花と香奈を見付けた。

久世橋先生(うちのクラスの松原さんと日暮さん。朝礼始まりますよ?)

ベランダでは穂乃花と香奈が会話していた。

穂乃花「ちゃんとパンパンしないとダメだよ?」

香奈「うわ!」

穂乃花「ん?」

香奈が怯えた。久世橋先生が怖い顔で睨んでいた。穂乃花も見て怖がった。怒らせたと思いい顔を下げる。これには久世橋先生もショックした。

久世橋先生(また、どうして・・・?)

烏丸先生「先生？」

その後のA組。

久世橋先生「それでは進路希望用紙を回収します。後ろから前に回して下さい。（生徒達からしたら睨んでるように見えたのかも・・・いつそサングラスを掛けて。）」

どうやら自覚はしてゐらしい。

久世橋先生（いやそれはもつと怖い・・・ん？）

するとカレンと目が合った。するとカレンは久世橋先生に向かって天使のような笑顔を見せた。

久世橋先生（九条さん良い笑顔!!私も何か答えないと!!）

頑張つて笑顔で返そうとするが、また睨む顔になってしまい、全員怯えてしまつてる。綾（カレンがまた何か!?!）

忍「ん？」

浩輔（久世橋先生から不気味なオーラが・・・）

その後HRが終わり、廊下を歩きながら落ち込む。

久世橋先生（またやってしまった・・・）

烏丸先生「凹みモードですか？」

久世橋先生「先生。」

烏丸先生「そう言う時は、可愛い物をギョツとするんです！」

久世橋先生「可愛い物？」

アリス「烏丸先生、忘れ物です。」

そこにアリスが忘れ物を届けてくれた。

烏丸先生「あら！ありがとうアリスさん。ちよつと良い？」

するとアリスの後ろに回って、後ろからギョツとした。

烏丸先生「ギュー。」

アリス「え!?! な、何!?!」

久世橋先生（最も容易く!?! 神ですか!?!）

その後アリスは烏丸先生から解放されて戻って来た。

陽子「おかえりー。」

圭太「ん？どうしたアリス？何か寝れてるぞ？」

アリス「烏丸先生にギューつとされたよ・・・」

陽子「そうかそうかー！ギューっ!!」

今度は陽子がアリスをギユツとする。

アリス「何なのー!？」

陽子「いやなんとなくー。」

アリス「なんとなくなのー!？」

圭太「おい陽子やめろ、アリスが困ってるだろ。」

その光景を4人がこっさり見ていた。

忍「困ってるアリス可愛いです!!」

浩輔「忍の思考が全く分んねえ。」

カレン「アヤヤ！アヤヤも！」

すると綾は決心して2人に近付く。

アリス「ヨーコってばー！」

陽子はまだアリスをギユツとしてる。

3人「ん？」

綾は恐る恐る近付く。陽子は怖がってる。だが綾はアリスをギュツとした。

アリス「ア、アヤまで……！」

陽子「アハハ！」

アリス「もう！ケイタ助けてよー!!」

綾から逃げ出して圭太に抱き付いた。圭太はアリスを撫でる。

圭太「おいアリス、こっちが恥ずかしいんだけど……」

アリス「シノー！やつと会えたー！」

忍「アリスー！」

2人は抱き合う。

陽子「まだ朝礼しか終わってないぞ？」

カレン「ヨーコとケイタも図書室行きますか？」

綾「本を返に行くだけだけど。」

陽子「良いよー。」



図書室。忍はラプンツェルの本を見て興奮する。

忍「金髪……！」

陽子「洗うの大変そうだなー。」

浩輔「それは言えてるな。何時間洗うのか想像するけど。」

アリス「カレン、ゴマを擦るって日本語知ってる？人のご機嫌を取って気に入られようとする。」

するとカレンは握るジェスチャーをする。

アリス「そう！それだよ！」

カレン「胡麻和え、ゴマだれ、ゴマアイス！日本人はゴマが大好きデス！」

アリス「ゴマは体に良いしね！」

カレン・アリス「ゴマかー。」

綾「2人共勉強熱心ね。」

圭太「ゴマに興味を持ち始めたな。」

アリス「そう言えばカレンは最近久世橋先生と仲良くなるうと頑張ってるよね？」

カレン「はい！仲良くなりたいたいと思ってマス！そうだ！日本人が大好きなゴマをプレゼントしましょう！きつと喜ぶデス！」

アリス「まさに胡麻播りだね！」

そして職員室に居る久世橋先生にゴマふりかけを差し出した。

カレン「どうぞ！食べて下サイ！」

だが久世橋先生は理解出来てない。

久世橋先生「ど、どうもありがとう九条さん・・・」

またカレンの笑顔を見た。久世橋先生は悔しがつていた。

烏丸先生「コーヒーをどうぞ。」

久世橋先生「烏丸先生。」

烏丸先生「はい？」

久世橋先生「私、生徒の気持ちが分からないんです・・・」

その頃ベランダに7人が居た。

忍「今度のお休みの日に、私の家でティーパーティーを開催します！」

5人「パーティー？」

アリス「アフタヌーンティーだよ。シノのマイブームなの。」

忍「アフタヌーンティーは、夕方4時頃に開くお茶会で、19世紀半ば、イギリス貴族の女性達の間で社交を目的として始まったそうです。」

綾「イギリスと言ったら紅茶よね。」

陽子「でもハマるの遅くない？」

忍「実はそこまで紅茶が盛んだとは知らなくて。だって……アリスがあんまり飲まないから!!」

圭太「そこかよ！」

アリス「紅茶も好きだけど？」

陽子「アフタヌーンティーってお茶を飲むだけ？」

綾「陽子。」

陽子「いや、お菓子もあると良いなって。」

浩輔「お前お菓子食べたいだけだろ？」

忍「勿論です！でも折角なので本格的にしたいなと。」

カレン「何するデス？」

忍「お菓子作りです!!」

5人「おー!!」

綾「良いわね! 定番はスコーンだけど!」

カレン「はいはい! クッキー食べたいデス!!」

忍「じゃあそれも作りましょう!」

カレン「やったー! 楽しみデス!」

アリス「両方作るの?」

陽子「大丈夫か? 欲張り過ぎじゃない?」

忍「欲望には充実に! 私このお茶会に人生賭けてるんです!!」

陽子・綾・圭太・浩輔「何故そこまで!?!」

そして昼。職員室で久世橋先生が弁当を食べる。さつきカレンから貰ったゴマのふりかけを開ける。

久世橋先生「良い香り。」

ゴマをご飯にふりかけて頂く。

烏丸先生「ゴマ美味しいですね。すりゴマはもつと美味しい!」

久世橋先生「そうですね。炒りゴマよりカロリーは高いですが、私も、ん？先生？」  
突然烏丸先生がシヨックした。左手には牛丼を持っていた。

烏丸先生「か、カロリー・・・？」

休日の日、4人が忍の家にお邪魔する。忍はメイド服を着ていた。

忍「ようこそいらっしやいました！」

陽子「招かれました！」

綾「お邪魔します。」

浩輔「どうも招かれざる客です！」

圭太「お前歓迎されてねえのかよ。」

アリス「もう準備してあるよ！」

リビングに行くと、調理器具が準備してあった。

忍「さあ！早速始めましょう！」

綾「その服でやるの？汚れちゃうわよ？」

忍「メイドは常にメイド服です！大丈夫。ちゃんと気を付けますから。」

その時オレンジジュースが溢れてメイド服が汚れてしまった。

陽子「言わんこっちゃない！」

仕方無く着替える。

アリス「シミにならなくて良かったね。」

忍「はい・・・ありがとうございます。」

アリスが忍にエプロンを着せる。

陽子「そう言やカレンは？」

圭太「何時もなら早く来るはずだが。」

アリス「ちよつと遅れるって。」

忍「なんとケーキスタンドをもって来てくれるそうです！」

浩輔「マジか！」

陽子「おー！」

綾「本格的ね！」

するとインターホンが鳴った。カレンが来たようだ。

忍「カレンようこそ！え!？」

忍が迎えに行つたが、何かを見て驚いた。

カレン「お邪魔するデス！」

何故ならカレンが持つて来たのはケーキスタンドではなく・・・

ラーメンの出前等に使う岡持ちだった。

忍「カレン！それケーキスタンドじゃないです！岡持ちですよ！！」

カレン「重かったので似てるの持つて来たデス。」

岡持ちの嵌め込み式の蓋を開ける。

カレン「ここに置くデス！」

忍「似てない！！似ても似つかないですー！」

結局忍が泣いてしまった。

陽子「まあまあ置ければ何でも良いよ。」

アリス「気を取り直してお菓子作り始めよう！」

陽子「料理経験豊富なのは綾と圭太だけだから頼りにしてるよ？」

圭太「そうだな。まあ宜しく頼む。」

綾「私もお菓子はあまり作った事ないけど。」

忍「宜しくお願いします！」

5人「宜しくお願いします!!」

綾「やめて！プレッシャーに弱いんだから!!」

圭太「綾。」

綾「ん？」

圭太「俺お菓子作りも得意から分からなかったら俺に聞けよ？」

綾「わ、分かったわ。」

こうしてクッキー作りが始まった。



綾「久世橋先生はやっぱり料理が得意なのかしら？」

カレン「きつと上手デス！家庭科の先生ですし！」

そこに勇が様子を見に来た。

勇「何作ってるの？」

忍「お姉ちゃん！」

陽子「勇姉！」

圭太「姉貴！」

カレン「クツキーとスコーンを作ってるデス！」

綾「今日はオフですか？」

勇「そうよ。」

陽子「そうだ！勇姉に手伝ってもらうのは？」

綾「そうね！私達だけじゃ不安だわ！」

浩輔「勇さん、手伝ってくれるか？」

勇「良いわよ。因みに得意料理は目玉焼き。真っ黒の。」

全員が不安を持った。

陽子「やっぱ良いです。」

勇「出来たら呼んでねー。」

お菓子作りが始まって数分が経った。陽子が泡立器で生地を混ぜる。

陽子「私こう言う繊細な作業はちよつと・・・うわ!!」

綾「うわ!?!」

すると生地が綾に向かって飛び散った。

陽子「ああごめん!!」

すると今度は小麦粉が綾に向かって飛んでった。だがその時間一髪で浩輔がキヤツチした。

綾「こ、浩輔・・・」

浩輔「危なかった・・・」

圭太「陽子貸せ。俺がやる。」

今度は圭太が泡立器で器用に混ぜる。

圭太「よし出来た。」

陽子「おー!上手いな圭太は!」

圭太「陽子お前少しはお菓子作り慣らした方が良いぞ。」

時間が過ぎて夕方になった。

アリス「日が落ちて来たよ！どうしよう！」

陽子「お菓子作るのに何時間掛かってるんだー。」

カレン「もうアフタヌーンティーじゃないデスねー。」

忍「そんな!?アツサム!!ダージリン!!アールグレイ!!」

綾「しの!!落ち着いて!!」

浩輔「紅茶の名前を言いながら狂ってる!？」

忍「皆さん!もつとまきでお願いします!!まだ間に合います!!」

陽子「忙しいお茶会だな!!」

ようやく生地を伸ばし終えたアリス。

アリス「クッキーは後型を抜いて焼くだけ!」

綾「型色々持って来たわよ。」

型は全部ハートだった。

アリス「ハート型ばかりだ!」

カレン「可愛いけど全部同じデス!」

そして型抜きする。

アリス「あ！カレンのゴマが入ってる！」

カレン「ゴマクッキーデス！」

浩輔「ゴマに拘り過ぎだな。」

陽子（ハートが、量産されていく・・・ハートが・・・）

すると陽子が棒を持って構える。だがしかし。圭太が陽子の腕を掴んだ。

陽子「あれ？圭太？」

圭太「陽子お前、ハートを割ろうとしてたろ？」

そして全て型を抜いて、電子レンジで焼く。その間に食器などを準備する。そして

クッキーが焼きあがった。

5人「うわー!!」

忍「出来ましたー!!」

カレン「美味しそうデス!!」

陽子「上手く出来たー!!」

浩輔「だがお前ら、外はもう夜だぞ。」

忍「要は気分です！では！お茶を淹れましょう！」

勇「もう夜ご飯よ。お茶会は明日にしなさい。」

忍の夢は潰えた。

仕方無く翌日。シートの上でお茶会をする事になった。

カレン「クッキーサクサクデス！」

綾「甘さも丁度良いわ！」

忍「何だか雰囲気が出無いです・・・」

アリス「そう？皆で食べれば何処でも楽しいよ！」

忍「アリス・・・！そうですね！でも今度はアリスの家でやりましょうね！日取りは何時にしますか!？」

5人（やる気満々だよ・・・）

カレン「ご馳走様デス！」

綾「もう良いの？」

カレン「はい！お裾分けに行くデス！」

圭太「そうだ！俺もお裾分けに行く。」

そしてカレンと圭太はお裾分けに出掛ける。

カレン「どうぞー！」

圭太「これ良かったら食べてくれ。」

カレン「何時もお菓子ありがとうゴジヤイマス！」

最初は穂乃花と香奈に差し上げる。

穂乃花「こんなに良いの？」

香奈「ありがとうー！」

カレン「どうぞー！」

圭太「じゃあな。」

次は職員室に居る久世橋先生に差し出す。

カレン「どうぞー！」

久世橋先生「え？私に？」

カレン「昨日皆で作ったクツキーデス！先生食べて下サイ！」

久世橋先生「あ、ありがとう・・・」

カレン「どう致しましてー！」

久世橋先生「あ！またゴマ!?これは一体、何かを暗示しているの・・・?」  
クツキーにゴマがくっ付いてた。

烏丸先生「私、分かっちゃいました。」

久世橋先生「え!?それは!」

烏丸先生「きつと今、ゴマが女子高生の間でブームなんです！」

久世橋先生「え?」

烏丸先生「流行に敏感になる事が、生徒の会話に付いて行くコツですよ?」

久世橋先生「成る程、勉強になります!」

???「いやそれは違うと想いますが・・・」

烏丸先生「あら香川君。どうしました?」

圭太「烏丸先生、これクツキーのお裾分けです。良かったらどうぞ。」

烏丸先生「まあ！ありがとうー！」

快くクツキーを受け取った。

圭太「久世橋先生。」

久世橋先生「？」

圭太「どうですか？笑顔の練習は。」

久世橋先生「それが、上手いかななくて・・・」

圭太「まあその内上手くなれますよ。自身持つて頑張つて下さい。あ！でも、その内身近な人物が接してくれるかもしれません。」

久世橋先生「身近な人？」

圭太「もうそこに居ますよ。では失礼しました。」

その後、烏丸先生がA組に入る。

烏丸先生「開けゴマー。」

だが生徒全員ドン引きした。

烏丸先生「えー皆さん、オープンセサミー。」

すると忍が明るくなった。

忍「オープンセサミー!!」

通じ合ったこの2人。



その後の職員室。

烏丸先生「今日の家庭科は、法被の作り方ですか！面白そうですね！」

久世橋先生「でも実習は緊張します。」

烏丸先生「大丈夫！勢いがあれば乗り切れますよ！例えば、法被だけにハッピー!! 第一声はこれで間違いありません！」

久世橋先生「で、でも……(勢いしかないです先生……)」

烏丸先生「きつと皆さんドツカンドツカンですよ！」

その頃、綾はメジャーを使って陽子の背中を測ってる。

アリス「法被楽しみ！シノ達は5時間目家庭科だよね！」

忍「はい！アリスは明日ですね！」

アリス「うん！早く作りたいな！」

忍「綾ちゃん、サイズはフリーなので寸法測らなくても大丈夫ですよ？」

綾「わ、分かっているわよ、陽子の1年の成長を測ってただけよ。」

陽子「つでどうだった？」

綾「・・・元気があつて宜しい!!」

陽子「寸法関係ないんだ・・・」

圭太「何故測つたんだ？」

陽子「私は調理実習が良かったな。」

浩輔「俺も陽子に同意だ。」

忍「私はお裁縫にハマっているので嬉しいです！」

陽子「マイブーム多いな。」

すると忍はメイドのカチューシャを着けた。

忍「可愛い服や衣はやっぱりお高いので、作れそうな物は自分で作ってるんです！」

綾「え!? 凄いわ!!」

陽子「これ自作なのか!? 意外な特技・・・」

浩輔「凄い! 此奴は格好良いな！」

忍が自作した水玉のスカート。

圭太「忍は昔からそう言うの得意なんだよなあ。」

陽子「これも外国好きの影響なんだろうなー。」

綾「この熱意があれば、何時か本当に通訳者になっちゃうかもしれないわねー。」  
スカートの丈を少し上げる。

浩輔「多分忍ならなれるかもな。」

スカートの袖を覗く浩輔。

圭太「やめんかアホ！」

浩輔「ボフア!？」

圭太が浩輔の尻にキックした。

アリス「そして最終的には世界の偉人に!!」

壱万円に忍の顔。

綾「えー!？」

陽子「しの凄えー!!」

圭太「偉人になれるのは遠い先だな。」

そして5時間目。久世橋先生が被服室前で心の準備をしていた。

久世橋先生「(烏丸先生のアドバイスだもの。信じてみようー) ハッピー、ハッピー……」

すると後ろからカレンが来た。

カレン「久世橋先生ー!! 今日 of 授業凄く楽しみデス!! 法被だけにHAPPYデス!! なんかちゃってー。」

久世橋先生「九条さん!!」

カレン「な、何で怒られたデス!?!」

何故怒られたか分からないカレンだった。

そして授業が始まった。

久世橋先生「それじゃ分からない所があったら聞くように。それから被服室にはミシンもありますし、危険な物が沢山あります。巫山戯たらどうなるか分かっていますね?」

糸切りハサミで脅す。皆怖がっていた。

久世橋先生「それでは始め! (皆ケガには注意してね!)」

さっきのは脅しではなくケガしないようにと言う訳だった。その後、誰も久世橋先生

に聞きに行く生徒は誰もいなかった。

久世橋先生（皆！もつと先生に聞いてくれても良いんですよ！）

忍「先生ー！」

久世橋先生「はい!?何処が分からない？」

そこに忍が来た。

忍「出来ました！」

久世橋先生「え!?!」

なんと短時間で法被を仕上げた忍。久世橋先生が忍の肩に手を置く。

久世橋先生「大宮さん!!あなたは本当に大宮さんなの!?!」

完成した法被を拝見する。

久世橋先生「素晴らしいわ!縫い目も既製品のように正確・・・丁寧に仕上げてくれ

て先生も嬉しい・・・どうしました？」

嬉しそうな表情をしてる忍。

忍「先生が褒めてくれて嬉しいんです！」

久世橋先生「そ、そんな・・・」

2人は背中合わせで恥ずかしがっていた。カレンは笑って見ていた。

その頃綾は不安な顔をしていた。

忍「綾ちゃん、調子はどうですか？」

綾「ミシンが曲がっちゃうわ・・・！」

忍「もつとダダダダー！つとやった方が良いですよ？」

綾「で、でも！針が怖いのだ！」

ミシンの針に怖がっていた。

忍「大丈夫！」

カレン「大丈夫デス！清水の舞台から飛び降りる勢いで!!」

浩輔「精神一到!!緊禪一番!!有言実行だ綾!!」

綾「そんな覚悟が必要なのだ!」

その後予鈴が鳴った。

久世橋先生「10分休憩ですよー。ん？（九条さん？休み時間なのにな？）」

カレンは休み時間中に何かを刺繍している。

忍「カレン、何作ってるんですか？」

カレン「余った布でマスコット作ってるデス。」

浩輔「へえ。それは楽しみだな。」

久世橋先生（C組の子かしら？）

その頃C組では、アリスがベールを頭に乗せていた。

陽子「アリス、その頭の何？」

圭太「それってベールか？」

アリス「うん！花嫁さんのベール！シノが作ってくれたんだ！私には、白い服が似合うから何時かウエディングドレスを着せたいって！」

陽子「へえ。日本では結婚前にウエディングドレスを着ると婚期が遅れるって言うけど。外国ではどうなの？」

するとアリスが固まった。

圭太「イギリスだと、基本的に結婚前夜、カップル達は別々の場所で時間を過ごすんだ。と言うのも、結婚式の前に花嫁のウエディングドレス姿を見てしまうと不幸になる

と言う言い伝えがあるってな。」

知ってしまったアリスはベールを忍に返した。

忍「え？ いらぬ？ アリスに似合うと思っただんですけど・・・」

そして引き続き法被作り。

久世橋先生「九条さん。」

カレン「はい？」

久世橋先生「分からない所があったら相談OKです・・・よ？」

カレン「ありがとうゴジヤイマス!!でも、シノに聞いたら出来ました!!」

綾「私も出来ました！」

浩輔「俺も出来ました！」

カレンの法被には『カレン 参上』。綾の法被には『太陽』。浩輔の法被には『嵐』の文字の刺繍が入ってた。

久世橋先生「その文字は？」

カレン・浩輔「個性デス!!」



そして家庭科の授業が終わった。

久世橋先生「終わらなかつた人は次の授業まで完成させて持つて来るように。それでは。(今日もあまり上手く出来なかつた……)」

被服室から出たその時。カレンが追い掛けて来た。

カレン「久世橋先生！これ先生にあげるデス！」

ライオンのマスコットを久世橋先生に差し出す。

久世橋先生「あ、さつき作つてた。九条さん、この前から色々くれるけど、私は何か欲しい訳じゃ……」

カレン「先生は笑顔がとっても素敵!!」

久世橋先生「え？」

カレン「もつと笑つて欲しいデス！」

久世橋先生「九条さん……」

カレンが久世橋先生に天使のような笑顔を見せた。だが久世橋先生は何か違和感を感じてた。

久世橋先生（気のせいかしら？何かが見えるような・・・）  
それは鞭と肉を持つてるカレンとトラが浮かんで来た。  
久世橋先生（そう言えば、この前香川君が・・・）  
以前に圭太が久世橋先生に言った事を思い出した。

圭太『身近な人物が接してくれますよ。』

身近な人物がカレンだと確信した久世橋先生。

久世橋先生「じゃあ貰います。」

カレン「はい!!」

マスコットを受け取ったその瞬間。久世橋先生が笑った。

久世橋先生「ありがとう。」

遂に自然に笑顔が出来た。

夕方の職員室。

綾「失礼しました。」

職員室から綾が出た。陽子が待っていた。

綾「お待たせ。」

陽子「皆昇降口で待つてゐるって。」

歩いてる途中に、烏丸先生と久世橋先生に会った。

陽子「あ！からすちゃん！クツシーちゃんさよならー！」

綾「先生に馴れ馴れしいわよ!!」

陽子「私はあだ名で呼びたいタイプなんだよー。」

久世橋先生「別にケジメさえあれば好き呼んでもらっても構わないけど。」

そう言つて通り過ぎた。

烏丸先生「久世橋先生ー!!また明日ね。」

久世橋先生を追い掛ける。

階段を上って職員室へ向かう。

久世橋先生「何か、クツシーってクツキーみたいじゃないですか？良いんですけど、呼びやすいしあだ名って自分で決めるものではないですし……」

すると烏丸先生が笑った。

久世橋先生「ちよつともう！何ですか先生!?!」

烏丸先生「ご、ごめんなさい……」

久世橋先生「わ、私は別にですわね!!」

そして翌朝。

女子生徒「おはようございまーす!」

久世橋先生「おはようございます。」

笑顔で挨拶した。

女子生徒A「最近久世橋先生、明るくなって話しやすいよね!」

女子生徒B「笑うと可愛い!」

アリス「久世橋先生の事、前より分かって来たよ!」

忍「はい！鳥丸先生と同じくらい優しいです！」

カレン「皆やつと気付いたようで私も嬉しいデス！」

圭太「俺も同じく嬉しいぜ！」

アリス「何でカレンとケイタが偉そうなの!？」

浩輔「圭太のあの一面初めて見た。」

カレン「先生と私はもう親友だから一緒に踊る事も出来マス！」

綾「やめた方が・・・」

カレン「見ていて下サイ！」

圭太「俺も行くぜ！」

久世橋先生の方へ走る2人。

カレン「久世橋先生ー！」

圭太「おはようございます！」

カレン「一緒に踊りまシヨウ！」

久世橋先生「え!?!そんな事より宿題は？」

カレン「え?えーつと・・・」

久世橋先生「宿題はやって来たんですか？」

圭太（オーラがドス黒い・・・!!）

カレン「うわああああ!!!」

久世橋先生「待ちなさい!!」

必死に久世橋先生から逃げる。

綾「本当に仲良くなったの？」

陽子「あれだよ!手のかかる生徒程可愛いって奴!!」

すると久世橋先生は圭太に向かって笑顔をした。それを返すように圭太も笑顔をした。

Q. 動物で例えるなら。

烏丸先生「カレンさんは猫で、小路さんは黒うさちゃん、香川君はドーベルマンで、

白川君はカワウソかしら？」

陽子「からすちゃん!私は？」

烏丸先生「猪熊さんは、うーん……」

綾「陽子は何でも食べるから……掃除機？」

陽子「せめて生き物で！」

浩輔 「何でも食べる生き物・・・ヨッシー？」

圭太 「もしくはカービィ。」

陽子 「それゲームのキャラじゃない!!」

烏丸先生 「成る程！」

陽子 「からすちゃん納得しないで!!」

Q・ 陽子を動物に例えると。

綾の回答 『掃除機』

浩輔の回答 『ヨッシー』

圭太の回答 『カービィ』

「END」

## Episode 14・5 「圭太とアリス」

ある日、アリスは圭太の部屋で勉強していた。

圭太「ここは・・・そうかこれか。」

アリス「うくん・・・」

何故アリスが圭太の部屋に居るかと言うと、数分前に遡り、放課後の教室でアリスが圭太に尋ねた。

圭太『え？アリスが俺の家に？』

アリス『うん。そうなの。』

圭太『でも何で？』

アリス『あのね、今日の宿題で分からない所がいっぱいあるの。』

圭太『それだったら綾とかに頼めば良いと思うが。』

アリス『でもアヤは用事があるって言ってた。ダメかな？』



キラキラした目で圭太を見る。

圭太『そうか・・・(つてかその眼差し卑怯だろ・・・でも勉強を頑張るアリスの為に色々教えてやるか。) よし!じゃあ俺の家に来い!』

アリス『え!?!良いの!?!』

圭太『分からない部分があつたら何でも教えてやる。』

アリス『やったー!』

だがそれを聞いた忍は泣いてた。

忍『圭太君、まさかアリスを自分の物にしようとしてませんか!?!』

圭太『お前それ、自分の思い込みだろ?心配するな。アリスを無事に送ってやるから。』

その後アリスは1回忍に帰宅して荷物を用意した。外で待つてる圭太と一緒に圭太の家にお邪魔する。

圭太の母『いらつしやい。圭太、この子が?』

圭太『ああ。去年イギリスから編入したアリス・カータレットだ。』

アリス『初めまして。アリス・カータレットです。』

圭太の母『あら可愛い子ね。圭太の妹になっても可笑しく無いわね。』  
圭太『おい母さん余計な事言うな。』

その後2人は圭太の部屋に入る。圭太がケーキとジュースを持って来た。

圭太『アリス、ショートケーキ食べるか？俺の手作りだけど。』

アリス『ケイタの手作りショートケーキ？』

圭太『この前母さんが留守中に作ってみたんだ。』

手作りショートケーキを食べる。

アリス『美味しい〜！凄く美味しいよ！』

圭太『そうか？良かった。』

アリス『ケイタは将来良いパパになれるよ！』

圭太『そこまで褒める？』

そして現在に戻る。アリスはお泊まりで圭太の家に招かれたのだった。

アリス「ケイタ、ここ分らないんだけど。」  
分らない所を圭太に見せる。

圭太「ここか。ここはあの公式に当てはめれば完璧だ。」

アリス「あ！本当だ！凄い！ケイタって教え方上手だね！」

圭太「褒められると何か恥ずかしいな。」

その後も宿題する2人。

そして数分後。

アリス「やったー！終わったー！」

圭太「よく頑張ったなアリス。」

アリス「ケイタの教え方のお陰だよー！」

圭太「正直アリスは忍より発育良いかもな。それに、他の子を招き入れるの初めてなんだ。」

アリス「え？シノ達は来た事ないの？」

圭太「そうじゃなんだ。忍や陽子や綾、それに浩輔以外の子を招き入れたのが初めて

と言う意味だ。」

アリス「あ！そう言う事ね！」

するとそこに圭太の母が部屋に入って来た。

圭太の母「圭太ー、アリスちゃん、ご飯出来たわよー。」

圭太「はーい。アリス行こうぜ。」

アリス「うん。」

リビングで夕ご飯を食べる3人。今日のメニューはエビチリと麻婆豆腐と卵焼きと煮卵。

アリス「美味しい〜！」

圭太の母「沢山食べてねアリスちゃん。」

アリス「ありがとうございます。ねえ圭太、パパは居ないの？」

圭太「俺母子家庭なんだ。」

アリス「ぼしかてい？」

圭太「簡単に言えば、父親が居なくて母親しか居ない子供の事だよ。」

アリス「そうなんだ。」

圭太の母「でも息子の圭太が居るだけで私幸せなのよ！」

圭太「母さん、少しテンション下げろよ。」

圭太の母「でも圭太、可愛いクラスメイトを持って良かったね。こうして見るとまるで圭太の妹みたいだね。」

圭太「いや別に妹じゃないけど。」

圭太の母「ねえアリスちゃん、圭太に向かってお兄ちゃんって言うってみて？」

アリス「え？」

圭太「いや話聞けよ。」

アリス「えつと……お兄ちゃん？」

すると圭太がドキツとして固まった。

圭太「アリス……それはちよつと……」

アリス「ケイタお兄ちゃん！」

圭太「アリスやめてくれ……!! つかアリス！何で話に乗ったの？」

アリス「ごめんね。」

圭太の母「そうだわ圭太！私さつきこれ作ってみたんだけど食べてみて？美味しいよ

？」

皿の上にプルプルした餅らしき物が乗ってあった。

圭太「母さんこれ、肉圓（バーワン）か？」

圭太の母「よく分かったね。その通りよ。」

圭太「中身は何だこれ？」

圭太の母「ひき肉とタケノコとニンニクと生姜よ？」

圭太「ほほ肉まんと同じ具か。まあ食べてみるか。」

肉圓（バーワン）を食べる。

圭太「何これ美味!？」

圭太の母「本当!?!良かったわ。」

その後の夜。圭太の部屋では寝る準備に入ってた。

圭太「いや、明日から土日か。にしても母さんの野郎、俺を弄びやがって。肉圓

（バーワン）は美味かったけど。」

アリス「でもケイタのママ凄く面白いね。」

圭太「母さんは元々ああ言うテンションだからな。」

??? 「ミヤア。」

圭太 「ん？」

ドアの向こうから猫の鳴き声が聞こえた。

アリス 「何？」

圭太 「彼奴か。」

ドアを開けると、小さな白い子猫が居た。すると圭太の方へ歩き、すりすりした。

圭太 「お前かミミー。」

ミミー 「ミヤア。」

圭太がミミーを持つ。ミミーが圭太の肩に乗って頬をすりすりする。

アリス 「子猫？」

圭太 「ああ。俺のペットのミミーだ。種類はマンチカンで、チャームポイントは短

足。」

アリス 「凄く可愛いね！」

圭太 「アリス、モフモフしてみるか？此奴人懐っこい奴だからさ。」

アリス 「良いの？」

圭太 「ああ。ミミー行つて来い。」

ミミー 「ミヤア。」

圭太「おっと。」

するとミミーがジャンプしてアリスの肩に乗って頬すりした。アリスは喜んだ。

アリス「あはは可愛い！ケイタもペット飼ってたんだね。」

圭太「母さんが凄く猫好きだからな。数週間前に調子乗って飼いましたって言った。そのお陰で俺の猫好きが高まったな。」

アリス「本当にケイタのママ凄く面白いね。」

圭太「まあ、でもまあ言う母さんは嫌いじゃないな。さて、そろそろ寝るか。ミミーも一緒に寝るか。」

部屋の電気を消して布団に入る。ミミーはアリスの布団の中に入った。

アリス「今日までありがとうねケイタ。」

圭太「いえいえ。楽しんでくれて良かったよ。」

アリス「また今度来ても良い？」

圭太「歓迎するよ。特に母さんとミミーがテンション上がって歓迎するかもね。ミミーすっかりアリスに懐いてしまってたな。」

ミミー「ミヤア。」



アリス「うん。おやすみケイタ。」

圭太「ああ。おやすみ。」

翌朝。圭太がアリスを忍の家まで送った。

アリス「じゃあねケイタ！また月曜ね！」

圭太「ああ。じゃあな！」

忍の家に帰宅したアリス。圭太は家に戻って行く。

圭太「帰ってゆっくりしようかな？」

「END」

# Episode 15 「あなたがとってもまぶしくて」

アリスとカレンは、何故嘘を言ったのか綾に事情を話した。

綾 「エイプリルフル？」

カレン 「エイプリルアヤヤー！」

陽子 「もう新学期が始まってるのに？」

綾 「4月1日なんて随分前じゃない！びっくりさせないで！」

アリス 「だから、エイプリルフルじゃないよ。」

カレン 「エイプリルフルごっこデス！」

綾 「ごっこ？」

カレン 「4月1日に十分嘘を付けなかったので今やりたいのデス！」

忍 「イギリスのエイプリルフルは盛り上がるそうですよ！新聞に嘘のニュースが載ったり！」

アリス 「イギリス人はジョーク大好きなんだよー！」

そして空想のイギリスの中。戸惑うメイド姿の忍。

忍『どうしましょう！どうしましょう！』

カレン『オホン。お嬢さん何かお困りかな〜？』

紳士姿のカレンが忍に尋ねる。

忍『時計を落としてしまつて、今何時でしょうか？』

カレン『オホホ！それならほーら！』

忍『え？』

するとビッグベンが鳴り響いた。

忍『あ！そう言えばビッグベンが。』

ビッグベンを見る。しかしビッグベンがデジタル化されてた。

忍『えー！ー！?』

空想終了。

綾「それ、本当なの？」

アリス「本当だよー！」

忍「公共放送で流れたらしいですよ！」

綾「公共放送で!?イギリス、何て国なの・・・!?」

カレン「凄いいんデス!」

浩輔「デジタル化って本当なのか?」

圭太「そうらしいな。でも今のビッグベンのままが良いと俺は思う。」

綾「で、でも、4月1日以外は嘘付きちゃダメよ?嘘を付いたら閻魔様に舌を抜かれるわよ?」

カレン「え?!し、舌を!?あわわわ・・・そ・・・そんなの嘘デス!!アヤヤだって嘘付いてるのにズルいデス!!」

綾「これはただの言い伝えよ。」

陽子「確かに嘘は良くない。一年に一度くらいなら良いけどさ。もう。」

アリス「どうかしたの?」

陽子「実はうちの弟と妹、嘘か本当か分からない嘘言って困らせるんだよ。まだ小4  
なんだけど。」

アリス「嘘付きさんなの?」

陽子「うん。小学校でも有名みたいで、先生や友達から『嘘付きブラザーズ』とか呼ばれてて・・・ちよつと羨ましい!!」

アリス「羨ましいの!」

浩輔「何処が!」

陽子「何かユニット名みたい!!」

圭太「それ絶対誰もファンいないと思うな。」

カレン「へえ。ヨーコに兄弟デスか。」

陽子「弟と妹だけどねー。」

綾「会った事ないわ。」

忍「空太君と美月ちゃんは双子ちゃんなんですよ。小ちやい頃会った事あります。」

圭太「俺達も会った事あるぞ。特に浩輔と意気投合してるしな。」

アリス「兄弟!羨ましいなく。私がお姉ちゃんだったら・・・ヨーコ!お姉ちゃんな

んだからビシツと言わなきゃ!」

陽子「ビシツとか。(何なんだこの風は?!)」

謎のお姉ちゃん風が吹かれてる。

アリス「嘘付いちゃめっ!って!」

陽子「うわ!!」

突然陽子が驚いた。

アリス「うわ!!じゃないよ!めっ!だよ!」

陽子「何で居るんだよ!」

アリス「え？何で・・・うわああああ!!!」  
横を見たアリスも驚いた。

陽子の弟の空太と妹の美月が姿を現したからだった。

空太「猪熊空太です。」

美月「美月です。」

空太「今日から編入して来まして、皆さんの1年後輩です。」

美月「宜しくお願いします。」

陽子「流れるように嘘を付くな!!」

アリス「可愛いー!!」

空太「そ、そんなに見詰められたら爆発します!」

美月「します!」

カレン「ば、爆発!」

浩輔「リア充がか!」

圭太「ちやうわ!!」

綾（あ!嘘付きって言うか・・・照れ屋?）

空太と美月の顔が赤面全開になっていた。

陽子「何で高校に来てるんだよ!今日は午前授業だろ?」

美月「鍵忘れちゃった。」

空太「お父さん達仕事だし。」

陽子「えー!?まだ授業は1時間あるし、鍵預けるから先帰ってな。はい。」

家の鍵を渡そうとするが。

美月「ううん、待ってる。保健室のおばさんに話したらここで待ってて良いよって。」

陽子「ちやっかりしてる!」

美月「涙ながらに訴えたのよ?」

証拠の目薬を見せた。

陽子「しかも嘘泣き!」

圭太「何じゃこりゃ!!」

カレン「私カレンって言いマス!」

忍 「忍ですよー！覚えてますかー？」

綾 「綾よ。」

空太 「姉が何時もお世話になってます。」

綾 「しつかり者ねー。」

空太 「浩輔兄ちゃん久し振り。」

美月 「圭太お兄ちゃんも。」

浩輔 「おー！空太に美月！覚えてるなんてお兄ちゃん嬉しいぜ！」

圭太 「久し振りだな。空太に美月ちゃん。」

アリス 「アリスだよ！宜しくね！」

だが空太と美月は察した。するとアリスの頭を撫でた。

空太 「宜しくアリスちゃん。」

アリス 「え!？」

陽子 「こら！アリスは姉ちゃんとタメだぞ!!全くもう！」

圭太 (アリスを幼稚園児だと思ってるのかこの双子は?)

綾 「心細くて会いに来たんだから良いじゃない。」

空太 「ち、違うよ！」

美月 「べ、別にお姉ちゃんなんか好きじゃないし!!」



空太「鍵忘れただけだし！」

嫌われた陽子はガーンとなつてしまった。

圭太（あ、ツンデレだ。）

陽子「そ、そつか・・・でも・・・姉ちゃんは好きだけどなああああああ!!!」

アリス「ヨーコー!!!」

泣きながら走り去つて行つた。

カレン「そろそろ教室戻らないと。」

綾「先に行つてて。この子達は私が保健室に連れて行くから。」

忍「じゃあ放課後迎えに来るので待つてて下さいね。」

浩輔「じゃあな2人さん！」

圭太「静かにしてるんだぞ。」

空太・美月「はい。」

保健室へ空太と美月を連れて行つた。

綾「ハハハよ。」

空太「ありがとうございます。」

綾「さっきのは、嘘ね!!」

嘘を見破られた2人は驚愕した。すると綾は空太の手を握った。

綾「分かるわ!その気持ち!」

空太「何ですかいきなり!?!」

綾「お姉ちゃんの事好きじゃないなんて、嘘なんでしょ?」

空太・美月「・・・うん。」

2人は認めた。

空太「姉はジョークが通じないので、イギリスでは生きられないかもしれません。」

美月「直球で言わなければ分からないので。」

綾「そうね。大丈夫。素直になればちゃんと伝わるわ。陽子は単純バカだから。それ

が出来たら苦労しないわよ!」

空太・美月「自問自答!?!」

素直になれない綾。

その頃C組の教室では、陽子が机に顔を乗せてガツカリオーラを出していた。

アリス（珍しい・・・ヨーコが落ち込んでる!!）

圭太（相当凹んでるな此奴。）

アリス「ヨーコ！元気出して！2人共本気で言っただんじやないよ！」

圭太「あれはただのツンデレだ！素直に受け止めるよ！」

陽子「分かっているけど・・・」

アリス「待ってて！」

するとアリスは画用紙にお絵描きする。

アリス「これをこうして！」

出来上がったのはマンガ肉だった。

アリス「ほらー！ヨーコの好きなマンガ肉だよ！食べて良いよ！」

陽子「舐め過ぎだろ!!」

圭太「またクマ扱いしてんのかい!!」

その頃のA組。

カレン「私も一人っ子だから憧れるデス！兄弟喧嘩とか！」

忍「ええ!?! 喧嘩ですか!?!」

浩輔「因みに俺姉ちゃんと喧嘩の時何時も開始3秒で負けてるがな。」

忍「じゃあやってみますか？」

浩輔「やんのかよ。」

忍「私がお姉ちゃん役です。」

カレン「私が妹デスね！よーし!!」

そして一回回って妹になりきる。

カレン「もう！お姉ちゃんとは口聞いてあげない!! デス！」

忍「ええ!?!」

突然妹役のカレンに嫌われた忍は怯えた。そして泣きながら土下座をする。

忍「ごめんなさい！許して下さい！この通りです!!」

カレン「な、何か違うデス・・・」

浩輔「つつかカレンが妹だったら喧嘩回避だな。」

それを見てた穂乃花はキラキラしていた。

穂乃花「素敵。」

香奈「羨ましいの？あんた一人っ子だっけ？」

穂乃花「良いな。金髪の妹。」

香奈「そっちななの？」

そして今日の授業が全て終わって放課後。

陽子「ごめん先帰る。皆に言っておいてね。」

圭太「待て陽子、俺も。アリス、皆に宜しく言っといてくれ。」

アリス「うん。気を付けて帰ってね。」

その頃保健室では、空太と美月が静かに姉の陽子を待っていた。丁度陽子と圭太が来た。

陽子「空太、美月、帰るぞ。」

空太「お姉ちゃん。」

美月「さつきはごめんね。私達お姉ちゃんの事好きよ。」

すると陽子は笑顔を取り戻した。だがしかし。

陽子「いや、喜んじやダメだ！また嘘かもしれない！」

空太・美月「姉が人間不信に・・・」

2人は圭太を見た。圭太は2人を見てウインクした。2人は頷いて陽子を抱く。

空太・美月「嘘じゃないよ？」

陽子「え?!そっか、そっか!!なんだよもう！私も好きだぞー！」

笑顔を完全に取り戻した陽子は嬉しそうに空太と美月を抱いた。

圭太「絆が修復されたな。」

その後4人で帰る。

美月「綾お姉ちゃんに同情する。」

空太「俺も。」

陽子「え？何で綾が出て来るの？」

圭太「分からね。でも懐かしいな。小さい頃こうやって一緒に帰ったよな。」

陽子「おー！そうだね！」

その頃5人は下駄箱に居た。綾はため息をした。

綾（どうすれば素直に心を伝えられるのかしら？）

忍「綾ちゃん、どうかしたんですか？」

綾「本当の事を言うのって難しいわ・・・あ!!」

アリスとカレンはジト目で綾を見つめる。

カレン「それって、アヤヤは何時も嘘ばかり言ってるって事デス？」

アリス「実はアヤってジョークの達人？」

忍「もしかしてイギリス人だったんですか!？」

カレン「弟子にして下サイ!!!」

綾「あわわわわ!!ち、違う!違うのー!!」

浩輔『綾が素直になれる日は来るのだろうか?』

翌朝、綾は木の下で考え事をしていた。

綾（もつと素直に、陽子に気持ち伝えられたら良いのに。）

陽子「おっはよー綾ー!!」

遠くから陽子が手を振ってた。

綾「おはよう。」

陽子「毎日早いな!」

2人は一緒に登校する。綾は陽子をジッと見てる。

陽子「ん?」

綾『陽子の笑顔って、まるで太陽みたいだわ!』

さつきの事で赤面した。

綾「(で、でもでも、今日こそ素直に!!) よ、陽子って、太陽みたいね!」

陽子「えゝ?何それ?暑苦しいって事?」

勘違いされた綾はガツカリしてしまった。



綾（もう、知らない!!）

陽子（何なんだ?）

集合場所の駅。既に圭太と浩輔が来ていた。数分後。

忍「おはようございます!遅くなつてすみません!」

陽子「おはようしの!」

綾「おはよう。」

浩輔「おっす!」

陽子「アリスも。」

アリス「おはようだワン!」

4人「ん?」

忍「もうアリス。」

アリス「ワンワン、ワン!」

忍「あゝ!ダメですアリス!惑わされませんよ!」

浩輔「まさかアリスは、犬の擬人だったのか!?!」

圭太 「んな訳ねえだろこのスケベ野郎。」

その後カレンも来て7人で登校。

陽子 「犬を飼いたい？」

忍 「そうなんです。昨日テレビに犬が出てて。」

浩輔 「そう言えば昨日動物特集の番組してたな。」

アリス 「モフモフした〜い。」

カレン 「アリスはイギリスでおっきい犬を飼ってるデス。」

圭太 「ああ、確かポピーだったな。」

陽子 「それでか〜。」

綾 「つで、飼ってあげないの？」

忍 「小型犬は可愛いな〜とは思ってたんですけど、私ってどうやらどんな犬にも必ず吠えられるみたいで。」

すると通りかかった犬が忍に向かって吠えた。

忍 「ほらー！どうしてー!？」

飼い主「こら！ごめんなさい。」

陽子「舐められてるんじゃないかな？そうだ！犬を飼ってる人の家で触らせてもらうのはどうかな？」

アリス「そっかー！それなら飼わなくてもモフれるね！」

綾「確かしのの家の近くに犬が居たわね。」

よく吠える犬だと確信した忍とアリスは落ち込んだ。

綾「え？何・・・？」

浩輔「相当トラウマでもあるのか？」

綾「ああ、カレンは？」

カレン「亀なら飼ってマスが。」

陽子「亀はモフれないからなく。」

アリス「そう・・・」

陽子「（期待させといて裏切ってしまった！！う、う・・・！）うちのペットを紹介します！」

綾「はあ!？」

突然綾をペットにさせた陽子。

綾（陽子が私を、ペット!?!）

陽子「違うんだ綾！私のお話を聞いて！あれは中学の頃！」

中学時代、綾はずっと陽子の後ろを付いて来てる。

陽子（綾は本当子犬に見えるなく。何か首輪を付けて歩きたくなくなってくるなく。）  
首輪を付けた綾を想像する。

回想終了&学校に到着した。

陽子「つて思った事があつて。」

圭太「何だそのサイコパス的な考えは・・・」

綾「よ、陽子があんな・・・変態だったなんてー!!」

泣きながら走り去ってしまった。

忍「いえ陽子ちゃん、それ悪くないです！いただきます！アリス！今日から私が、アリスの犬になります!!」

アリス「え!?!」

浩輔「まさか忍も擬人化した犬だったのか!?!」

圭太「それもちやうわこのボケナス野郎。」

忍「お手もしますし、散歩もいきます！」

アリス「でも・・・」

忍「さあ！何でも命令しても良いんですよ！」

アリス「うわああああん!!こんなシノ見たくないよーー!!」

泣きながらアリスも去って行った。

忍「アリス！どうして!?!」

陽子「そりやそうだよ。」

圭太「当たり前だろ。」

走り去ったアリスはそのまま走り続けてる。そしてアリスのモフリたいゲージが限界に達した。

アリス「もう、力が・・・」

限界に達したアリスはそのまま仰向けに倒れた。6人がアリスが倒れてるを見付けた。

綾「アリス!!」

忍「しっかりして下さい!!」

アリス「うう・・・ポピー・・・」

陽子「大変だ!アリスのモフりたいゲージが限界に!」

圭太「どんなゲージだそれ?」

浩輔「アリスがのバツテリーが切れたな。」

圭太「切れたらさっさと入れ替えるマヌケ。」

忍「一体どうしたら・・・!」

アリス『目をつぶると、ポピーの柔らかな毛並みを思い出す・・・』

浩輔「アリスがまた英語で何か言ってる・・・」

カレン「因みにポピーとはアリスがイギリスで飼っている犬の名前です。」

圭太「それ知ってる。」

綾「そうだ!陽子の髪がポピーの代わりになるかもしれないわ!」

陽子「何で!?!」

カレン「Good idea!アヤヤ!」

陽子「お、おい!」

綾とカレンが陽子をアリスに寄せる。アリスが陽子の髪を触る。

アリス「全然違う。」

陽子「地味にシヨツクだー！何でだよー！！」

そんな7人を後ろから久世橋先生と烏丸先生が見ていた。

久世橋先生「微笑ましいですね。まるで小学生のよう。」

烏丸先生「でも、アリスさん真剣に悩んでいます。久世橋先生！すみません、これ持つていてもらえますか？」

久世橋先生「え？あ、はい。」

出席簿を久世橋先生に預ける。

烏丸先生「私も教師として、何か力になりたい！」

懐から犬耳のカチューシャを取り出して自分の頭に取り付けた。

久世橋先生「え!?そこまで体を張って!?!」

走ってアリスの方へ走る。そして。

烏丸先生「わん！わん！」

アリス「あ！声似てる！」

陽子「あ、ちよつと元氣戻った。」

烏丸先生「わんわん！わん！」

すると久世橋先生の何かが反応した。

久世橋先生（先生！流石です!!私も見習いたい!）

元気が戻ったアリスは陽子の髪をモフモフする。烏丸先生に事情を話す。

烏丸先生「そう。アリスさんはイギリスで犬を飼っていたのね。」

綾「そう言えば烏丸先生はうさぎを飼ってるんですよね？」

烏丸先生「そうよ。」

カレン「久世橋先生は何か飼ってるデスカ？」

久世橋先生「私は・・・」

烏丸先生「猫ちゃんです！携帯の待ち受けにしてるんですよねー。」

久世橋先生「烏丸先生・・・！やめて下さい生徒の前で・・・！威厳が・・・」

烏丸先生「え？」

カレンはのほほんとした笑顔をした。

綾「動物の前だと凄く甘えた感じになる人居るわよね。」

カレン「うちのパパもよく亀の甲羅ナデナデしてるデス。」

すると烏丸先生は飼いうさぎのアリスに甘えてる回想をする。



烏丸先生『アリスちゃん！ただいまー！一人で寂しかったー？ご飯にしましょうねー！』

今度は久世橋先生も飼猫に甘えてる回想をする。

久世橋先生『聞いて？今日生徒にクッキー貰っちゃったの！』

烏丸先生と久世橋先生は今を思うと恥ずかしいと思ってるのか、赤面してる。

綾「先生？」

またしてもカレンがのほほんとした笑顔をした。

時間が過ぎて放課後。

アリス「今日は私のワガママで皆に迷惑掛けちゃったね。ごめんね。」

陽子「そんな事ないって。」

圭太「そうそう。気にする事はないさ。」

陽子「ペットの事、もう一度頼んでみたら？」

アリス「でも、ホームステイさせてもらってるのに。」

陽子「ペットを飼うのは、子供の情操教育に良いんだよ？きつとアリスの事も大きく成長させてくれるはず。ん？」

ジト目のアリスが陽子を見てた。

アリス「ヨーコ？私ヨーコとケイタと同年だよ？子供扱いしてない？」

陽子「わ！分かってるよ!？」

3人はA組に来た。

アリス「シノ！話を聞いて！ペットを飼うとね、子供の情操教育に！（以下省略）だよ！」

ペットがどれ程良いかを話す。

忍「分かりました。犬もちゃんと躡ければ吠えたりしませんよね。それじゃあ一度お願いしてみましよう！許してくれるかもしれない！」

アリス「シノ！シノは何時も輝いてるけど、今日はまるで太陽のようだよー！」  
すると綾は今朝の言葉を思い出して察してしまった。

忍「いえ、そんな。」

夕方。綾は陽子と一緒に帰ってる。

綾（アリスはあんなに自然に言えるのに・・・）

陽子「ペットかあ。綾は何か飼いたい動物居る？」

綾「そうね、鳥とか。」

男性「焼き鳥いかがつすかー？」

焼き鳥屋の大将の言葉で泣きそうになった。

綾「焼き・・・鳥・・・」

陽子「何かタイミング悪くてごめん!!鳥良いよね？」

綾「ありがとう・・・でも私、ペットは必要ないわ。」

陽子「何で？」

綾「だって、（今よ！素直よ！自然に！）ペットが居なくても、皆が居るし、陽子が居

るもの！」

陽子はただ綾を見つめる。

綾「わ、私用があるからここで!! それじゃあ!! (恥ずかしい!! 今の素直に伝えられたわよね!)」

恥ずかしいと思いながら走って帰る。

陽子「私ペットって事? さっきの仕返しか?」

自分がペットと勘違いしてる陽子だった。

その頃大宮家では、勇にペットの事を話した。

勇「ペット? ダメよ? 毛が抜けるし、服に臭いも付くし、お金も掛かるでしょ? テレビで観るだけで十分可愛いじゃない。ほらワンコ。」

テレビを点けると、グッドタイミングで犬が映し出された。

忍「そんな事言わずにお願いします! アリスの為だと思って!」

勇「ダ・メ・よ?」

すると極寒の風が吹かれて、忍とアリスがダメージを受けた。

忍「わ、私ができるのはここまでです……すみません……」  
アリス「イサミ強いよ……」

だが翌日の休日。ロボット掃除機のルンバの上に犬が乗っていた。ルンバは犬を乗せたまま動いてた。

アリス「ポピー!?!」

犬を持ち上げる。

アリス「ぬいぐるみ?」

忍「私を作ったんです。アリスが元気出してくれるかな? って。掃除機はお姉ちゃん  
が。」

アリス「ありがとうシノ! イサミ! 感激だよ!」

犬のぬいぐるみを頬すりする。

忍「良かったー!」

アリス「あ! 私おつかい頼まれてたんだ!」

ルンバを置く。

アリス 「また後で遊ぼうねポピー！じゃあ行つて来るね！」

忍 「一緒に行きましょうか？」

アリス 「大丈夫！もう元気100倍だよ！」

忍 「車を付けて下さいね！ハンカチは持ちました？お財布は？信号は青で渡るんですよ？」

そしてアリスはおつかいに出掛ける。

アリス 「ワンワンワワーワワン♪ワワワワン♪あれ？空太君に美月ちゃん！」  
途中で空太と美月と偶然出会った。

アリス 「2人で遊んでるの？」

美月 「アリスちゃんも一緒に遊ぼう？」

アリス 「でも、おつかいの途中だから。ごめんね。」

空太・美月 「え〜？」

すると2人は何か閃いた。

空太 「アリスちゃん、実はね。」

アリス「ん？」

空太「ゴニヨゴニヨ。」

耳打ちで何かを言った。

その後、猪熊家にインターホンが鳴った。

陽子「はーい。」

インターホンを聞いた陽子が玄関のドアを開けると6人が居た。すると圭太を除いた5人が押し寄せて来た。

忍「陽子ちゃん!!朝起きたら突然12ヶ国語を話し出したって本当ですか!？」

アリス「聞いたよ!!」

忍「一体どうやって!？」

カレン「ヨーコが勇者になって旅に出るって聞きマシタが!マジデスカ!？」

綾「けけけけ結婚したって!嘘でしょ!？」

浩輔「アフリカ象を軽々持ち上げれる力が発揮出来たってそれガチか!？」

陽子「何の話？」

すると陽子の後ろから空太と美月が出て来た。

空太・美月「皆来た〜。」

美月「お姉ちゃんに遊んで欲しくて。」

陽子「この嘘付き兄弟!!」

圭太「やっぱり2人は相変わらずだな。」

空太・美月「てへ。」

こうして9人で遊ぶ事になった。空太と美月がけんけん・ぱをする。

陽子「悪かったな休日にも。用事あったんじやなかったつけ?」

綾「良いの。嘘なら、良かったわ。」

陽子「え? そんな訳ないだろ?」

綾「そうね。」

美月「綾お姉ちゃん、素直だね。」

空太「うん。」

浩輔「けんけん・ぱ! のわ!？」



すると途中で浩輔がぐるぐる転がって海老反りしながらズザーッと滑った。アリス「コースケ!？」

起き上がった浩輔の顔が赤くなっていた。

浩輔「いやあく。これくらい慣れてるから心配ご無用！」

圭太「慣れつつは怖えなおい。」

後日。

忍「カレンの金髪は金より価値があります！」

カレン「へえ〜！」

浩輔「それ褒めてるのか？」

綾（まだまだ及ばないわ。私も陽子の良い所を褒めてみよう！良い所・・・良い所!!）

陽子「ん？何処見てるの？」

ずっと陽子の胸を見ていた。

綾「か、勘違いしないでよ！つい目が!!」

陽子「何が？」

「END」  
圭太 「ダメだこりや。」

## E p i s o d e 1 6 「雨にもまけず」

アリスが綾と会い、何をやってるかを綾に質問した。綾は赤面してた。

綾「ちよつと、イケてる女風に佇んでみたの。」

アリス「どうして？」

綾「実は、昨日中学生に間違われてシヨックで・・・」

アリス「私はしよっちゆう間違われるけど、アヤもそんな事があるんだね！」

綾「私達同じ悩みを持つてるのね！本気が合うわ！」

アリス「ねえねえじゃあこうしない？一緒に不良になろうよ！」

綾「え!?!ちよつと待って？何で不良？私はもつと大人の女性になろうと・・・」

アリス「前にイサミが言ってたの！」

数日前の事だった。

アリス『イサミは小さい頃から大人っぽいけど、何か秘訣はあるの？』

勇『ん？うくん、そうね、私はアリス達みたいに良い子じゃないからそう見えるか

もね〜。』

それを聞いた綾はやる気になった。

綾「勇さんがそう言うなら間違いないわ！」

アリス「だよね!!」

後日の学校。烏丸先生を見付けた久世橋先生。

久世橋先生「お、おはようございます烏丸先生！」

烏丸先生「おはようございます久世橋先生。A組にはもう慣れました？」

久世橋先生「はい。皆良い子達なので。ただ、生徒達の模範となる教師とは何かを常に考えてまして。」

烏丸先生「大丈夫ですって。先生は今そのまま十分模範的ですから。」

久世橋先生「え?! いえ! まだまだです! 更に新しい自分を目指して努力します! (今年こそ、生徒達に好かれる先生に! 皆に優しく接しよう!)」

すると途中でアリスと綾を見付けた。2人はロングスカートを履いており、ヤンキー座りをしていた。綾はマスクをしており、アリスはタバコ吸ってる真似をしていた。

久世橋先生「何あれ・・・!? どう接したら良いの・・・!?」

その後、ベランダで綾とアリスがまた不良的な事をしていた。陽子と忍と圭太が唾然としていた。

陽子「アリスと綾がグレてしまった・・・」

忍「何があつたのでしょうか？」

陽子「つてか、あれって不良なの？」

忍「可愛いですけど。」

圭太「何処が？俺から見れば聖歌隊のガキ以下だな。」

忍「よーしよーし。よしよし、よーしよしよし。バナナ食べますか？」

アリス「猛獣扱い!?!」

何処からかバナナを出してアリスの前に出した。これに対してアリスが抵抗するが。

アリス「ガオーー!!」

受け取ってしまった。

陽子「受け取った!？」

圭太「餌付けかよ!」

陽子「何か訴えたい事があるのかもな、若者の犯行的な?」

カレン「私も不良に憧れた事がありますが、あの2人とは何か違うデス!」  
するとカレンは一瞬にして学ランに着替えた。

カレン「不良と言ったらこうデス!!」

陽子「それも何か違う気がする・・・」

カレン「後者の窓叩き割るデス!!」

浩輔「カレン総帥!俺もお手伝いいたしやす!!」

カレン「ではコースケ!共に行こー!」

久世橋先生「九条さん!白川君!」

カレン「Noooo!!」

浩輔「ごめんなさーい!!今のジョークですー!!」

久世橋先生「待ちなさーい!!」

カレンと浩輔は久世橋先生から逃げる。

圭太「何やってんだが・・・」

陽子「本当だよ・・・」

その頃ベランダでは、忍が不良的な事をやっってるアリスと綾に対して微笑んでいた。

綾「全力で不良を演じてみたのに、伝わってないみたい・・・」

アリス「何でだろう？」

綾「髪が黒いから？」

アリス「私金髪だよ？」

綾「アリスは地毛が金だもの。」

アリス「ああ！」

綾「だったらアリスの場合、黒く染めたら不良になれるんじゃないや！」

アリス「そっか！その手があつたよ！」

圭太「いやアリスよ、髪染めは禁じられてるぞ？」

すると忍が突然。

忍「こらーーーーー!!!」

アリス・綾「ヒーーーーー」  
突然忍が本気で怒り出した  
?!?!???

陽子（め、珍しい!!しのが怒った!?!しかもこらって。）

圭太（あんな一面初めて見たぞ!?!つかビビった・・・）

忍「アリス！何て事を言うんですか!!そんな子に育てた覚えはありませんよ!!」

アリス「シノ・・・育てられてないよ・・・?」

圭太「お前はアリスの母親かよ。」

忍「もう知りません!!」

結果的に忍とアリスの間に気不味い溝が出来てしまった。

陽子「また下らない理由で・・・」

圭太「最早喧嘩じゃねえだろこれ・・・」

その後何時ものスカートに履き替えて、アリスはC組で泣いてた。

陽子「あんなの喧嘩って言わないよ。」

圭太「ただ忍が怒っただけだから気にするなよ。」



アリス「どうしてこんな事に!!」

その頃A組では、忍は震えていた。さっきの罪悪感が芽生えてしまっていた。

忍「私は・・・なんて事を・・・」

綾「ごめんなさい!!きつと私のせいだわ!私があんな事を言ったから!」

カレン「どうして不良になりたいなんて思ったデス?」

浩輔「そうだそれが知りたい。」

綾「はっ!!そう言えば何で!?私達別に不良を目指していた訳では・・・何時の間にか目的がズレていたわ!!」

カレン「こう言う時は!早く謝った方が良いデス!次の休み時間に行きまショウ!!」  
忍「カレン・・・はい!!」

そして休み時間になり、C組に訪れたが。

陽子「え？アリスなら授業終わってすぐ教室出てったよ？てつきりしのと仲直りしに行ったんだと。」

綾「すれ違い？」

圭太「そつちには来てないのか？」

綾「ええ。」

忍「まさか!!家で!?!怒ってイギリスに帰ったんじや!!」

陽子・綾・カレン・浩輔「えー!!」

圭太「ありえんだろ。アリスがイギリスに帰るんだつたら皆に伝えるはずだろ？」

浩輔「仕方無い、アリスを探るか。」

こうして6人はアリスを探す。

一方アリスは自販機でジュースを買っていた。

アリス（飲み物持ってシノに謝りに行くこう。）

忍「アリスー!!」

遠くから忍の声が聞こえた。アリスは自販機に隠れた。

忍「アリスー!!ごめんなさーい!!!」

気付かれずに済んだ。

浩輔「アリスーーーー!!!出て来ーーーーい!!!」

それに続いて浩輔達も通り過ぎて行った。

圭太「おい皆!!廊下を走るなよ!ん?アリス?」

アリス「ケイタ・・・」

自販機の所に止まった圭太がアリスを見付けた。

その頃忍達は走りながらアリスに謝る。

忍「私!アリスが居たら金髪じゃなくても大好きですーーーー!!!」

陽子「何時も少動物みたいって思ってたごめーん!!!」

綾「胸の事で仲間意識持ってたごめんなさーーーーい!!!」

カレン「アリスの実家の花瓶割っちゃったの実は私デーーーーース!!!」

浩輔「添い寝したらどんなに天国かと思ってたごめんよーーーーー!!!」

そして中庭でアリスを探す。

忍「アリスー！ー！！出て来て下さーい！！」

遠くからアリスと圭太が見てた。アリスはドン引きして、圭太は呆れていた。

圭太「彼奴らの反省の色はどんな色だ・・・？ってか1人器物破損が居たぞ・・・」

アリス「ケイタ・・・どうしよう・・・」

圭太「アリス、素直に行って来い。もし無理だったら俺が援護する。」

アリス「う、うん・・・」

そしてアリスを見付けられなかった忍は泣いてしまった。

アリス「そうだったの？初耳だよ。」

忍「あ！アリス!!!」

アリスは素直に忍の前に現れた。

忍「聞きましたよ？子供っぽい気にしてたと、アリスは成長してますよ！背も伸びてる気がしますし！」

アリス「本当!?!」

忍「はい!! 去年よりもずっと輝いています!! 金髪が。」

アリス「シノー……!!! 私シノみたいな人になりたいな……!!!」

忍「うふふ。アリスつたらー。」

綾「身近な人を目標に? 良いかも!」

陽子「じゃあ! 綾は私を目標にすると良いよ! なんて!」

綾「そうね……」

陽子「あ、綾が素直になってる!! ツンデレデレだ!!!」

綾「ツンデレデレ!?!」

カレンは忍とアリスを見る。

アリス「背も追い付くから待っててね!!」

忍「はい!!」

今度は陽子と綾を見る。陽子は綾の古典の教科書を持って逃げてる。

陽子「捕まえてごらーん!!」

綾「何よこれ!?! 私の教科書返しなさいよー!!」

そして圭太と浩輔を見る。

浩輔「いやー、アリスと添い寝出来たらどんなに幸せだろうかなー?」

圭太「お前頭がイカれちまつてるなおい。」

カレン（目標デスカ。うくん、私は誰でシヨウ？）

その頃久世橋先生は、隠れながら烏丸先生の後を尾行していた。

カレン「久世橋先生の目標は烏丸先生デス？」

久世橋先生「な!?!何でそれを!?!」

そしてC組では、アリスは忍とすっかり仲良くなった。

陽子「まあ仲直り出来て良かったよ。」

圭太「本当ホツとしたよ。」

アリス「うん！」

陽子「そう言えばアリス、最近しのと別のクラスにも慣れて来たみたいだなー。」

アリス「もー何時までもー。当たり前だよー。だって。よいしょ。」

何処からか忍の抱き枕を取り出した。

陽子「うわああ!？」

圭太「どわああ!？」

アリス「私にはシノ2号がいるもん!久世橋先生が作ってくれたんだよ!」

陽子「クツシーちゃん・・・余計な事を・・・!!」

圭太「久世橋先生・・・あなたはアリスに甘いんですか・・・!？」

タイミング良く烏丸先生がC組に入った。

烏丸先生「はくい。皆席に付いて、!？」

シノ2号の抱き枕を見て烏丸先生が驚いた。

烏丸先生「大宮さん・・・の枕・・・?」

アリス「ただの枕です!」

烏丸先生「(これは、きちんと先生として注意しなきゃダメだわ!)アリスさん・・・

枕なんてあつたら寝ちやうでしよ!!」

陽子「そこなの!？」

圭太「先生!!注意点間違ってますよ!？」

英語の授業を終えた後、枕を没収して職員室へ持つて行く。

烏丸先生「先生ー、これ没収しときましたからー。」

久世橋先生「あ！それは！すみません、強くお願いされて。」

アリス『欲しいなー!!』

あの時アリスが強くおねだりして来て断れなかった。

烏丸先生「その気持ちよく分かります。この枕は私が貰っておきますねー。」

数分後、職員室に忍が入って来た。

忍「失礼しまーす。ん？」

烏丸先生が忍の抱き枕で寝てる光景を目にした。

忍「せ、先生!？」

そして忍は嬉しそうに笑う。



その後、久世橋先生はA組のクラスに居てため息をする。

久世橋先生（はあく、厳し過ぎても甘過ぎてもダメ、教育って難しい、飴と鞭を正しく使い分けないと。）

すると寝てたカレンが目覚めた。だがシャツのボタンが取れて腹が見えてしまってる。

久世橋先生「九条さん！お腹が出てますよ！はしたない!!」

カレンが腹を隠す。

久世橋先生「お腹は大切に。」

そう言つてカレンに腹巻をあげた。見事に飴と鞭を使い分けた。

カレン「優しいデス！」

夕方、7人で帰る。

陽子「何で枕？」

アリス「ギューツッて出来た方が良いなー！って。」

陽子「あー！」

綾（結局、大人っぽく見られたいって話はどうもなっていないわ。）

忍「いっぱいギューツッてするのはどうですか？」

アリス「うわー！」

カレン「シノだめデスね！」

陽子「シノだめって・・・」

すると7人は止まってる綾を見た。

陽子「どうした綾？」

浩輔「具合でも悪いのか？」

綾「ちよつと用事。じゃあ私はここで。」

6人「ばいばーい！」

そして綾は1軒の喫茶店に来店した。そこで大人っぽくなれたかは定かではない。

後日の学校、アリスと忍と烏丸先生が中庭でガーデニングをしていた。

アリス『学校の花壇で、お花を育てています。』

花に水をあげる。

アリス「シノ！もう少して咲きそうだよ！」

忍「本当ですね！」

何故ガーデニングをしてるかと言うと、それは以前烏丸先生から聞いた時から始まった。

アリス『花壇？』

烏丸先生『ええ。中庭に去年まで園芸部が使ってた花壇があるから、皆で一緒に何か

植えましょ？』

忍『何でも良いんですか？』

烏丸先生『良いですよ。』

アリス『だったら植えたいお花があるの！』

これが始まりだった。

アリス『そして、ここまで育ちました!』

忍「植物は話し掛けると良く育つって言いますよね。」

烏丸先生「それじゃあ、話し掛けてみましょう。」

花に向かって話し掛ける。

烏丸先生「おつきくなくれ♪」

3人「おつきくなくれ♪おつきくなくれ♪トータルポール♪トータル♪」

遠くから久世橋先生が見ていた。

久世橋先生（私も、私も混ぜて欲しい!!）

何度も話し掛けるが、一向に変化はない。忍は自分が植えた花を見て少し落ち込んだ。  
た。

忍「私ののは、何だか今でも枯れそうなんですけど。」

烏丸先生「あらあら。水のあげ過ぎかもしれないわね。」

アリス「愛情あげ過ぎちゃったんだね。」

忍「ガーデニングって難しいですね・・あ!!もしかしてアリスが小さいのは私が愛情を注ぎ過ぎてるせいかもしれない!!きつとそうです!!」

聞いたアリスはドン引きしてる。

アリス（複雑な気持ちなのに、何でだろう・・・とても嬉しい!!）

カレン「私のお花の調子はいかががデース？」

そこにカレンが様子を見に来た。

忍「カレンの花は、そつちで満開ですよー。」

綺麗に満開になつてるカレンの花。

カレン「Oh!!私に似て、生命力に溢れてるデス!!」

アリス「カレン、あんまりお世話してないのに何で・・・？」

カレン「きっと私の元氣パワーが花にも伝わったデス!!アリスにも分けてあげるデス

!!」

アリス「いい、寧ろ何か吸収されてる感じがする・・・」

元氣パワーを拒否した。

穂乃花「ん？」

香奈「どうした穂乃花？」

2階の廊下から、穂乃花がガーデニングしてるアリス達を見た。

カレン「元氣パワー注入!!」

花にカレンの元気パワーを注入する。

穂乃花「ここ、ロンドンの魔法学校かな？」

香奈「はい!？」

いきなりハリー・ポッターの Hogwarts 魔法魔術学校の事を言った。

陽子「おー! やってるやってる!!」

浩輔「元気に育ってるなー!」

そこに陽子と圭太と浩輔が様子を見に来た。

忍「あ! 陽子ちゃん、浩輔君、圭太君。」

アリス「アヤとヨーコとケイタとコースケも一緒に植えれば良かったのにー。」

浩輔「いや俺、多分即枯れちまうかもしれない。」

忍「綾ちゃんは虫が怖いからって言っていましたね。」

陽子「私も、虫が怖くて〜。」

可愛子ぶった陽子。

カレン「ヨーコ!?! お腹でも痛いデスカ!?!」

アリス「変な物でも食べたんじゃない?!」

陽子「ちよつと可愛子ぶつてみただけだろー!!!」

圭太（何かさつきの陽子かなり萌え感溢れてたな。）

陽子「私は花より団子ー!」

アリス「ヨーコらしいね!」

忍「そう言えば綾ちゃん遅いですね。遅れて来るって言ってましたけど。」

カレン「アヤヤならとつくに來てマス。」

木の後ろから綾がこっそり覗いてた。

浩輔「ナズエミテルンデイス!!」

圭太「お前劍崎か。」

するとカレンが綾を引つ張る。綾が抵抗する。

綾「カ、カレン・・・ちよつと・・・!!」

カレン「アヤヤにも元氣パワーあげるデスよー!」

アリス「アヤ泣いてる!?!どうかしたの!?!何か悲しい事でも!?!」

綾「違うの・・・前髪切り過ぎちやって・・・」

泣いてた理由は、前髪切り過ぎたからだった。

陽子「しょうもない!」

綾「しょうもないわ!!」

カレン「ヨーコ！髪は女の命デスよ！」

陽子「だって、そんなに変わんないし。」

綾「誰か髪を1日でも早く伸ばす方法を教えて！」

圭太「そんなに深刻な悩みか。」

忍「えーつと、わかめが良いとよく聞きますが・・・」

アリス「そうだ！お花も水をあげたら伸びるから人間も同じかもしれないよ？」

綾「成る程！水ね!!」

陽子「そんな訳が。」

浩輔「ある訳ないだろ？」

自分の前髪に水を掛ける。

綾「やってみるわ!!」

陽子・圭太「稀にもすがる思い!!」

アリス（私の花、咲きそうなのに中々咲かないのは何でだろう・・・）

花を見てアリスは落ち込んだ。

烏丸先生「葉っぱも元気だし、きつとすぐ咲きますよ。」

アリス「そうかな？」

陽子「いつその事前髪あげたら？」



綾「私はおでこを隠したいの！」

陽子「そうなの？」

カレン「アヤヤ、おでこ狭いから大丈夫デス！」

浩輔「そうだな。気にするな。」

綾「どう言う意味よ!？」

忍「アリス、そろそろ教室戻りましょう。」

アリス「うん・・・」

その後の職員室。

久世橋先生「烏丸先生、花を育てているって聞きましたが。」

烏丸先生「そうなんです！久世橋先生も一緒にいかがですか？」

久世橋先生「え!?! 良いんですか!？」

烏丸先生「久世橋先生はお花が似合いますし。」

久世橋先生「そ、それを言うなら先生の方が！何と言うかふわふわですし！」

烏丸先生「久世橋先生は特に、カボチャの花が似合うと思います！うん！」

久世橋先生「カボチャ!？」

烏丸先生「花と言うか、私がやってるのは家庭菜園です。今はオクラが育って来ました。」

久世橋先生「先生それ家庭じゃないです……」

烏丸先生「許可も取ってますし。」

久世橋先生「てつきり花を育てているのかと……」

烏丸先生「久世橋先生、花は愛でる物ですが、オクラは食べる物です！」

すると久世橋先生がメモした。

久世橋先生「その言葉！今度使って良いですか!？」

烏丸先生「ん？どうぞ。」

使用道無さそうな台詞。

その頃陽子と圭太はA組に来た。

陽子「綾ー！英語の宿題んだけどさー……誰だ!?怖え!!」

圭太「のわ!?何じゃありゃ!？」

2人は綾を見て驚いた。顔が描かれた段ボールを被ってる綾が立っていたからだっ

た。

綾「え？綾だけど？」

陽子「本当か？じゃあ、綾が好きな物は何？」

綾「す、好き!?何で陽子に言わなきやいけないのよ!？」

陽子「良かった。その赤面は綾だ。」

忍「凄いです！段ボール越しでも分かるのですか!？」

圭太「いや普通に髪を見てれば分かるだろ。」

綾は段ボールを取った。

陽子「その格好、逆に目立つぞ？」

圭太「街中を歩いてたら不審者扱いにされるぞ？」

綾「我ながら名案だと思ったんだけど・・・」

カレン「それじゃあ、ここをこうして、こうやって、お揃いデス!!」

綾の前髪に髪留めのピンを付けてより可愛らしくなった。

陽子「可愛い可愛いじゃん!!良いよ!!」

圭太「おー！確かにより可愛らしくなったな！」

褒められて赤面する。

綾「バ、バカアーーーー!!!」

陽子「うわ!? 何で私!？」

逆に怒って段ボールを陽子に被せた。

圭太「嬉しいのか嫌なのかどっちだ?」

放課後、7人は花壇へ向かう。

忍「咲いてると良いですね。」

アリス「うん。」

陽子「日当たりと後水をやり過ぎると良くないって、からすちゃん言ってたよ?」

綾「梅雨入り前だし、時期的には良いはずよね?」

カレン「ツユイリ? つゆはソバに入れると美味しいデス!」

アリス「違うよカレン。日本には梅雨って言うのがあってね、雨がいつぱい降るんだよ?」

陽子「いやアリス、今のはカレンのポケだから真面目に返さないで良いぞ?」

アリス「え!? 酷いよカレン!!」

カレン「フッフォン!」

浩輔「ぎる蕎麦食いたいな。」

圭太「それには俺も同感だ。最近食ってないな。」

そして花壇を見ると、まだ咲いてなかった。

アリス「まだ咲かない・・・もう咲かないのかも・・・」

忍「大丈夫です！明日には咲きますよ？明日の朝も見に行きましょう！ね？」

アリスは無言で頷く。

そして翌朝、遂に梅雨入りした。アリスと忍は不安な顔をした。

その後7人は、花壇の方へ走って行く。

忍「花！花は無事ですか!?!」

花を見ると、無事だった。

カレン「大丈夫そうデス！」

陽子「ちよつと強過ぎるかな？」

圭太「今年は強いって天気予報で言ってたしな。」

綾「雨除けとかあった方が良かったら？」

アリス「私イギリスでもよく、ママの庭のお手伝いしてたの。」

忍「そう言えば、アリスの実家の庭は、いっぱい花が咲いてましたね。」

浩輔「へえ、アリスのお母さん良い趣味してるな。」

カレン「アリスのママは、スコーンを焼くのも花を育てるのもとつても上手デス！」

浩輔「流石アリスの母親だな。」

アリス「だけど・・・私は・・・一度も上手に咲かせられなくて・・・」

忍・陽子・綾・カレン・浩輔「うわあああ!!」

悔しくて泣いてしまったアリスを見て、5人は花壇に強くおねだりする。圭太は呆れてた。

圭太「まるで大きな子供だな。」

その後、梅雨は離れて快晴になった。忍とアリスは花壇の様子を見に行く。

忍「お昼までに雨が上がって良かったですね。お花見に行きましょう。」

アリス「そうだね。でももう・・・」

陽子「アリスー！」

花壇の所に5人が集まっていた。皆笑顔をしていた。アリスが急いで花壇を見ると。

アリス「うわー!!」

何とアリスの花が無事咲いたのだった。

アリス「シノー！咲いたよー！」

忍「はい！」

咲いたアリスの花の隣に、忍が新たな花を植える。

忍「アリスの花も無事咲いた事ですし、私ももう一度植え直します。」

陽子「何気にしたのは枯らしてるな。」

浩輔「ちゃんと水やってんのかいな？」

アリス「ねえシノ、この花の事知ってる？」

忍「はい。マリーゴールドですよね？」

アリス「うん！それでね、あのね、マリーゴールドの花言葉は『友情』なんだよ！」

忍「わあ！素敵！」

綾「ああ後、嫉妬って意味もあるのよね！」

陽子「お前は全く・・・空気読めよ・・・」

圭太「因みにマリーゴールドの花言葉は『嫉妬』『絶望』『悲嘆』『信頼』『悲しみ』『別れの悲しみ』『勇者』『健康』『生命の輝き』『友情』『生きる』『濃厚な愛情』『変わらぬ愛』の13個だ。半分悲しい言葉だが。」

陽子「圭太も空気読めよ・・・」

こうしてアリスは、初めて自分で花を咲かせる事に成功した。

休日のある日、忍とアリスは家で昼食を食べていた。忍はミートソースパスタ。アリスは親子丼。

忍「知ってますアリス？天使の髪の毛って言うパスタがあるそうです。」

アリス「へえ。そう言えば、錦糸卵も金髪みたいだよね。」

忍「言われてみればそうですね。アリスの髪の毛も美味しいのかもしれないね。」

アリス「もうシノつたらまた。」

忍「ペペロンチーノオ・・・」

興奮しながらアリスの髪を見る。

アリス「目が本気だよー!!」



因みに天使の髪の毛は、カツペリーニと言う極細パスタである。エンジェル・ヘアとも呼ばれてる。

「END」

# Episode 17 「おねえちゃんとあそぼう」

陽子「勇姉がスランプかあ。」

勇がスランプだと言う事を知った。浩輔はまだぶっ倒れてる。

カレン「写真では何時もと変わらなく見えマスが。」

圭太「多分写真の時はポーカークーフェイスだろ。にしても珍しいな。姉貴がスランプなんてな。」

綾「勇さんでも落ち込んだりするのね。」

忍「お姉ちゃんも人の子ですからね。」

綾「ううん！私にとって勇さんは雲の上の人！仙人よ！霞食べてるイメージ!!」

忍「そんなに浮き呼ばわりしてますか!?!お姉ちゃん、ぼーつとする事が多くて心配です。」

カレン「元気の無い時はパーつと遊ぶデス！パーつと!!」

陽子「そうだな！」

アリス「それが一番だね！」

圭太「おい浩輔起きろ！」

浩輔「ぐえっ!!」

ピンタして浩輔を起こして、勇に遊ぼうと誘う。

勇「一緒に遊びに? 良いわよ。今日は一日予定無いし。」

5人「やったー!」

浩輔「よっしやー!」

忍「他所行きの服に着替えて来ますね。」  
着替えに行く。

陽子「勇姉は変装しなくて良いの? サングラスとか。」

勇「ん?・・・ステルス迷彩?」

陽子「カムフラージュし過ぎだ!!」

圭太「見つかりっこねえよ!! スネークかあんたは!!」

勇「そうね、何時もは帽子くらいなんだけど、今日はちよつと変装してみようかしら  
? 待ってて。」

勇も変装しに着替えに行く。

忍「お待たせしましたー!」

青のドレスに着替え終えた忍。アリスがカメラで撮影する。

アリス「Princessシノ!!」

浩輔「何故ドレス・・・？」

圭太「お前舞踏会へ行くのか・・・？」

綾「アリス、そのカメラは？」

アリス「イサミがくれたの！今日は色々撮ろうと思って。」

陽子「良いね！」

忍「皆の分もお姉ちゃんのカメラコレクションから用意したので、今日は各自最高の1枚を撮りましょう！物でも人物でも何でもOKです！」

カレン「Oh！アリスが最高の1枚を撮るのに必死です！」

浩輔「俺も負けてられないな！」

忍「そしてなんと！優勝者には賞金も用意しております!!」

陽子「おいおい無理するな!？」

浩輔「何だって!？賞金だって!？もしかしたら100万円か!？」

圭太「いやそんな訳ねえだろ！忍、賞金は無理だぞ？」

忍「大丈夫です！アリスと一緒に貯めてるちりつも貯金があります！」

綾「ちりつも？」

それは以前、忍とアリスは部屋に飾られてるホームステイの写真を見てる事だった。

忍『またイギリス行きたいですね。』

アリス『でもお金が無いよ？』

忍『あ！決めました！2人で貯めて旅行資金にしましょう！』

アリス『良い考えだね！』

忍『1日10円が目標です。』

貯金箱に10円を入れる。

忍『ちりつも！』

アリス『気が遠くなるね。』

そして現在。忍は興奮して震えてた。

忍『あれを使えば・・・！』

アリス『ダメだよ！それにそんなに貯まってないし！』

圭太『不可能だろ。1年で3650円・・・』

勇「ちよつと忍。あんたが目立ってたら変装の意味ないじゃないもう。」

忍の制服を着た勇。メガネも掛けてる。

陽子「しのの制服!？」

圭太「全く違和感無いなおい！」

そして勇を含めた8人が遊びに外出する。

勇「何だか新鮮な気分だわー。」

綾（本当にその格好で行くのね・・・）

忍「お姉ちゃん！カメラを忘れていましたよ？」

勇「あら、ありがとう。」

カメラを受け取り、目的の場所へ行く。

アリス「何時も出掛ける時は持って行くのにね。」

忍「はい。」

そしてららぽーと船橋に到着した。

圭太「ららぽーと船橋に到着！」

アリス「凄く大きいね！」

カレン「沢山遊べそうデース！」

忍「皆さん写真を撮る事も忘れないで下さいね。」

陽子「よーし！撮るぞー！」

浩輔「俺も撮るぜーヒヤツハー！」

綾「つて言っても何を撮れば？」

陽子「綾の笑顔写真とか良いかも！」

綾「ええ!？」

陽子「はい笑って？」

戸惑う綾。

陽子「君の笑顔が見たいんだ。」

綾「な!？」

陽子「ほら綾ってキザな言葉好きだから！」

浩輔「何だって!?!じゃあ、俺に笑顔を見せてくれ。」

綾 「いやー！絶対からかってるでしょ!!」

陽子 「守りたいこの笑顔！」

ららぽーと船橋内を歩いている途中、カレンが何かを発見した。

圭太 「カレンどうした？ん？」

カレンが見ている方を見ると、服を選んでる髪を下ろした女性が立っていた。カレンがその女性に駆け寄る。

カレン 「もしかして久世橋先生？」

久世橋先生 「九条さん!」

何と久世橋先生だった。

圭太 「え!?!久世橋先生!?!」

久世橋先生 「香川君!?!」

圭太 「あ、久世橋先生こんにちは。き、奇遇ですね。」

久世橋先生 「そ、そうですね。」

カレン 「スーツじゃないデス！激レアデス！先生もパーっとしに来たデスカー？」



久世橋先生「買い物に來ただけです！」

カメラを久世橋先生に向けてシャッターを切る。

カレン「私服の先生可愛いデス！意外にミニスカ！」

久世橋先生「ちよつ！どうして写真を撮るんです!？」

カレン「お金の為デス。」

久世橋先生「え!?!どう言う意味!?!説明しなさい!!」

圭太「先生、カレンは遊び気分で言ってるだけなんで、これで失礼します。迷惑かけてごめんなさい。ほらカレン行くぞ。」

カレン「Oh。」

圭太が無理矢理カレンを連れて行く。

その頃6人は1階を見下ろしてた。

綾「あら？圭太とカレンは？」

浩輔「まさか彼奴ら、俺達が知らない間にイチャイチャしてるのか？」

陽子「いや浩輔、それは流石に無いだろ？圭太は嫌らしい事考えないしな。」

カレン「やりマシター！」

圭太「おーい皆ー！」

丁度そこに圭太とカレンが合流した。

カレン「Nice shot! Get デス!!」

浩輔「おい圭太、カレンと何してた？」

圭太「ちよつとな。言っておくがイチャイチャなんてしてねえぞ？」

忍「他の階にも行きましょう！」

アリスと忍が下りエスカレーターに乗るが、勇が登りエスカレーターに乗ろうとした。  
た。

陽子「い、勇姉！」

勇「え？」

陽子「逆逆！そつちは登り！」

勇「あらいけない。」

陽子「重症だな・・・」

浩輔「あれ？おーい皆ー、このエスカレーター進まないけど。」

陽子「言ってるそばから何やってんだよ？」  
登リエスカレーターに浩輔がわざと乗ってた。

その後忍が服屋に来て、試着室の鏡を使って金髪のカツラを被ってシャッターを撮る。アリスがドン引きしてた。

その頃カレンと勇と圭太と浩輔はゲーセンに来た。

カレン「イサミー！一緒に撮りまシヨウ！」

プリクラを見付けたカレンが勇を誘う。

勇「うーん、今撮られるのはちよつと・・・」

カレン「美人に補正してくれるので大丈夫デス！」

勇「そうなの？」

そして2人はプリクラで写真を撮る。カレンは色々なポーズをするが、勇は無表情のままだった。出来上がった写真はデコレーションし、目が凄くキラキラしてた。カレンは震えてた。

カレン「これは！人類が進化した時の姿デス！未来のイサミも凄く美人デス！！  
勇（フオローしてくれてる・・・）」

その頃圭太と浩輔はマリオカートアーケードグランプリDXをしてた。

浩輔「うおー!!負けるかー!!」

圭太「しまった!?!」

すると圭太のルイージがスリップしてしまった。

浩輔「よっしゃ！貰った！」

だがしかし、ゴール直前でこうらの直撃を受けてしまった。

浩輔「何だって!?!」

圭太「勝った。」

結果、圭太が勝った。

浩輔「くっそー！もう少しだったのにー！」

圭太「勝つ事だけ考えたら命取りだ。覚えとけ。」

その後、勇と忍は1階にある木を眺めてる。

カレン「うーん、あまりパーっとさせられなかったデス・・・」

陽子「これからこれから。」

浩輔「そうそう。本番はこれからだ。」

綾「色んなお店を見れば、勇だって元気になるわよ。」

アリス「他の所にも行ってみよう！」

次に向かったのはメガネ屋。アリスがメガネを掛ける。他の6人もメガネを掛けてた。互いにシャツターを切る。

忍「お姉ちゃんは何か気になる物はありませんか？」

勇「え？そうね・・・」

白のメガネを取って、メガネを掛ける。

勇「何だか微妙ね。」

圭太「おい姉貴、二重メガネになってるぞ。」

メガネの上にメガネを掛けた。

カレン「あー！メガネOnメガネデス!!」

圭太「どう言う意味だ？」

次はペットシヨップ。フェレットを見る。

綾「うわー可愛いー！私あの子が良いー！」

アリス「イサミ！フェレット可愛いねー！」

勇「え？そうね。でも今日はお腹の上で貝を割らないのかしら？」

アリス・陽子「それはラッコ!!」

圭太「フェレットとラッコは同じイタチ科だけど。」

浩輔「おーい圭太ー！子猫だぞー！」

圭太「子猫!？」

子猫を見付けた浩輔が圭太を呼ぶ。圭太は子猫を見る。

圭太「可愛えなおい！マンチカンも良いがスコティッシュフォールドも可愛いな！」

綾「圭太が凄く盛り上がってるね。」

陽子「彼奴猫好きだからな。」

その後も色々回ったが、勇の元気が戻らない。

アリス「イサミ、あんまり楽しそうじゃないね・・・」

綾「服を見に行ってみる？」

カレン「服は仕事で沢山見てマス。」

陽子「じゃあ気晴らしにはなんないか。」

浩輔「じゃあゲーセンでも行くか？」

圭太「さっき行つただろ。」

何処へ行くか考え込む。

忍「あ！そうだ！彼処へ行きましよう！！」

次に向かったのは、CAN TOURだった。

忍「じゃーん！ここならきつと盛り上がりますよ！」

圭太「キャンツアー？」

陽子「どうやって？」

忍 「簡単です！パンフレットを見て目を閉じればいくらでも海外に旅立てるんです！」

カレン 「へえ〜！」

忍 「あ！ここにあるパンフレット全部最新版じゃないですか！」

盛り上がってる忍に対して、全員ドン引きしてた。

圭太 「楽しいのは忍だけだろ。」

浩輔 「それは正論だな。」

そして忍は最新版のパンフレットを持って来た。

カレン 「そんなに集めてどうするデス？」

忍 「1日1旅立ち。これだけあれば数ヶ月持ちそうです!!」

すると忍がバランスが崩れそうにフラフラする。

綾 「ちよつと大丈夫!？」

アリス 「足元フラフラだよ!？」

浩輔 「お前パンフレット持ち過ぎてバランス崩れそうぞ!？」

忍 「大丈夫です・・・！これでしばらくの間・・・旅に放題です！あつ!!」

バランスが崩れて倒れそうになった。

アリス 「シノ!!」



勇「あ!!忍!!」

すると勇が動き出して、前に倒れる忍を支えて救った。

忍「あ、お姉ちゃん・・・」

勇「もう、危ないじゃない。お店に迷惑よ?全部返して来なさい!」

忍「は、はい!」

パンフレットを全部返しに行った。

勇「全くもう。ダメね忍は。私がちゃんと付いてないと!」

自分自身を取り戻した勇。

アリス「イサミー!」

陽子「何時もの勇姉の顔だ!」

綾「戻ったのね!」

カレン「流石シノデス!」

浩輔「フオー!やったー!勇さんバンザイ!!」

圭太「やっぱ何時もの姉貴がしつくり来るな。」

全部返し終えた忍が戻って来ると、勇の顔を見て喜んだ。

忍「お姉ちゃん!」

勇が忍に近付き、忍の両手を握る。

勇 「さあ！まだまだいっぱい遊ぶわよ！」

忍 「はい！」

その後8人はアイスを買って食べる。

勇 「忍、ちよつと頂戴。」

忍 「はいどうぞ。」

忍のアイスを一口食べる。

忍 「お味はどうですか？」

勇 「うん！美味しい！」

その後も色々回って、写真を撮ったりもした。そして夕方になって忍の家に戻った。

全員「ただいまー！」

そして撮って来た写真を見る。

忍「沢山撮りましたねー！」

陽子「しのと綾とクツシーちゃんが多いなー。って言うか何でクツシーちゃんか？」

圭太「カレンが偶然見付けてな。俺最初見た時誰!? って思ってた。」

忍「では結果発表です！優勝は・・・」

アリスがドラム演奏する。そして結果は。

忍「全員目を瞑った一瞬を撮ったお姉ちゃんです!!」

優勝作品は、7人全員目を瞑った写真だった。撮影は勇。

陽子「面白写真コンテストだっけこれ？」

浩輔「くっそー！賞金逃したー!!」

圭太「いやいや賞金は無理あり過ぎって言ったろ。」

勇「うふふ。」

アリス「何見てるのイサミ？」

勇「うふふ。忍のね。」

忍「お姉ちゃん！さっきから私の写真ばかり見てませんか!?!」

勇「え？だって面白いんだもの。」

忍はむくつと怒る。

勇「忍。」

忍「ん？」

勇「アリス。」

アリス「ん？」

勇「綾ちゃん、陽子ちゃん、カレンちゃん、圭太君、浩輔君、今日はありがとね。楽しかったわ。」

忍「お姉ちゃん・・・べ、ベリーマッチ・・・」

勇「その返事間違ってるわよ？」

全員が笑い合い、アリスが勇を撮る。最高の笑顔が撮れた。

数日後、A組に集まった7人。

忍「見て下さい！新しく出た雑誌の巻頭にお姉ちゃんが大きく載ってるんです!!」  
雑誌を捲る。

陽子「凄えー！」

カレン「おー！」

綾「元氣戻ったみたいで良かったわ！」

圭太「これでスランプから脱出出来たみたいだな。」

カレン「前より美しくなった気がシマス！」

綾「これは最早神レベルね！神が降臨してるわ！」

アリス「神!? 凄く縁起が良さそうだね！」

すると全員が雑誌に向かって拝む。

7人「ありがたやー。ありがたやー。」

烏丸先生「トータ、あら？」

7人「ありがたやー。」

烏丸先生「皆さん、何か楽しい事でも？」

カレン「あ！烏丸先生！良い物見せてあげマス！」

烏丸先生「ん？」

カレンが烏丸先生に見せた物とは。

その後久世橋先生と廊下を歩く。

烏丸先生「久世橋先生ってお休みの日は雰囲気違うんですね。」

久世橋先生「ん？」

烏丸先生「カレンさんが写真を見せてくれて。」

久世橋先生「あ!! 九条さん!!」

怒ってカレンに寄り詰める。

久世橋先生「フィルムを渡しなさい!」

カレン「せ、先生・・・アハハ! デジカメだからフィルムは無いです!」

久世橋先生「喧しい!!」

圭太「データならありますよ?」

そこにSDカードを持った圭太が来た。

カレン「ケイタ!? それは!」

圭太「こっそり抜いたのさ。」

久世橋先生「香川君、それを渡しなさい。」

圭太「お安い御用です。どうぞ。」

SDカードを渡す。

カレン「Noooo!!私のコレクションがー!!」

圭太「お前は少しは手加減しろよ。」

数日後、アリスはわらしべ長者の絵本を見てた。

アリス「わあ〜！私日本昔話大好き！わらしべ長者って凄く面白い！1本のわらが、最後にはお屋敷になるなんて！億万長者も夢じゃないね！」

忍「アリス、何を読んでるんですか？」

アリスが忍の方を見た。アリスの両目には？が浮かんでた。

忍「アリスが髪だけでなく目が金に!?!金じゃなくて金ですけど・・・そんなに貧しい思いをしてたなんてごめんなさい・・・」

アリス「違うよ!?!シノの家族に何時も感謝してるよ!?!」

わらしべ長者について話す。

忍「成る程。わらしべ長者ですか。やってみます？1人目は私で。」

アリス「え？ダメだよ！シノがくれる物は全部宝物だもん！でも、最終的にお宝を手

に入れるはずだから2人で山分けしようね！」

忍 「期待してますね！」

勇 「アリス、顔。」

1人目は勇に。

勇 「え？私と？交換する物によるわね。」

アリス 「最初はこれ！手のひらサイズで老若男女にオススメだよ！」

わらしべの代わりにこけし。

勇 「怖っ！うくんそうね、じゃあ、私はこれあげる。」

アリスに1枚の写真を渡す。

勇 「次の人は綾ちゃんよ。間違えないでね。検討祈ってるわ。」

アリス 「帰る頃にはセレブだよ。」

勇とアリスが企み顔してた。

忍 「2人共何で企み顔なんですか・・・？」

その後学校に来て、アリスが教室から出る。



圭太「アリス？何処へ行くんだ？」

アリス「わらしべ長者だよ。」

圭太「ああわらしべ長者か。つで何を持ってるんだ？」

アリス「これ！」

写真を圭太に見せる。

圭太「ああそれか・・・」

アリス「そうだ！ねえケイタも一緒に行こうよ！」

圭太「俺も？別に良いけど。」

こうして圭太も同行する事になった。

A組に来た。

綾「わらしべ長者？ああ昔話の。」

アリス「これと交換して欲しいの！」

綾「写真？な!？」

写真を見た綾が赤面した。写真に写っていたのは、綾と陽子の2ショットだった。

綾「せ、千円までなら・・・」

アリス「アヤ!? 現金はダメだよ!」

圭太「買収かよ!!」

綾「じゃあ私は、この本で良い?」

交換した物は、動物の赤ちゃんの本だった。

アリス「わーい! ありがとう!」

圭太「動物の赤ちゃんか。どれも可愛いなく。ん?」

綾は2ショット写真をじつと見る。

アリス「アヤはそんなにヨーコの写真が欲しかったの?」

綾「な!? 違うわ!! それじゃあ私に変態みたいじゃない!! 私はあまり2ショット写真なんてあまり持っていないし!! 嬉しくて!!」

圭太「おい本音出てるぞ?」

綾「つてそうじゃないて!!」

するとアリスと圭太が綾の肩に手を置いて頷く。

綾「何!? その悟りきつた顔!」

浩輔「おーい何やってんだー?」

圭太「浩輔か。アリスがわらしべ長者してるって言ってるな。」

浩輔「なあなあアリス！俺も同行可能か？」

アリス「良いよ。」

浩輔も加わった。

次に向かったのは職員室。久世橋先生に本を渡す。

久世橋先生「ぶつぶつ交換？」

アリス「はい！お願いします！」

久世橋先生「(何だか教師と生徒との距離が近過ぎる気がするわ……ここはビシッと！キョン!!) 交換する物が無いのですが……」

アリス「何でも良いんです。」

浩輔「可能な物でもありです。」

久世橋先生「(えっと、生徒が喜びそうな物……) はっ！単位！」  
アリス「先生!?!」

圭太「先生！現金NGです!!」

烏丸先生「何の話ですか？」

4人「ん？」

烏丸先生が話し掛けて来た。烏丸先生の頭にうさ耳付きの帽子が着けてあった。

久世橋先生「烏丸先生!?!その頭のは!?!」

圭太「コスプレですか!?!」

烏丸先生「アリスさんに似合うと思って。」

うさぎの帽子をアリスに被せる。

浩輔「先生!?!」

烏丸先生「あ、これも付けてみて? あー! 可愛い!!」

メガネもアリスに付けた。

アリス「あれ?」

がっかりしてしまった。

アリス「価値が、下がったような気がする・・・」

圭太「アリス大丈夫か!?!」

浩輔「でもこのアリス可愛いなおい!」

圭太「どうかしてるぞお前。」

次にC組に向かった。すると陽子が興味を持った。

陽子「何それいかす!!良いなアリスく!それ何処で手に入れたんだ?かつけー!!」  
圭太「何処が!」

陽子「冬場は帽子にも使えそうだし、実用性もバッチリだな!」

アリス「ヨーコ・・・」

陽子「ん?」

アリス「喜んで差し上げるよ!」

陽子「マジで!?やったー!」

浩輔「喜ぶのかよ。」

カバンから何かを探る。

陽子「わらしべ長者かく。私も何かあげないといけないな。」

浩輔「でも何か良い物でもあるのか?」

陽子「大丈夫!はい!」

取り出したのは水だった。

アリス「え?これ水?しかも水道水?」

陽子「ただの水じゃない!私の元気分も入ってる名付けて陽子水だよ!」

アリス「どうしよう・・・どんどん価値が下がってゆく・・・」

陽子「酷え!!」

圭太「陽子お前、卑猥な事言ったな。」  
陽子「あれ？」

水と交換成立し、次へ向かう。陽子は帽子を被って手を振った。  
アリス「最初は上手く行きそうだったのに意外と難しいよー。」  
浩輔「あの陽子、可愛い気がする。」  
圭太「そうか？」

その頃カレンは、中庭で穂乃花とベンチで座っていた。穂乃花はおしるこを飲んで、カレンはホットドッグを食べてた。

穂乃花「ふう〜、今日はポカポカしてて暖かいね〜。」

カレン「おしるこまだ売ってたんデスね。」

アリス「カレン!!」

そこにアリスと圭太と浩輔が来た。

カレン「あ！アリス！ケイタ！コースケ！風の噂で！な!?!」

するとカレンがホットドッグを喉に詰まらせて苦しむ。

アリス「カレン!？」

穂乃花「カレンちゃん!」

カレン「のど、喉に……」

穂乃花「しっかりして!」

圭太「そうだ!アリス!水だ!水を飲ませろ!」

アリス「あ!!」

カレンが水をごくごく飲む。

アリス「ふう、丁度水持ってて良かったよ。」

浩輔「水が無かったら即死だったな。」

圭太「無かったら普通に胸を叩けば良いだろ。」

穂乃花「大丈夫?」

カレン「あ〜!生き返りマシタ〜!わらしべってるって噂本当だったんデスね〜!」

アリス「わらしべってる?」

カレン「わらしべ長者になる事デス!」

すると穂乃花はカレンとアリスの会話を見てキラキラしてた。

穂乃花「ふ、2人は王室の方か何か?」

アリス「そんな訳ないよ!!」

カレン「ん?」

穂乃花「アリスちゃんだよな? 忍ちゃんから話聞いてるよ。今日は天使の輪っかが無いんだね。」

アリス「一体どんな話を?」

浩輔「(松原、忍の話に乗り過ぎだろ。)

アリス「宜しくね。えつと・・・」

穂乃花「松原穂乃花。穂乃花で良いよ。」

アリス「うん! それじゃあホノカって呼ばせてもらうね!」

穂乃花「そっちは確か、香川君だったね。この間カレンちゃんと一緒にお裾分けしてくれたよね?」

圭太「ああ、あの時か。そう、俺が香川圭太だ。宜しくな松原。」

カレン「それじゃあ! 私も交換デス!」

アリス「わーい! カレンはお嬢様だから期待出来そう!」

小さな小箱を取り出して開けた。中に入ってたのは指輪だった。

アリス「!?!」

すぐに箱を閉じた。



カレン「どうかしたデス？」

浩輔「指輪!? しかもダイヤ!?」

指輪を見る。アリスは怯えてた。

アリス「指輪!? 本物のお宝だよ・・・」

圭太「確かに本物だ・・・これ高いだろ・・・?」

カレン「そこまで高い物じゃないデス。」

アリス「あ、そうなんだ。」

浩輔「つでカレン、いくらだ？」

カレン「1万円デス。」

アリス「いつ1万!」

圭太「0・1カラット!」

穂乃花「流石セレブ!!」

アリス「カレン! 金銭感覚可笑しいよ!! 女子高生にとって1万円は大金なんだよ!!」

浩輔「男子高校生にとっても大金だよ!!」

圭太「こんな高価の物受け取れねえよ!!」

カレン「でも他に交換出来そうな物は無いデス。」

穂乃花「じ、じゃあ金髪は!」

アリス「いらないよ！私持つてるし。」

その後放課後。アリスはまだ怯えてた。陽子はアリスから貰った帽子とメガネを掛けてた。

アリス（本当に良いのかな・・・）

忍「アリスー！」

アリス「!?」

カレン「ヨーコー！」

浩輔「圭太ー！」

カレン・忍「帰るデース！（帰りましょう！）」

7人で下校。

忍「陽子ちゃんその帽子可愛いです！」

陽子「フフーン！だろー？」

圭太「お前それ絶対笑い取ろうとしてるだろ？」

綾「恥ずかしいから取りなさいよ。」

陽子「綾も被ってみる？」

綾「え!?!嫌よ！」

アリスはずっと怯えてた。

カレン「また明日デス！」

途中でカレンと別れた。

綾「また明日。」

陽子「またねー。」

圭太「じゃあな。」

浩輔「じゃあねー！」

忍「はい。また明日です。」

その後圭太達と別れた。

忍「そう言えば、わらしべリレーはどうなりました？」

アリス「それが・・・」

小箱の中の指輪を見せる。

忍「え!? 私の家にお父さんの金庫があります! そこに!」

アリス「落ち着いてシノ!!」

その夜の忍の部屋。

アリス「こんなに簡単に高価な物が手に入るなんて、嬉しいはずなのにこの罪悪感：指輪と一緒に手に入れた虚しさ・・・苦勞せずにお宝を手に入れた気持ち。この物語はそれを教えてくれた・・・」

忍（アリス・・・わらしべ長者ってそんな話じゃないです・・・）

勇「すごい!!」

アリス「あ、イサミ。」

指輪を見て勇は嬉しそうだ。

勇「ねえねえ! もう1回交換してよ!」

アリス「でも、これ以上価値がある物なんて・・・」

勇「じゃあ忍をあげるわ。」

忍「え?」

アリス「あ!! これ以上無い宝物だよー!!」

忍「もうアリスったらー。」

忍と交換成立し、アリスが忍に抱き付く。そして勇は指輪を手に入れた。

勇「うふふ。」

作戦成功。

おまけ。 きんモザ版鶴の恩返し。

忍「絶対に覗いちゃダメですよ?」

そつと戸を閉める。

アリス「シノ？」

勇（隠れて一体何を？）

そして勇は勢い良く戸を開ける。

勇「忍が私に隠し事なんて100年早いわ！」

忍「きゃー！内緒に作ってたアリスのお洋服バレちゃいましたー！」

アリス「シノ・・・！」

おしまい。

「END」

## Episode 18 「きになるあの子」

後日の休日。7人は無謀パフエがあるレストランへ向かっていた。

浩輔「無謀パフエかあ。俺も食ってみたいな。」

圭太「途中でぶっ倒れそうだぞお前。」

陽子「えーっと、確かこの辺りを・・・あ！ここだ！」

アリス「うわー！可愛いお店だね！」

目的のレストランに到着した。

忍「そこはかとなくイギリスの香りが！」

綾「そう？」

浩輔「その香りは何処から？」

カレン「さあ行くデス！」

陽子「よし！」

綾「待って陽子！チャレンジ失敗した時の為にちゃんとお金持って来た？」

陽子「大丈夫!!絶対成功するから!!」

綾「いくら持って来た!？」

忍「えっと……」

浩輔「陽子、お前からフラグしか醸し出してないぞ？」

圭太「確かに、途中でぶっ倒れそうだな。」

陽子「私を信じろ！私は負けない！」

そしてレストランに来店。

穂乃花「いらっしやいませー。え!?!」

店の中にウエイトレス姿の穂乃花が居た。7人が来店したのを見るとすぐに後ろに向いた。

穂乃花の母「いらっしやいませー。」

穂乃花（ど、どうしてカレンちゃん達が!?!）

穂乃花の母「穂乃花お客さんよ？お水持って行って。」

穂乃花「う、うん。（このまま出て行ったらバレちゃう・・・恥かしい!）」

右のボックス席に座った陽子達5人。圭太と浩輔は左のボックス席に座ってる。穂



乃花が水を持って来たが。

穂乃花「い、いらっしやいませ〜！」

陽子「何だ!？」

バレたくない穂乃花が猫の着ぐるみを被つてた。

カレン「その声はホノカデス！」

穂乃花（バレてる!?)

あつさりバレてしまった。

陽子「ほのか？」

綾「もしかして松原さん？」

バレてしまった穂乃花は着ぐるみを外した。

綾「バイト？」

陽子「どう言うバイトなんだ？」

浩輔「よう松原！」

穂乃花「白川君と香川君も来たんだね。」

圭太「なあ松原、ここでバイトしてるのか？」

穂乃花「て言うか実は、ここ私のお家なの。」

5人「えー!？」

圭太 「マジか!？」

浩輔 「凄いな!!」

ここのレストランは穂乃花の家だった。

穂乃花 「お休みの日は時々お手伝いしてて。」

カレン 「看板娘! 看板娘デス!!」

アリス 「お店のアイドル!!」

穂乃花 「こ、声が大きいわ・・・」

忍 「陽子ちゃんとは初めてですよね? 同じクラスの松原穂乃花ちゃんです。」

陽子 「ヤホー! 宜しく穂乃花!!」

綾 「ちょ!?! いきなり下の名前で!?! 馴れ馴れし過ぎでしょ!?!」

陽子 「昨日の敵は今日の友! って言うだろ?」

綾 「敵!？」

浩輔 「成程、強敵と書いて友って読むしな。」

圭太 「どう言う事だ?」

陽子 「私の事は陽子って呼んでね。」

穂乃花 「うん! 陽子ちゃん。」

陽子 「それじゃあ早速・・・この超無謀パフェ一つ!!」

穂乃花「チャレンジジャーだね。畏まりました。他の皆は？」

カレン「そうデスねー。」

穂乃花「あ！」

カレンがお嬢様雰囲気を出してる。

穂乃花（こんな接客じゃ失礼かも・・・もつと丁寧な腰を低く・・・）

突然その場に腰を低くした。

穂乃花「お嬢様！どうぞ！何なりとお申し付け下さい！」

圭太・浩輔「ブハア!？」

水を飲んだ圭太と浩輔が水を吹いた。

カレン「Oh!メイド喫茶!!」

圭太「松原ってああ言う子なのか？」

浩輔「何時もカレンを見るとキラキラ見てるからな。松原ー！俺オムライス！」

圭太「じゃあ俺カルボナーラ。」

穂乃花「あ！はい畏まりました！」

数分後。

穂乃花「お待たせしましたー。」

遂に無謀。パフェがその姿を現した。プリンやアイスクリーム、メロンやマカロンや大量のクリーム等が乗ってあった。

忍「実物は凄い迫力です……！」

陽子は目をキラキラしながら見てた。

圭太「なんじゃありや……!?!」

驚きながらカルボナーラを食べてる圭太。

穂乃花「無理しないでね？」

陽子「大丈夫！余裕！」

綾「その自身は何処から来るの……？」

陽子「私女の子だから甘い物大好きなんだ！てへっ！」

綾「この状況で女子アピール!?!」

浩輔「今更そう言っても無理あり過ぎだろ。」

呆れながらオムライスを食べてる浩輔。

パフェのクリームを口に運んだ。

陽子「美味しい！幸せ!!」

そのままパフェをどんどん食べる。

綾「所で、もし完食出来なかったらお代はいくら？」

穂乃花「8000円だよ。」

綾・アリス「え!?!8000円!?!」

アリス「ヨーコ!!頑張って!!」

綾「陽子なら出来るわ!!ファイト!!」

陽子「お!ありがとう皆!」

忍「陽子ちゃん凄いです!」

アリス「ああ、見てるだけでお腹いっぱいだよ・・・」

忍「見てたら私も食べたくなってきました。」

アリス「え!?!」

綾「何か頼む?すみませーん!」

カレン「はいデス!ただいまー!!」

そこにウエイトレス姿のカレンが来た。

忍「キャアア!!」

綾「何してるのカレン!?!」

穂乃花「カレンちゃんもお手伝いしてくれるって。」

カレン「Yeah!!憧れのバイト体験デス!!」

忍 「素敵!! 穂乃花ちゃん! ありがとうございます!!」

圭太 「このレストランってバイト募集してるのか?」

浩輔 「いや、そんな張り紙は無かったぞ。」

忍 「じゃあ注文良いですか?」

カレン 「畏まりデス。」

穂乃花 (カレンちゃん、なんて優雅な物腰。何時ものお店がまるで外国のおしゃれなレストランだよ! 私も見習わなくちゃ!)

忍 「っでお願いします。」

カレン 「喜んで! タイショー!! ハンバーグセット一丁!!」

穂乃花 「カレンちゃんそれは違う!!」

浩輔 「ラーメン屋にチェンジ!」

数分後、ハンバーグセットが来た。忍が美味しそうに食べる。

忍 「美味しー!」

綾 「カレン、撮ってあげる。」

カレン 「可愛くお願いシマス! Yeah!!」

指鉄砲のポーズを取る。綾が携帯で写真を撮った。

綾「後でメールで送ってあげるわ。」

忍「綾ちゃん私にも！」

圭太「おい忍！お前携帯持ってないだろ？」

忍「プリントで！」

浩輔「そつちかよ!!」

綾「はいはい。」

穂乃花（良いな、私もカレンちゃんのメアド教えて欲しいな・・・）

数分後、忍がハンバーグセットを完食した。するとそこに。

忍「うわー!!」

ウエイトレス姿のアリスが来た。

アリス「えへへ、エプロン借りたよ。」

忍「ウエイトレスエンジェルアリスちゃん!!オススメはどれですか？」

アリス「え!?えつと・・・ぜ、全部美味しいので全部オススメですよー!」

忍「お店ごといただきますー!」

アリス「畏まりましたー！」

浩輔「なんかもう大食い番組みたいな雰囲気になったな。」

圭太「いや全部は無理だろ。そう言えば陽子は？」

当の陽子は、止まっていた。

圭太「あれ？陽子がフリーズしてる？」

陽子（ん？あれ？なんか一向に減らない。それに、段々寒くなってきた……！体が、パフェを拒んでる……まさか……私が負けるなんて……無念!!）

パフェ対陽子。結果パフェの勝利。負けた陽子がぶつ倒れた。

忍「陽子ちゃん!？」

綾「陽子!しっかりしてー！」

アリス「もう十分だよー！」

カレン「その名の通り無謀だったデスカ!恐るべし……！」

アリス「後は私達が食べるから。」

綾「陽子は頑張ったわよ。」

陽子「綾……」

綾「この経験で得られた事は沢山あったわ。主にカロリーとか!!」

陽子「む?!無駄な努力……!!」



浩輔「じゃあ残りは俺達で駆除しようぜ！」

圭太「害虫駆除みたいに言うなよ！」

別の日。

穂乃花の母「おめでとうございます！完食成功です！」

無謀パフェを時間内に完食出来たお客が現れた。そのお客の正体は。

烏丸先生「ふうく。ご馳走様でした。」

なんと烏丸先生だった。

烏丸先生（美味しかったけど流石に食べ過ぎ、ううん。1ヶ月は甘い物控えるから大丈夫よ！）

こっそり店から出ようとする。

烏丸先生（もし生徒に見付かったら恥ずかしいわ。早い所お店から出て・・・）

穂乃花「凄い・・・」

烏丸先生「はっ!!」

松原穂乃花。烏丸先生の秘密を目撃した。

後日、陽子と綾とカレンと浩輔が携帯を弄つてた。陽子が3人にメール送信した。

綾「陽子のメールって何か素っ気ないわ。」

陽子「そう?」

浩輔「例えば?」

カレン「絵文字が少ないんデスよ。アヤヤを見習つてもっとハートをLOVEさせるデス!」

綾「そんなに使つてないわよ!」

浩輔「そうだったのか綾?」

綾「違うわよ!浩輔本気にしないでよ!」

陽子「うくんそれじゃあ。」

再びメール送信した。3人の携帯に受信した。メールの内容は

『こんな感じでどう???どうでもいいけどさー??お腹す??い??た??ね??!』

だった。カレンは怖じ気付いてた。

浩輔「うぜえ・・・」

カレン「ヨーコが言ってると思うと鳥肌が凄いデス・・・」

陽子「言われた通りしたの!!」

だが綾は満足してる模様。

穂乃花（カレンちゃんって、やっぱりメールでも片言なのかな？メアド聞いたらすんなり聞いてくれそうだけど。もしかしたら・・・）

カレンにメアドを聞きに行くが。

SP『そう言うのは事務所を通してもらいませんと。』  
穂乃花『はぶらせてる!?!』

と言う想像を考えてしまった。

穂乃花 「ありえるよー!!!」

忍 「穂乃花ちゃん!? 何処か具合でも!？」

穂乃花 「忍ちゃん! ううん、何でもないよ。あ! 肩に金髪が!」

忍の制服の肩部分に1本の金髪がくっ付いてた。

忍 「このウェーブはアリスのですね。」

穂乃花 「うわあー。」

忍 「ゴクリ! 財布に入れたら金運アップしそう・・・!」

穂乃花 「だよね! ついていや! それはどうかかな!？」

忍 「実は私、穂乃花ちゃんとは一度金髪愛について語り合いたかったのです!」

穂乃花 「私も!」

その頃アリスはA組に向かっていった。後ろから圭太が追い掛ける。

圭太 「おいアリス待てよ!」

アリス 「シノー。ん?」

圭太 「どうした? ん? 忍と松原?」

忍と穂乃花が金髪愛について話し合っていた。

アリス「何だか凄く盛り上がってる……」

圭太「金髪って言ってるぞあの2人……」

そして忍と穂乃花は、握手をした。

忍・穂乃花「金・髪・同・盟！」

金髪同盟結成。

アリス「何がどうなったの!?!」

圭太「何だよ金髪同盟って!?!」

穂乃花「ふう〜。こんなに気が合うなんて。」

忍「うふふ。穂乃花ちゃんはカレンのメールアドレスを知りたいのですね?大丈夫で

す!アリスもカレンも中身は普通の女の子です!ストレートにGOですよ!」

穂乃花「ありがとう!勇気を出して聞いてみるね!」

勇気を貰い、穂乃花がカレンの方へ向かう。それと同時にアリスが忍の後ろに抱き付く。

忍「どうかしましたかアリス?」

アリス「何でもないよ〜!」

圭太「母親に甘える子供かよ。」

穂乃花（考え過ぎかもしれないけど、いきなりメアド聞くななんて何かナンパっぽくないかな？）

カレンにナンパしてる自分を想像する。

穂乃花『メアド教えてYO!』

想像終了。

穂乃花（みたいな!）

綾「松原さん。」

そこに綾が穂乃花に話し掛けた。

綾「さつきからジツと見てるけど、カレンに何か用？」

穂乃花「違うよ! チャンスを伺って! ナンパじゃないよ!」

綾「え!?!」

そこで綾に事情を説明する。

綾「カレンのメールを。成る程そう言う事ね。」

穂乃花「うん。あ！それから私も苗字じゃなくて穂乃花で良いよ？」

綾「そう？じゃあ穂乃花、穂乃花は何時もカレンにお菓子あげてるでしょ？一緒に

メッセージ入れるとかどう？」

穂乃花「ナイスアイデア！」

作戦実行。

穂乃花「カレンちゃん。お菓子いる？」

だが穂乃花の顔が真っ赤に染まっていた。かなり緊張してる模様。

穂乃花「な・・・何も入ってないから・・・大丈夫だよ・・・安心して・・・！」

綾「怪し過ぎる!!」

作戦失敗。

今度は忍と圭太が相談に乗る。

穂乃花「どうしよう！カレンちゃんが警戒ムードだよ!!しかもメッセージ入れ忘れちゃった!!」

圭太「ダメじゃん！」

綾「ドジだわ！人の事言えないけど!!」

するとカレンが教室から出るのを目撃した。

穂乃花（やっぱり私なんて、遠くから見つめてるのがお似合いだよ……身分違い……）

自分を気弱なメイドで、カレンを優雅なお姫様と例えた。

忍「穂乃花ちゃん、素晴らしい設定です！」

綾「何が……？」

圭太「何処が……？」

忍「私達金髪同盟！穂乃花ちゃんを応援しています！」

穂乃花「忍ちゃん……分かった！私もう1回行ってみるね！」

走ってカレンの方へ向かう。

忍「穂乃花選手！ゴールに向かって走り出しました！」

綾「実況!?!」

圭太「マラソンかよ！」



だが走ってる途中転んでしまった。

圭太「転んだ!？」

忍「転びましたー!」

綾「何処までもドジ!？」

カレン「ホノカ!大丈夫デス!？」

転んだ穂乃花に気付いたカレンが手を差し伸べた。

穂乃花（方向が眩しいよ・・・）

カレンから金色のオーラが放たれた。

穂乃花「あのねカレンちゃん、良かったら、メアド教えて・・・」

カレン「Yes!! そう言えばホノカのアドレス聞いてなかったデス! うっかり八兵衛

デス!」

穂乃花「だったら私は久兵衛だね。」

カレン「どう言う意味デス?」

こうして穂乃花はカレンにメアドを聞く事に成功した。

その夜、穂乃花の携帯にカレンからのメールを受信した。

穂乃花（カレンちゃんはメールでは片言じゃありませんでした。）

その翌日。穂乃花の目の下にクマが出来てしまってる。

忍「穂乃花ちゃん！目の下にクマが!？」

アリス「大丈夫!？」

圭太「おい松原!？眠そうだぞ!？」

浩輔「昨日何かあったのか!？」

穂乃花「カレンちゃん・・・中々メールやめてくれなくて・・・」

圭太「ああ・・・浩輔、カレンに言っておいてくれるか？程々にしてやれって。」

浩輔「合点承知。」

その後、廊下に1人の教師が歩いてた。2-A担任の久世橋朱里だった。最近久世橋

先生は、教師として自信が付いている。

女子トイレ。鏡で自分の顔を見る。

久世橋先生（いけない顔が緩むわ）。こんな顔、生徒に見られたら・・・）

カレン「じー。」

久世橋先生「はっ!!」

カレンに見られてしまった。

図書室では、アリスが古典の本を読んでいた。するとアリスは、カレンと久世橋先生を見た。

カレン「先生一人で笑ってたデス。」

久世橋先生「わ、笑ってません・・・!変な言い方しないで下さい・・・!」

アリス「カレン、先生こんにちは。ねえカレン、この文法分かる?」

カレン「分からないデス。」

アリス「見てから言っつてよ〜!」

久世橋先生「どれです?」

アリス「あでも、古典の文法で。」

久世橋先生「(古典……?) 任せて下さい! 私もちよつと前まで女子高生だったんですから!」

アリスに古典を教える。

久世橋先生「国語は5段階で、大体4か5だったんですよ。」

アリス「凄くいい!」

久世橋先生「信じて下さい……!」

アリス「先生!?!」

その後、烏丸先生に教えてもらうが。

烏丸先生「担当教科以外答えられないわ……特に古典は苦手で……」

カレン「じゃあ、動物を逆さまにした国は分かりマス?」

アリス「カレン! それはナゾナゾだよ!」

烏丸先生「ルーマニア。逆から読むとアニマル。」

カレン「早い!! 即答デス!!」

久世橋先生「す、凄い……流石です烏丸先生……」

そして放課後、7人が廊下を歩いてると、周りから吹奏楽部や野球部等の音が響き渡ってた。

アリス「放課後は部活動の音でいっぱいになるねー。吹奏楽やボールの音とか。」  
忍「ですねー。」

浩輔「圭太は運動部とか似合いそうだよな。」

圭太「そう言うお前は文化部だよな。」

アリス「あ！先生ー！」

烏丸先生「皆ー！」

目の前に烏丸先生と久世橋先生を見付けた。

烏丸先生「今帰り？」

忍「はい。」

久世橋先生「皆さん帰宅部なんですか？」

圭太「ええまあそうですね。」

アリス「シノ部です！」

久世橋先生「はあ。」

浩輔「まだやってんのかよアリスが設立した部活は。」

アリス「先生は学生の頃は何部だったの？」

久世橋先生「学生の頃、私は陸上部でした。」

陽子「運動部!? 何か以外！」

久世橋先生「そうでしょうか？」

浩輔「あの時俺とカレンが全力で逃げてもすぐに捕まった理由はこれだったのか。」

カレン「凄いデス！久世橋先生走るの早いデスカ!！」

久世橋先生「（これは、尊敬の眼差し・・・）いくら九条さんの逃げ足が速くても、追

付けるくらいには走れますよ？」

カレン「ハッ!!」

圭太「じゃあ烏丸先生は何部だったんですか？」

烏丸先生「先生は演劇部でしたよ。」

陽子「おー！」

圭太「こつちも以外だなー。」

忍「先生のお芝居見てみたいですよ！」

烏丸先生「え!? そんな急に!? でも頼まれたら断れませんね。先生！頑張りましたよ。」

！」

久世橋先生「え!?私も!？」

烏丸先生「シンデレラやりまゝす！」

シンデレラ役は烏丸先生。継母役は久世橋先生。

烏丸先生「ゴシゴシ。ゴシゴシ。」

久世橋先生「こんなな埃が。全く愚図ねシンデレラ。」

烏丸先生「ごめんなさいお母様。」

だが烏丸先生は笑顔のままだった。

陽子「うくん。」

綾「何か笑顔だから、嫌そうじゃないわ。」

烏丸先生「シンデレラにとつてはご褒美なんです!!」

久世橋先生「勝手に設定変えちゃダメです！」

浩輔「そのご褒美俺に分けて下さい!!」

圭太「お前DMに覚醒したのか？」

シンデレラ終了。

陽子「先生達の高校時代かあ〜。」

忍「どんな風だったんでしよう?」

綾「興味あるわ!」

烏丸先生「先生と久世橋先生はこの学校の卒業生なんですよ。」

アリス「え!?! そうなんだ〜!」

圭太「学校のOGか。」

陽子「クツシーちゃんも?」

久世橋先生「はい。」

陽子「もしかして同級生!?!」

久世橋先生「いえ、私達は2個違いで。」

烏丸先生「はっ!ダメダメ! デリケートなお年頃なんです!」

久世橋先生（言わない方が良い・・・?）

カレン「学生時代の先生ってどんな感じだったんデスか!?!」

久世橋先生「どうって、至って普通でしたよ?」

カレン「先生の制服姿想像付かないデス!」



久世橋先生「失礼ですね！ちゃんと似合っていました！流石にこの年では着れませんけど。」

烏丸先生は忘年会で着ました。すると何かを取り出した。

烏丸先生「実は女子高生時代の写真持ち歩いてるんですよ？」

久世橋先生「何故!？」

圭太「持つて来てるんですか!？」

7人が烏丸先生の学生時代の写真を見る。

綾「うわぁー！面影ありますねー!！」

陽子「リボンの色が今と違うー!！」

カレン「まだメガネ掛けてないデス!！」

アリス「烏丸先生可愛いー!！」

忍「当時から素敵ですねー!！」

浩輔「ヤバい、ナンパしちやいそう!！」

圭太「やめとけ。」

久世橋先生「え!？」

烏丸先生「ん？何か？」

久世橋先生「いえ！私も見るの初めてでびっくりしただけです!！」

烏丸先生「びっくり?」

久世橋先生「あはは・・・」

烏丸先生の学生時代の写真を見て思い出した。

回想。久世橋先生の学生時代。中庭で1人黄昏てる。

朱里（入学して数日経つけど、まだ慣れないな・・・）

久世橋朱里・当時15歳。高校生活にまだ慣れてない模様。

朱里（上手くやって行けるかな・・・プラス思考！プラス思考！）

歩いてる途中何かを踏んだ。先輩のお尻だった。

朱里「きゃ!!」

??? 「ん?」

朱里「ごめんなさい!大丈夫ですか!?(先輩だ、どうしよう・・・)」

その先輩は、当時17歳の烏丸先生だった。

さくら「大丈夫大丈夫。うふふ。LL教室の鍵落としちゃって。でも見付けたわ」。

朱里「はあ〜。」

さくら「それで鍵閉めに行くよう頼まれたんだけど、LL教室って何処だったかしら〜?」

朱里（え!?!先輩!?!）

さくら「まあ、よくある話よね〜。」

朱里「ないです!!」

その日の昼。購買部でパンを買いに来た。

数分前朱里がさくらにLL教室を案内した。

さくら『わあ〜!案内ありがとう!』

朱里（変な先輩だったなー。）

購買部のおばさん「売り切れだよー。」

朱里「え!？」

売り切れてしまい、朱里は泣いてしまった。そこにさくらが朱里の肩に手を置いて、ブレザーからホットドッグを取り出した。

さくら「良かったら、さっきのお礼。」

朱里「何処から出したんですか!？」

中庭でホットドッグを食べる。さくらが朱里の事情を聞いた。

さくら「そっか。高校生活慣れないか。でも大丈夫よ。すぐに慣れるわ。そうだ！私が応援歌歌ってあげる！ト〜テムポール〜フワフワト〜テムポール〜フワフワ」  
ワ♪高校生活〜フワフワ♪ト〜テムポール〜フワフワ♪」

朱里（熱唱している・・・どうしよう・・・）

意味が分からない応援歌に、朱里はただ静かにドン引きしてる。

そして数分後、応援歌を歌い切ったさくらに朱里は拍手する。

朱里「ありがとうございます・・・」

さくら「私、この学校が大好きで、将来この先生になるのが夢なの。とつても素敵  
な学校だから、あなたも高校生活楽しんでね。やだ、私、この学校の回し者みたい。」  
すると朱里は笑った。

さくら「あ！笑った。」

そして回想が終了した。

久世橋先生「どう考えても烏丸先生だった！何で今まで気付かなかったんだらう!!」

烏丸先生「久世橋先生？」

陽子「2人は先輩後輩の関係だったんだー!!」

浩輔「これまた以外ですね！」

久世橋先生「そ、そうなんです！烏丸先生！今日から先生の事を先輩と呼んで良い  
ですか!？」

烏丸先生「た、確かにちよつとだけ上ですけど・・・同じ学園の担任同士、上下関係  
は無しで・・・」

久世橋先生「ど、どうですよ！すみません！」

圭太「どつちですか!？」

そして7人は帰る事に。

忍「先生さようなら〜！」

5人「さようなら〜！」

カレン「サヨウナラー！」

烏丸先生「はいさようなら〜。」

久世橋先生「気を付けて〜。」

7人は下校する。

久世橋先生「はあ、やっぱり烏丸先生には敵いません。」

烏丸先生「そんな事ありませんよ？久世橋先生、私より全然立派じゃないですか。何気無い言葉でも、生徒は覚えてたりもします。きっと先生に救われてる生徒は沢山居ますよ。」

学生時代を思い出して、久世橋先生が再び元気を出した。

久世橋先生「はい!! 本当に!!」

数日後。忍が烏丸先生に質問した。久世橋先生がこっそり観察する。

忍「烏丸先生は憧れの人は居ますか？私は先生です！」

烏丸先生「う〜んそうね〜・・・福沢諭吉かしら？」

久世橋先生（先生流石です!!）

福沢諭吉に憧れてると言う事は、学問のすゝめや教育者について勉強してるかと思ってる。

烏丸先生（食べ放題行きたいわ〜。）

だが烏丸先生は1万円札の福沢諭吉の方に憧れてた。

「END」

# Episode 19 「マイ・ディア・ヒーロー」

校門前では、烏丸先生と久世橋先生が立っていた。

久世橋先生「おはようございます。」

烏丸先生「おはようございます。もう皆さん夏服ですね。」

久世橋先生「今日は暑いですからね。」

女子生徒「おはようございます。」

久世橋先生「おはようございます。」

烏丸先生「おはようございます。先生はクールビズとかしらないんですか？」

久世橋先生「え!? 一応夏服なんですけど・・・暑苦しいでしょうか・・・?」

烏丸先生「いえ、イメチェンしたらどうかかな? つて。夏は可愛い感じが良いと思います。」

久世橋先生「可愛い? でも・・・」

烏丸先生「例えば・・・こう言うのは?」

久世橋先生「着ぐるみ!?!」

何時の間にかうさぎの着ぐるみを着ていた。



烏丸先生「ロッカーに入っていました。」

久世橋先生（クールビズの話は何処へ・・・？）

烏丸先生「夏でも耐えられるかちよつと着てみます。」

久世橋先生「や、やめた方が・・・！」

着ぐるみを着て生徒達に挨拶するが、生徒達は怖がっていた。そして烏丸先生がフラフラ倒れた。

烏丸先生「ダメでした・・・」

久世橋先生「先生ー！私の為に！」

今日の放課後。カレンが携帯を見て喜んだ。そしてカバンを持って帰る。

カレン「お先デース！」

穂乃花「またねー。」

香奈「また明日ー。」

そしてカレンはC組に来た。

カレン「スママセーン！今日はお先に帰るデース！」

陽子「何か用事？」

圭太「嬉しそうだなカレン。何かあったのか？」

カレン「実はずっと欲しかった限定品のネットクレスをパパが買ってくれたデス！」

圭太「ネットクレス？」

アリス「良かったねカレン！」

カレン「また明日デース！」

ご機嫌上昇で下校する。

綾「カレン、どうかしたの？」

陽子「パパにネットクレス買ってもらったって。」

圭太「しかも限定品。」

忍「ご機嫌でしたね。」

アリス「カレンはパパと本当に仲良しなんだよねー。」

陽子「パパっ子か。あ！パパっ子って何か良いなー！美味しそう!!」

圭太「そっちかよ!!（あれ？限定品のネットクレスってもしかして・・・）」

その夜、ある事件が起きた。忍の家にインターホンが鳴った。

忍「はい。」

アリス「宅配便かな？」

忍「どちら様ですか？」

ドアを開けると、何と泣いてるカレンが立っていた。

アリス「カレン!?! どうしたの!?! 先に帰ったんじゃない?!」

忍「何かあったのですか!?!」

カレン『ああアリス、シノー！話を聞いて。私ショックのあまり気が動転してしまって、ここまで来てしまったの。あ、もちろんママには電話したけど。聞いて！パパが、私のパパが嘘をついてたの！私のためだなんて言ってたけど、本当のことちゃんと言って欲しかった！ひどい！喜んでた私、バカみたい！パパなんて大嫌い！大嫌い！もう家に帰らない!』

忍「早口!?!」

カレンがものすごい早口で英語を言った。

アリスが事情を聞く。

忍「カレンは何て？」

アリス「パパと大喧嘩したから家出したって。」

忍「家出!？」

なんとパパと喧嘩して家出したらしい。

カレン「だってパパが・・・ネットクレス無理だったって・・・買ったって言ったの嘘で、私が悲しむ顔を見たくなかったって！」

アリス「優しい嘘は時に人を傷付ける！」

忍「アリス!？」

アリス「でも、カレンのパパは悪くないよ？さあ今からでも仲直りを！」

カレン「嫌です！私今日はシノの家に泊まるです！」

アリス「ええ!？」

カレン「お願いです！ママには連絡済みなので！パパと顔合わせ辛いです・・・」

アリス「だ、ダメだよ！急に言っても迷惑でしょ!？」

忍「私は寧ろ大歓迎ですが！」

アリス「シノ!？」

カレン「この通りです！迷惑掛けませんので！」

アリス「え!？」

なんとカレンは忍の母にも交渉する。

忍の母「金髪少女が2人も！良いわよ！ジャンジャン泊まってっ！」

アリス「ママまで!?!」

交渉即成功した。

数分後。勇が帰って来た。

勇「ただいまー。ん？」

玄関前でカレンがお迎えしてた。

カレン「おかえりなさいませ！撮影お疲れ様デス！お荷物お持ちシマス！」

勇「あれ？カレンちゃんだ。」

カレン「あ！そのアングル良いデス！」

ポケットからデジカメを出してシャッターを何枚も切った。

カレン「流石イサミ！何処を撮っても絵になるデス！」

勇「何事？」

アリスが勇にカレンが居る理由を話した。

勇「そう、カレンちゃんが家でねー。」

カレン「ジャーンデス！」

忍から服を借りたカレン。青のワンピースを着ていた。

忍「制服のままだとシワになってしまっているので。私の服ですが。」

勇（あれ、忍が着ても似合わない奴だわ。）

カレン「何だかホームステイみたいデス！私ちよつと憧れてたデス！」

忍「本当ですねー！」

カレン「そうデス！お部屋ここで十分なので。」

トイレを部屋変わりにしようとする。

アリス「住む気なの!？」

リビングで夕食を頂く。今日のおかずは鮭と冷奴。

カレン「和食美味しそうデス！」

アリス「シノのママは和食が得意なんだよ？」

カレン「私の家はママがイギリス人なので洋食が多いデス。」  
勇「へえー。得意料理は？」

カレン「ミートパイデス！」

そして味噌汁を啜る。

カレン「美味しいデス。この味噌汁こそお袋の味デス。」

勇「ミートパイじゃなくて？」

その後カレンは夕ご飯を全部食べた。

カレン「ご馳走様でした。ふうく、美味しかったデス！」

忍の母「お粗末様でしたー。」

カレン「あ！お片付け手伝うデス！」

忍の母「良いのよ。座ってて。」

カレン「手伝わせて下さい！」

皿を持って片付けを手伝う。

忍の母「そう？悪いわね。」

カレン「お邪魔するデス！」

忍の母の隣に立ってお片付けを手伝う。それを見たアリスがすぐに食べ終えて片付けを手伝おうとする。

アリス「私も手伝う！」

忍の母「え？」

カレン「アリス狭いデス！」

アリス「カレンだけポイント稼ぐなんてずるいよ！」

勇「何処で覚えたのかしら？」

夕食を食べ終えて、忍は張り切っていた。

忍「今日なら行ける気がします！1人ずつだと時間が掛かるから皆で入ろうって！」  
だがそうは行かなかった。既にアリスとカレンが浴室で風呂に入ったた。

勇「ん？」

トイレのドアの横で悲しんでる忍を見付けた。

忍「私だけ・・・仲間外れ・・・」

勇「あんな小さなお風呂に3人も入れる訳ないでしょ？」



その頃アリスとカレンは、風呂から上がって髪を乾かしていた。

カレン「シノの家のお風呂も楽しいデス！」

アリス「カレン。」

カレン「ん？」

アリス「泊まるのは良いけど、やっぱり一度パパと話した方が良いよ？」

カレン「あ．．．はい。後で電話掛けマス。」

アリス「うん。」

そしてカレンは勇気を出してパパに電話する。

アリス（カレン、仲直り出来ると良いけど。）

カレン『．．．パパ？さつきはごめんね。もう怒ってないよ．．．えっ？本当？パパ大好き、愛してる!!』

突然カレンが嬉しそうに叫んだ。

カレン「アリス聞いて下サイ！ネックレス、パパの権力で手に入れたそうデス！やっぱりパパは超格好良いデス！」

なんと限定品のネックレスを権力で買えたのだった。

アリス「そ、そう・・・」

カレン「そうデス！この喜びを皆に分けてあげマス！」

皆に喜びを分けようと電話する。

最初は綾。

綾「カレン、どうしたの？珍しいわね。」

カレン『ウフフー！アヤヤに喜びをプレゼントしちやいマス！』

綾「ん？」

次は陽子。

陽子「あれ？カレン？」

カレン「ウフフー！陽子に喜びをプレゼントしちやいマス！」

陽子「何だそれ？アハハ！カレンは本当何時も元気だなー。」

次は浩輔。

浩輔「珍しいなカレン。そつちから電話して来るなんて。」

カレン『ウフフー！コースケに喜びをプレゼントしちやいマス！』

浩輔「え？喜び？何か欲しいかもな。」

最後は圭太。

カレン『ウフフー！ケイタに喜びをプレゼントしちやいマス！』

圭太「え？いきなり何だ？俺何かやったか？」

すつかりカレンは元気を取り戻した。

忍「カレン、仲直り出来て良かったですね。」

カレン「アリスのアドバイスのお陰デス！やっぱりアリスは私のヒーローデス！」

アリス「私はお姉ちゃんだよ！」

その頃圭太は、ネックレスの事を思い出した。

圭太「限定品のネックレス、母さんに聞いたら。」

夕方帰って母に聞いたら。

圭太の母『限定品のネックレス？あああれね！昨日最後の1つがギリギリ残ってたから買った！』

圭太『やっぱり、昨日母さんネックレスしてたからなく、つでそのネックレスいくらしたんだ？』

圭太の母『100万円。』

圭太『ぐはっ!?!』

回想終了。

0 圭太「あの時カレンに言っておいた方が良かったかもな。それにしても母さん、10万のネックレス無理して買いやがって。明日カレンに謝るか。」

その頃忍達は部屋に居た。時間は夜の10時前。

忍「さくて、そろそろ寝ましようか・・・」

カレン「え!? 早い! まだ10時前デスよ?」

忍「カレン、私のベッドで寝ますか?」

アリス「ダメダメ! 2人用じゃないし、カレン寝相悪いよ?」

忍「大丈夫です! カレンを壁側にして、万が一私がベッドから落ちても天国です!」

アリス「地獄だよ!」

忍「今日は予期せぬお泊まり会で楽しかったですね。」

カレン「泊めてくれてありがとうデス。今度は是非、イギリスの私の家にホームステ

イしてに来て下サイ!」

アリス「カレンの家はシノも見た事あるはず。大きいよー! お城みたいなの!」

忍「確かあの時の。」

ホームステイし、アリスが忍にカレンの家を紹介した時を思い出す。

カレン「皆一気に泊まりに来て余裕デス! 100人乗っても大丈夫! Yeah!!」

忍「何かあまり大きい感じがしなくなってきたのですが。そろそろ寝ましよう。電気

消しますね。おやすみなさい。アリス、カレン。」

カレン 「おやすみデス！」

アリス 「おやすみなさい。シノ、カレン。」

翌朝。

アリス 「もうカレンったら、私の布団取っちゃってるよ……2人共起きて？遅刻しちゃうよ？ほら早くー！」

忍 「後5分……」

カレン 「ママ、後10分……」

アリス 「もう仕方無いなー。じゃあ10秒だけだよ？いーち。だがアリスも寝てしまった。」

忍の母 「こらー！3人居るのに全員寝ないのー！」

その後やっと3人が起きた。

陽子達は登校してる。

綾「昨日の夜カレンから電話があったわ。」

陽子「綾も？私も！特に用事は無かったけど。」

浩輔「俺もカレンから電話が来たぞ？圭太も来たのか？」

圭太「まあな。何か急に。」

忍「おはようございますー！」

4人「ん？」

後ろから忍とアリスとカレンが来た。

アリス「おはよー！」

カレン「ゴジヤイマース！」

綾「おはよう。」

陽子「あれ？カレン？なんでしの達と一緒に登校してるの？家反対なのに。」

カレン「実はデスね、昨日・・・」

皆に事情を話した。

陽子「そんな事があったんだ。」

圭太「なあカレン、昨日ごめんな。」

カレン「Oh、ケイタどうかしたんデスか？」

浩輔 「圭太？もしかしてカレンに何か暴力でも？」

圭太 「違えよ。昨日言い忘れてた事があつてな、限定品のネックレスの最後の1つ、俺の母さんが買つちまつてな、それで謝ろうって昨日思つてたんだ。」

カレン 「そうだったんデスカ。」

圭太 「何かごめんな。」

カレン 「大丈夫デス！ケイタは悪くないデスよ！」

圭太 「そうか。許してくれるか？」

カレン 「勿論デス！ケイタも仲間デス！」

そう言つて圭太に抱き付いた。

圭太 「おいカレン！いきなり抱くなよ！」

その日の昼。皆で弁当食べてる。

カレン 「小さな頃、ヒーロー役は何時もアリスデシタ。」

綾 「え？それは意外ね。つて言うか、ままごとじゃないの？怪獣ごっこ？」

陽子 「今も昔も、カレンがアリスを引っ張り回してる図しか浮かばないけど。」



カレン「確かに、今も妹みたいデス。」

アリス「え!？」

圭太「ヒーローごっこなら小さい頃俺達やってたよな浩輔?」

浩輔「ああ。あの頃が懐かしいぜ。何時も俺が敵役だったけどな・・・」

カレン「でも、私は何時だってアリスの事尊敬してるデス!」

アリス「えー? 本当?」

忍「私、ホームステイの時と今のアリスしか知りません。アリス達の昔の話聞きたいです!」

綾「あ! 私も!」

陽子「私も私も!」

圭太「俺も興味あるな。」

浩輔「俺も聞きたいなー!」

カレン「分かりマシタ! そうデスねー、これはシノがホームステイに来て日本に帰った後の話デス。」

それは、忍が日本に帰った後の昔話。カレンがアリスの家に向かった。

カレン『Hi!』

アリスのママ『Hi。』

カレン『お邪魔します！アリス！一緒に遊ぼう……。？』

だがアリスは日本語の勉強をした。部屋に卓袱台が置かれてあり、こけしも置かれてあった。

カレン「アリスは取り憑かれたように50音を書いてマシタ。」

アリス「集中してただけだよー！」

そしてまた昔話に戻る。

カレン『アリスまた日本語の勉強してるの？今日はパパの授業ないの。』

アリス『けど、予習も復習は大事だよ。』

カレン『ふーん……。わかんない。』

日本語の本を見てもカレンは分からないまま。

カレン『ねー、遊びに行こー！』

アリス『今はちよつと……。』

カレン『えくくっ！つまんないつまんない。遊ぼうよーヒマだよー！』

アリス『ごめんね。後でね。』

遊んでもらえない事にカレンが不機嫌になった。

カレン『あ、そうだ！パパが面白い日本のゲーム持つてるの！持ってきてあげる！』  
そう言つてカレンが家に戻つて行く。

だが夕方になつてもカレンが戻つて来なかつた。

アリス『あれ？』

カレンが戻つて来ないと感じたアリスは、部屋中探す。だがカレンの姿は何処にも無かつた。

アリスのママ『え？カレン？さっき飛び出して行つたきり、来ないけど？』

あの時からカレンは戻つてなかつた。するとアリスは外に出てカレンを探しに行つた。

アリスのママ『あら、どこ行くの？』

アリス『ちよつと、そこまでー。』

近くまで探してみても、カレンの姿は無かつた。その後も探し回る。

アリス『あっ!!』

するとアリスは目の前に何かを見付けた。猫だつた。その猫がある物を啜えてた。

アリス『あれって・・・カレンの靴だ!』

なんとカレンの靴だった。帯が切れてた。するとトラックのクラクションに驚いた猫が、靴を置いて逃げた。靴を拾ったアリス。

アリス『いたら返事して!カレ〜ン!』

だが、近くの石橋の下で気を失ってた少女が倒れてた。カレンだった。アリスの叫び声を聞いて目を開いた。

カレン『ん・・・?今、何か声があったような・・・私、何でこんなところで寝てるんだろう?えつと・・・』

それは数時間前、石橋の端で鼻歌を歌ってバランス取りながら歩いてた。

猫『ニャー。』

カレン『KITTY!』

猫を見た瞬間、足を滑らせてバランスを崩してしまった。

カレン『NO〜ン〜ン!!!』

そのまま落ちてしまって気を失ってしまった。脱げてしまった靴は猫が持って行った。

カレン『そうだ。足を滑らせて・・・うつかりうつかり。』

立ち上がろうとしたその時、左足のくるぶしに衝撃が走った。

カレン『い・・・いい痛いー！捻挫!? ヤ・・・ヤバ!』

落ちてしまった時に捻挫してしまつてた。痛そうにゴロゴロ転がる。

その後も誰もカレンを発見せず、カレンはただ泣いて待つてる。

カレン『うつ、うつ・・・アリス・・・っ! アリスは、私の声、聞こえてないし、いつも、こけしの人形見てるし、私のことなんて・・・』

アリスに見捨てられたと感じたカレンは悔しかつて泣いてしまった。だがその時。

アリス『カレ~~~~ン! 聞こえる!?! カレ~~~~ン! カレ~~~~ン!』

カレン『アリス!』

アリスの声が聞こえた。アリスはずっとカレンを探し回っていた。カレンが立とうとするが、捻挫してた為起き上がれない。

アリス『カレ~~~~ン! どこなの!?!』

アリスはそのままカレンがいる場所から遠ざかってしまった。

カレン『アリスが行っちゃう! アリス~~~~! 私はここだよ~~~~! アリス~~~~!!』

必死に叫んだが、アリスは既に遠ざかってしまった。

カレン『どうすれば、どうすれば……!!』

するとカレンは、アリスに教えてもらったあの言葉を思い出した。

アリス『ツーと言えばカー。これは日本の合言葉だよ。』

それを思い出したカレンは、必死に叫んだ。

カレン『ツーーーー!!!』

その時、アリスが誰かの叫び声を聞いた。

アリス『カレン!?!』

カレンの叫び声を聞こえた。聞こえた場所を見てカレンを発見した。

アリス『カレン! 大丈夫!?!』

カレン『アリス……!』

アリスはカレンを見てホッとした。カレンはアリスを見て泣いていた。そして近くの人に助けを求めて、カレンを救出した。救出されたカレンは『ツー!』と言いながらア

リスに抱き付いた。

アリス『ツ—って何？』

その夜、2人は手を繋いで帰る。

カレン『あと少し遅かったら、命が危なかった・・・』

アリス『もー、大げさなんだから。』

カレン『アリス・・・。探してくれて。ありがとう。』

アリス『当たり前でしょ。友だちなんだから。』

そして現在に戻り、昔話が終了した。

カレン「そしてアリスは私に何も告げずに、1人日本に旅立つのデス！」

アリス「それは！だってカレンずっと旅行中だったでしょ!?!」

カレン「アリスは意外と猪突猛進デス！（でも、私も人の事言えないかもデス!）」

イギリスに居た時も、カレンも日本語の勉強をした。

圭太「それが2人の昔話か。何か心温まる話だな。」

浩輔「何か、話を聞くと泣きそうだぜ・・・!!」

圭太「お前何時も感動話で泣いてるよな？」

放課後、カレンの左足に包帯が巻かれてた。

忍「カレン、足大丈夫ですか？」

アリス「え!？」

綾「体育で挫いたのよ。」

浩輔「見た時痛そうだったぜ。」

カレン「もう全然痛くないので大丈夫デス！」

下校途中、カレンと別れる。

カレン「それじゃあ皆さん！また明日デス!!」

忍「はい！」

陽子「またなー！」



綾「気を付けてねー！」

圭太「お大事に！」

浩輔「転げるなよー！」

アリス「待って！送って行くよ！」

忍「あ！じゃあ私も！」

陽子「まあまあ。たまには2人で。」

一緒に行こうとするが、陽子に止められた。

アリスはカレンを家まで送って行く。

カレン「やっぱりアリスは私のヒーローデス！」

アリス「だからお姉ちゃんなんだってばー！」

カレン「じゃあシノは？」

アリス「シノは私達のヒーローだよ。」

カレン「Yes!!」

2人は昔みたいに手を繋いでいた。

その後、カレンを送ったアリスが忍の家に帰った。

アリス「ただいまー！」

忍「はい！もう30分経つのに家に帰って来なくて！はい！金髪で見た目小学生くらいの高校生なんですけど！」

アリス「シノ・・・」

忍が警察に電話してた。

「END」

## E p i s o d e 2 0 「もうすぐ夏休み」

学校のベランダで、陽子は外に向かって叫んでた。

陽子「今年の夏休みは計画的に過ごしたい！去年は思い残した事があって不完全燃焼だったからー！」

アリス「山に行ったり、お祭り行ったり楽しかったよ？」

陽子「夏の楽しみはまだまだあるんだよ！今年は燃え尽きるまで遊びたい！全力で！寧ろ燃え尽きたい！」

綾「ちよつと落ち着きなさいよ！」

陽子「今の私は止まらない暴走列車だよ!!」

綾「ブレーキ何処に置いてきたの!?!」

浩輔「放してやった。」

燃えてる陽子の額に冷えピタを貼る。

綾「まあ、計画を立てるのは大事な事だわ。」

アリス「ヨーコは何処に行きたいの？」

陽子「それは勿論ー。」

陽子・カレン「海ー！（空ー！）」

またカレンと意見が別れてしまった。

陽子「このー！去年の再戦か！だいたい空って何だよ空って！！」

カレン「スカイダイビング？」

圭太「スカイダイビングかあ、バンジージャンプでも良いかもな。」

浩輔「俺高い所苦手・・・」

陽子「海！」

カレン「空！」

陽子「海！！」

カレン「空！！」

陽子「今年こそ海ー！」

カレン「空が良いデス！！」

海か空、どっちにするか争ってる。

忍「暑いですねー。」

アリス「そうだねー。」

陽子「なあなあ！今年は海行こー？海行きたい！海海海！！」

浩輔「なあ圭太、海行きたいか？」

圭太「流石の俺でも海でバカンス味わいたいな久々に。」

カレン「仕方無いデスね。良いデスよ。今年海行くデス！」

陽子「よっしゃー！！海ー！！」

今年の夏休みは海に決まった。

忍「海ですか。」

アリス「あれ？シノ海嫌い？」

忍「実は昔、海のギャングに襲われた事が。」

綾「ええ!?それってシヤチ!？」

忍「いえ、ヤドカリです。」

圭太「ヤドカリかよ!!」

綾「可愛い!？」

カレン「ヤドカリ可愛いデス。」

忍「でもお姉ちゃんが危ないって。」

浩輔「それってヤドカリに触って襲われただけだろ？」

陽子「大丈夫だって！楽しみだなー海！」

アリス「あ！私水着持っていない！」

綾（海か・・・やだな・・・泳ぐのも上手く出来ないけど、何より水着を着るのが・・・）  
憂鬱になった綾は溜め息した。

アリス「もしかして、アヤも水着無いの？」

綾「くびれが無いの。胸も無いけど・・・」

アリス「えっと、（くびれって何のヒレだっけ？）  
すると陽子が綾のくびれを触った。

綾「うわあああああ!!?!?!な・・・な!?!」

陽子「くびれあるよ!!」

アリス「あそつか！くびれってウエストの事だね！大丈夫だよ！アヤにも立派なくびれがあるよ！」

陽子「そうだよ！綾ももつと自信持て！」

恥ずかしくなった綾が泣いてしまった。

アリス「泣いちやった!?!」

陽子「ごめん!!」

アリス「アヤ・・・？」

陽子「何かこんな空気になって悪かったと思って・・・」

だが綾がアリスと陽子のくびれを触ってくすぐる。くすぐられてる陽子とアリスが笑う。

カレン（アヤヤも、ママと同様怒ったら怖いデス・・・気を付けるデス・・・！）

綾「全く、いくら何でも浮かれ過ぎよ。大体夏休みの前に来週の期末テストの心配をしたらどうなん・・・」

期末テストを思い出した陽子とカレンと忍と浩輔はガツカリした。

綾「そ、そんなに!?!」

圭太「何時も通りの4人だな。」

そして放課後。忍達がC組に来た。

忍「アリスく、陽子ちゃん、圭太君、帰りましょう!」

カレン「迎えに来たデス!」

アリス「はーい!」

綾「あ！どうしたの陽子!?何時の間にも目が悪くなったの!？」

なんと陽子がメガネを掛けてた。

陽子「ああこれ？」

綾「朝は掛けてなかったわよね？授業の時だけ掛けてるとか？」

陽子「違う違う。ちよつとしたテスト対策だよ。メガネって頭良く見えるだろ？どうか？偏差値100くらい？」

綾「可笑しいわね。バカっぽく見えてるわ。」

圭太「陽子、お前の偏差値0だぞ。」

陽子「え〜？じゃあテスト範囲で分からない事綾に聞いても良い？」

浩輔「陽子の声がイケボになってる。」

カレン「私もアヤヤに教えて欲しいデス！」

綾「構わないけど、だったら皆で帰りに何処か寄りましょうか！」

カレン「はい！何か食べながら勉強するのはどうでシヨウ！」

忍「賛成です！」

浩輔「俺も同感！」

アリス「私もー！」

綾「やる気が感じられない・・・」



圭太「お前ら何か食いたいだけだろ。」

陽子「私もやる気満々だよ!!このメガネだって伊達じゃない!何と度入り!!」

圭太・綾「(バカだろ!!)バカだわ!!」

陽子「クラクラしてきたー!」

圭太「だつたら外せー!!」

そこで向かったのは、マックだった。

アリス「ハンバーガー屋さん!」

圭太「マック久し振りだな。」

忍「こう言うお店に寄り道するのって何だか高校生って感じがしてて良いですね!」

陽子「じゃあ入ろうか!」

すると1人の少女が忍の背中にぶつかった。

忍「あ、大丈夫・・・」

少女「ごめんなさい。おばあちゃん。」

おばあちゃんと言われた忍が激しくシヨックした。

少女「あ！おばあちゃん！こっちこっち！」

おばあちゃん「はいはい。」

アリス「シノー！すっかりして！勘違いみたいだよ!!」

浩輔「年を取ったな忍。てめえは老いぼれだ。」

圭太「今度余計な事を言うとか口を縫い合わすぞ。」

マツクに入って座る。

忍「私、イケイケの弾ける高校2年生なんですけど。」

アリス（その発言が既に・・・!!）

陽子「お待たせー！」

綾「しの達も注文して来たら？」

忍「はい！」

注文しに行った5人。

忍「何食べます？」

アリス「えつとね・・・」

カレン「そう言えば、アリスは日本の F i r s t f o o d は初めてデスね？」

忍「そうでしたっけ？」

圭太「初めてなのか？」

アリス「大丈夫だよ！イギリスでは行った事あるし、私も日本2年目だし！（とは言ったけど、もしかしたらイギリスとは違う注文の仕方があるのかしれないし。ここはカレンを参考に！）」

後ろからカレンが注文するのを見る。

店員「ごゆっくりお召し上がり下さい。」

カレン「えつと、チキンバーガーとコーラと、後スマイル1つ！」

アリス「!？」

カレンがわざとスマイルを注文した。

アリス（スマイル？でも日本ではこれが普通なのかも・・・）

忍を見るが忍は分からないままアリスを見て微笑んだ。

店員「次のお客様。」

アリス「あ、はい！」

店員「いらっしやいませ。ご注文は何になさいますか？」

アリス「えっと、チーズバーガーセットと、スマイル1つ！」  
すると忍が笑い出した。

アリス「え!? 何シノ!?」

忍「アリス可愛いです!!」

アリス（シノに笑われた!?）

その後注文を終えてテーブル席に座る。

アリス「もー！カレンの意地悪ー!!」

カレン「アハハ！ごめんなさいです！」

圭太と浩輔は、忍達の隣の席に座っていた。カレンはキョロキョロ店内を見ていた。

陽子「ん？」

綾「どうしたのカレン？」

カレン「私もこう言うお店でバイトしてみたいです！」

陽子「カレンは目立ちそうだな。」

カレン「それに私、発声には自信ありマス！」

圭太「カレンがバイトしてるマツク、忍が毎日寄ってそうだな。」

カレンが息を吸って声を出そうとした時。

陽子「カレン！ちよつと待った！店内で大声出すのは禁止。」

カレン「いらつしやいませって言うだけデス。」

陽子「ダメ。」

カレン「ちよつとだけー。」

陽子「ダメ。なまはげが出るぞー！悪い子がいねえか!!」

カレンとアリスが怖がって怯えてる。

陽子「効果覷面？」

浩輔「陽子なまはげだー！」

陽子「こらー！浩輔ー！」

忍「アリスはどんなアルバイトがしてみたいですか？」

アリス「え？うーん、私はどうせなら日本ならではのバイトがしたいなー。年賀状の

仕分けとか。」

綾「知識に偏りがわるわね。」

圭太「正月しか出来ねえバイトだなそれ。」

陽子「日本ならではあゝ。」

綾「巫女さんとか憧れるわ。しの似合いそう！」

忍「え？」

カレン「確かに！シノのおみくじはご利益がありそうデス！」

忍「もう、2人共お世辞が上手いです。西洋風の顔達なんですけど、似合いますかね？」

アリス「え？誰が？」

忍「がーん!!」

女子生徒「きやつ！」

綾「ん？」

男子生徒「何してんだよ、ドジだなあ。」

女子生徒「ああ、どうしよう・・・」

綾（あれは、飲食店における羨ましいシチュエーション！）

想像シチュエーション。ケチャップが綾のスカートの上に溢れた。

綾『ああ!』

陽子『何してんだよ。ドジだな。』

綾『あ、ありがとう・・・』

陽子『しょうがない奴だな。』  
ケチャップを拭く陽子。

綾「(素敵！何故か相手が陽子だけど……！問題点は服が汚れる事、でも。)多少の犠牲は付き物!!」

陽子「どうした綾!?何か悩みがあるのか!？」

浩輔「なあ圭太、お前リア充は嫌いか?」

圭太「何だいきなり?俺は別に嫌いじゃねえけど。寧ろ幸せそうで良いと思うけど。」  
こっそり何かをしてる圭太。

忍「ふうく、お腹いっぱいです……」

ハンバーガーを食べ終えた忍がぐったりしてる。

アリス「どうしようシノ、お家のご飯もう食べられないよ。」  
忍「そうですね……」

陽子「ん?2人共家に連絡してないのか?」

綾「こう言う時携帯が無いと不便ね。」

カレン「じゃあ私の貸してあげマス!どうぞー!」

忍「ありがとうございます。」

アリス「私が掛けるよ！」

カレンから携帯を借りて電話しようとするが。

アリス（これって携帯電話？）

カレンの携帯はスマホだった為操作が分からない。

アリス「またカレンが意地悪してるんじゃない？」

カレン「意地悪してないデスよー。使い方教えてあげマース。」

アリス「本当に？」

スマホの操作を教える。

カレン「ここを押してからここ。」

アリス「うん・・・」

カレン「後はここから選んで。」

アリス「ここ？」

カレン「そうそう！」

綾「アリス、ちよつと背が伸びた感じがするわ。」

圭太「本当だな。前より少しだけど。」

陽子「そうかな？」



忍「私はあんまり変わったようには見えませんが。」

浩輔「何時もの身長じゃね？」

綾・圭太「・・・」

その後電話を終えて皆の所に戻った。

アリス「お待たせー！」

カレン「無事に電話出来マシター！」

アリス「何の話してたの？」

綾「アリスの背が伸びたって話よ。」

アリス「え!?! 本当!?!」

綾「と思ったんだけど、気のせいだったみたい。」

アリス「ぬか喜び!?!」

陽子「でも精神は大きくなって毎日見ると気付かないけど、見違える程だよ！  
きつと！親御さんが今のアリスを見たら、びっくりするぞー？」

圭太「お前それ褒めてんのか？」

綾「そう言えば、1年以上イギリスには帰ってないのよね？」

アリス「うん、電話では話してるけど。」

カレン「パパやママに会いたくないデス？」

アリス「会いたいけどシノが。シノが・・・シノ・・・」

忍「私のせい!？」

アリス「イギリス遠いよ？シノと離れるの寂しいよ・・・」

忍「アリス・・・私も一度里帰りした方が良いと思います。」

アリス「え？シノは私と離れて寂しくないの？」

忍「勿論寂しいです。でも、こうして日本に来て、一回り成長したアリスを、イギリスのご両親に見て欲しいんです。」

カレン「あ！私夏休みに家族でイギリスに行く予定あります！その時に一緒にどうデス？」

アリス「カレンと？」

忍「良いですね。」

アリス「うくん・・・そうだね、じゃあ数日だけ！」

カレン「決まりデス！」

綾「楽しみね。」

アリス「皆元気かな？」

陽子「お土産宜しくな！」

アリス「うん！」

すると忍が大粒の涙を流した。

忍「お母さんとお父さんに、元気な顔を見せて下さい・・・！」

陽子「行き辛いよ!!」

アリス「シノも一緒に行こうよ！」

忍「いえ、家族水入らずの時間でよし、本当にアリスは出会った時よりも大きくなつたと思います。例えるならそう、ひよこです！ピヨピヨ歩きだったアリスが、ピヨピヨ歩きに！」

アリス「何か響きを感じ悪いよ!?!」

浩輔「変わってねえじゃん！」

忍「そして今、大空を旅立とうとしてる！」

アリス「シノ！ひよこは成長しても飛べないよ!!」

綾「あ!!大変!!」

陽子「ん?どうした綾？」

綾「テスト勉強全然してないわ!!」

すると陽子とカレンと浩輔がメガネを掛けた。

陽子「あく目がぼやけて現実が見えないく。」

カレン「あく見えないデース。」

浩輔 「ここは2次元ですか?」

圭太 「お前から現実逃避するな!!」

浩輔 「さつきから圭太は何やってんだ?」

圭太 「え? テスト勉強。」

浩輔 「何!?! ここそそやってたのってそれか!?!」

圭太 「そうだけど?」

あ。そして期末テストを終えた。そして通知表が渡された。綾とアリスと圭太はまあまあ。

綾 「つで、どうだった?」

陽子 「散々だったよ!!」

忍・カレン・浩輔 「うわあああ!!」

この4人はダメだった。

そして終業式を終えた。全校生徒は大掃除。

綾「私と浩輔が雑巾、カレンは箒で、しのはチリトリね。」

カレン「Yeah! 私がバッター、シノがキャッチャー!」

忍「しまつて行きましょう!」

カレンが箒をバット代わりにして、忍がキャッチャーの構えをする。綾は持つてる雑巾を丸めた。

綾「真面目にやりなさい!!」

雑巾をストレートに投げた。カレンにジャストミートした。

カレン「ノーコンデス!!」

浩輔「掃除やれよ。」

綾と浩輔は雑巾で窓拭きをする。

カレン「アヤヤはお掃除好きなんデスか?」

綾「嫌いではないけれど・・・」

カレン「潔癖性?」

綾「そんな事ないわ! 普通よ!」

浩輔「俺結構掃除好きだぜ。将来用務員になろうかな。」

綾「学校の?」

浩輔「ああ。中学校か高校のどっちかだな。」

忍「潔癖性の人は、体が触られるのが嫌いって聞いた事あります。」

陽子「ん？何の話？」

たまたま通り掛かった陽子が綾に引っ付いた。

綾「もー陽子ったら！ちゃんと自分のクラスの掃除しなきゃダメよ！」

陽子を押して離す。

カレン「ヨーコは特別デス。」

忍「そうなんですか？」

浩輔「本当に陽子は綾に懐いてるな。」

その頃C組では、アリスが雑巾を絞ってバケツに水を出してた。圭太は箒掃除をした。アリスはしょんぼりの表情を浮かべていた。

アリス「はあ・・・」

圭太「落ち込むなよアリス、正直に言えば大丈夫だって。」

アリス「でも・・・」

そこに陽子が戻って来た。

陽子「ん？アリスどうした？」

アリス「ヨーコ、これ見て。」

差し出したのは、焦げ跡が付いた白いハンカチだった。

陽子「何これ？焦げ跡？あ雑巾！」

ハンカチを雑巾だと思い、窓を拭く。

アリス「あー！ヨーコ違うの！！ストップヨーコ！！」

すぐに拭くのをやめた。

圭太「陽子は相変わらずだなおい。」

陽子「ごめんごめん。っでこれ何？」

アリス「実はね、この間シノと部屋の掃除をした時。」

数日前、アリスと忍が部屋の掃除をした時の出来事。

忍『あ！洗濯物取り込まなきゃでした！』

アリス『私がやるよ！』

洗濯物を丁寧に畳む。

アリス『あ！これシノのお気に入りのお気のハンカチだ！そうだ！アイロン掛けといてあげよー！』

だがこれがフラグに繋がった。アイロンをハンカチの上に乗った瞬間、焦げてしまった。

アリス『あ。』

フラグ回収成功。

陽子「やると思った!!」

ハンカチど真ん中に焦げが出来てしまった。

忍『アリスー！終わりましたー？』

アリス『あわわわわ!!お、オワタヨ。』

ハンカチを隠す。

忍『アリスが頑張ってくれたので早く終わりました！おやつにしましょう！』

アリス（どうしよう、謝らなきゃ！今すぐに！）



この事が切つ掛けだった。

アリス「ソシテ、イマニイタルヨ。」

圭太「おいアリス、片言になつてるぞ。」

陽子「と、とりあえず早めに謝つた方が良いんじゃないか？」

圭太「俺もその方が良いぞ。」

アリス「でも、更に汚れて・・・」

圭太「ああ、その汚れ陽子のせいだな。」

陽子「それはごめん!!」

???「どうしたんですか3人共？」

聞き覚えの声が聞こえた。久世橋先生だった。

陽子「クツシーちゃん！」

圭太「丁度良かった。久世橋先生、ちよつと相談が。」

焦げてしまったハンカチを久世橋先生に見せる。

久世橋先生「そうですか、残念ですが、これはもう元には戻りません。誠意を持って謝りましょう。」

アリス「でも・・・」

久世橋先生「きゅんっ！」

アリスを見て久世橋先生がきゅんとしてしまった。

久世橋先生「大丈夫です！私も一緒に謝りますから！」

圭太「久世橋先生！あなたはアリスに甘いんですか！」

陽子「圭太、それこの前聞いたぞ。」

その頃忍は、はたきで窓の掃除をしていた。そこに久世橋先生が来た。

久世橋先生「大宮さんお話が。」

忍「はい。なんででしょう？」

アリスを連れて来て、姿勢をビシツとして頭を下げた。

久世橋先生「申し訳ありませんでした!!」

忍「ええ!? 顔を上げて下さい!!」

アリスが忍にハンカチを見せた。

忍「このハンカチ、風で飛ばされてしまったのだとばかり。」

アリス「ごごごごめんさい!」

忍「それで元気が無かったですね。良いんですよアリス。ここを見て下さい!」

アリス「ん?」

忍「オーストラリアの形にそっくりです!」

アリス「シノ・・・!」

ハンカチの焦げ部分がオーストラリアの形になっていた。

忍「アリス!」

アリス「シノ!」

忍「アリス!」

元気が戻ったアリスが忍に抱き付いた。

アリス「シノ!」

忍「アリス!」

だが久世橋先生は違っていた。憂鬱になっていた。

久世橋先生「あれ?」

遠くから圭太が見てた。

圭太「久世橋先生、お気持ち分かります。」

その頃、穂乃花が箒で掃き掃除をしてる。

穂乃花「ん？あ！」

カレンの金髪が床に付いてた。

穂乃花（カレンちゃんの髪の毛、床に付いちちゃってる。）

すると穂乃花は、カレンの金髪を持って見惚れてた。カレンは気づく事無く雑巾を絞っていた。

穂乃花（金・・・髪・・・）

綾「何してるの？」

穂乃花「わあ!!」

カレン「ん？」

その後、綾がゴミ捨て場でゴミを捨てた。

綾「よいしょっと。」

陽子「よっと！」

隣に陽子が居た。

綾「陽子!？」

陽子「ん？ヤッホー！綾。」

すると綾がゴミ箱を落としてしまった。

綾「わーーーーー!!!」

陽子「わーーーーー!!!何やってんだよもう!!!」

ゴミ捨て場から戻る。

陽子「全く綾はドジだなあ。」

綾「陽子が驚かすからでしょ？」

C組の前に到着。

陽子 「それじゃあ！」

綾 「待って！ちよつとしりとりして行かない？」

陽子 「ん？良いけど、じゃあ夏。」

綾 「つ、つみき！」

陽子 「啄木鳥。」

綾 「きのこ。」

陽子 「コアラ。」

綾 「ラッパ！」

陽子 「パラシュート！」

綾 「と、と、と・・・」

同時にチャイムが鳴り響いた。

陽子 「じゃあまた後で。」

教室に入ろうとする陽子のスカートを掴んだ。

綾 「ときめき!!」

陽子 「綾チャイムが。」

綾 「陽子の番よ！ときめきのき！」

陽子 「えー！？」

何やかんやで大掃除としりとり終了。

遂に夏休みに突入した。

陽子「はあく。遂に夏休みだなく。」

カレン「夏休みデス!!」

浩輔「夏休みヒヤッハー!!」

アリス「楽しみだねシノ！」

忍「そうですね！」

全校生徒が一斉に下校する。

駅に着いた7人。

綾「私達はこのまま水着を買いに行くけど、カレンと陽子と浩輔はどうする?」

カレン「今日はパパとママとレストランに行くデス。」

陽子「私は空太と美月と一緒に帰る約束してるからパスだな。」

浩輔 「俺はこれから姉ちゃんと飯食いに行く予定がある。」

陽子 「新しい水着、海で見れるの楽しみにしてるよー!!」

アリス 「うん！」

綾 「あ！」

陽子 (綾の妄想) 『見れるの楽しみにしてるよー!!してるよー!!してるよー!!してるよー!!』

綾 「陽子の破廉恥ー!!」

陽子 「何で!?!」

そして綾とアリスと忍と圭太は、カレンと陽子と浩輔と別れる。

アリス 「またねー!!」

カレン 「バイー!!」



4人がショッピングモールの水着店に入る。圭太と別行動。

忍「お店の中涼しいです！」

アリス「涼しいね！」

綾「アリスはどんな水着にするの？」

アリス「あのね、実は絵に描いて来たの！これ！」

描いた絵を綾に見せる。

綾（え？何？ふんどし・・・？）

ふんどし履いてるような絵。

アリス「やつぱりビキニは背伸びし過ぎかな？」

綾（え!?ビキニなのそれ!?)

忍「アリスったら大人ですー！」

アリス「お店の人に見せて、こう言うの無いか聞いてみようかな？」

忍「良いですねー！」

綾「（え!?そんな事したら笑われる事必至だわ!）ど！どすこーい!!」

急に綾が力士の真似をした。

アリス 「アヤ？」

恥ずかしくなりながら、綾はアリスの手を握って水着を探す。

綾 「わ、私がアリスの水着を選んであげる！」

アリス 「ありがとうー！」

その頃圭太は、ウエットスーツを見てた。

圭太 「海パンも良いが、そろそろウエットスーツに挑戦してみようかな？」

そこに水着を持った綾達が来た。

綾 「圭太、そっちは何か決めたの？」

圭太 「今年からウエットスーツにしようと思ってるんだ。」

綾 「へえー。」

圭太 「海パンも良いけどなー。」

忍 「圭太君は水着姿でも格好良いですよね。」

アリス 「え？ そうなの？」

忍 「圭太君の腹筋は凄く割れてるんですよ？」

圭太 「まあこれが俺の腹筋だ。」

スマホのギャラリーから自分の海パン姿の写真をアリスに見せた。  
アリス「すごい！」

圭太「至って普通な感じだけど。」

アリス「凄いよケイタ！これなら周りからモテモテだよ！」

圭太「アリス、それ褒めてるのか？」

そして水着を買って別れた。

忍「可愛い水着が買えて良かったですね。」

アリス「うん！早く着たいなー。」

忍とアリスが夕焼けの空を見る。カレンはパパとママと3人で車に乗っていた。カレンも空を見る。陽子は空太と美月と一緒に帰ってる。陽子も空を見る。綾は買った水着を持って嬉しそうに帰ってる。綾も空を見る。浩輔は部屋から空を見る。圭太は部屋で宿題をしながら空を見る。空を見ると夜空が徐々に広がっていた。

忍「後は、この通知表をお母さんに見せるだけ。」

通知表を見る。見せたくない成績を見て怯えた。そして忍は逃げた。

アリス「シノ！現実を受け入れて！シノ！シノーーーー！！！」

現実を受け入れた忍が帰って来た。リビングに勇が居た。

勇「あ、忍。通知表見せてよ。」

忍「どうぞ・・・」

通知表を勇に差し出す。

勇「どれどれ？」

通知表の中を見る。

勇「あら凄いじゃない！流石だわ！」

忍はホツとした。

勇「つで、あんたの通知表は？」

差し出したのは忍ではなくアリスの通知表だった。すると忍は勇に抱き付いておねだりする。

忍「後生です！見逃して下さい！！」

勇「バカな事しないでさっさと見せなさい！」

アリス（シノ・・・）

これにはアリスは見てるだけしかなかった。

その夜圭太は、部屋で夏休みの宿題をした。

圭太の母「圭太、お風呂上がったよ。」

圭太「ああ。」

圭太の母「圭太、もう宿題やってるの？」

圭太「先に済ませた方が後が楽だからな。」

圭太の母「程々にしなさいよね？」

圭太「ん。」

圭太の母が部屋から出た。その後も圭太が宿題をやめる事は無かった。

「END」

## Episode 21 「とっておきの一日」

ある朝、忍の部屋で寝てるアリスが目を覚ました。

アリス「朝？」

カレンダーを確認する。

アリス「あそつか。今日から夏休みだから朝寝坊出来る。幸せ。」

今日から夏休みが始まった。幸せそうにアリスが二度寝する。

??? 「じーっ。」

アリス「う、うう・・・」

??? 「じーっ。」

アリスが誰かの視線を感じた。目を開くと驚きの光景を目にした。

カレン「アリス！おはようゴジヤイマス！」

アリス「わあああ!!」

なんと目の前にカレンが居た。

アリス「カレン何!?!こんな朝早くから!?!」

カレン「スイカ割りしようと思つて。」

アリス「え?スイカ割・・・り!?!」

横を見るとスイカが置かれてあつた。

アリス「やめてー!枕元で!!」

カレン「昨日から割りたくて仕方無かつたデス!」

アリス「シノ起きてー!カレンがー!」

だが忍は気持ち良さそうに熟睡中。

カレン「さあ割るデスよー!グルグルグルグルグル!」

アリス「ヒィー!起きてシノー!!」

その頃綾は、部屋で何かを仕上げた。それは宿題消化スケジュールと言う資料だつた。

綾「よし！これで完璧だわ！今年は皆で海行くし、宿題は早めに済ませておかないと！これさえあれば陽子だって！（思えばこれまでの夏休み・・・）」

中学一年生の夏休み最終日。

陽子『頼む綾！宿題手伝って！』

中学二年生夏休み最終日。

陽子『今年もお願い！』

中学三年生夏休み最終日。

綾『・・・』

陽子『すまーん!!』

綾「おまけに去年と来たら・・・！」

そして昨年の夏。



陽子『何で高校生なのに宿題ってあるんだろうね．．．はは、はははは．．．』  
完全にやる気を無くした今年の陽子だった。

綾「今年こそ陽子に計画的な夏休みを!!：：：ただ問題は、これをどう渡すかよね．．．」

その頃陽子の家では。

空太・美月「プール!プール!学校プール!」

陽子「空太!美月!、忘れ物無いかちちゃんと確かめてから行くんだぞ!」

空太・美月「はい!」

今日は空太と美月がプールに行く日。すると陽子の携帯の着信音が鳴った。

陽子「ん?綾?もしもし?」

綾『い、猪熊．．．陽子さん．．．ですか．．．?』

陽子「うん、そうだけど?」

綾『はあ．．．はあ．．．はあ．．．』

陽子「ん？どうした？」

途端切られてしまった。

陽子「ん？何だ？」

空太「あ！水泳キャップがなーい！」

美月「お姉ちゃん！うさちゃんのバスタオルどこー？」

陽子「ああはいはい！ちよつと待ってー。」

その頃綾は泣いてた。

綾「今の電話完全にアウトだわ：：うう：：夏休み初日からあんな電話掛けたら：：」

想像する綾。港で陽子が海軍の制服を着てた。

陽子『あんな電話掛けて来るなんて、がっかりだよ綾。』

綾『ち、違うの！あれは！』

陽子『さよなら。』

綾『待つて陽子！陽子ー！！ああっ！！』  
陽子を追い掛けるが転んでしまった。想像終了。

綾「とりあえずフォローのメールを・・・」

メール『さつきはハアハアしてごめんなさい』

綾「これじゃあ益々アウトだわー！！！！」

その後綾は外出した。

綾「暑・・・思わず出て来ちゃったけど。（そう言えば、陽子の家に1人で行くのって初めてかも。・・・帰ろう。）」

行こうとしたが、帰る事になった。

綾「（そうよ。もし訪ねて留守だったらどうするの？そもそも連絡も無しに訪問するなんてマナー違反だわ！行くならせめてお土産位持って！）はあ・・・」

浩輔「おい綾ー」

綾「浩輔？」

目の前に浩輔が立っていた。

浩輔「今日は暑いよなー。綾はあれか？散歩日和か？」

綾「いや、そんなんじゃないけど・・・浩輔は何してるの？」

浩輔「気分転換に図書館へ行って宿題しようと思つて外出してる。」

綾「そう。」

すると綾の携帯の着信音が鳴った。電話に出る。

陽子『あ！綾？』

綾「陽子!？」

陽子『さっきの電話どうしたの？急に切れちゃったから心配したよー。』

綾「ああああれは・・・何でもないの・・・」

浩輔（何を言つたんだ？）

綾「ところで今何処に居るの？おうち？」

陽子『いや？外だけど？』

綾「そう・・・」

陽子『あ！目の前にツイントールの女の子とショートの子発見!』

綾「え!？」

浩輔「何!？」

後ろに振り向くと陽子が立っていた。

陽子「よっ!」

浩輔「お!陽子!」

綾「何で居るのよ!陽子のバカー!」

陽子「いきなり!」

浩輔「ビビった!」

綾と浩輔は陽子の家に訪問した。陽子が麦茶をコップに入れてる。

陽子「行き違いにならなくて良かったよ。私もそっちに行く所だったからさー。」

綾「そう・・・」

浩輔「陽子の家めっちゃ久々だなく。しかも俺まで招き入れたけど大丈夫か?」

陽子「気にしなくて良いよ。」

綾「空太君と美月ちゃんは?」

陽子「ああ、学校のプールへ行ってる。」

浩輔「そうか。」

陽子「はいどうぞー。」

麦茶を差し出す。

浩輔「サンキュー。」

綾「え？ああ、お気遣い無く・・・」

陽子「綾に気なんか遣わないよーだ。つで、何の用なの？」

綾「そうだ！忘れてたわ！これよ！」

カバンから取り出したのは、綾が作ったスケジュールだった。

陽子「今年こそ最終日に泣かない為の・・・宿題消化スケジュール!?」

綾「夏休みのけいは初日にあり！今日から陽子はこのスケジュールに沿って宿題やつてもらいわ。」

陽子「えー！!?」

浩輔「そう言えば陽子は何時にも夏休み最終日の時綾の家に訪問してたよなー。」

綾「そうだ！浩輔もこのスケジュールに沿ってもらいわ。」

浩輔「マジかよ！」

る。3人はリビングで宿題をする。陽子は綾の顔をじつと見る。浩輔は数学の宿題をす

綾「(見られてる……)な、何?」

陽子「あいや、そう言う女の子っぽい服、私一着も持ってないなくって。」

綾「女の子っぽい?」

陽子「うん。」

綾「……じゃあ着てみる?」

浩輔「!?!」

察した浩輔はリビングを出た。陽子と綾が着せ替えっこした。

陽子「わははー!違和感スゲー!!ねえ!どうどう?」

綾「そうね、何と言うか……」

浩輔「終わったか?」

陽子「浩輔どう?」

浩輔「ああそうだな……似合ってるかもな。」

陽子「やっぱり似合わないかな?それに、この辺がちよつとキツイしなー。」

胸元を見る。

浩輔「おい陽子、お前地雷踏んだな。綾を見る。」

陽子「え?ん?」

綾を見ると、黒いオーラを醸し出してる。陽子が怯える。

綾「小さくて悪かったわねー!ー!ー!!」

陽子「うわ!そんな事言って!わはははは!やめて!ギブギブギブ!!」  
怒った綾は陽子にくすぐり攻撃する。浩輔はリビングから出た。

数分後。陽子は疲れ果てた。かなり笑い疲れた。

綾「洗濯して返すわ。」

陽子「あ良いよ・・・」

綾「でも、汚してたら困るし。」

陽子「大丈夫だよ汗くらい。」

綾「はっ!やっぱり洗って来るー!」

陽子「ちよっと!?!」

その時、空太と美月がプールから帰って来た。

空太・美月「ただいまー!」

綾「あ。」



陽子「あ！」

陽子が綾を後ろから抱いてる光景を目にした。

浩輔「どうした？ん？ちよ!？」

これには浩輔もびっくり。空太と美月は冷たい目で2人を見る。

綾「えつと・・・」

空太「お邪魔でしたか。」

美月「何なら私達はちよつと外に。」

浩輔「どうぞごゆっくり。」

綾「ああいやいや！誤解よ誤解！」

浩輔「こんな状況で説得力ねえよ。」

綾「陽子も何か言つてよ！」

陽子「つて！今の状況が一番困るんですけど！」

その後何とか誤解が解けた。その後もまた宿題する。

空太「お姉ちゃん、アイス食べて良い？」

陽子「良いけどー、1人1本なー。」

美月「うん。」

アイスと取った空太と美月。すると2人は綾の所へ向かう。

空太「あげる。」

綾「え？良いの？」

アイスを綾にあげた。

美月「良いよ。だってこうすれば。」

持つてるアイスをもつに割った。片方空太にあげる。

空太「仲良しはこうやって食べるんだ。」

綾「仲良し・・・」

浩輔「仲良しは良いよなく。って俺にアイスは無しか。まあ良いけど。」

綾がアイスを2つに割る。

綾「はい陽子。」

陽子「良いよこつちで。綾はお客さんだからさ。」

小さい方を取る。

綾「でも、悪いわ。」

陽子「うーん、じゃあ。」

すると陽子は、大きい方のアイスを少し食べた。

陽子「うんまー！ほらこれで同じだろ？」

綾「陽子のバカーーーーー!!」

陽子「ええ!?!やっぱり食べたかったんじゃないかー!」

浩輔「本当に仲良しだな。」

夏休みが始まって数日が経った。学校のテニスコートでは、テニス部が練習をしていた。

穂乃花「ふう・・・」

香奈「皆気合入ってるよね。」

穂乃花「うん。もうすぐ練習試合だし、私も頑張らないと。カレンちゃん、今頃どうしてるかな？」

その頃カレンは、忍の部屋でゴロゴロしてた。

カレン「やっぱりシノの家は落ち着くデース。」

忍「カレンは夏休みに入ってから毎日うちに来ますね。」

カレン「あ！迷惑だったデス!？」

忍「そんな事ないですよ！毎日会えて嬉しいです！」

するとカレンはアリスの隣に座る。

カレン「私の事はお構い無くデス！大人しくしてるデス！」

アリス「カレン！偉いね！」

カレン「あ、所で、今日のお昼は流しそうめんが良いデス！」

アリス「図々しいにも程があるよ！」

忍「そうめんならお母さんにお問い合わせ出来ますが、流しそうめんはちよつと無理ですね。」

カレン「OH・・・テレビで観て楽しそうだったデスが・・・毎日2人に会えて楽しいデスが、何かこの頃少し退屈デス。」

アリス「じゃあ読書はどう？この本凄く面白いよ？読書感想文に丁度良いんじゃないかな？」

本をカレンに差し出す。本を開くと、文字がエグいくらい多かった。

カレン「明日の楽しみにとっておくデス！」

アリス「あはは。」

忍「ではトランプなんてどうですか？」

カレン「それも飽きマシタ。もつと何か何時もと違うS p i c yなイベントが欲しい  
デス！」

忍「う〜ん．．．あ！それならお昼は激辛そうめんにしましょう！」

アリス「え!？」

カレン「缶詰ミカンは付くデスカ？」

忍「勿論です！早速お母さんに伝えておきますね。」

アリス「やめてシノー!!」

そしてそうめんを完食。

カレン「ご馳走様デシタ！」

忍「私、今年は夏休みデビューしようと思つてまして。」

カレン「夏休みデビュー？何にデビューするデス？アイドル？」

アリス「違うよカレン。夏休みデビューって言うのは、休み明けにイメージチェンジ  
する事だよ！」

カレン「あ！聞いた事ありません！例えば髪の毛が、30センチ伸びるとか。」

アリス「怖い!!」

忍「それ何かの呪いですよ!?! : : : 実は今日、美容院へ行つて来ようと思つてまして。」  
アリス「え!?! そうだったの?」

忍「はい。黙っていて皆に驚かせようと思つてたんですが。」  
するとアリスが椅子から立ち上がつて忍の横に移動した。

アリス「シノ、まさか金髪にしたりしないよね?」

忍「あ! その手がありましたね!」

アリス「今言つた事忘れて!!」

その後準備して美容院へ出掛ける。

カレン「楽しみデスね金髪!」

アリス「金髪はダメ!」

勇「あら、お出かけ?」

忍「はい。私は美容院へ。お姉ちゃん! 私夏休みデビューして来ます!」

勇「そ、そう・・・」

アリス「私達はお散歩がてらシノを見送りに！」

勇「じゃあ帰りにアイス買って来てくれない？皆も好きな選んで良いわよ。」

アリス「わーい！」

カレン「オオー！イサミはNice Buddyだけど、太っ腹デス!!」

そして3人は美容院前に到着。

忍「では！行って参ります！」

アリス「頑張つてねシノ！」

カレン「楽しみにしてるデス！」

忍は美容院へ足を運んだ。

アリス「じゃあ、私達はお買い物して帰ろうか！」

カレン「あ！そうデシタ！」

アリス「どうしたの？」

カレン「アリス、その前にちよつとだけ寄りシマセンか」

寄り道場所は学校のテニスコートだった。穂乃花が練習してる。

穂乃花（弱気になっちゃダメ！この一本に集中集中！）

相手がボールを上投げる。穂乃花が構える。だがその時。

カレン「ホーノカー！」

穂乃花「え!?!カレンちゃん!?!」

カレンとアリスを見付けた。すると相手がサーブした。テニスボールが猛スピードで飛び、穂乃花の額に直撃した。穂乃花はそのまま後ろに倒れて気絶した。

アリス・カレン「うわあああ!!!」

穂乃花『私は、松原穂乃花って言います。一年生の時、カレンちゃんの隣の席でした。カレンちゃんは何時にも明るくて、眩しくて、時々……』

気絶してる穂乃花の顔に、カレンが水を掛ける。



カレン「衛生ヘーイ！衛生ヘーイ！」

アリス「カレーン!!」

穂乃花『突拍子もない行動をします。』

その後穂乃花は保健室へ行つて手当てを受けた。そして保健室から出た。額はまだ赤かった。

穂乃花「ごめんね。大丈夫だったから。」

カレン「良かったデス！」

アリス「ホノカはテニス部だったんだね！」

穂乃花「うん。」

カレン「Aceを狙ってるデスよ！」

アリス「わあ！格好良い!!」

カレン「火の玉スラッシュ打てるデス？」

穂乃花「あの、テニス部だけど、あんまり上手じゃなくて、上手く出来るのは玉乗りくらいだし……」

アリス「凄いけどテニス関係ないよ!？」

下駄箱。

穂乃花「え？忍ちゃんか夏休みデビュー？それは楽しみだね。」

カレン「ホノカも見に来ませんか？」

穂乃花「でも邪魔じゃ？」

アリス「そんな事ないよ！皆で夏休みデビューを祝ってあげよう？」

穂乃花「・・・うん！」

3人は忍の家に向かう。

アリス「アイスも買ったし。シノどうなってるかな？」

カレン「きつと激辛シノになってるデスよ。」

アリス「ええ!?! 困るよそんなの！」

カレンとアリスの会話を穂乃花は見てる。

穂乃花（何だか2人共お姫様みたい・・・）

陽子「おーい!!」

目の前に陽子と綾と浩輔が居た。

陽子「へえ、穂乃花はテニス部なんだ。」

穂乃花「うん、陽子ちゃんは部活には入らないの？運動神経良いって噂だよ？」

綾「え!!」

浩輔「そうなのか？」

穂乃花「うちの部とかどう？」

陽子「うくんそうだな。」

綾「そんな、クラスも離れたのに部活まで始めたら会う時間ほとんどなくなっちゃう

！」

穂乃花「あ！無理にとは言わないよ？」

綾「あ!!え!!?(声に出てたー!!)」

カレン「所で3人は何処へお出かけデス？」

陽子「図書館に本を借りに行くんだ。」

浩輔「読書感想文の宿題を制覇しに行くんだ。」

カレン「あ!!聞こえない・・・聞こえない・・・」

耳を塞いで聞こえないフリをする。

綾（やっぱりカレンとしのにも、あのスケジュール表が必要かも。）

その後3人別々に別れる。

陽子「じゃー！そう言う訳だから！またねー！」

浩輔「じゃあなー！」

アリス「またねー！」

カレン「バイー！」

アリス「ふう〜、それにしても今日は暑いね〜。」

カレン「ウフフ！」

アリス「ん？」

カレン「フツ！」

アリス「お金で汗を!?何かいやらしいよ!?!」

何処からか五千円札を出して額に当てる。

アリス「しかもこれおもちゃだよね？」

カレン「当たり前です。」

勿論おもちゃだった。

穂乃花（流石お嬢様だよー。私も！）

500円玉を使って額に当てる。

アリス「どうして張り合ってるの!？」

カレン「ん？あれはケイタデスか？」

目の前に圭太が居た。ちよつとふらついている。

アリス「本当だ。ケイター!!」

圭太「ん？あれはアリスとカレンと松原か？」

横断歩道を渡つて3人の所に向かう。

圭太「よう3人方、どうしたんだこんな所で。」

アリス「シノが夏休みデビューを祝おうと思つて今帰つてる所だよ。」

圭太「夏休みデビューって・・・」

穂乃花「ん？香川君、目の下にクマが出来てるよ?」

目の下に薄いクマが出来てた。

圭太「ああちよつとな。」

実は、夏休みの宿題を終わらす為に夏休み前日から3日間一睡もせず宿題を終わらせたのだった。残る宿題は日記だけ。そんな圭太は今、気分転換で散歩していると云う。

その後4人は忍の家に来た。

忍「アリス、カレン、遅いですよー。」

アリス「うわあ！シノ！凄く可愛いよ！まるで本物のこけしみたい!!」

忍「ええ!!」

前髪が切られてこけしみたいになってる。

カレン「す、Spicyデス。」

穂乃花「夏らしくて良いと思うよ?」

圭太「褒めてるのかそれ?」

忍「あれ穂乃花ちゃんに圭太君!?!いらしてたんですか!?!」

穂乃花「あ！お邪魔してます。」

圭太「今更気付いたのかよ。」

忍「ごめんなさいこんな格好で!」

穂乃花「え!?!」

忍「ちよつと待ってて下さい!」

急いで部屋に向かう。

数分後。

忍「お待ちせしました！」

メイド服を着て猫耳を着けて現れた。しかも猫の尻尾付き。

忍「セーフです！」

勇「アウトよ。」

リビング。

アリス「お待ちせー！買って来たよ！」

勇「ありがとう。」

アリス「イサミはちよつと溶けてるのが好きだから、いっぱい溶かして来たよー！」  
蓋を開けるとアイスが完全にドロドロに溶けてた。

勇「そうそうこのくらいが丁度良い、なんでやねん!!ハア・・・」  
ノリツツコミ炸裂。

忍（お、お姉ちゃんがノリツツコミを！相当凹んでます・・・！）

そして忍の部屋。

カレン「ホノカは毎日お店で美味しいパフエが食べられて羨ましいデス！」

穂乃花「そんな事ないよ。私はカレンちゃんやアリスちゃんの方が。」

ティータイムしてるカレンとアリスを想像する。

カレン『パンが無ければアイスを食べれば t r ・ s b i e n デスよ。』

穂乃花「ハハー!!」

急に土下座した。

カレン・アリス「ん？」

圭太「おい松原何やってんだ？」

穂乃花「それに忍ちゃんも羨ましいなー。毎日キラキラな2人に囲まれて。」

忍「はい！幸せです！そうでした！金髪同盟の穂乃花ちゃんに是非お見せしたい物があつたんです！」

クローゼットから緑のドレスを出した。

穂乃花「わあ！これ全部忍ちゃんが!？」

忍「はい！アリスの金髪や瞳の色に合わせて、色やデザインを工夫するのが楽しくて



！  
」

穂乃花「凄い！本物のお姫様みたい！」

忍「他にも色々あるんですよ？」

アリスとカレンが2人を見てる。

カレン「OH!!ではアリスの着せ替えごっこするデスよ！」

アリス「え!？」

圭太「おいカレン！」

忍「良いんですかアリス!？」

穂乃花「凄い！良いの!？」

アリス「え、ええ・・・」

圭太は部屋から出てリビングに入ってソファに座る。

アリス「ニャーニャー!!!」

勇「ん？」

圭太「やってる。」

部屋では着せ替えごっこしてる。カレンも参加。更に穂乃花も参加する。

リビングでは圭太が眠たそうにウトウトしてる。

勇「あら、圭太君どうしたの？眠いの？」

圭太「ああ、この前日記以外の夏休みの宿題を全部終わらせたからな・・・3日間一睡もしてなくて、クマがまだ残ってる？」

勇「ええ、薄く残ってるわ。それにしても圭太君は宿題を早く終わらすの得意よね。」

圭太「その方が後々楽になれるしな・・・」

勇「でも下手したら不眠症になるわよ？」

圭太「分かってるよ。帰って寝る。」

そして夕方になった。

忍「穂乃花ちゃん、また何時でも遊びに来て下さいね。」

穂乃花「うん！ありがとう。」

カレン「また明日デス！」

圭太「またな。」

忍「さようなら。」

アリス「バイバーイ！」

3人が帰る最中。

穂乃花（何だか今日、思いがけない事になっちゃったな。でも楽しかった！）

カレン「そうデシタ！来週皆で海行くデスよ！穂乃花も一緒にどうデスカ？この日デス！」

スケジュールを穂乃花に見せる。

穂乃花「あ、その日はテニスの練習試合が。」

圭太「そうか。」

カレン「OH！ホノカ試合出るデス!?凄いデス！」

穂乃花「でも、足引つ張らないかちよつと心配で。カレンちゃん、良いおまじないと知ってる？」

カレン「あ！それなら！ユーラユラ、ユーラユラ。ホノカは今からテニスの星デス。」

穂乃花「それ催眠術だよ!!」

圭太「それやっても無意味だと思っただろ？」

穂乃花「香川君は何か良いおまじない知ってる？」

圭太「そうだな・・・ごめん、何も無いな。まあでも成功を祈っておくよ。」

カレン「大丈夫ですよ。試合絶対勝てマス！私お天道様にお祈りするです！！」  
輝く笑顔に穂乃花は見惚れた。

カレン「あ！でも雨降ったらどうしましヨウ！」

穂乃花「くす、テニスは雨天中止だし、雨だと海に行けないよ？」

カレン「あ！それもそうです！」

圭太「いや気付けよ。」

穂乃花「じゃあ中止になったら、一緒に何処か遊びに行こうか！」

カレン「はいです！！」

そして交差点の所に来て、3人は別れる。

カレン「ホノカ！フアイトですよ！」

穂乃花「うん！ありがとー！」

圭太「じゃあな松原。勝利を祈ってるぜ。」

穂乃花「ありがとう。じゃあね。」

カレンと欠伸してる圭太が穂乃花と別れる。

穂乃花「よし！」

試合当日。

穂乃花「ふう・・・」

香奈「穂乃花、今日調子良いね！」

穂乃花「そうかな？」

香奈「何か良い事あった？」

穂乃花「うくん、お天道様のお陰かな？」

空を見て両手を広げた。

穂乃花「ありがとうー!!」

その頃カレンは海に来ていた。

カレン 「ん？」

アリス 「カレン！行くよー！」

カレン 「OH！今行くデスよー！」

「END」

## E p i s o d e 2 2 「海へのやくそく」

ビーチに到着した。

5人「うわー！」

圭太「おー！」

浩輔「うっひゃー！」

目の前に海が広がっていた。

陽子「海だー！」

海の空気を吸うアリスとカレン。

アリス「海の匂いがするー！」

カレン「風が塩辛いデース！」

綾「結構暑わね。」

圭太「この日差しが良いなー。」

浩輔「さて一気にバカンスを楽しもうぜ！」

忍「さあ皆さん！声を揃えて叫びましょう！！アローハー！！」

カレン「シノ、ここはハワイじゃなくて日本デス。」

アリス 「ヤッホーの仲間だと思ってるんだね。」

陽子 「アローハー!!!」

綾 「陽子!？」

陽子 「だって海だよ! 海海!! アローハー!!」

忍 「アローハー!!」

アリス・カレン 「アロハー!!」

テンションMAXの陽子が海に向かって走り出した。それに続いて忍とアリスとカレンも海に向かって走り出した。

綾 「ま、待って! あ、ああ・・・アローハーハー!!」

更に綾も走り出した。

圭太 「本当テンション高いなー。」

浩輔 「よっしゃ! 圭太! 俺達も行くぞ! アーローローハーハーハー!!!」

更に浩輔も走り出した。

圭太 「お前もかよ!! しゃあねえ。アロハーハー!!!」

そして圭太も走り出す。



別の場所では、あの2人が海に到着した。烏丸先生と久世橋先生だった。烏丸先生「海……本物の海！」  
何故2人が海に来たのかと言うと、それは数日前の職員室から始まった。

久世橋先生『え？海ですか？』

烏丸先生『はい、海に行きたいです……どうしても行きたいんです……』

久世橋先生『でも仕事が。』

烏丸先生『実は、新しく買った水着を着て、うちのお風呂で泳いでみたんですけど……』  
久世橋先生『え!?!』

風呂で泳いでる烏丸先生を想像する。

烏丸先生『狭いわ。』

浮き輪を持つて風呂に入ってる姿が浮かんだ。

烏丸先生『何だか悲しくなってきた……』

久世橋先生『行きましょう先生！海!!』

烏丸先生『え？良いんですか？』

それで2人も海に来たと言う訳だった。現在に至る。

烏丸先生「久世橋先生、早く行きましょう！」

久世橋先生「いえその前に、海の家でサマーパラソルとベッドを借りましょう。貴重品の管理は大丈夫ですか？コインロッカーを借りる必要がありますね。万が一の為にライフセーバーの本部が何処にあるのか確認しないと！あ！ビーチサンダルは持って来ましたか？裸足では怪我をする恐れがあります。すぐに履き替えましょう！」

烏丸先生「は、はい・・・」

結構積極的な久世橋先生だった。

一方皆はそれぞれ水着に着替え終えてた。圭太は青のウェットスーツを着てる。

忍「わあ！アリス！水着とつても似合います！」

アリス「えへへ、そうかな？」

忍「綾ちゃんのお見立てに間違いありませんでしたね。」

陽子「アリスの水着、綾が選んだの？」

綾「ええ。私の水着はアリスが選んでくれたのよ。」

圭太（アリスがあのだしののような水着を着たら大惨事だからな。）

水着を買い終えた時に、アリスが圭太に描いた水着の絵を見せた。圭太はあの時ドン引きしてた。

カレン「2人共よく似合ってるデス！」

アリス「本当？大人っぽい？」

陽子「うん！大人可愛い!!」

アリス「・・・嘘だ・・・ヨーコは嘘付くとき八重歯が見えるもん・・・」

陽子「私そんな何時も嘘付いてないだろ!!」

カレン「私はどうデス？結構良い線いってると思うデス！」

忍「カレンもとっても素敵ですよ！」

陽子「おー！似合ってる似合ってる！」

カレン「そこは、姉ちゃん良え体してまんな！って言って欲しい所デス！」

陽子「何処のエロオヤジだ!!」

するとカレンは陽子を見る。結構ナイスバディーな体型をしてる。

カレン「ヨーコはとってもNice buddyデス！」

陽子「え？そう？」

するとカレンが陽子の体を触る。

カレン「何か悔しいデス！私とどう違うか調べさせて下サイ！」

陽子「おいやめろ!!」

カレン「ちよつとくらい良いじゃないデスカ！・・・良いではないか！良いではないか！」

陽子がカレンにゲンコツ攻撃する。

カレン「パ、パパにも打たれた事無いのに！」

陽子「クツシーちゃんの雷全然足りてないな!!つたく!!」

浩輔「アムロかお前は！」

陽子「ん？あれ？しのは水着に着替えないのか？」

何故か忍は私服のままだった。

忍「知っていますか？昔の外国では着古したお洋服が水着だったそうです。」

すると忍が海水に入る。

アリス「シノが大自然に戦いを挑もうとしてる!!」

忍「あ!!」

だが波に流されて戻って来た。

カレン「You lose!!」

陽子「何がしたいんだ彼奴は？」

浩輔「何時から趣味が自殺になった？」

陽子「圭太はウエットスーツ？」

圭太「ああ。今年からウエットスーツにデビューしたんだ。」

浩輔「何だと？以前は海パンだったのによ。」

圭太「いや俺の腹筋割れのお陰で周りの女性達が俺ばっか見てたからな。」

陽子「ああ、逆ナンか。」

その頃烏丸先生と久世橋先生はビーチチェアに座って海を眺めていた。

烏丸先生「はあく、なんて素晴らしい景色なの。癒されるわ。あそうだ！はい久世橋先生持つて。乾杯しましょう。」

ジュースを持つて久世橋先生に差し出す。

久世橋先生「あ、はい。」

烏丸先生「今日めいっばい楽しませようね！」

久世橋先生「はい！」

乾杯する。

久世橋先生「あ！」

ジュースを置いてバッグから何かを探る。

烏丸先生「久世橋先生？」

久世橋先生「日焼け止めです！」

日焼け止めを取り出して腕に塗る。

久世橋先生「夏休み明けに真っ黒に日焼けしたら、生徒に示しが付きません！」

烏丸先生「真面目!？」

海の家では先程忍が着てた私服が干されてる。忍も水着に着替えてた。皆はそれぞれ浮き輪とビーチボールを膨らませてた。綾は腕に日焼け止めを塗ってる。

陽子「綾、何塗ってるの？オイル？」

カレン「Oh! OIL! コトコトデス！」

綾「日焼け止めよ！」

陽子「ええ!?! 日焼けしないと焼き豚ごっこ出来ないじゃん！」

浩輔「日焼けしねえとイノシシのステーキごっこ出来ないだろ！」

綾「しないわよそんな事!!」

圭太「嫌味な野郎だ!!クソツタレ!!」

陽子「そんなあ、一緒にこんがりしようよ。」

綾「嫌よ!焼けたくないよ!」

アリス「私は日焼けすると真っ赤っかになるよ!茹で蛸みたいに!」

カレン「私もデス!真っ赤になつてお終いデス!こんがりきつね色にはならないデス

!

忍「色白の方はそうなりますよね。」

綾「金髪で焼けてる人ってチャライ感じがするわよね。」

カレン「チャライってどう言う感じデス?」

綾「陽子みたいな人の事よ。」

陽子「え・・・?私の何処にチャライ要素が・・・?」

綾「陽子ってよく道で話掛けられるの。」

カレン「Oh!ナンパデスか!」

陽子「お婆ちゃんに道聞かれたただけだよ!」

アリス「声を掛けやすいタイプなんだね。」

忍 「陽子ちゃん優しいですもんね。」

綾 「つまりチャライとは、金髪になった陽子の事を言うの!」

陽子 「酷い言い掛かりだ!」

忍 「金髪の・・・陽子ちゃん?」

アリス 「シノ!?!」

圭太 「金髪で反応するな!」

アリス 「シノ、そろそろ泳がない? 私物凄く泳ぎたくなってきたな。」

忍 「あ! それなら私が海での泳ぎ方を教えてあげますね。」

海水に入って、泳ぎ方を教える。アリスは浮き輪を持つてる。

忍 「ではまず、海に入ったら肩まで海水に浸かります。」

アリス 「うんうん。」

忍 「こうして数を数えて。1、2、3、4、5。ふう、ぐくぐくぐくぐくぐく。」

アリス 「ヒイ!?!」

また波に流されて浜辺で倒れた。波が『真面目にやらんかー!』と言ってそう。

アリス 「しっかりしてーシノー!!」



忍「ごめんなさい・・・私本当は泳げなくて・・・見栄張っちゃって・・・」  
アリス「大丈夫だよ。今度はもつと浅い所へ行こ？」

今度は浅い所を歩く。

アリス「ここなら浮き輪もいらないね。」

忍「そうですね、うわ!？」

アリス「シノー!!」

途中で忍の足がつつた。

今度はヤドカ리를発見。

忍「ヒイー!!海のギャングですー!!」

アリス「シノ逃げてー!!」

忍「すみません・・・何か・・・」

すっかり忍の元気が低下してしまった。

アリス「良いんだよシノ。私何か飲み物買って来るね。」

飲み物を買いいに出掛ける。

その頃他の5人は。

陽子「うちらは何して遊ぶ？」

カレン「砂のお城作りしたいデス！」

圭太「子供かよ。昔ようやったけど。」

浩輔「だったら貝殻集めとかはどうだ？」

カレン「良いデスね！」

陽子「綾と圭太は何したい？」

綾「え？私？でも海に来たがってたのは陽子じゃない。今日は陽子のやりたい事をしましよ！」

圭太「そうそう。陽子何したいんだ？」

陽子「え！良いの？それじゃあ・・・遠泳！」

綾「え!!？」

圭太「なぬ!？」

カレン「遠泳って何デスカ？」

陽子「海をひたすら遠くまで泳ぐ事だよ！」

カレン「Oh! Long distance swimmingデスね！」

陽子「そうそう！ベリーベリーロングなスイミングー！」

圭太「無理だろ!!」

綾「分かったわ。私行つて来る。」

陽子「え!?!」

圭太「綾!?!」

綾が海水へ向かう。

カレン「アヤヤ！遠泳するデスカ!?!」

陽子「冗談だよ！無理するな!!」

浩輔「溺れるぞおい!!」

綾「10分くらいしても上がって来なかったら、助けて。」

陽子「溺れる前提!?!」

圭太「トム・クルーズでも6分が限界だぞ！」

映画『ミッション・インポッシブル ローグネイション』でトム・クルーズが息止め

6分のスタント演技をした経験がある。

綾 「(はっ!! 溺れる!! 気を失う!! それってつまり……人工呼吸とか!?) やっぱりやめるわ!!」

陽子 「諦めの早さ!!」

浩輔 「じゃあやんなよ!」

カレンは微笑んだ。

アリス 「アヤー! ヨーコー! カレン! ケイター! コースケー!」

5人 「ん?」

飲み物を持ったアリスが走って来た。

カレン 「アリス?」

浩輔 「どうした?」

アリス 「シノ見なかった!」

綾 「いえ、見てないけど?」

陽子 「どうかしたのか?」

アリス 「私が飲み物を買に行ってる間に何処かに行っちゃって、もしかしたら浜辺

で迷っちゃったのかも!」

陽子 「しのが迷子に!」

圭太 「いやもしかしたらナンパされて攫われたのかも知れない。」

浩輔「それこそ大惨事だろ!!」

アナウンス『迷子のお知らせをいたします。』

浩輔「ん？アナウンス？」

突然迷子アナウンスが響いた。

アナウンス『金髪で青い瞳。ピンク色の水着を着た小学生くらいの女の子を見掛けた方は、海の家までお知らせ下さい。』

忍「もう一度放送して下さい！金髪で見た目小学生くらいの高校生なんです！もう五分も経つのに戻って来ないんですくくく!!!」

アリス「シノ・・・また・・・」

圭太「素直に待ってやれよ。」

全員の目が死んでた。

その後忍はアリスと再会した。

忍「アリスー！無事で良かったです！アリスー！」

アリス「苦しいよシノ。」

陽子「迷子になったのはしの方だろ？」

浩輔「全く人騒がせな奴だな。心配したんだぞ？」

綾「でも見付かって良かったわ。」

忍「もう絶対離しません！絶対に離しませんから！」

アリスをきつく抱きしめる。そしてアリスが力尽きた。

カレン「You win!!」

陽子「今すぐ離せ！」

忍「あ！ごめんなさいごめんなさい！アリスー！！嬉しさのあまりつい・・・」

アリス「ダイジョウブだよ。シンパームヨウだよ・・・」

忍「片言!？」

綾「しのつてばいくら嬉しくてもちやんと加減しなきゃ。」

圭太「またやっちゃってしまったらアリスが本気で怒るぞ？」

忍「はい・・・」

陽子「まあまあ、次は何して遊ぶはっ!？」

突然陽子の体に異変が起こった。苦しそうに腹を抱える。

綾「どうしたの陽子!？」

カレン「ぐはっ!!」

今度はカレンも腹を抱える。

綾「カレンまで!？」

浩輔「ブゲラツパ!？」

更に浩輔も腹を抱える。

綾「浩輔!？」

圭太「お前からどうした!？」

陽子「お腹が……!」

カレン「お腹が……!」

浩輔「腹が……!」

アリス「お腹痛い!？」

綾「もう3人共、電車の中で食べ過ぎるから! 兎に角病院に!」

すると陽子とカレンと浩輔の腹が鳴った。

陽子「お腹が……空いた!」

カレン「デス!」

また陽子をポカポカ叩く。

陽子「痛い痛い！痛いって私にも加減！」

圭太「浩輔お前は？」

浩輔「俺は・・・腹減った☆」

圭太が浩輔の頭にゲンコツした。

浩輔「ブゲラツ!!」

忍「そろそろお昼にしましょうか。」

アリス「そうだね。」

カレン「ヤッター！お昼デース！」

陽子「あ！待って私も行く！」

綾「あ！ちよつと陽子！もー！」

浩輔「待ってくれ！俺も行く！」

圭太「おい逃げんなゴラア！」

そんなこんなで海の家に入る。すると久世橋先生が何かを感じた。



烏丸先生「どうかしましたか？」

久世橋先生「あ、いえ。さっきの迷子の呼び出しの子、見付かったかな？つて。」

烏丸先生「大丈夫ですよ。放送が止んだと言う事は、きっと見付かったんだと思います。」

久世橋先生「そうですよね。」

烏丸先生「それにしても、金髪の小学生、何だか他人事とは思えないですよ。」

久世橋先生「確かに。」

アリスだと確信してる。

その頃海の家では。

アリス「わあ！沢山あるねー！」

忍「そうですね！」

綾「どれにすれば良いか分からないわ。」

カレン「私決まりマシタ！」

陽子「私も！」

浩輔「俺も！」

忍「アリスは何にしますか？」

アリス「うくん、和食が良いかな？おでんとか！」

陽子「いや、流石におでんは・・・あつた!!」

おでん発見。定価500円。

忍「じゃあ私はスコーンとロイヤルミルクティーを。」

陽子・圭太「無いよ!!（無えよ!!）」

カレン「Hey! 大将! 冷やし中華一丁! 冷え冷えで。」

陽子「どんだけ冷やしたいんだよ。」

浩輔「大将! カツ丼！」

圭太「俺チャーシュー麺！」

陽子「綾、何食べるか決まった？」

綾「うくんじゃあ、陽子と同じ物にするわ。」

陽子はカツカレーにした。結構大盛り。綾にもカツカレー。

忍「はい。あーん。」

アリスにおでんを食べさせてる。

カレン「冷え冷えデース！」

陽子「美味ーい！ん？どうした綾？食べないのか？」

綾「食べるわよ！食べれば良いんでしょ!!」

カツカレーをガツガツ食べる。

陽子「あ、綾？」

浩輔「カツ丼が死ぬほど喰いたかったんだよ！もう半年もまともなメシ食ってねえやっつてられっか！」

圭太「次は命が無いぞ。こんなのは一度きりだ。これ美味しいな。」

同じ頃烏丸先生と久世橋先生はメニューを見てる。

久世橋先生「メニューが沢山あって迷っちゃいますよね。」

烏丸先生「そうですね。すみませーん！とりあえず生ビール下さーい！後枝豆と串カツと焼きおにぎりもー！」

久世橋先生「全く迷いが無い!!」

その頃。

陽子「海と言ったら焼きそばー！」

カレン「かき氷ー！」

浩輔「焼きとうもろこしー！」

綾「あれだけ食べたのにまだ入るの!？」

圭太「お前から食い過ぎだろ？」

陽子「別腹別腹！」

カレン「脇腹脇腹！」

浩輔「外腹外腹！」

圭太「ダメだこりゃ。」

アリス「ねえねえ！食べ終わったら皆でビーチバレーしない？」

陽子「するするー！」

カレン「Oh！ビーチバレー！ならば鬼コーチカレン再びデス！」

鬼コーチカレン再び降臨。ビーチバレーが始まった。

カレン「ソイツ!!!」

強烈なサーブで綾の横を飛んだ。綾は腰を抜かす。

カレン「アヤヤ、腰が抜けてるデス！もつと前に出るデス！」

綾「無茶言わないで!!」

その後も海で楽しく遊ぶ。アリスがカメラで写真を沢山撮る。

シヨップを訪れる。

アリス「イサミのお土産どれにしようか？」

忍「そうですね。」

カレン「チョット！これ見て下サーイ！ホラー！」

I??炎天下の赤いTシャツを着てる。

アリス「凄い！英語と日本語のコラボレーションだね！」

忍「良く似合ってますよ！」

カレン「当然デス！」

アリス「ねえねえ！これとか良いと思わない？」

熱中人のTシャツを試着する。

忍「素敵です！」

カレン「流石アリス！お目が高いデス！」

陽子「おっ！そろそろ帰るぞ〜！」

アリス「え？もうそんな時間？」

カレン「えー!?もっと遊びたいデス！海満喫したいデス！」

陽子「そりゃあ私だつてもっと遊びたいけどさ。」

浩輔「俺も同感だな。」

忍「そろそろ着替えないと体が冷えてしまいますね。」

綾「ねえ！それなら最後にここ行ってみない？」

圭太「海中公園か。」

全員私服に着替えて海中公園へ行く。前売り券を買って中に入る。展望台へ行つて景色を眺める。

外は夕方になり、皆はアイスを食べる。アイスを食べた後、カレンと陽子と綾と圭太と浩輔が浜辺で遊ぶ。忍とアリスは階段に座っていた。

アリス「綺麗だね。」

忍「そうですね。イギリスは海を越えた所にあるんですよね？」

アリス「うーんと遠いけどね。」

忍「アリスがイギリスに帰ってる間、寂しくなってもこの海は繋がっています！ここから筏でアリスに会いに行きますね！」

アリス「シノ……！シノは海に嫌われてるから飛行機使おうね！」

忍「はい！」

アリス「絶対だよ！」

忍「はい！」

そして皆は電車に乗り込む。

陽子「ごめんごめん遅くなった〜！ん？ってもう寝てんの!？」

忍とアリスとカレンがもう寝てる。圭太と浩輔は相変わらずゲームに没頭してる。

綾「しっ。起きちゃうわ。」

陽子「全くお子ちゃまだなく。」

綾「疲れたのよ。今日はいっぱい遊んだもの。」

陽子「綾も疲れてるなら寝ろよ。寄り掛かって良いよ〜。」

綾 「え!? 何言ってるの!?! そんな事絶対しないんだからね!!」

陽子 「そんな全力で拒否らんでも・・・」

綾 「絶対絶対絶対なんだからね!」

陽子 「あくはいはい。」

綾 「絶対絶対絶対絶対ぜーったいしないんだからねー!」

数分後。寝ていたアリスが目を開けると、陽子と綾が寝ている。綾は陽子に寄り掛かっている。アリスはまた目を閉じて寝る。圭太と浩輔は5人が寝てる光景を見てる。

圭太 「皆疲れて寝てるな。」

浩輔 「ああ。久々の海楽しかったな。だが結局イノシシのステーキごっこが出来なかったな。それ以前に俺日焼けしてねえし。」

圭太 「また何時かやれば良いじゃないか。」

浩輔 「確かにな。」

こうして海を楽しく満喫出来たのだった。



その頃海のショップでは、久世橋先生と烏丸先生がお土産を選んでる。久世橋先生「えっと、こつちが先生方のでこつちが・・・」

烏丸先生「久世橋先生！これ凄く可愛い！」

久世橋先生「そ、そうですね・・・」

サボテンのマスコットキャラのキーホルダーを久世橋先生に見せてる。

烏丸先生「そうだ！今日の思い出にお揃いで買いましたよ？」

久世橋先生「え!?!」

烏丸先生「ね！」

キーホルダー2つ。

久世橋先生「何だか名残惜しいですね。帰るのちよつと寂しいです。」

烏丸先生「あ！それじゃあ！」

2人は露天風呂に入る。

烏丸先生「大人にも夏休みは必要ですね！」

久世橋先生「そうですね！」

こうして海と温泉を満喫した先生方であった。

「END」

## E p i s o d e 2 3 「ほんのすこしの長いよる」

その日の夜。穂乃花が風呂から上がって部屋に戻って来た。すると携帯が振動した。

穂乃花「ん？あ！カレンちゃんからだ！」

携帯を持ってベッドの上でメールを見る。

穂乃花「明日の部活に海のおみやげを渡しに行きます。わあ！カレンちゃんから私にお土産、何だろう？あ！そうだ！」

翌日、穂乃花が部活を頑張ってる。

穂乃花「きん！」

相手が打ち返す。

穂乃花「ばっ！」

金髪の言葉で相手に勝った。

女子生徒A「凄い！」

女子生徒 B 「松原先輩練習試合以降何か調子良いわね。

女子生徒 A 「でもばつって何だろう？」

香奈 「ふう。」

部長 「集合！」

部活が終了し、更衣室で着替える。

香奈 「ねえ、あのきんとかばつって何とかならないの？」

穂乃花 「あの掛け声で打つと調子があがるんだ！」

制服に着替えた穂乃花と香奈。穂乃花は何かを待つてる。

香奈 「お待たせー！何？誰か探してるの？」

穂乃花 「うん。今日は来ないのかな？」

すると携帯の着信音が鳴った。

穂乃花 「カレンちゃんだ！もしもし？」

カレン 『私カレンさん。今学校の中に居るデス。』

穂乃花「カレンちゃん？」

カレンを探す為校舎の中に入る。

香奈「カレンちゃん何で校舎に？」

穂乃花「さあ？」

カレン『私カレンさん。後ろを見るデス。』

穂乃花・香奈「ん？」

後ろを見ると、カレンの居場所が分かる張り紙がいくつも貼られてあった。

香奈「何これ？」

穂乃花「焦らしプレイ？」

そんなカレンは、階段の方に隠れてた。

カレン「日本ではサプライズからのPresentが喜ばれるとアリスが言ってマシタ！穂乃花をビックリさせるデス！」

久世橋先生「九条さん！」

カレン「サプラーイズ!?」

後ろから久世橋先生に見付かった。

久世橋先生「こんな張り紙を！」

カレン「す、すぐ剥がします！」

久世橋先生「しかも私服で、休み中の格好で何をしているんです？」

カレン「その、分からない事があつて。」

久世橋先生「何ですか？」

カレン『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか。』

久世橋先生「え？」

フランスの画家ポール・ゴーギャンが1897年から1898年にかけて描いた絵画の『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか』を言った。久世

橋先生が張り紙を落とした。

カレン「知りたいデス。」

久世橋先生「ちよ、ちよつと待ちなさい！えつと・・・ウエハードウワイカムフロ

ム・・・われわれは・・・」

穂乃花「あ！居た居た！カレンちゃん！」

カレン「ホノカー！カナー！」

穂乃花と香奈がカレンを見付けた。

香奈「久世橋先生こんにちは！」

久世橋先生「ああはい！こんにちは！」

カレン「それじゃあ私は行くので、分かったら教えて下さい。後これ、お土産です！  
烏丸先生にも！」

久世橋先生「ど、どーも……」

カレンから海のお土産を受け取った。

中に入ったのはガイコツのマスコットのキーホルダーだった。

烏丸先生「これ暗い所で光る奴ですね〜！今度会ったらお礼言わないと。何処のお土

産かしら？」

久世橋先生「さ、さあ……ウエハードウイーカムフロム……」

烏丸先生「ゴーギヤンの絵がどうかしましたか？」

久世橋先生「え!？」

その頃カレンは、穂乃花と香奈にお土産を渡してる。

カレン「これと、これデス！」

2人へのお土産はTシャツだった。

穂乃花「うわー！」

香奈「私も貰っちゃって良いの？」

カレン「勿論デス！」

香奈「ありがとー！」

すると穂乃花が膝付いてカレンの手を握る。

穂乃花「ありがたき幸せ！」

カレン「くるしゆうない！」

その後3人で帰る。

穂乃花「これは額縁に入れて飾らせてもらうね。」

カレン「Tシャツは着る物デスよ？」

穂乃花「勿体なくてとも。」



カレン「あ！ホノカ！ちよつと遊んで行きましょウ！」  
目の前に公園を発見。

香奈「じゃあ私はここで！」

穂乃花「またねー！」

カレン「see you！」

香奈と別れた2人は公園で遊ぶ。

カレン「ホノカー！」

滑り台に滑る。

カレン「アーー！」

ターザンロープで楽しく遊ぶ。

穂乃花「折角のお召し物が！」

カレン「払えば平気デス！」

穂乃花「でも、お母さんに怒られない？」

それを聞いたカレンの顔が真っ青になった。お尻を穂乃花に向ける。

カレン「ホノカ、綺麗に叩いて下サイ。」

穂乃花「え!? カレンちゃんを叩くだなんて!!」

その後お尻を叩いた後、カレンにお菓子をさせる。

カレン「Ohh!! ホノカ! これは何デス?」

穂乃花「うちのお店で出してるお菓子だよ。お土産のお返しにと思って。どうぞ。」

カレン「いただきま〜す!」

クッキーを食べる。

カレン「Berry sweets!!」

穂乃花「まだまだいっぱいあるよ?」

カレン「こんなに美味しいお菓子が毎日食べれるなんて、ホノカが羨ましいデス!」

穂乃花「またうちに遊びに来て。他にもいっぱいご馳走する。」

カレン「本当デスか!?!」

穂乃花（あ! カレンちゃんのお口に・・・）

カレンの口元にクリームがくっ付いてた。

穂乃花（そうだ! ハンカチで!）

だが穂乃花は何かを想像したのか、目がグルグル回ってる。

カレン「ホノカ？どうしたデス？」

するとカレンが口元のクリームをペロツと食べる。

穂乃花「ううん。何でもない。」

その頃綾は、陽子の家の前に立っていた。勇気を出して敷地内に入ると。

陽子「こらやめろ！」

空太「そこだー！」

美月「甘い！」

空太と美月が互いに水鉄砲を向けていた。陽子は洗濯を干そうとしてる。

陽子「だから遊ぶのは向こうで！洗濯物が濡れるだろ！」

綾「陽子。」

陽子「よう綾！今ちよつと・・・」

空太「貰った！」

美月「まだまだ！」

2人が水鉄砲で陽子の顔に直撃させた。

綾「陽子……」

陽子「綾……パス!!」

綾「え!？」

洗濯カゴを綾にパスする。水鉄砲2丁出した。

陽子「見えた!」

空太と美月に攻撃した。

陽子「フツ。まだまだ姉ちゃんにはブフオア!？」

だがしかしまた反撃された。

陽子「お前達卑怯だ!」

空太「ライフは3発分。」

美月「撃った後が大事だよ。」

その後2人は陽子達から遠ざかる。

陽子「やれやれ。ごめん綾って!」

綾を見ると、洗濯まみれになってた。

陽子「アハハ!ごめん!!」

その頃浩輔は、部屋で宿題をしてる。

浩輔「よっしやOK！」

そこに湊が部屋に入って来た。

湊「浩輔どう？終わりそう？」

浩輔「姉ちゃん、さっき終わってたぜ。」

湊「もう？じゃあそろそろ行きましょ？」

浩輔「OKOK。」

2人は外出する。

浩輔「いやあく！やつと宿題全部終えたぜ！残りは日記だけだな。」

湊「あんた昔はよく私に助けを求めてたよね。」

浩輔「それ昔の話だろ？」

湊「まあでもやれば出来るじゃない。」

浩輔「いやあく褒められてもな〜アハハ。」

その頃カレンと穂乃花は。

男の子「はい。」

カレン「thank you！」

男の子からボールを借りる。穂乃花が玉乗りする。玉乗り成功。

その後男の子達と別れて公園を一回りする。

穂乃花（はあく。カレンちゃんの金髪綺麗だなく。お姫様？天使？湖の妖精？それが、こんな私のような庶民の娘と・・・）

カレン「ホノカ？どうしたデス？」

穂乃花「ううん、何でも。あ！そうだ！」

スポーツバッグから飴玉を出す。

穂乃花「はいカレンちゃん。飴あげる。」

カレン「飴ちゃんデス！thank you！」

穂乃花「そう言えば、関西のおばちゃんは飴にちゃん付けるよね？何でかな？」

カレン「美味しい物には全部ちゃん付けなのかもデス！」

穂乃花「成る程！いちごケーキちゃん美味しいんやで！みたいな！あいた!？」

カレン「なんでやねん!!」

突然穂乃花にカレンがチョップしてツツコミを入れた。

カレン「ホノカ！Badデス！今のはツツコむ所デス！」

穂乃花「えー？ボケが分かりづらいよー！そう言えばカレンちゃん、海楽しかった？」

カレン「Yes！皆でいっぱい遊んだデス！焼きそば食べて、かき氷食べて、

焼きとうもろこし食べて、ビーチバレーしたり砂でお城作ったり！」

穂乃花「良いな。」

カレン「でも、一つし忘れた事がありマシタ。」

穂乃花「何？」

カレン「ホノカと一緒に遊ぶ事デス！」

穂乃花「カレンちゃん……」

カレン「次はホノカも一緒に行きまショウ！ホノカは何処が良いデスカ？海も良いデス  
すが山も良いデス！お祭りも良いかもデスね！」

穂乃花「私時々思うんだ。もつと前にカレンちゃんに会ってたらなって。もつと皆み  
たいに親友になれてたのかもなって。」

カレン 「ん？ 私にとってホノカは今も Best friend デスよ！」  
穂乃花 「カレンちゃん・・・ありがたき幸せ！」

途中でベンチに座ってアイスを食べる。

カレン 「あ！ そうデス！ 私今度イギリスに帰る予定デス！」

穂乃花 「え？ 帰るって、そんな・・・折角お友達になれたのに・・・」

カレン 「と言っても、夏休みの最後の一週間だけデスが。」

穂乃花 「い、一週間？」

カレン 「Yes！ アリスと一緒に帰るデス！」

穂乃花 「そうなんだ。良かった。」

カレン 「ホノカはイギリスのお土産、何が良いデスか？ 何でも良いデスよ？」

穂乃花 「え？ 何でも？」

カレン 「別荘とかお城とか無しデスよ？」

穂乃花 「そ、そんな滅相も無い！ 私は何も！ あ！ じゃあ一つだけ！ お土産じゃないかもだけど、カレンちゃん毎日メールくれないかな？」

カレン 「勿論デス！ それはお願いされなくても送るデス！」



穂乃花「わーい！」

その後2人は別れる。

カレン「じゃあホノカ、メール送るデス！」

穂乃花「うん！私も送るね！」

その頃、圭太は母と一緒に回転寿司に来て、寿司を食べてた。

圭太の母「今日は思いつきり食べてね圭太。」

圭太「母さん、手当てか大丈夫か？」

圭太の母「大丈夫よ。たまには思いつきり使わないとね。」

圭太「元気だなおい。」

炙りサーモンを食べる。

圭太「美味しい。」

数日後。夏休みもそろそろ終わりに近付いてる。忍の部屋ではアリスがカレンダーで何日目か印を付けてる。

忍「そうこうしている間に刻一刻と夏休みが過ぎていきますね。」

アリス「そうだね。」

忍「あら？」

8月22日に星マークがあつた。

忍「明後日の星マーク、何か良い事でもあるんですか？」

アリス「その日はイギリスに帰省する日だよ。前から言つてたでしょ？」

あの星マークは、アリスとカレンが実家のイギリスに帰省する日だった。それを聞いた忍が固まった。

勇「用意は早めにしておいた方が良いわよ？」

アリス「うん！えつとカバンは・・・ってシノ!？」

カバンに忍が体育座りしていた。

忍「私もイギリスに連れて行って下さい！」

アリス「ええ!？」

忍「やっぱり寂しいですアリス・・・」

アリス「シノ！そんな事されたら私まで辛いよ！・・・分かったよシノ！一緒に行く！！」

カバンに忍を無理矢理押し込む。

忍「アリス・・・首が・・・首が・・・」

翌日の夜。アリスが荷物の確認をする。

忍「アリス、忘れ物は無いですか？」

アリス「うん！ちゃんとこけしも持ったし！」

忍「うう・・・今だけ本物のこけしになりたいです・・・ダメですね。折角実家に帰るのに私がこんなだと・・・」  
するとアリスは忍に近寄る。

アリス「シノ！私も寂しいけど、大丈夫！たったの一週間だよ！私が日本に来るまで、何年も会えなかったのを思えば・・・一週間分のシノを補充させて！」

そう言つて忍を抱きしめる。

忍「アリス・・・！」

就寝時間になった。

忍「寂しかったら何時でも電話して下さいね。なんでしたらエアメールでも。」

アリス「もうシノったら。届くより先に帰っちゃうよ。」

忍「そ、そうですね。」

翌朝。遂にアリスとカレンが帰省する日になった。カレンは眠そうにウトウトして  
る

忍「やつぱり、綾ちゃん和陽子ちゃんと圭太君と浩輔君も呼びましようか？」

アリス「朝早いし悪いよ。皆に宜しくね。」

そしてカレンのパパの車に乗る。

アリス「じゃあねシノ！ママも！」

カレン「行って来るデス・・・」

忍の母「行ってらっしゃい。」

忍「アリス・・・」

2人に乗せた車が空港へ向かって行く。忍が大きく手を振る。  
忍「くれぐれも！道中には気を付けてー!!」

リビングでは、勇が起きて来た。

勇「アリスは？もう行っちゃった？」

忍の母「とづくによ。」

勇「そっかあ。忍大丈夫かしら？」

忍は部屋でアリスのカーデイガンを見ている。

忍「一週間、思ったより長いです・・・何時もならカレンが家に来て一緒に遊んでい  
る頃・・・再会してからこんな離れた事なかったの・・・何だかとても寂しいです・・・  
アリス・・・アリスの残り香がします。アリス・・・！」

泣きながらアリスのカーデイガンの残り香を嗅ぐ。勇がそれを見ていた。

忍「あ、お姉ちゃん・・・」

勇（ここまで元気の無い忍を見るのは初めて。ちよつと心配。まるで、雨の日に捨て  
られたこけしみたい。嵐の中、それでも強く耐えて・・・）  
だが想像した途端、勇が笑ってしまった。

勇「忍、そんな顔してたら・・・一層こけしに見えるわよ・・・元気出して・・・」  
忍「な、何が可笑しいんですか!!」

折角の感動が台無しになってしまった。

勇『家に閉じこもってるより外に出た方が良いわよ。』

その言葉通りに忍は町中を歩く。

綾「あ、しの！こんな所で珍しい！」

後ろから綾が忍を見付けて声を掛ける。

忍「綾ちゃん。」

綾「そう言えばアリスは？」

すると忍は、綾がアリスに見えてしまった。

忍「アリス・・・！」

綾「え？」

忍「アリスー!!!」

綾「えー!? ツインテールしか共通点無いけれど!？」

アリスだと思い込んでる忍は綾に抱き付いて倒れた。

圭太「お前ら何やってんだ？」

綾「あ、圭太。」

忍「圭太君。」

そこにたまたま2人を見付けた圭太が声を掛けた。

圭太「忍、アリスはどうした？」

忍「それが・・・」

その後3人は綾の部屋に入る。

綾「出発今日だったわね。お見送り行けなくてごめんなさい。」

2人にジューズを渡す。

圭太「そつか、今日からイギリスへ帰省か。落ち込むなよ忍。アリスは今でも忍の事思ってるからな。」

忍「ありがとうございます・・・ん？」

テーブルの上に『好き・・・』と言う本が置かれてあった。忍が手に取って中を見る。

忍「君を愛してる……」

綾「ちよ！音読しないで！」

圭太「だったら最初から仕舞つとけよ。」

次々とページを捲る。

忍「綾ちゃんはラブストーリーを何時も読んでいるのですか？」

綾「ま、まあね……」

忍「儀式的な本は持ってませんか？」

綾「儀式？」

圭太「何だそれ？」

忍「綾ちゃんは魔法陣で好きな人を召喚しそうなイメージです！」

魔法使いの綾『サモン!!』

周りに炎が燃え上がる。

忍「出来ればそれでアリスを！」



綾「どんなイメージよ!!」

圭太「非現実的だなおい!!」

すると窓が開く音が聞こえた。

陽子「しのと圭太来てたんだ。」

忍「陽子ちゃんを召喚しました!」

浩輔「お! 3人お揃いか!」

圭太「浩輔も召喚されたぞ!?!」

陽子と浩輔が窓から侵入した。

綾「窓からなんて不法侵入よ!」

陽子「いや〜声が聞こえたから〜。」

圭太「お前地獄耳か。おい浩輔、窓からの侵入は犯罪だぞ。もしバレたりしたら。」

浩輔「何時も平気でやってる事だろうが! 今更御託を並べるな! やるんだ。」

圭太「何を?」

忍「陽子ちゃんついたらロミオみたいですね。ロミオとジュリエットの。」

陽子「そんな話だっけ?」

忍「違いましたっけ?」

圭太「どっちも違えわ。」

綾「陽子は、どうして陽子なの？」

陽子「どうもこうも・・・」

圭太「おい、バッドエンドになりそうなフラグだな・・・」

忍「アリスとカレンが居なくなつて、2人の大切さに気付いたんです。」

綾（たつた半日で？）

忍「もう私は2人が居ないと息が出来ない！はあ・・・はあ・・・そう、言わば2人は嘸です・・・このままでは・・・私は・・・！」

倒れる忍を綾が支える。

綾「しの！しっかりして！陽子！しのに金髪ボンベを！」

陽子「何それ苦しそう!？」

浩輔「窒息して死ぬわ!!」

陽子「全く、しのがそんなだとアリスが心配して楽しめないぞ?」

忍「そ、そうですよね！すみません！私もっともつとしっかりします！イギリスから帰つて来た時、笑顔でおかえりつて言えるように！」

すると両手でダンベルを持って筋トレを始めた。

陽子「何故筋トレ？」

忍「精神も肉体もムキムキになるんです！」

アリス『シノ凄ーい!!』

陽子「方向性間違ってる!!」

圭太「そんな早くムキムキにならねえよ!」

浩輔「髪は黒、筋肉モリモリモリマッチョマンのこけしだ。」

陽子「やれやれ。ねえ、今日しのん家泊まって良い?綾も一緒にさ。」

綾「え!?ええ。」

陽子「それに圭太と浩輔も一緒に。」

圭太「え?俺達もか?」

浩輔「良いね良いね。」

忍「ど、どうぞどうぞ!今日は寂しくて眠れない所でしたので!!」

4人「うふふふ。」

その日の夜、4人が忍の家に泊まる事になった。風呂から忍が上がった。

忍「ふう〜。」

忍の母「忍、今さつきアリスちゃんから、無事イギリスに着いたって電話があったわよ。」

忍「ええ!？」

部屋で忍が落ち込んでしまった。

綾「帰ったらいくらでも話せるわよ。」

陽子「あ、しの。私パジャマ忘れちゃったんだけど。」

圭太「おい行く前に確認しとけよ!」

タンスの中を探る忍。

忍「では私のお貸ししますね。」

陽子「Tシャツとかで良いから。」

忍「あ! いえ! 丁度良いのが!」

陽子「ん? え!?!」

忍「うわあ！陽子ちゃん可愛いです!!」

陽子「暑いなくこのパジャマ。」

忍から貸してるパジャマは、白のナイトドレスだった。

綾（びつくりする程似合わない・・・）

部屋から出た圭太と浩輔が部屋に入る。

浩輔「何だろう、違和感なさそうな感じする。」

圭太「結構アリかもな。」

その後、圭太と浩輔はポーカーをしてる。

浩輔「スリーカード!」

圭太「フォーカード!」

浩輔「ぶべら!!」

ババ抜きしてる3人。忍がウトウトしてる。

忍「あ!すみません。私そろそろ眠くて・・・」

綾「早っ!？」

陽子「眠れないんじゃないかなかったのか？」

綾「でも、しのが元気になって良かったわ。」

忍「皆さんのお陰です！」

陽子「また何時でも遊びに来るからさ。」

浩輔「毎日でも良いぜ。うんと遊ぼうぜ！」

忍「それで、あの・・・」

陽子「どうした？」

忍「一緒に、寝ても良いですか・・・？」

すると陽子と綾が忍の頭を優しく撫でる。圭太と浩輔は微笑ましい顔で忍を見てる。

忍「な、何だか皆さん！今日は私の事子供扱いしてませんか!？」

陽子「この感じ、何だか懐かしいな。」

綾「5人で居ると、中学生の頃に戻ったみたい。」

圭太「あの頃が楽しく思えるぜ。」

浩輔「昔に戻りたい気分がするな。」

忍「本当ですね。・・・イギリスのホームステイでの日々を思い出します・・・」

綾「あわわわわ!ごごごごめんなさい!!」

圭太「あらら。」

そして就寝時間になって、全員が寝る。忍と綾と陽子是一緒の布団。圭太と浩輔は個別の布団に入って寝てる。

忍（イギリスは、晴れていますか？時差ぼけは大丈夫でしょうか？アリス、1日合わないだけで、話したい事がいっぱいですよ！）

そしてイギリスバトルが始まった。光の球体が激しくぶつかり合う。

アリス「カレン!!」

アリス、綾、陽子の3人の魔法少女達が着地する。その目の前に居たのは。

カレン「ワーハッハッハッハッハ!!」

闇の魔女の姿をしたカレンが浮遊していた。そして左右隣の2つの光から空太と美月が姿を現した。

カレン「力が有り余っているデス!ちよつとやりすぎてしまうかも知れません!」

空太「ひよつとして、何時もの嘘だと思った?」

美月「忍お姉ちゃんにはこけしになってもらったよ!」

忍『酷い・・・』

既に忍はこけしにされてしまった。

陽子「空太!美月!」

綾「もうやめて!こんな事しても何も変わりはないわ!」

アリス「カレン!シノを元に戻して!」

カレン「だったら、この私を倒す!デス!!」



掌から闇の玉を上放と、闇が一斉に地上に落ちた。その落ちた所から。腹に4が書かれたモノリスが複数現れた。そしてビッグベンの後ろから巨大なモノリスが起き上がった。

陽子「あれは！」

綾「凄く大きいわ！」

アリス「そんな・・・完成していたなんて・・・！」

カレン「アハハハ！覚悟するデス！アリス！」

モノリス達はアリス達を囲む。

???「待った!!」

全員「!？」

声が聞こえた方を見ると、ビルの上に2人の人影があった。その2人は。

綾「圭太！」

陽子「浩輔！」

圭太と浩輔が立っていた。浩輔の手には謎のベルトがあった。

浩輔「助太刀に来たぜ！」

圭太「カレン！俺達を忘れるな！」

カレン「Oh！ケイタにコースケ、私にやられに来たんデスか？」

圭太「フツッ！お前達を正義のロードへ招待してやるぜ！行くぜ浩輔！」

浩輔「よっしゃ！」

圭太がジャケットのボタンを外すと、腰に風車を取り付けられたベルトが巻かれてあつた。するとベルトの風車が勢いよく回つた。すると圭太がジャンプして3人の所へ向かう。

そして浩輔は、持つてるベルトを腰に装着して、左のアクセラレーターグリップを捻る。

『アルファ』

浩輔「アマゾン。」

電子音が鳴り、アマゾンと言うと、浩輔の体全体が赤く燃え上がった。そしてジャンプして3人の所へ向かった。

2人は3人の所に着地した。圭太は傷だらけのホッパーに、浩輔はアマゾンアルファに変身した。

圭太「此奴らは俺達が蹴散らす！」

浩輔「援護するぜ！」

陽子「頼む！」

ホッパーとアマゾンアルファがモノリス達に立ち向かう。

圭太「やああああ!!!」

『バイオレントスラッシュユ!』

浩輔「ハアツ!!」

ホップパーがキックしてモノリス達を蹴散らし、アマゾンアルファがバイオレントスラッシュユでモノリス達を切り裂く。しかしモノリスが次々と出現する。

浩輔「数が多過ぎて埒があかない!」

圭太「全員ハワイへ招待してやるか!」

陽子「こうなったら、綾! 禁断のあの技を使うんだ!」

綾「き、禁断の!?! いけないわ!!」

陽子「やるしかない!」

綾「・・・分かった!」

陽子・綾「封印解除! 金・髪!」

こけしになった忍を上に掲げると金色に光った。そして陽子と綾のコスチュームがチェンジして、髪の色が金髪になった。

空太「遂に封印が!」

美月「解くの!?!」

カレン「この金色の輝きは!!」

圭太「禁断の技が!!」

浩輔「使ったのかあの2人!!」

アリス「まさか、ヨーコ達も・・・!!」

陽子・綾「はあああああああああああああああ  
!!!!!!」

忍『ひやああああ!!もしかして私も!!?!?』

こけしになつた忍の髪の毛が徐々に金色になつていく。

忍「はっ!」

目を覚ました忍がキョロキョロ見る。どうやら忍の夢だった。陽子と綾も起きた。  
圭太と浩輔も起きた。

陽子「うくんどした・・・?」

忍「はい。面白い夢を見まして。」

綾「夢？」

陽子「どんな？」

圭太「面白い夢って何だ？」

浩輔「話してくれ。」

忍「それが、途中で目が覚めてしまつて。陽子ちゃんと綾ちゃんが今まさに禁断の技を使う寸前だったのですが。」

綾「き、禁断つて!?!」

陽子「何それみたい!!」

圭太「それでどうなったんだ!?!」

浩輔「教えてくれ忍!」

「END」

# Episode 24 「なによりとびきり好きだから」(最終回)

カレン 「イギリスに着いてから、アリスずっとシノの事ばかりデスね。」

ビデオカメラでアリスを撮影する。

アリス 「だって、ん？カレン、イギリスに着いてからしよつちゆうビデオ撮ってるね。」

カレン 「ハイ！日本では見られない風景皆へのお土産にするデス!!」

アリス 「わあ！ナイスアイデアだね！じゃあもつと建物とか！」

カレン 「NoNo！これはシノに会いたいしよんぼりアリス映像集デス！」

アリス 「何なのそれ!!」

カレン 「それじゃあ、今日はお土産買いに行きマシヨー！買い物ー！」

アリス 「昨日山程買ったから十分だよ！」

カレン 「えー？」

アリス 「私達が無事帰る事が一番のお土産なんじゃないかな？」

カレン 「成る程デス．．．でも、帰るまでシノ、私達の事覚えてるデシヨウか？」

アリス 「あ．．．！」

それを聞いたアリスの顔が真っ青になった。

カレン「もしかしたらもう・・・」

アリス「もー覚えてるよー！ホームステイの時は3年も離れてたけど大丈夫だったし！今回はたったの1週間だよ！」

カレン「だってシノの間。」

回想・この間の忍。

忍『コペンハーゲンって何処の首都でしたっけ・・・？』

コペンハーゲンとはデンマークの首都である。回想終了。

カレン「って。」

アリス「ただの度忘れだよ！」

カレン「じゃ、シノはちゃんと覚えてマス？」

アリス「うん！私達と同じ会いたがってるに決まってるよ！（ね！シノ！）」

制服姿の忍がモザイクに掛かっている。私服姿の忍もモザイクに掛かっている。

忍『いとおかし。』

最終的に雛人形姿の忍が浮かんだ。

アリス「シノー！シノ大和撫子〜。」

カレン「アリス〜、シノの事ちゃんと覚えてマス？」

その後アリスの実家。

カレン「今日は何して遊びマス？アリスの好きな事で良いデスよ〜！」

アリス「本当？」

部屋で花札をする。カレンが有利な状況になってる。

アリス「もーカレン強いよー。」

カレン「ふっふっふー！花札久し振りにやりマシタ！」

アリス「シノともこの部屋でしたんだ。花札。」

するとカレンはポケットからスマホを出した。

カレン「アリス、シノに電話しますか？」



アリス「え？あ・・・ううん、日本はもう夜だよ。」

カレン「Oh、それでシタ：私、アリスやシノが携帯持ってないの不便そうだなって思ってたシタ。携帯あっても不便デスね。」

アリス「言いたい事があつたら手紙で気持ちを伝えれば良いんだよ。私とシノだったらそうするよ！」

カレン「それはそれで時間掛かるデス。」

アリス「そっか・・・」

するとノックの音が聞こえた。アリスのママが部屋に入って来た。

アリスのママ「アリス、カレン、今スコーン作ってるんだけど。」

1階に降りて、お菓子作りをする。アリスとカレンがクッキーの生地を使って自分の名前の形にする。

カレン「KAREN参上デス！」

アリス「出来たー！」

更に忍の名前も出来た。

アリス「ハートいっぱい作ろー！」

カレンが鉄板の上にアルミホイルを敷いて、その上にクッキークッキーの生地を乗せる。

カレン「これでOKデス？」

アリスのママ「ええ。カレン手際が良いわね。」

カレン「シノの家でも作っただんデス！」

アリスのママ「そうなの？」

アリス「皆でティーパーティーしたんだよ？シノ凄く燃えてたけど作るのに時間掛かつちやつて。結局次の日学校で食べたんだよね。」

カレン「中庭でレジャーシート敷いてピクニックデシタ！」

クッキークッキーをオーブンに入れる。

アリス「カレンのゴマクッキークッキーも美味しかったな。」

カレン「ホノカや先生達も喜んでくれマシタ！アヤヤの型抜き借りてハート型のクッキークー！」

アリス「作ってる時、ヨーコが小麦粉ひっくり返したけどコースケが助けてくれたんだよね。」

カレン「アハハ！ドジっ子ヨーコ！後ケイタが凄く作るの上手デシタ！」

アリス「カレンが来る前シノもオレンジジュースこぼしたんだよ？」

カレン「ドジっ子シノ！アハハハ！」

アリスのママ「うふふ。」

アリス・カレン「ん？」

アリスのママ「もつと聞かせて。日本の話。」

アリス「うん！」

カレン「YES！」

その後もアリスのママに日本でやった事を色々話した。話してる最中にクッキーが焼けた。そして中庭に移動してティーパーティーの準備をする。準備が完了し、ティーパーティーを始める。

カレン「わあ！美味しそうデス！」

アリス「うん！いただきます！」

アリスのママ「いただきます。」

カレン「いただくデス！」

焼けたクッキーをカレンがいただき、アリスがスコーンをいただく。

カレン 「お上手デス！」

アリスのママ 「アイスクリームもあるわよ？」

カレン 「わーい！食べたいデス！」

そして数日後の夜、アリスの家で夕食を食べる。カレンも居た。

アリスのママ 「1週間もあつという間ね。アリス、明日はパパがあなた達を空港まで送るわ。」

カレン 「宜しくお願いします！」

アリス 「カレンのパパとママは？」

カレン 「空港で待ち合わせデス！」

アリス 「折角の家族旅行なのに、ほとんどうちに居たね。」

カレン 「パパとママとまた来るデス！」

アリスのママ 「2人共随分日本に慣れたみたいね。」

カレン 「ん？」

アリスのママ 「2人で話をする時、何時も日本語だし。」

アリス・カレン「あ！」

アリスのママ「何より・・・毎食納豆を食べるのが・・・」  
納豆から遠ざかるアリスのママ。

アリス「折角日本から持って来たのにー！！」  
更に納豆から遠ざかる。

その後アリスの部屋ではアリスとカレンが居た。

カレン「今度来る時は、皆で来られれば良いデスね。」

アリス「うん！アヤは飛行機苦手なイメージあるよ。」

カレン「ヨーコが行くならアヤヤも付いて来るはずデス！コースケが来ればケイタは  
コースケにつつこんで来マス！地球の裏側でも宇宙でも何処までもデス！」

陽子『イエーイ！』

綾『しようがないわねー！』

浩輔『宇宙キター!!!』

圭太『お前の運命は俺が決める!』

アリス「凄〜い!」

宇宙を飛んでる4人を想像して2人は笑い合う。

アリス「日本に帰ったら夏休み終わっちゃうね。」

カレン「2学期楽しみデス! 体育祭と学校祭!」

アリス「シノ記念日もあるよ!」

カレン「パーティーしなくちやデスね!」

アリス「うん! 楽しみだなく!」

カレン「楽しみデス。」

するとカレンとアリスが眠たそうに欠伸をした。

カレン「移ったデス。」

アリス「うふふ。寝よつか。」

カレン「はい。」

電気を消して布団に入る。

アリス「カレン。」

カレン「ん？」

アリス「イギリス来るの誘ってくれてありがとう。」

感謝されたカレンは微笑んで目を瞑る。

カレン「早く寝ないと寝坊するデスよ？」

アリス「寝るよもう。」

カレン「おやすみデス。」

アリス「うん。おやすみ。」

2人は静かに眠る。

そして翌朝。遂に日本へ帰る準備が出来た。アリスのパパが車に荷物を入れる。そして家では。

アリスのママ「日本に電話するわ。」

アリス「着いた日はシノと電話出来なかったから今日こそは！」

カレン「1週間振りの会話緊張シマスねー！」

アリス「あ!!」

カレン「ドキドキ〜!」

アリス「や、やめてよカレン! どうしよう・・・手が震えて・・・」

緊張を解す為深呼吸をする。

カレン「深呼吸デスよアリス!」

アリスのママ(電話するだけであんなに。)

そして忍の家と回線が繋がった。

忍の母『はいもしもし? もしもーし?』

その頃忍の部屋では、今日も4人がお泊まりに来ていた。

浩輔「フオーカード!」

圭太「ロイヤルストレートフラッシュユ!」

浩輔「またかよ! 圭太お前何か仕組んでるだろ!」

圭太「仕組んでねえよ。俺に僥倖の女神が舞い降りただけだ。」

忍と陽子と綾がババ抜きをして、圭太と浩輔がポーカーをやってる。忍にまた眠気が



来た。

綾「しの限界みたい。」

陽子「あはは。もう寝るか。」

綾「うん。」

浩輔「圭太！もう1戦！」

圭太「懲りねえなお前は。」

すると忍の母が部屋に入って来た。

忍の母「アリスちゃんから電話よ。」

忍「アリス!!!」

浩輔「うおっ!?!」

突然忍の眠気が吹っ飛ばされた。

陽子「一発だな。」

圭太「完全に開眼だなおい。」

そして忍がアリスと電話する。

忍「アリスー！お久し振りですー！」

陽子「いやー良かった良かったー！ やつとアリスと電話出来て。」

綾「ええ！ しのも喜んで……って何か固まってるわ!？」

途中で忍が固まっていた。

陽子「まさかアリスの身に何かあったんじや!？」

忍「アリスが、凄い勢いで英語を喋って……」

圭太「ただの照れ隠しかよ!？」

アリス『シノ、元気？ 私は元気だよ。カレンもママもダッドもポピーも元気だよ。これから家を出て飛行機に乗るよ。日本に着くのは日本時間で朝の9時くらいかな。カレンと一緒に沢山お土産買ったから楽しみにしててね。気に入ってくれると嬉しいな。イギリスは懐かしくて、楽しかったよ。ママ達も喜んでくれたよ。イギリスの話、帰ったらいっぱいするね。久し振りに話すから、何話して良いか分からないよ……』

忍「ハロー。」

アリス『あ！こ、こんにちは。』

忍「ハロー！」

綾「会話してるみたいだけど。」

陽子「いやいやいや。」

浩輔「ハローで会話成立しねえよ。」

アリス「シノ、あのね、さっきはごめんね。」

カレン「アリス！ちよつと貸して下サイ！」

アリス「うん。」

今度はカレンに代わる。

カレン「シノ？元気デス？お土産いっぱい買ったから覚悟しておくデス！アリスも元気デスよ？イギリス懐かしいですってアリス言ってマシタ。はい！それじゃバーイ！」  
そう言つて切つてしまった。

アリス「えー！?!どうして切つちやうの!!!」

カレン「わあ!!ごめんデスつい・・・」

アリス「ついじゃないよー!!!!」

切ってしまった事にアリスが怒ってしまった。ガツカリして縮こまってしまった。

アリス「全然喋れてないのに・・・」

カレン「アリス凄い喋ってマシタ！大丈夫！シノには通じたはずデス！」

アリス「あ、うん。」

カレンが何とかアリスを励ます。励ました結果アリスが少し元気を出した。

そして忍は、受話器を置いた。

陽子「またアリスと喋れなくて残念だったな。」

忍「いえ、今度は喋れましたよ。英語でいっばい。ハローって。」

陽子「そっか！」

圭太「でも下手したらあの時みたいになっちまうぞ？」

それは、今年の3学期初日に起こったアリスが英語で喋ってる時の事だった。

その頃アリスは、部屋に置かれてるこけしを持った。

カレン「忘れ物無いデス？」

アリス「うん！これで全部！」

すると2人は、ひらがなチャートを見付けた。

アリスのママ「2人共、時間よー？」

アリス・カレン「はい！」

そして日本へ戻る時間になった。

カレン「お世話になりマシタ！」

アリスのママ「体に気を付けてね。アリスの事宜しくね。」

カレン「OK！任せて下サイ！」

アリス「もー子供じゃないんだからー！」

アリスのママ「また何時でも帰っていらっしやい。」

アリス「うん。」

カレン「バイ！」

車の方へ走るカレン。アリスも車の方へ歩くが、恋しくなつてママに抱き付いた。マ

マは少し戸惑ったが、笑顔でアリスを優しく抱く。

アリスのママ「手紙、待ってるわ。」

優しく言うママ。アリスはママを離す。アリスは嬉し泣きしてる。

アリス「行ってきます！」

そして車に乗って空港へ向かう。アリスのママとポピーが空港へ向かうアリス達を暖かく見送る。そして飛行機に乗って日本へ旅立つ。

その頃日本では、朝になっていた。忍の家では、忍が何故かシャワーをしていた。

陽子「さて、もうすぐアリス達が帰って来るけど。」

綾「どうしてお風呂に入ってるのかしら？」

風呂から上がった忍は、今度はオレンジ色のドレスを着る。

忍「何処か変な所無いでしょうか？」

陽子「何時も通り変だけど。」

浩輔「制服より酷えぜ。目立ってしようがないわ。」

忍「あ！そろそろです！」

綾「え!? 外で待つのは!？」

外に出た忍。すると車のドアが開く音が聞こえた。振り向くとそこには。

忍「アリス!!」

カレンとアリスの姿があった。頭にリボンがあった。

アリス「シノ!!」

忍「アリース! カレーン!」

アリス「ただいま! シノー!」

カレン「ただいま! デース!」

1週間振りの再会を果たした3人は抱き合う。

忍「おかえりなさい! ようこそ無事に帰って来てくれました!」

アリス「長い1週間だったよー!」

綾「おかえりなさい!」

陽子「おかえり!」

圭太「おかえりさん!」

浩輔「おっ久!」

カレン「ただいまデス！」

アリス「来てくれたの？」

綾「ええ！見送り出来なかったから。所でそのリボンは何なの？」

カレン「お土産デス!!」

陽子「何だそのプレゼントは私みたいなのは！」

浩輔「こんなのお土産じゃないわ。ただのアリスとカレンよ。」

圭太「だったら受け取れば良いだろ！」

家に戻り、アリスとカレンがイギリスのお土産を出した。

カレン「皆の分もいっぱい買って来たデスよ！好きなを選んで下さい！」

陽子「おー！凄え！」

綾「これ紅茶！可愛い！」

カレン「アールグレイデス！」

浩輔「こりやあ凄え！たんまりありますぜ！」

圭太「浩輔早まるな。」

そこに勇が起きて来た。



勇「おかえり。」

カレン「イサミー！」

アリス「イサミもお土産選んで！」

勇「私は最後で良いわ。ん？」

テーブルの上に置かれてるビデオカメラを見付けた。保存されてる映像を確認するとコードをテレビに繋げて再生ボタンを押した。

忍（カレン）『大宮忍です！この映像はシノに会いたいしよんぼりアリス映像集です  
！』

アリス「きやあああああああああ  
!!!!!!」

忍（カレン）『お！アリス絶賛しよんぼり中です！私がシノのフリをして元気付けてあげマス！』

アリス「それはダメーリー!!!」  
圭太「カレンこんな事やってたのかよ。」

その後荷物を忍の部屋へ持って行く。

忍「時差ボケは大丈夫でしたか？」

アリス「うん！飛行機で寝たから。」

部屋に入ったアリスはとても懐かしく感じてた。

忍「実はアリスが居ない間、寂しくてちよつと泣いちゃいましたよ。」

アリス「シノ・・・！」

忍「イギリスでのお話聞かせて下さい。」

アリス「うん！あ、あれ？シノの夏休みの宿題真つ白！帰省中に終わらせておくようにって言ったのに！シノ、今度は違う意味で泣く事になるかも・・・」

忍「え？」

何と忍の宿題がほぼ真つ白になっていた。

そして2学期が始まった。アリスと綾が中庭の花壇に水やりをする。

綾「え!?夏休みの宿題今朝終わったの!？」

アリス「うん・・・」

綾「提出日ギリギリじゃない!アリスが居れば大丈夫だと思っただけど。」

アリス「力及ばずだったよ・・・」

綾「はあ、しのつたら相変わらずね。」

そんな忍は今、教室で金髪少女倶楽部の雑誌を読んでいる。本当に相変わらず金髪に目がない。すると机の中から一枚のプリントが落ちた。

穂乃花「あ!忍ちゃん、落とし、はっ!!ご、ごめんね!見てないから!!モザイク掛かって見えたなかったからー!」

浩輔「うお!？」

プリントを見て驚いた穂乃花が忍に返して浩輔を横切つて走り去つて行つた。

浩輔「松原どうしたんだ？」

忍「どうしたんでしょう？」

穂乃花が見たプリントを綾が見て顔を険しくした。それは英語のテストだった。点数は5点。

綾「しの、これは何？」

忍「英語のテストです・・・」

綾「見れば分かるわ!!」

浩輔「これ酷いな・・・」

綾「いい加減勉強しなさい！後半年で受験生なのよ！」

浩輔「忍！この点数は酷すぎるぞ！俺はこの前のテストは前より良い点取れたんだぞ！」

するとそこにカレンが忍に抱き付く。

カレン「アヤヤ！コースケ！そんなにシノを責めないで下サイ！」

綾「カレン？」

カレン「確かに勉強はダメかもデスが、シノには色んな才能があります。テストの点数はたったの5点デスが！」

忍「カレン声が大きいです！」

浩輔「カレン、忍の味方をするのは良いが、さっきの言葉は褒めてるのか貶してるのかどっちかにしろよ。」

綾「色んな才能ってどんな？」

カレン「えつと皿回しとか！クルクルクルクル〜。」

忍「私回した事無いです。」

カレン「大丈夫デス！結構簡単デス！」

忍「それなら私でも。」

皿に手を伸ばした瞬間、落として割ってしまった。

綾「回す前に割れたわ・・・」

浩輔「ダメじゃん。」

忍「お皿が・・・」

カレン「ドンマイ！次は腹話術デス！」

アリスと綾のパペットを取り出した。

綾「どうして一発芸系なの!?!」

浩輔「成績関係ねえだろ！」

腹話術に挑戦。

忍「わあアリス綺麗な金髪ね！ありがとうアヤ！私がいただくわ！アリスの髪は蜂蜜味よ！きゃー！」

腹話術をする忍だが口が動いてる。

綾「私を変なキャラにしないで！」

浩輔「プラス口思いつきり動いてるぞ！」

忍「私って、何の才能も無いのですね……」

才能が無くてしょんぼりしてしまった。

カレン「誰だって1回は上手く出来ないデスよ。さあ！もう1回皿を回すデス！」

浩輔「ええ加減にしろ！」

陽子「コンニチハ……」

そこに圭太とアリスと陽子が来た。陽子は元気が無い。

カレン「Oh！ヨーコまで落ち込んでマス！」

綾「どうしたの陽子？私は元気なあなたが好きだわ。」

腹話術をする綾。見事にこなした。

忍「綾ちゃんが腹話術を！」

カレン「上手デス！」

浩輔「隠れた才能が覚醒したのか!?それで陽子、そのクマのぬいぐるみは何だ？」

陽子「実は、昨日美月のクマを壊しちやって・・・」

昨日、陽子が美月のクマのぬいぐるみの左腕を破いてしまった。

陽子『ああやべえ!!』

仕方無くガムテープで雑に直した。

陽子『ごめんな、わざとじゃないんだ。』

綾「直し方が雑!!」

美月『うわあああん!お姉ちゃんが!お姉ちゃんが!』

空太『よしよし。』

泣いてる美月を空太が慰める。

陽子『美月ごめん!ガムテープは無いよな!せめてセロハンテープだよな!』

美月『うわああああん!!!』

そして現在に至る。

圭太「セロテープでもアカンわ!!」

陽子「私って何でこうがさつなのかな・・・」

忍「大丈夫です!クマ夫さん直りました!」

陽子「え!?!」

忍「はい!これで仲直りして下さい!」

何と忍が一瞬にしてクマを直した。

陽子「今の一瞬で!?!ありがとー!流石しのだよ!」

アリス「当たり前だよ!だってシノだもん!シノ最高!」

カレン「シノ最高!」

忍「大袈裟ですよ。」

綾「才能あるじゃない!しのなら将来プロの服飾職人になれるかもしれないわ!」

圭太「おお!服を自作出来るレベルなら売れる事間違いないだな!」

カレン「成る程!シノ!デザイナーになるデス!」

陽子「デザイナー?格好良い!」

浩輔「その才能を活かせば将来大丈夫だろ!」

アリス「凄くいい!世界の大宮だね!」



忍「あの、私通訳者になりたいんですけど……」

6人「あ。」

アリス「シノ、人には向き不向きがあるんだよ？」

忍「ヒイツ!？」

陽子「アリスの一撃……」

圭太「結構辛口だな。」

アリス「でもそれでもシノが頑張るなら私は全力で応援するよ!」

忍「アリス……」

アリス「それでもダメだったら私が通訳者になる!」

浩輔「おいアリス、お前がなったら意味無えだろ。」

忍「分かりました!私頑張ります!」

6人「おー!!」

アリス「頑張ってシノ!それじゃ私応援するね!全力で!」

早速勉強を始めろ。

アリス「さあ!お勉強の時間だよ!英単語50個意味調べて書き取り50回ずつ!」

急にアリスが鬼教師ポジションになった。更に竹刀も持つてる。

忍「アリス厳し過ぎます！せめて10回で！」

アリス「今日はビシバシ行くよ！ビシバシビシバシ！」

忍「ひええ!!」

陽子「勉強って自分でやる気にならないと身にならないよなー。」

カレン「馬の鼻先に人參ぶら下げたらやる気になるデス！」

浩輔「それ良く漫画とかでやるよな。」

綾「しのに金髪ね！」

陽子「あはは！どうやって金髪ぶら下げるんだよ？」

アリス「よいしょ。」

するとアリスが忍の頭に顔を乗せた。すると忍のスピードが更に倍増した。

圭太「どう言う状況だこれ？」

カレン「でもやる気出してマス。」

圭太「金髪ボンベってこれか？」

陽子「好きこそ物の上手なれって言うし、しのは英語が苦手でも外国は好きでしょ？」

だつたら大丈夫だよ！」

忍「陽子ちゃん・・・はい。私、アリスもカレンも大好きです！陽子ちゃんのご飯が

好きだから食いしん坊なんですな！成る程！」

陽子「それはただの食欲だよ！」

浩輔「でも早弁してるから食いしん坊間違い無しだな。」

陽子「こら浩輔ー！」

そして放課後になっても忍は勉強に集中する。途中で綾が教えてあげたり、穂乃花と香奈が応援に来てくれたりもした。そして時間が過ぎて。

忍「予習復習宿題のプリント全部自分の力で終わらせましたー！」

陽子「それが普通だよ。」

予習と復習と宿題を終わらせた。

忍「凄く頭が良くなった気がします！皆さんありがとうございます！」

アリス「良く頑張ったよー。それじゃあ次の問題集だよ！もう一頑張り！」

忍「もう勘弁して下さい！」

圭太「はいこれで終わり。じゃあ皆帰るか。」

そして全員下校する。

忍「はあく、頭使い過ぎてふわふわします。」

陽子「しのは何時もふわふわしてるけどなー。」

綾「帰りに何処か寄る？」

カレン「ハイハイ！クレープ食べたいデス！」

アリス「クレープ！」

忍「良いですね！若者っぽいです！」

浩輔「俺達まだ若者だろ？」

陽子「私チョコカスタード！」

カレン「モダンチョコ！」

アリス「いちご入ってるのが良いな〜！」

圭太「俺バナナクリームにするか。」

浩輔「じゃあ俺キャラメル！」

忍「迷いますね。綾ちゃんは？」

綾「そうね、アップリシナモンにしようかしら。」

陽子「良いな！一口ちようだい！」

綾「え!？」

陽子「私のもあげるから! 予約ね!」

綾「勝手なんだから・・・」

そして外に出ると、真っ赤な夕日が浮かんでた。

忍「夕日が眩しいです。」

陽子「よーし! 今日には体育が無かったから途中まで競争しようぜ!」

綾「え!？」

忍「良いですよ!」

陽子「走れー!」

忍「わーい!」

アリス「待ってシノー!」

圭太「負けるかー!」

浩輔「あ! ずりいぞ!」

カレン「GO! GO!」

7人が競争する。

後ろでは烏丸先生と久世橋先生が見ていた。

久世橋先生「青春。」

烏丸先生「え？」

久世橋先生「青春って良いですよ。私学生時代の頃は勉強ばかりであんまり楽しめていなかった気がします。」

烏丸先生「久世橋先生、楽しめれば何時だって青春時代ですよ！」

久世橋先生「烏丸先生。」

烏丸先生「久し振りにハイタッチしてみましよう！」

久世橋先生「え？」

烏丸先生「ハイタッチ！」

だがずれてしまつて失敗。

烏丸先生「上手くいかないものね。」

久世橋先生「烏丸先生・・・もう一回やってみませんか？」

烏丸先生「いきますよ！トータム！」

久世橋先生「ポール！」

テニスコートでは穂乃花と香奈がテニスの練習をしていた。

香奈「きん！」

穂乃花「ぼっ！」

その頃カレンは。

カレン「ニャー！ニャー！ニャー！ホノカに送るデス！」

猫を見付けて写真を撮って穂乃花に送信した。

そして陽子は、直ったクマのぬいぐるみを美月に見せた。

陽子「美月ー！しのが直してくれたぞー！」

美月「ありがとう。凄い綺麗な縫い目・・・」

陽子「だろー？」

空太「何でお姉ちゃんが嬉しそうなの？」

陽子「うーん、何か嬉しかったんだよねー！しのはきつと通訳者になれるよー！小さい頃からずっと一緒に私が呼んだから間違い無い！」

空太「話が見えないけど、何か保護者っぽい。」

陽子「そう？しのは妹みたいな感じだからな。」

美月「妹・・・お姉ちゃんはその前に自分の心配したら？」

人の事言えない成績の矢印が陽子の体に突き刺さった。美月はぬいぐるみを持って走り去った。

陽子「美月まだ怒ってるの!?もう!!」

空太(妬いてる。)

美月はただやきもちやいてるだけだった。空太にはお見通しだった。

その頃綾は部屋で携帯を見ていた。

綾「陽子、美月ちゃんと仲直り出来たかしら？」

陽子にメールしようとするが。

綾「やっぱりダメー！」



その頃浩輔は部屋でゲームをしていた。

湊「浩輔ー、晩御飯よー。降りて来てー。」

浩輔「おいつすー！今行くぜー！」

その頃圭太は、母と一緒に外食していた。今回はファミレス。圭太はペペロンチーノ。圭太の母はハンバーガー。

圭太の母「もう2学期が始まったのねー。この先面白い事が起こるかもね。」

圭太「何で母さんが緊張してんだよ？」

圭太の母「何でだろうね。」

そして忍の家では、勇がテレビを観ていた。

忍の母「勇、もうすぐ忍達帰って来るわよ？夕飯の支度手伝って。」

勇「んー。」

その頃忍とアリスは、家の前に居た。郵便受けからエアメールが入ってた。

忍「エアメールです。アリスのお母さんからですよ！」

アリス「イギリスで撮った写真かな？」

忍「見るの楽しみです！アリス、お返事書く時私も書いて良いですか？」

アリス「え？」

忍「私も英語でお手紙書いてみます。辞書を引きながらなので時間は掛かると思いますが、これも通訳者になるための第1歩です！」

アリス「うん！私も手伝うよ！」

忍「はい！まずはローマ字で下書きです。」

アリス「日本語で書いてから英語にした方が良いと思うよ？」

忍「そうですね？最初のエアメールはローマ字で書いてましたよね？」

また新しい出来事が起こりそうです。

『THE END See you!!』

## 「Pretty Days」

到着した綾は走り疲れた。

綾「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

忍「綾ちゃん!？」

陽子「おいおい・・・」

綾「お願いだから・・・ちゃんと時間通りに来て・・・」

忍「だ、大丈夫ですか!？」

アリス「アヤ!？」

カレン「アヤヤはもう少し体力付けるデス。」

圭太「おい心配しろよ。」

忍「すみません、この所何だか朝が鈍くて・・・」

陽子「眠い?」

浩輔「寝不足なのか?」

忍「今朝なんて・・・ベッドから出たと思つたら、何時の間にか支度を終えていた程です。」

綾「全部アリスがやってくれたのよ！」

浩輔「良いなそれ。俺にくれ。」

圭太「アホか。」

その後教室へ向かう。

圭太「おい綾、大丈夫か？」

綾「え、ええ・・・」

圭太がバテてる綾を背中から押してる。

カレン「もしかしてシノ、お疲れデスか？」

忍「そう見えますか？」

アリス「シノ、学校祭の準備家でも頑張ってるもんね！」

そして階段を登る。

陽子「A組は演劇だっけ？しのが脚本担当の。」

忍「はい。今脚本のラストを練っている所なのですが……脳の普段使っていない部分を使っている気がして……それで眠いのかもかもしれません。」

陽子「その部分、もつと普段から使った方が良くないか？」

浩輔「正論だ陽子。」

アリス「シノ……」

綾「はあ……もう、演劇の脚本だけでも大変なのに、衣装のリーダーまで引き受けちゃうから……はあ……」

圭太「まあ忍が決めた事だから大目に見てやってくれ。」

カレン「デスが！シノお陰で面白い出来になりそうデス！早く脚本見たいデス！」

浩輔「俺も気になる！忍早く見せてくれ！」

忍「もう少しだけ待って下さいね。」

綾「はあ……あんまり張り切り過ぎてても……はあ……それで遅刻したら大変よ？そっだ！毎朝電話で起こしましょうか？」

カレン「Oh! Morning coal!」

浩輔「そりゃあナイスイデア！是非実行すべきだ！」

忍「そんな！悪いですよ！」

陽子「じゃあ昔みたいに迎えに行こうか？」

綾「陽子が？はあ・・・」

忍「小学校の時は、陽子ちゃんと圭太君と浩輔君が家まで迎えに来てくれてたんです。」

アリス「へえ〜！」

カレン「でも今日はヨコとコースケも寝坊したデス！」

陽子「そつか！ごめんやっぱ無理！」

浩輔「俺も無理！めんごめんご！」

圭太「おい浩輔うぜえぞ。」

アリス「大丈夫！私が居るから遅刻はさせないよ！」

忍「アリス〜！！じゃあ私がどれだけ眠っていてもずっと起こしてくれるんですか？」

アリス「シノの為だったら全然へっちゃらだよ！」

浩輔「あんまり無理するなよアリス？」

すると綾は忍を見て小さく呟く。

綾「小学校の頃・・・」

圭太「ん？綾どうした？」

綾「え？いや・・・」

カレン「ん？」

するとカレンが綾にくっ付いた。

カレン「じゃあアヤヤは毎朝私を迎えに来て下サイ！」

綾「・・・くすつ。1人で来れるでしょ？」

その後のA組のHR。

久世橋先生「今月は学校があります。これから準備などで忙しくなると思いますが、あまりそちらにばかり気を取られず勉強の方もしっかりと。」

その後の休憩時間。

アリス「楽しみだね！学校祭！」

忍「はい！」

陽子「しのは脚本と衣装のリーダーで、カレンはまた舞台に立つの？」

カレン「Yes!しかも今年は主演デス!期待してくれちゃってOKデスよ?」

圭太「また女優オーラを醸し出してるな。」

陽子「あはは!何かそれ去年にも聞いた気がするな!浩輔は?」

浩輔「俺は裏方だ。良い感じにしてやるぜ。」

陽子「綾は?」

綾「え?私も裏方に決まってるでしょ?」

陽子「ええ!?!綾の晴れ舞台見たかったな〜!」

綾「顔が近い!」

陽子「何で?」

怒った綾が陽子の顔をグリグリする。

陽子「まあ、しのが張り切るのは容易に想像が付くな〜。」

アリス「そうなの?」

陽子「小学校の頃からそう言うの好きだったもんな〜。」

アリス「そうなんだ!」

陽子「昔は今よりボーツとしてたのに、いざと言う時には別人みたいになつてさ〜!」  
アリス「昔からそうなんだね!」



圭太「俺も最初見た時びっくりしたな〜。」

浩輔「丸で二重人格に目覚めたみたいだったな〜。」

忍「そう言う陽子ちゃんは、小学校の頃からずっと陽子ちゃんのままですな〜。」

陽子「おい！成長してないみたいに言うな〜！」

浩輔「でも陽子はそのままで良いと思うぜ？」

陽子「おい浩輔！」

6人「あはははは！」

しかし綾は何かを思っていた。

その後全校生徒は学校祭の準備に励んでいた。松原穂乃花が材料を持って廊下を歩いている。他のクラスの様子を見ながら。A組に戻り、忍の方へ。

穂乃花「忍ちゃん、補充の布ここに置くね。」

忍「ありがとうございます。」

陽子「やってるな〜！」

忍「陽子ちゃん！アリス！圭太君！」

そこに陽子とアリスと圭太が様子を見に来た。

陽子「中世ヨーロッパの衣装なんて大変そうだな。」

綾「？」

アリス「シノ！無理しないで手伝える事があつたら言つてね!? 違うクラスだけど……」

圭太「そうだな。忍、無理したら体に毒だぞ？」

忍「ありがたいございます。でも大丈夫です。やり甲斐はあるし、とつても楽しいです！あ、カレン。あれを。」

カレン「ササササ、ニュツ！本日3度目入りマックス。」

後ろからカレンが出て来た。そして忍にパワーマックスと言う栄養ドリンクを渡した。

圭太「栄養ドリンク？」

忍「これこれ。」

そしてドリンクを豪快に飲む。

アリス「イヤー！こんなの大和撫子じゃないよー!!」

圭太「そう言えば忍、浩輔は何処だ？」

忍「浩輔君なら今彼処でステージセット製作で張り切ってますよ。」

浩輔「こんな感じで良いか？」

男子生徒A「OK!そんな感じだ!」

浩輔「よしよし。お!そっち手伝おうか?」

男子生徒B「助かる!頼む!」

浩輔は男子生徒達とセットの製作をしている。

圭太「やつてるな。」

陽子「そう言えばしの!小学校の時も演劇となるとやたら張り切ってたよな!」

忍「はい!昔から好きでした!」

陽子「お姫様です!って全身花だらけの衣装着てさ!」

圭太「懐かしいなく!白馬の王子様来て下さ!って言ってたなく!」

アリス「凄く!」

遠くから綾が忍達を眺めていた。

綾『最近、少し思う事がある。』

忍「陽子ちゃんに圭太君ったら!そんな昔の話をしないで下さい!」

圭太「本当の話だろ?なあ?」

陽子「ああ!」

忍「も〜!!」

綾『しのと私は、中学生からの友達。だけど・・・陽子や圭太や浩輔みたいに、昔か

らの幼馴染みじゃないし、アリスやカレンみたいに、金髪でもないし、もしかして……  
しのことって私は、私が思ってる程大事な友達じゃない……？ううん。そんな事は……  
そんな事は無い、わよね……？私とあなたは親友よ……」

考えてる内に怖くなった。

陽子「ん？あはは……まあ何か悩んでるな……」

綾を見付けた陽子が呆れてた。綾はその場を歩き去って行った。

カレン「あ！アヤヤー！何処行くデース!？」

穂乃花「久世橋先生の所に衣装サンプルを持って行くんじゃないかな？」

忍「この調子だと土日も作業ですね。」

アリス「家でするなら私も手伝うよ！」

カレン「私も行くデース！ホノカも来るデース！」

穂乃花「ごめんね。土日はテニス部の出し物を練習するの。」

カレン「何をやるんデース？」

穂乃花「玉乗りしてジャグリング。」

圭太「サーカスカよ。」

陽子は一人綾をジッと見ていた。

綾『だけど……』

後日。陽子達が忍の家にお邪魔する。

陽子「お邪魔します！え!!？」

綾「え!!？」

圭太「な!!？」

浩輔「何ですと!!？」

玄関を開けた瞬間4人が驚いた。

アリス「いらつしやいませ！皆！」

カレン「いらつしやいデス〜！」

忍「ハア・・・ハア・・・！」

何故ならアリスが忍の中学時代の制服を着ていて、カレンが勇の高校時代の制服を着ていたからだった。忍は相変わらずのメイド服。

綾「それって、私達の中学時代の制服と！」

陽子「勇姉の高校の制服か！」

カレン「そうデース！」

綾「ちよつと大きいけど似合うわね。」

浩輔「凄く違和感無いなおい。」

アリス「えへへ！」

忍「ハア〜！良いですね！時代は金髪にセーラー服ですね！ハア・・・ハア・・・！」

圭太「お〜い忍〜。あんまり興奮していると狂うぞ？」

陽子「相変わらず楽しそうだなしの・・・」

勇「何だか賑やかね〜。」

2階から勇が見ていた。

陽子「あ！おつす勇姉！」

圭太「よう姉貴！」

浩輔「勇さんヤツホー！」

綾「こ、こんにちは！」

勇「は〜い！いらつしやい！陽子ちゃん、綾ちゃん、圭太君、浩輔君。」

早速忍の部屋に招かれた。

忍「どうぞ。散らかつてますが。」

浩輔「OK。」

綾「あ！お姫様の衣装ね！大分出来上がってきたわね！」

圭太「衣装凄えな！」

部屋にマネキンがあり、製作中の衣装があった。するとカレンが忍のベッドにダイブして漫画を読む。

アリス「もうカレン！そこで漫画読んでたらシノ達の邪魔になるでしょ!？」

その後部屋を片付けた。

綾「作業は順調？」

忍「はい！昨日と今日で何着か。」

陽子「流石だな！」

浩輔「忍天才過ぎる！」

アリス「シノが作る衣装はどれも凄く素敵なんだよ！」

カレン「脚本もとても面白いデス！ん？」

忍は真剣に衣装を作っている。

圭太「忍真剣だな。」

陽子「何か、何時ものしのと有能なしのが混ざって、混乱するな。」

綾「そうね。」

浩輔「もしかしたら忍、解離性同一性障害を患ってるのか？」  
圭太「いやそれはありえんだろ。」

そして数分後。

忍「お姫様の服出来ました！」

カレン「ウハーーーー!!」

遂に衣装が完成した。

アリス「わぁー！」

陽子「おおー！」

圭太「凄え！」

浩輔「うっひょー！」

綾「素敵・・・！」

その中で綾は一人キラキラしながら衣装を見ていた。

陽子「どうした綾？お姫様役やっぱりやりたかったの？」

綾「え!?そ、そんなじゃ！」

アリス「シノ凄ーい！着て見せて！」



忍「え？」

カレン「私も！見てみたいデス！」

忍「そ、そこまで期待されてしまったては、期待に応えない訳にはいきません。お姫様姿の私を見ても驚かないで下さいね・・・？」

圭太「じゃあ俺達出るから。」

浩輔「期待してるぜ！」

忍「はい！」

そして忍が衣装を着た。

忍「じゃーん！どうでしょう？」

アリス「キヤー！可愛過ぎてビッグバンが起こりそうだよ！」

陽子「しのに甘過ぎだろ！」

カレン「割と何時ものシノです。」

そして圭太と浩輔が部屋に入る。

圭太「おお！似合うじゃん！」

浩輔「天使様ー！」

カレン「所でシノ！王子役の衣装はまだデスか？」

綾「そう言えばC組の和の展示は順調なの？アリスが張り切ってるって聞いたわ。」

圭太「順調だぜ。なあアリス。」

アリス「うん！日本の心和の心！綾達も見に来てね！」

綾「ええ！」

陽子「まあ和なら何でもアリのゆる〜い展示だからな。私は当日、ご飯と味噌汁と焼き魚を並べて。」

綾（まさか・・・和食？）

陽子が展示するのは和食。

綾「圭太は何を展示するの？」

圭太「俺は和風の画像を展示するんだ。桜や富士山や紅葉など色々な。」

その後それぞれ準備を進める。カレンと浩輔は寝ている。すると忍がそわそわし始めた。

綾「どうしたの？そわそわして。」

忍「ああー!!」

突然忍が大声を出した。

圭太「どうした忍？何か忘れ物でもあるのか？」

忍「喉が乾きました。緑茶しか無いのでちよつとひとつ走り買つて来ますね！」

圭太「そんな事かよ。」

アリス「いいよ。緑茶淹れるね。」

忍「だだだだダメです！今は紅茶の気分なのです！」

すぐに部屋を出た。その後すぐに戻つて来ると勇も連れて来た。

忍「他にも買いたい物があるのでお姉ちゃんも行つて来ます！」

綾「だったら私が一緒に。」

忍「いえ！結構です！」

綾「え？そ、そう・・・」

圭太「なあ忍、お前何か隠してるのか？」

忍「そ、そんな事ないです！皆そのまま待つていて下さいね！では！」

そして勇と一緒に去つて行つた。

アリス「ああ！シノ！・・・行つちやつた・・・」

カレン「怪しい！デス！何か企んでるに違いありません！尾行しまシヨウ！」

浩輔「面白そうだな！調査開始！」

陽子「まあまあ。企んでるとしたら何かのサプライズじゃないかな？」

圭太「そうかもしれないな。俺達は気付かないフリしてあげようぜ。」

アリス「へえ〜！ヨーコ良く分かるね！」

陽子「そりやあ付き合い長いしね。」

浩輔「俺達も同じだ。」

陽子「と言うか分かりやすいし！な！綾！」

しかし綾は不機嫌になりながらムツとしていた。

綾「ムーーーーー。」

陽子「何その顔!？」

綾「別に？」

圭太「綾お前ここ最近どうした？」

綾「別に？」

カレン「どんなSurpriseでシヨウ!? キヤハハ！ウハハ！」

綾「アリスとカレンに何かプレゼントとか？」

アリス「え!？」

カレン「え!?!ほ、本当デスカ!?!そわそわが隠し切れないデス！」

アリス・カレン「ソワソワ♪ソワソワ♪ソワソワ♪」

そわそわしながら踊る。

陽子「あはは！何だそのダンス？」

カレン「ソワソワダンスデス！」

陽子「それにしても、2人共しのと勇姉の昔の制服が良く似合ってるなく！」

圭太「それに忍の中学時代の制服を見ると、青春時代を思い出すな。」

浩輔「確かに！」

カレン「皆が着てた中学時代の制服が可愛いデス！イサミの制服もVery cut  
e！」

アリス「ねー！」

カレン「アリス！ソワソワダンスpart2いくデス！」

アリス「良いよ！」

浩輔「俺も入れてくれ！」

カレン「OK！私に続くデス！はい！ソワソワ♪ソワソワ♪」

すると綾は中学時代を思い出した。それは忍と陽子と浩輔に勉強を教える頃を。

陽子「綾？」

綾「え？」

陽子「綾ちよつと元気無い？」

圭太「どうしたんだ？」

綾「そ、そんな事は！」

すぐに否定して準備を再開する。

綾「ちよつと中学の頃を思い出して、センチメンタルになっただけよ。」

カレン「成る程c m。」

陽子「おい英語だぞ!？」

カレン「あ！中学生と言えはずつと気になってた事があつたデス。」

陽子「ん？」

圭太「何をだ？」

カレン「シノは、どうやって高校入学したのデスカ・・・？」

圭太「そつちかい！」

陽子「受験だよ!!ちゃんとテストを受けて入学したよ!」

カレン「で、でも!金髪POWERの無いシノが一体どうやって!?!アリスも居なかつたのにデスよ!」

陽子「まあ言いたい事は分かるけど・・・」

アリス「私も、シノがどうやって高校受験したのか知りたいな。」

陽子「分かつた分かつた。今話してやるって。」

カレン「本当デスカ!？」

アリス「ヤッター！」

浩輔「懐かしの青春が今蘇るのか!？」

圭太「お前テンション高えな。」

陽子「えー、オホン。昔昔ある所に。」

アリス「ヨーコ？」

陽子「ん？」

アリス「ど、どうしちやったの？」

カレン「おぼあちゃん出て来るデスカ？」

陽子「そだよー。」

圭太「桃太郎かよ。真面目にやれよ。」

陽子「分かった分かった。」

く2年前く

日差しが強い夏の季節。中学生達が下校する。そして3年2組では。

綾「どう言う事!?赤点じゃない!」

忍の数学テストの点数が28点と言う赤点結果を出してしまった。忍がガクガク震えていた。3年2組の教室には忍と陽子と綾と圭太と浩輔と2人の男子が居た。

陽子「ま、まあまあ後1問で赤点クリアだったんだし。」

浩輔「そうそう。またテストの時期が来たら頑張れば問題無し。」

綾「陽子、浩輔、あなた達も人の事を言える点数じゃないでしょ?」

陽子「はい!」

浩輔「ぶべら!」

陽子「あははは・・・」

2人の男子生徒が教室から出る。



圭太「お！じゃあな智流！」

智流「またな圭太！」

浩輔「まったな！光明ー！」

光明「浩輔！明日なー！」

圭太と浩輔の友人の朝香智流と古橋光明が教室から出て下校する。因みに圭太と浩輔と智流と光明の4人は趣味やゲームのトークで1年の時からの仲良しである。

綾「私達もうすぐ高校受験なのよ？こんな成績でどうするつもり？」

圭太「そうだぞ忍。このまま赤点結果を出し続けるのか？」

陽子「まあ私は入れる高校があれば何処でも。」

綾「勉強するって発想は無いの？」

陽子「そう言う訳じゃ・・・」

圭太「勉強しないで受験合格出来たら超人だな。」

陽子「しのはどんな高校へ行きたい？」

忍「私は・・・出来ればイギリスに留学して・・・」

綾「夢の話じゃなく!!」

忍「ああいや！私は本当に・・・！」

圭太「浩輔は何処の高校へ行くんだ？」

浩輔「俺も忍と同じくイギリス留学！」

圭太「現実逃避すんな！」

浩輔「ぶげら！」

陽子「あ！だったら勇姉の高校は？」

圭太「姉貴の高校？おいおいそれって・・・」

陽子「うん！一緒の高校なら朝だって安心だろ？」

綾「しのお姉さんの高校？何処なの？」

忍「えつと確か・・・」

勇が通う高校名を言う。

綾「無理に決まってるでしょ・・・そんなレベルの高い所・・・」

陽子「でも圭太の学力なら合格出来そうだな！」

圭太「いや俺もやめとく。」

陽子「なくんだ。だったら綾は何処？もう決まってる？」

綾「私は一応・・・」

机に、ある学校のパンフレットを置いた。

忍・陽子・圭太・浩輔「水蓮女学院!？」

圭太「マジかよ！」

忍「美しい響きです！初めて聞きました！」

陽子「つてしの知らないの!?流石に私も聞いた事あるよ！有名なお嬢様学校！」

圭太「まさか綾がここを選ぶとは・・・」

パンフレットを開く。

忍「可愛い制服ですね〜！」

綾「親も先生もそこが良いんじゃないか？つて。成績的にも少し頑張れば・・・」

陽子「マジで!?流石綾！」

忍「綾ちゃんのイメージにぴったりです！」

圭太「確かに綾は成績良いよな。」

浩輔「何言ってるんだ。圭太もそうだろ？」

綾「でも少し遠いから、多分寮に入る事になりそうで・・・そしたら・・・しのや陽

子や圭太とや浩輔とも・・・」

忍「きや〜！羨ましいです〜！」

陽子「女子校の寮生活格好良い〜！H U u〜!!」

浩輔「寮生活良いな〜!!」

圭太「おいお前ら・・・」

忍「挨拶はどんなでしょう？やはりごきげんようとかででしょうか？」

陽子「ご飯とか洋食なのかな？」

浩輔「陽子は食う事しかないのかう。」

忍「金髪の留学生は居ないのでしょうか？」

浩輔「金髪しかないのか忍は。」

忍・陽子・浩輔「あははは！」

しかし綾は残念な顔をしていた。

陽子「綾？」

忍「どうかしましたか？」

圭太「どうした？」

綾「私……」

陽子「ひよつとして……」

綾「あ……」

陽子「他にも行きたい高校があるのかう!?」

忍「成る程流石は陽子ちゃん！綾ちゃんの事は何でもお見通しですね！」

綾「あ……そ、そうよ……」

そこで5人はある駅に到着した。

陽子「へえ。割と近くだな。」

綾「あ！あの制服よ。」

近くのベンチに座ってる女子高生達を見付けた。

陽子「そう言えば見た事ある！」

圭太「俺も1回だけ見た事あるぞ。」

忍「ああ！」

綾「しの？」

陽子「どうした？」

忍「良いですね制服！私もあんな制服着てみたいです！」

綾「こつちよ。」

5人は先程の女子高生達を通う高校へ向かった。

その高校とは、後に忍達を通う県立もえぎ高等学校だった。

陽子「もえぎ高等学校。聞いた事ある！」

綾「ええ。公立校でこの辺じゃ割と人気あるのよ。」

圭太「へえ。こんな感じなんだな。」

綾「家から通えるし、何だか雰囲気も素敵かなって。」

陽子「近いのは良いな！」

浩輔「確かに！近い所だと困らないな！」

陽子「特に朝に弱いしなんて。ん？」

当の忍は学校を見て感動していた。

女子高生達「先生さようなら〜！」

烏丸先生「はいさようなら。ん？」

すると烏丸先生がある光景を目にした。それは門から高校を覗いてる忍達だった。

すると2人の女子生徒が忍達を見た。

女子生徒A「可愛いね。」

女子生徒B「見学かな？」

陽子「入って良いんじゃない？」

綾「だ、ダメよ……」

圭太「もう見ただろ？帰ろうぜ？」

烏丸先生「あなた達。」

5人「あ！」

しかし烏丸先生に見付かってしまった。

忍「す、すみません！」

陽子「決して怪しい者では！」

浩輔「見逃して下さい！」

圭太「お前ら落ち着け！」

烏丸先生「中学生？見学かしら？」

5人「は、はい！」

忍「あの、こちらの先生ですか？」

烏丸先生「そうですよ？見学なら私が案内しましょうか？」

4人「・・・はい!!」

忍「お願いします！」

こうして忍達は烏丸先生に案内される事になった。玄関でスリッパに履き替えて校

舎内を見学する。教室や廊下、更には体育館やグラウンドなど見学した。外の階段から見えたのは街が見える絶景だった。

忍・陽子・綾「わああー！」

圭太「おおー！」

浩輔「うっひょー！」

そして次は中庭を見学。

烏丸先生「ここはお昼休みになると、お弁当を持った生徒達でいっぱいになるの。」

陽子「へえ〜！」

圭太「雰囲気良いな〜。」

すると小雨が降り始めた。

烏丸先生「あら？お天気雨？」

そして天気雨が降り始めた。

陽子「これじゃあ止むまで帰れないな。」

浩輔「参ったな・・・傘無えのに・・・」



忍「あの先生、私この生徒になれますか!？」

綾「え!？」

陽子「しの!？」

圭太「どうした急に!？」

浩輔「忍どうした!？」

烏丸先生「・・・勿論なれますよ。受験して合格すれば。」

忍「本当ですか!？」

綾「ちよ、ちよつと待つて下さい!その前に成績的な事があつて・・・」

圭太「そうだった!」

烏丸先生「成績は勉強すれば上がりますよ?」

陽子「でも私達もう3年ですし・・・」

浩輔「それもそうだな・・・」

綾「現実問題として・・・」

烏丸先生「大丈夫!まだ夏休み前よ?この頃から巻き返した生徒もいっぱい居ます!

何を隠そう、この私がそうでした!」

陽子・綾「え!？」

浩輔「先生が!？」

烏丸先生「私もこの卒業生なんです！」

忍「そうなんですわね！」

圭太「つて事はOG!？」

烏丸先生「この学校が凄く好きで、何時かここの先生になりたいなと思っていたら、何時の間になつちやいました。」

忍「成る程！夢は大事なんですわね！」

烏丸先生「その通り！」

陽子「し、しの、同じくらい現実も大事だぞ？」

圭太「そうだ。努力しなきゃ良い成績が取れねえぞ。」

烏丸先生「うふふ。それじゃあこの学校に合格出来るお呪いをしてあげる。」

5人「ん？」

烏丸先生「ファイター！トーテム・ポール♪ジャカジャン♪皆で合格♪ジャカジャン♪頑張れ頑張れ♪ジャカジャンジャンジャン♪」

トーテム・ポールの歌（合格祈願バージョン）を熱唱する。陽子と綾と圭太と浩輔がドン引きしていた。忍はキラキラしながら聴いていた。

烏丸先生「ファイター！」

忍「あ！トーテムー！」

烏丸先生・忍「ボール!!」

その後天気が止んだ。

5人「ありがとうございます!」

烏丸先生「うふふ。また何時でも見学に来てね。」

夕方になり、5人が帰る。その途中。

忍「綾ちゃん、陽子ちゃん、圭太君、浩輔君。」

4人「ん?」

忍「決めました。・・・私、この高校に入ります!」

陽子「・・・え!?!いやだから現実を見ろって!テストの点数を思い出せ!!」

浩輔「どうぞ!」

忍「う・・・!い、今から頑張って勉強して成績を上げて、受験に合格します!」

綾「しの……」

圭太「忍……」

陽子「じゃあ私もここに決めた！」

綾「え？」

陽子「来て見て見て良いなと思つてた！まあしのの学力で難しいって事は私も難しいって事だけどね……あははは！」

浩輔「だったら俺も陽子に賛同するぜ！」

忍「ですが、私達だけではどうしようもありません。お願いします！綾ちゃん！圭太君！私達に勉強を教えて下さい！」

綾「え!?!」

圭太「な!?!」

陽子「私も頼む！出来る範囲で良いから！」

浩輔「俺達5人の中で成績優秀なのはお前達2人だけなんだ！俺からも頼む！この通りだ！」

3人が綾と圭太に頭を下げる。綾と圭太は互いを見て頷いた。

綾「相当厳しいわよ。覚悟は良い？」

圭太「俺も手加減と容赦はしないぞ。良いな？」

3人「・・・はい!!!」

綾「私も気合入れていくわ!」

圭太「俺も覚悟決めませ! お前達の頭脳をビシバシ鍛えてやるからな!」

忍「頑張りましょう! 陽子ちゃん! 浩輔君!」

陽子「ああ! 絶対合格しような!」

浩輔「受けて立とうぜ!」

すると空に虹が現れた。

綾「あ! 見て!」

陽子「虹だ!」

忍「きつと、天からの祝福ですね。」

浩輔「神様ありがとー!」

陽子「何かいける気がして来た!」

綾「この虹の下にも受かる人と受からない人が居るのね!」

陽子「今は受かるだけで良いだろ!?!」

そして夏休みに入って忍の部屋で勉強会をする。綾が夏休みのスケジュールを見せた。圭太は早く出来た全部の宿題を繰り返し読んでる。少しクマが残ってる。

綾「数学は兎に角問題を解く楽しさを覚える事。簡単な物からでも・・・ん？」

圭太「どうした？え？」

すると忍から黒い煙が漂い、陽子と浩輔が顔を俯いた。

忍「ダメです・・・もう既に頭が・・・」

綾「も、もつと簡単な物から始めましょ!？」

浩輔「ダメだ・・・気力低下・・・」

陽子「よし！解けた！」

圭太「出来たか。見せろ。」

綾と圭太が早速陽子の回答を拝見する。

陽子「どう？合ってる？」

綾「何で式の途中で答えに・・・？」

陽子「何となく分かったんだ！直感で！」

綾「間違ってる！良い？途中式も書く事も答えの内なのよ？」

陽子「うくん、可笑しいな・・・」

圭太「陽子が可笑しいだろ・・・」

数分後。3人がバテてしまった。

圭太「これじゃ成績がロストしていくな……つてか眠い……」

綾「圭太、あなたクマが残ってるわよ。」

陽子「何で圭太は宿題を早く済ますの……？」

圭太「いやあ、その方が後々楽で良いだろ……？3日やれば楽勝だろ……？」

浩輔「出来るか!!」

綾「ん？」

すると綾がある写真立てを見た。それは忍と陽子と圭太と浩輔と勇の小学校の時の写真だった。

綾「これ小学校の時？」

忍「はい……林間学校に行った時の写真です……懐かしいですね……」

浩輔「あの頃が思い浮かぶな……」

陽子「ああ、カレーが美味しかったんだよね……」

圭太「食い物ばっかだな陽子は……」

綾「4人は小学校の頃から仲良しなのよね。」

忍「はい、昔から仲良しですく．．．」

陽子「腐れ縁って奴？うふふ。」

圭太「幼馴染みだろ。」

陽子「そう言えば今日勇姉は？」

忍「最近モデルの仕事が忙しくなつて来たらしくて．．．」

数日後。綾が陽子の家に向かう。

空太「いけいけ。」

美月「や。」

隣の公園には空太と美月が遊んでいた。

空太・美月「あ。」

綾「ここら辺かしら？」

空太「引き分け。」

美月「4勝4敗1引き分け。」

綾が陽子の家を探してる途中。



忍「綾ちゃん！」

陽子「おーっす！」

圭太「ここだー！」

浩輔「早く来いよー！」

陽子の部屋にお邪魔する。しかし綾は密かに緊張していた。

綾（そう言えば、陽子の家に来たの初めてだわ・・・）

陽子「あそっだ綾。」

綾「え!？」

すると持ってたお茶を溢してしまった。

綾「あ！うわああああ!!!」

圭太「おいおい！」

すぐにテーブルを拭いた。

綾「ご、ごめんなさい・・・」

陽子「良いって。それよりさ綾。第一志望校決めた？」

綾「え、ええ。一応第一志望は前と同じ・・・」

忍「あのお嬢様っぽい素敵な学校ですか？」

浩輔「つばいじやねえだろ？」

綾「うん・・・水蓮女学院。やっぱり親や先生と相談して。」

陽子「そっか・・・」

忍「また皆で一緒に学校の学校に通えるかと思つたのですが・・・」

陽子「おいおい強気だなく。私達を受かるかどうか分からないのに。」

忍「いいえ！きつと受かります！だつてこうして綾ちゃんと圭太君が教えてくれるんですから！ですよね？」

圭太「そうだな。綾もそうだろ？」

綾「も、勿論よ！」

陽子「綾も自分の方の勉強ちゃんと進んでる？」

綾「と、当然よ！私は3人と違って日頃からちゃんと計画立ててやってるから！」

陽子「あいたー！」

圭太「それに俺は夏休みと冬休みと春休みの宿題は日記以外短期間で終わらせるタイプだからな。」

浩輔「あばす！」

忍「私達の為にありがとうございます！」

綾「私の事より自分達の事を考えて。さあ！休憩お終い！」

圭太「さあ厳しくいくぞ！」

陽子・浩輔「ええ!?!短くない!?!」

そして月日が流れて2学期。教室で綾が陽子と忍の成績を見る。圭太は浩輔の成績を見る。

綾「陽子は、かなり良い感じだわ！」

陽子「やった！」

圭太「浩輔は、前より成績がアップしてるぞ！」

浩輔「よっしゃ！」

綾「でもしのは・・・」

陽子「ああ！」

忍は1人ガクガク震えていた。

綾「まだ2学期だって始まったばかりよ!?!諦めるには早いわ！」

陽子「そうだ！これからこれから！」

浩輔「頑張れ頑張れ！絶対諦めるな！」

圭太「お前松岡修造かよ！」

忍「ううう・・・はい・・・」

その日の夜。忍は部屋で猛勉強している。

忍「ハロー、ハロワー、ハロリスト・・・」

翌日の放課後。

綾「え!?!もう終わったの!?!」

忍「はい！次お願いします！」

陽子「凄え！これ一晩で解いたのか!?!」

忍「いえ、私は人一倍頑張らないといけませんから、綾ちゃんは自分の勉強で大変だ  
と思いが・・・」

綾「大丈夫！3人に教えてる内に、私の成績も良くなったから。しの！今まで以上に  
厳しく行くから覚悟して！」

忍は頷く。

綾「スパルタ過ぎて受験が終わる頃には、しのの髪が真っ白になってるかもしれない  
けど！」

陽子「どう言う事？燃え尽きて？」

忍「せ、せめて金髪に・・・」

陽子「そう言えば圭太と浩輔は？」

忍「さつき朝香君と古橋君と一緒に帰りました。」

その頃圭太と浩輔は、クラスメイトの智流と光明と一緒に帰ってる。

智流「そう言えばどうだ？受験勉強の方は。」

圭太「ああ。順調だぜ。」

浩輔「俺も順調だ。お陰で成績も上がったぜ。」

圭太「智流と光明はどうなんだ？」

光明「俺と智流はある学校の受験を受けるんだ。」

圭太「何処だ？」

智流「実は、ここなんだ。」

すると智流がある学校のパンフレットを圭太と浩輔に見せた。

圭太「え!?!お前らまさか・・・」

智流「その反応するのは分かる。だがこれは俺達4人の秘密話だ。誰にも言うなよ？」

光明「俺からも頼む。秘密にしてくれよな？」

浩輔「お、OK。」

その頃忍達3人は図書館で勉強していた。その夜も忍達は頑張つて勉強する。

そして季節が過ぎて年明け、賽銭箱に小銭を入れて拝む。そして絵馬に合格祈願を掛

ける。その後温かいお茶を飲む。

陽子「くうく温まる〜！」

忍「美味しいです〜！」

圭太「ふう〜。」

浩輔「美味え〜！」

綾「もうすぐね。」

陽子「だな。」

忍「綾ちゃん、陽子ちゃん、圭太君、浩輔君。今年も宜しくお願いします。」

4人「宜しく〜！」

そして雪が降るある日。水蓮女学院の受験合格発表の日。合格出来た者も居れば不合格の者も居る。合格発表を見た綾は電車に乗って戻る。その電車の中で綾は智流と光明と出会った。3人は駅に到着した。

陽子「綾。」

忍「綾ちゃん。」

圭太「綾。」

浩輔「綾。」

綾「しの、陽子、圭太、浩輔……」

忍「水蓮女学院、どうでした……？」

綾「……ありがとう！合格よ！」

遂に綾は水蓮女学院に合格出来た。

忍「わあ！おめでとうございます！！綾ちゃん！！」

陽子「良かった！浮かない顔をしてたから落ちたのかと思ったよ！やったな綾！」

綾「陽子……」

圭太「綾おめでとう。」

浩輔「やったな綾！」

綾「圭太……浩輔……」

その後智流と光明を含めた7人が一緒に帰る。

陽子「何で智流と光明が綾と一緒に居たんだ？」



智流「え？ああいや・・・電車で小路と偶然会ったのさ。なあ光明？」

光明「そ、そうそう言う事だ！」

綾「でも朝香君と古橋君、何で電車に乗ってたの？」

光明「それは・・・俺の親戚があつちに居るつて連絡が来たから智流と一緒に会いに行つたつて訳。」

智流「そうそう。」

忍「そうなんですか。」

圭太「どうだ？結果は？」

智流「合格しちまった・・・」

浩輔「そうか。」

圭太「にしても智流、まさかお前のお袋さんが勝手に申し込んだとはな。」

智流「ああ。最悪だよ・・・出来ればお前と同じ高校に受かりたかつたな・・・」

光明「お気の毒。俺もだけど。」

忍「綾ちゃん、春から遠くへ行くのですね・・・同じ学校に通えるのも・・・後・・・」  
すると忍が泣きそうになった。

陽子「おいしの・・・」

忍「すすすみません・・・これは嬉し泣きです・・・決して離れ離れになるのが寂し

いからとかではなくて……」

綾「しの……」

陽子「ほら、綾が困ってるだろ？」

忍「ほ、本当に嬉しいんです！困らせるつもりは全然無くて……」

陽子「今日はおめでとただけで良いんだよ……」

忍「そうですね……おめでとございます！」

綾「ええ……ありがとう……2人共……」

圭太「おめでと綾。」

浩輔「おめでと。」

智流「小路おめでと。」

光明「おめでと！」

綾「ありがとう……」

その後も受験の為に猛勉強する忍達。陽子が勉強してる所を弟の空太と妹の美月が静かに見守っていた。

空太・美月「しーっ。」

そして綾は夜の空を見ていた。

圭太は部屋で勉強している。

浩輔は姉の湊から勉強を教えて貰ってる。

忍の部屋では。

勇「もう、大切な本番なのに。風邪引くわよ。」

忍が勉強中に寝てしまった。勇が忍をベッドまで運ぶが。

勇「重い……！」

かなり重かった。やっと忍をベッドに寝かせた。

勇「がんば。」

部屋の電気を消して自分の部屋に行った。

そして受験当日。しかし駅で思わぬアクシデントが起こってしまった。

圭太「大雪の影響でダイヤグラムが乱れた!？」

陽子「こんな日に!？」

忍「間に合うんでしょうか!？」

浩輔「ピンチ到来!？」

その後遅れた電車に乗って、駅に到着して走って受験へ向かう。高校では受験生達が次々と高校に入って行く。

烏丸先生「まだ時間はありますよ!雪で危ないですから走らないで下さいね!」

受験生の中に、松原穂乃花と日暮香奈も居た。

香奈「色んな中学の子が居るね。」

穂乃花「この中に何時か、お友達になつたりする子が居るのかな？」

香奈「その前に受からなきゃだけどね。」

穂乃花「そうだね。」

その頃忍達4人は。

陽子「な、何とか！」

忍「間に合いましたね！」

圭太「このまま走れ！」

浩輔「本番で失敗したら水の泡だ！」

そしてギリギリ到着した。烏丸先生が忍達を見て思い出した。

烏丸先生「(あら？あの子達は……) 頑張れ。」

小さな声で応援する。4人が試験会場に向かう。

会場前にマスクとメガネで顔を隠した1人のツイントールの少女が立っていた。忍達は気付く事なく通り過ぎた。と思ったその時。

陽子「あれ？綾!？」

綾「!？」

マスクとメガネで顔を隠した人物は何と綾だった。

忍「え!?!綾ちゃん!？」

圭太「綾だと!？」

浩輔「お前!？」

陽子「何してるんだ？」

そしてマスクとメガネを外した。

忍「綾ちゃん・・・どうしてここに!？」

綾「わ、私も受けるからよ・・・」

圭太「そうか受けるのか・・・って、え!？」

陽子「え!?!もう水蓮受かってるのに!？」

綾「出願してたから・・・」

陽子「だったら言っておいてくれたら!？」

忍「心強いです!綾ちゃんの顔を見たら何だか緊張が解れました!」

陽子「うん！」

圭太「さあ皆！早く行こうぜ！」

浩輔「本番はこれからだ！」

そして受験会場に入つて席に座る。受験生達に緊張が走る。

久世橋先生「それでは、始めて下さい！」

遂に試験がスタートした。

綾（思ったより難しいわ・・・4人共大丈夫かしら・・・？）

集中してやる4人を見る。

綾（そうね。あれだけ頑張ったもの。）

圭太（流石に難しい箇所はあるな。けど俺達の成果を甘く見縊つては困る。）  
そして受験が終わった。

その帰り道。

綾「やれるだけの事をやったんなら、きっと大丈夫よ。」

圭太「そうそう。そんなにネガティブになるなよ。」

受験が終わった直後に、忍と陽子と浩輔がネガティブになってた。

陽子「凄く難しかった気がする・・・」

浩輔「もうダメだ、お終いだ・・・」

忍「陽子ちゃん、浩輔君・・・私立の二次募集って何時でしたっけ・・・？」

陽子「さあ・・・？だけど・・・調べておいた方が良さそうかな・・・？」

圭太「ダメだこりゃ。」

綾「ほら！試験も終わったんだし何か美味しい物でも食べに行きましょう？」

忍「美味しい物!?!わーい！」

陽子「そうだな！」

浩輔「美味しい物食って元気出すか！」

圭太「もう既に元気じゃねえか。」

そして数日後。遂に合格発表の日が到来した。綾の番号は0069。自分の番号を



限なく探すと、番号があつて合格出来た。綾はホツとした。

そして圭太の番号は0084。圭太も自分の番号を探すと。

圭太「よっしゃ！」

自分の番号があつてガッツポーズした。圭太も合格した。そして他の3人はと言うと。

忍「だ、ダメです陽子ちゃん！私の代わりに見て下さい！」

陽子「わ、私も無理！綾頼む！」

忍「わ、私もお願いします!!」

浩輔「俺も無理だ！圭太頼む！俺の代わりに見てくれ!!」

綾「もお。」

圭太「しゃあねえなあ。」

陽子の番号は0068。忍の番号は0067。浩輔の番号は0086。

忍・陽子「ううう・・・」

綾「2人共ほら。自分の目で確認しなさい？」

忍と陽子が目を開いて確認する。すると自分の番号が目映った。

陽子「・・・あつた！」

忍「ありました!!」

2人も合格出来て、嬉し泣きした。

陽子「あつた！あつたよ綾!!」

忍「私の番号も!!」

圭太「おい浩輔。お前も自分の目で見ろよ。」

浩輔「いや・・・もう見るのが怖い・・・!」

圭太「良いから目を開けろ。」

無理矢理浩輔の両目を開けて合格発表を見せる。

浩輔「いやいやいややめろ圭太・・・目が痛い・・・あ!」

そして浩輔も自分の番号を確認する。自分の番号が目映った。

浩輔「圭太・・・俺やったのか・・・?」

圭太「ああ。やったな浩輔。」

浩輔「・・・よっしゃー!!」

嬉しさのあまり大声を上げた。この光景を烏丸先生と久世橋先生が見ていた。

烏丸先生「久世橋先生。この光景を見るのはまだ慣れませんか?」

久世橋先生「はい。受かった子も居れば落ちた子も居ますから。正直、どう言う顔で

居れば良いかわかりません・・・」

烏丸先生「ですね。それでもそんな涙も笑顔も全部、あの子達の青春の1ページなん

ですよね。」

その中に穂乃花と香奈も合格出来た。中には合格出来た学生と不合格になった学生も居た。

数日後。綾は服屋で水蓮女学院の制服を試着する。しかし綾は何処か浮かない顔をしていた。そしてある決心をした。

綾「あの！お母さん！」

更に数日後。中学校では卒業式が終わっていた。忍達も無事卒業出来た。

浩輔「ありがとよ・・・俺達の青春達よ・・・」

圭太「おいおい浩輔、俺達の青春はこれから始まるんだぜ？」

忍の母「はい！皆！」

圭太の母「こっち向いて！」

そこに5人の母親達がカメラを向けた。忍と陽子と綾はくっついてポーズを取り、圭太と浩輔はハイタッチしたポーズを取り、素敵な写真が撮れた。

その後忍の家で、中学卒業と綾の送別会が開かれた。

陽子「いよいよ綾とも離れ離れかあ。」

忍「お手紙下さいね。」

陽子「まあ家は近いんだし休みになれば。」

綾「あ、あの・・・皆に言いたい事が・・・」

陽子「何も言うな！」

綾「え!?!」

陽子「言葉にしなくても十分伝わってるって！」

忍「私達はずっと一緒です・・・！」

浩輔「元気でやれよ！」

綾「そ、そうじゃなく、あの・・・」

陽子「もうこれ以上泣かせないでくれ～～～!!!」

綾「ちよ、ちよつと!!」

圭太「お、お前ら落ち着けよ！」

忍「お手紙！毎日送りますね!!」

陽子「今日はとことん盛り上がるぞー!!」

浩輔「盛り上がって行こうぜー!!」

その後送別会が終わって、圭太が帰る途中。

綾「圭太！」

圭太「ん？綾？どうした？」

綾「あのね……」

数日後が経ち、また新たな春の季節がやって来た。目覚まし時計を止めた綾が起きて部屋から出る。

そして忍は新しい制服に着替えて玄関のドアを開ける。

忍「それじゃあ！」

勇「制服似合ってるわよ忍。」

忍の母「行つてらっしやい。」

忍「はい！行つて来ます！」

その頃浩輔は。

湊「似合ってるわよ浩輔。」

浩輔「ありがとな姉ちゃん。じゃあ行つて来るぜ！」

そして圭太も。

圭太「じゃあ母さん。」

圭太の母「圭太、似合ってるわよ。行つてらっしやい。」

圭太「ああ。行つて来ます！」

3人が登校する。集合場所に陽子が待っていた。

陽子「おはよーしの！」

忍「おはようございます！陽子ちゃん！」

浩輔「おーい陽子ー！忍ー！」

圭太「おつす。」

陽子「おはよー圭太！浩輔！」

忍「圭太君、浩輔君！おはようございます！」

陽子「制服が変わっただけで何だか別人みたいんだな！」

圭太「言えてるな。」

忍「陽子ちゃん、急にお姉さんっぽくなった気がします！」

陽子「えへへ！」

桜が舞い散るもえぎ高校。今日は入学式。4人が門の前に止まる。するとある少女が4人の方へ走ってる。

忍「遂に高校生ですね。」

陽子「何だかワクワクするな。」

圭太「今まで無い体験だな。」

浩輔「緊張するな。」

忍「陽子ちゃん、圭太君、浩輔君。」

陽子「じゃあ行こうか。」

圭太「ああ。」

浩輔「行くぞ。」

4人「せーの!!」

???「しの!陽子!圭太!浩輔!」

4人「??」

そこに聞き覚えのある声が聞こえた。そこに居たのは・・・

何と同じ制服を着た綾だった。

忍「綾ちゃん!?どうしてここに!?!」



陽子「水蓮女学院は!」

浩輔「そうだよ! 彼処に行つたんじゃないのか!」

綾「私も、来ちやつた・・・」

陽子「来ちやつたつて・・・」

綾「黙つててごめんなさい。だつて言い出せなかつたんだもん。」

陽子「折角受かつた第一志望なのに! 親や先生とも話し合つたつて!」

綾「うん。ちゃんと話し合つて伝えたわ。私の第一志望はこの学校だつて! それに、

4 人の事も心配で放つておけないしね!」

陽子「綾・・・!」

忍「綾ちゃん・・・!」

浩輔「綾・・・!」

3 人は喜んだ。

圭太「おかえり綾。」

浩輔「え!?! 圭太お前知つてたのか!」

圭太「送別会が終わつた後に綾が俺だけに秘密を話したんだ。だよな綾?」

綾「ええ。圭太に話してお願ひしたの。今日まで黙つててくれる? つて。」

浩輔「つて事はお前綾が来るつて知つてたんだな!」

陽子「何で話してくれなかったんだよー！」

圭太「いや秘密話だから他人にバラさないのが常識だろ？」

忍「綾ちゃん！陽子ちゃん！圭太君！浩輔君！これからまた3年間宜しくお願いします！」

陽子「宜しくしの！綾！圭太！浩輔！」

そして陽子は綾の手を繋いだ。すると綾は中学の頃を思い出した。

忍「じゃあ行きましよ？陽子ちゃん。綾ちゃん。」

そして忍も綾の手を繋ぐ。

綾「うん！」

浩輔「俺達も行くか。圭太。」

圭太「そうだな。」

5人「せーの！！」

そして高校生活が始まった。これが忍達が高校に入るまでの出来事だった。

（現在）

陽子「と言う訳で、めでたしめでたし。綾が居なかつたら私としのと圭太と浩輔は違う制服着てただろうなく。ん？」

アリス「皆で合格出来て良かったねく……」

カレン「Oh……！流石アヤヤデス……！」

アリスとカレンが感動していた。アリスは涙を流しながら感動していた。

陽子「あの時は本当にありがとう綾！」

綾「そ、そんな……」

浩輔「そうだな！綾ありがとな！お前には感謝してるぜ！」

綾「い、今更……」

カレン「尊敬します！」

アリス「ありがとうアヤ！私からもお礼言うよー！」

綾「私は何も・・・あれはしのが頑張ったから・・・」

圭太「そうだぞ。忍が頑張ったお陰だからな。」

陽子「あれ私は!？」

浩輔「おい俺は!？」

そしてそれと同時に。

忍「ただいま帰りました。」

丁度忍と勇が帰って来た。

アリス「おかえりー！シノー！」

カレン「present！じゃなくて何買って来たデスカ!？」

忍「実はですね。今日は日頃の感謝を込めて皆にプレゼントを用意しました。」

綾（皆に・・・？）

カレン「Wow！ウソーシンジラレナイ！」

早速リビングでプレゼントを貰う。

忍「さあ、手を出して目を瞑って下さい。」

アリスとカレンが目を瞑る。

陽子「私達もやるのか？」

綾「何か恥ずかしい・・・」

圭太「しようがないなー。」

浩輔「何かな〜？」

全員が目を瞑る。そして忍がプレゼントを皆の両手に乗せる。

忍「乗せました。開けて良いですよ。」

目を開けてプレゼントを見るが、何も無かった。アリスとカレンが驚愕した。

浩輔「忍、プレゼントは？」

忍「皆が喜ぶ物って思い浮かばなくて。でも、お金で買えない価値ってあると思うんです。今私があげたのは・・・友情と言う名の絆です！これからも良い友達で居て欲しいと言う気持ち。ハートを乗せました！」

プレゼントはハートだった。カレンは困って忍を見るが、忍は満面な笑みをしている。カレンが大粒の涙を流した。

カレン「こんな・・・こんな事って・・・」

忍「カレン！泣く程喜んでくれるなんて！」

陽子「あはははは！」

浩輔「そんなバカな・・・期待した俺がバカだった・・・！」

圭太「まあまあ気持ちだけでも受けとれよ。」

すると綾が両手を胸に当てた。

綾「ありがとう！しの！」

すると忍が喜んで綾の両手を握った。

忍「此方こそ！何時もありがとうございます！」

陽子「・・・やれやれ。」

泣いてるアリスとカレンに勇が歩み寄った。

勇「じゃあ私からのお土産。ロールケーキ。」

アリス・カレン「うわああああ!!!」

ロールケーキを聞いてアリスとカレンが一気に元気出した。

勇「この間友達と食べたんだけど、美味しくてね。紅茶も買って来たわ。」

カレン「Super surpriseデス!!」

アリス「ありがとうイサミ!!」

忍「何か・・・デジャヴが・・・」

陽子「あはははははは！」

綾「うふふふ。」

圭太「ははははは。」

浩輔「くはははは。」

その夜。圭太が部屋でゲームをしていると、スマホの着信音が鳴った。

圭太「ん？・・・え？智流？もしもし？」

智流『よう圭太！久し振りだな！』

圭太「お前どうしたんだいきなり？」

智流『お前が通う高校のHP見たら文化祭の告知があったから是非行ってみたいと思っつてな。』

圭太「おおそうか！それでお前1人でか？」

智流『いや、光明と女友達4人連れて行く。』

圭太「そうか。楽しみにしてるぜ。じゃあな。」

智流『ああ。またな。』

それから数日後。遂に学校祭が開催された。体育館前にアリスが誰かを待っていた。

アリス「あ！ヨーコー！」

陽子「ごめんごめん！」

アリス「早く早くー！」

陽子「今行くー！」

たこ焼きを買って来た陽子と一緒に体育館の椅子に座る。

アリス「いよいよシノ達の劇が始まるねー！」

陽子「今日まで頑張ってたもんなー！」

アリス「精一杯応援するよー！」

陽子「私もー！」

すると隣に烏丸先生が座った。

烏丸先生「先生も負けませんよー！」



陽子「からすちゃん何時の間に!？」

そして何処からか綿飴やアメリカンドッグなどを取り出した。

烏丸先生「楽しみねえ。」

陽子「誰よりも楽しんでる!？」

アリス「そう言えばケイタは何処なの？」

陽子「さつき他校の友達と一緒に来るって言ってたな。」

その頃圭太は、智流と光明と一緒に体育館の一番後ろに立っていた。

圭太「懐かしいなく智流に光明。」

智流「お前中学と変わんねえなく。」

光明「浩輔は居ないのか？」

圭太「彼奴は舞台の裏仕事をすって。お前らの女友達は何処なんだ？」

???「智流く〜ん！」

智流「お！来た来た。」

そこに4人の少女が智流と光明を見付けた。

智流「紹介しよう。白詰女子高校の同級生でクラスメイトだ。」

若葉「ごきげんよう。小橋若葉ですわ。」

萌子「時田萌子だよ。宜しくね。」

真魚「黒川真魚ですー！まあテキストに！」

直「僕・・・じゃなくて私は真柴直だ！」

それは若葉達だった。

圭太「へえ、随分個性的な友達だな。俺は香川圭太だ。智流と光明とは中学の時の友人だ。宜しくな。」

若葉「宜しくお願いしますわ。」

光明「どうだ圭太？俺達に可愛い天使達が付いてるだろ？」

圭太「光明は相変わらず女好きだな。何かごめんな皆。光明がこんな男で。」

萌子「ううん。寧ろ楽しいよ。」

真魚「そうつす！光明君とまおは意気投合のコンビつすー！」

圭太「そ、そうか。それと真柴だっけ？凄くボーイッシュだな。」

直「どう言う意味だ？」

圭太「いやさつき僕って言ってたし。」

直「ああ、あれ癖なんだよな。」

圭太「まあ癖ならしやあねえか。そうだ智流。お前何処か居候してると言ってたな。」

智流「ああ。若葉の家で居候してるんだ。母さんが家を売却したせいで。」

若葉「でも智流君は何時も私と一緒に楽しい毎日を過ごしてますわ。」

智流「いやそこまですらないけどな。」

圭太「なあ若葉、智流の事これからも宜しくな。」

若葉「はい！」

智流「おい圭太、俺が若葉の彼氏扱いか？」

圭太「冗談冗談。」

穂乃花『ただいまより、2年A組演劇「君の髪はゴールド」を上映致します。』

アリス「シノらしいタイトルだね！」

陽子「あはは・・・」

圭太「タイトルが忍らしいな。」

智流「そうだな。大宮らしいぜ。」

すると電気が消灯し、舞台の幕が上がった。

陽子・アリス「!？」

圭太「な!？」

幕が上がって、陽子とアリスと圭太が驚いた。

陽子「綾!？」

圭太「綾!?!何故!?!」

舞台に立っていたのは何と忍が作った衣装を着た綾だった。

何故綾が立っているかと言うとそれは数時間前の事だった。

忍「いよいよ当日です。やれる事は全てやりました。本番でその力を出しましょう

!」

穂乃花「演技も大分良くなったね！」

カレン「アヤヤの熱い演技指導のお陰デス！」

綾『そうじゃなくてこうよ？台本通りに！』

穂乃花「へえ。綾ちゃん、役に入ったら凄く良い芝居するよ？」

綾「本当？残念ね。陽子に見せてやりたかったわ。」

浩輔「そのドヤ顔は何だ？」

しかしそこに。

女子生徒「大変！お姫様役の子が風邪で出られなくなっちゃって！」

浩輔「何だって!？」

アクシデントが起こった。何と姫役の女子が風邪を引いてしまった。ピンチ到来。

浩輔「おい忍！ピンチだぞ！」

忍「あわわわ！代役を立てなくては……！」

穂乃花「綾ちゃん。皆に見せるチャンスだよ？」

綾「ええ!?あああ……ごめんなさい!!やっぱり無理!!小学生の頃緊張のあまり失神

した事あって……」

浩輔「完全な黒歴史だな……」

忍「大丈夫です！これを被って下さい！」

金髪のカツラを綾に被せた。

綾「これは!？」

忍「緊張を和らげ、勇気が湧いて来る効果があります!これは効きますよ!」

綾「それってしの限定の効果よ!」

忍「ああ!すみません・・・無理は良くないですよ・・・では代わりに私が!」

穂乃花「忍ちゃんは舞台袖で指示出さなきゃ。」

忍「ああ!そうでした・・・」

浩輔「どうするんだ忍?このままでと失敗に終わるぞ?」

忍「うう・・・他に出来る人は・・・」

綾(しの・・・この日の為に本当に頑張ってたのに・・・私だって・・・成功させた  
い!)

そして綾が決心した。

綾「分かったわ!代役引き受ける!」

忍「ええ!?!良いんですか綾ちゃん!?!」

綾「任せて!やってやるわ!」

例の段ボールを被って決心した。

忍「どちら様ですか!?!」

そして現在に戻った。やはり綾は緊張してしまった。

綾（どうしよう・・・やっぱ怖い・・・せめてお面があれば・・・）

アリス「綾〜！頑張れ〜！」

陽子「応援してるぞ〜！」

綾（アリス！陽子！ん？）

奥を見ると、圭太と智流と光明が手を振っていた。

綾「圭太！それに朝香君に古橋君!?）み、み・・・見に来てなんて頼んでないんだか

らー!!ふん!!」

何時ものツンデレ綾が出てしまった。

陽子「良いから芝居しろ！芝居！」

綾（でも、ちよつと緊張解けたかも。）

深呼吸して芝居する。

綾「小鳥さんが鳴いてる〜！今日はとっても良い天気〜！」

アリス「綾凄〜い！貫緑の演技〜！」

陽子「う、上手いのか・・・？」

若葉「凄く可愛い演技ですわ。」

圭太「そうか？」

綾「誰？その木陰に居るのは？」

草のセツトの裏から王子役のカレンが出て来た。

綾「私はこの国の姫アイリーン。あなたの名は？」

カレン「わ・・・わ・・・」

するとカレンの様子が可笑しくなった。

綾「まさか・・・あんなに練習したのに忘れたの!？」

カレン「忘れました・・・」

何とセリフを度忘れてしまったのだ。これまたピンチ到来。

カレン「(でも何とかしなくては・・・シノの劇が台無しデス・・・) No prob

lem!これは金魚のマネデス！」

綾「言わなくて良いから・・・！」

カレン(はっ！そうデス・・・！アドリブで繋げば・・・！)

アドリブ作戦を思い付いたカレンが驚きの行動に出た。

カレン「フッフ！お前がアイリーンデスカ。私は某国からのスパイ。」



綾「え？そんなセリフ？」

するとカレンが何かを取り出した。それは煙玉だった。煙玉を地面に投げて変身した。

カレン「Japaneseニンジャ！くノ一デス!!」

くノ一に変身した。綾が啞然とした。

カレン「秘儀！早着替えデス！」

綾「この劇中世ヨーロッパなんですけど!?!」

そして舞台袖では。

穂乃花「カレンちゃんのアドリブ!?!」

浩輔「ヤバイぞこりや・・・」

香奈「あれは、アニメ「ニンニンくノ一大市」のコスプレ衣装!」

浩輔「日暮?!」

忍「この展開は想定外でした・・・!」

女子生徒「次の展開どうしよう!?!」

穂乃花「忍ちゃん!!」

忍「(皆の為に成功させたい・・・!) 即興で何とかします!」

すると忍が金髪のカツラを被った。

穂乃花「え？」

浩輔「何!!」

忍「皆！私に力を分けて下さい！」

すると忍の金髪が輝き出した。

穂乃花「うわ!!」

浩輔「眩し!!」

穂乃花「忍ちゃん!?!本気モード!?!金髪が眩しいよー!!」

そこで忍はある提案をした。穂乃花と浩輔がその案に乗った。穂乃花が陽子とアリスに何かを申し込んだ。

穂乃花「あの、友情出演お願い出来ますか？」

陽子・アリス「え？」

烏丸先生「元演劇部の私も協力しますよ？」

それは友情出演のスカウトだった。そして浩輔は体育館の一番後ろに立ってる圭太を呼ぶ。

浩輔「おい圭太、つて智流に光明!!」

智流「久しぶりだな浩輔。」

光明「浩輔おっ久！」

圭太「浩輔どうしたんだ？」

浩輔「丁度良い！圭太に智流に光明！お前達に友情出演を申し込む！」

智流「友情出演!?!」

光明「面白そうだな！」

圭太「忍の奴何か考えたな？」

その頃綾は固まっていた。

綾（こんなのどう進めたら・・・!?!）

するとそこに。

烏丸先生「こんにちはー！トータムボールの妖精です！」

トータムボールの妖精役は烏丸先生と陽子とアリス。

綾（え!?!）

久世橋先生「烏丸先生・・・!?!」

そして久世橋先生はハラハラしていた。

圭太「よう！俺達は未来から来た若者達だ！」

そして圭太と智流と光明は未来人役。

綾（圭太に朝香君に古橋君!?!）

烏丸先生「心配しないで？アイリーン姫。」

アリス「あなたの身をお守りする為。」

陽子「色んな人達が変装して潜んでいたのです。」

圭太「悪い奴らは俺達が倒してあげるぜ。」

智流「俺達が居る限りもう大丈夫だ。」

光明「この世の悪者よ！掛かって来い！」

綾「え!？」

陽子「合わせて。」

綾「ど、どうなってるの・・・？」

陽子「あれを見て。」

舞台袖を見ると、忍が即興脚本を書いていた。

綾「しの・・・!？」

陽子「しのが即興でストーリー作ってる。」

忍「金髪ファイター!!」

陽子「だから、皆に合わせて。」

綾「・・・ええ！」

こうして新しいストーリーが展開した。穂乃花が玉乗りしながらジャグリングし、カレンが大いに盛り上げる。そして圭太と浩輔と智流と光明はダンスする。忍もステー

ジに立つ。陽子と綾が華麗に踊る。舞台は一気に盛り上がった。劇が終わって、観客達が拍手喝采する。

綾「しの。」

忍「はい？」

綾「私、この学校に来て良かったって本当に思うわ！」

忍「は……！はい！」

そして劇が終わって、圭太と浩輔は再び智流と光明達に会った。

浩輔「本当に久々に会ったな。」

智流「元気にしてたか浩輔？」

光明「俺達まだまだ元気だぜ？」

浩輔「勿論元気だぜ。智流、その4人は？」

智流「紹介しよう。白詰女子高校のクラスメイトの小橋若葉と時田萌子と黒川真魚と

真柴直だ。」

若葉「宜しくお願ひしますわ。」

萌子「宜しくね。」

真魚「宜しくつすー！」

直「宜しくな。」

浩輔「俺は白川浩輔だ。宜しくな。まあお前達が向こうで元気に学校生活を送れて良かったな。」

智流「ありがとな。そっちも楽しくやってるか？」

圭太「ああ。忍達も何時も一緒だぜ。」

光明「そっか。」

萌子「さっきの劇とっても良かったよ。」

智流「ありがとな萌子。真魚と直はどうだった？」

真魚「凄く面白かったつすー！」

直「確かに。今までにない発想だったな。」

光明「若葉ちゃんはどう？」

若葉「凄く良かったですわ！私もああ言う劇に出演してみたいですわ。」

圭太「良かった。それと俺達の事は名前で呼んでも構わないぜ。」

智流「さて、そろそろ帰る時間か。じゃあなお2人さん。また会おうな。」

圭太「智流、俺達と一緒に回るか？」

智流 「いや、6人で行く。劇を観れて楽しんだからな。じゃあな。」

圭太 「ああ！また会おうぜ！」

光明 「まったなー！」

浩輔 「じゃあなー！」

若葉 「バイバイー！」

萌子 「バイバイー！」

真魚 「バイバイっすー！」

直 「じゃあなー！」

智流達は他の所へ移動した。

圭太 「また智流達と会えるかもな。」

浩輔 「また会えるさ。」

忍 「あ！圭太君！浩輔君！行きましょう！」

浩輔 「ああ！そろそろ行こうぜ。」

圭太 「ああ。」

こうして楽しい劇が幕を閉じた。

そして舞台裏では。

綾「もー！カレンのお陰で一時はどうなる事かと！」

カレン「Sorry・・・」

忍「いえ。カレンのお陰でもっと良い舞台になりました！」

カレン「シノ！結果オーライデス！」

陽子「あはは！まあ何だかんだでちゃんとした劇になれて良かったな！」

浩輔「次回も同じような劇作ろうぜ！」

圭太「それはどうだか。」

綾「やっぱり今回の口論者はしのね。」

忍「え？」

綾「お疲れ様！」

忍「ええ・・・!?」

アリス「シノ凄いや！」

忍「そんな！皆と金髪のお陰ですよ！」

穂乃花「確かに！忍ちゃん立具を被った途端凄かったよ！神がかってたよ！」

綾「やっぱり！しには効果があるものね！」



穂乃花「うんうん！」

全員「ありがとう！金髪！」

アリス「金髪じゃなくてシノを褒めて！」

浩輔「神がかった。髪なだけに。」

圭太「寒いわ！」

その後圭太と陽子とアリスは和の展示の接客をする。扇子や盆栽や日本の画像。更に陽子が用意した和食などが展示された。そして中には忍のこけしが大量に展示されてた。綾は少し引いた。学校祭の中に変装した勇と湊も来ていた。そして皆で店を回った。途中でまた智流と光明と若葉達と会った。勇は隠れながら写真を撮る。湊は呆れてた。こうして楽しい学校祭が幕を閉じた。

時は遡り、忍達の入学式。

校長先生『えく新入生の皆さん。ご入学おめでとうございます。皆さんは本日より。』  
陽子「5人揃ってまた同じクラスとはなく。」

忍「友情と言う絆を感じますねく。」

綾「もー。2人共私語しない。」

陽子「怒られたく。」

そして浩輔も。

浩輔「忍達と同じクラスになれるなんてラッキーだな。」

圭太「おい静かにしろよ。」

浩輔「おつと悪い悪い。」

綾『最近、思う事がある。』

そして現在に戻り。綾は中庭の木を見ていた。するとそこに。

忍「綾ちゃん！一緒にC組行きませんか？」

浩輔「行こうぜ？」

忍と浩輔が来た。

綾「良いわよ！」

一緒にC組へ向かう。

綾『小さい頃からの幼馴染みじゃなくても、綺麗な金髪じゃなくても。』

カレン「私も行くデス！」

アリス「シノ！アヤにカレンにコースケも！」

陽子「綾！ノート見せて？」

圭太「よう！来たか！」

綾『しのと私は友達。これからも、ずっと！』

「See you！」

『HAPPY きんいろモザイク Thank You』

アリスがまだ日本に居た頃。3年生となった彼女達はいよいよ修学旅行。忍とアリスがギリギリで新幹線に乗り込んだ。

修学旅行の舞台は、京都。

バスの中で陽子がお菓子を食べ、綾が怒る。

圭太は景色を眺めてる。

アリスも京都の景色を眺めてる。

バスが目的地に到着。

綾「私が班長だから、迷子にならないようにちゃんと付いて来て！」

陽子・カレン・浩輔「了解デース！」

穂乃花「カレンちゃんと白川君はこっちだよ!!」

圭太「お前何こっちに入ってるんだよ!!」

奈良県。

忍「ここが京都で有名な奈良公園ですか。」

アリス「シノ！何言ってるの!?奈良だよ!?!」

陽子「ヤギとか羊とか居るのかな?」

圭太「お前も何ってんだ!?ここに居るの鹿だぞ!?!」

アリス「奈良公園に鹿が居るのはね、鹿の神様の御使いなんだよ?春日大社にお祀りしている神様が、白鹿に乗っていたって言う伝説があつてね。だから鹿は、神聖な存在なの。」

圭太「おお。アリス、更に賢くなったな。」

アリス「そうかな?」

するとカレンがアリスの左手に鹿せんべいを置いた。

カレン「鹿せんべいあげマース。」

アリス「因みに、その神様のお名前は・・・武甕槌神（たけみかづちのかみ）・・・」

鹿せんべいを持ったアリスに鹿達が群がる。

陽子「うわああー!アリスー!?!」

圭太「大丈夫かー!?!」

その光景を忍がデジカメで撮った。

忍「アルプスの少女みたい〜♪」

陽子「言ってる場合かー！ー！！」

圭太「お前は呑気だな!!」

何とかアリスを救出した。

次に訪れたのは、法隆寺。

アリス「阿修羅様の3つの顔には、それぞれ意味があるんだよ?」

陽子「阿修羅像って、ちよつと綾に似てるな。」

圭太「はい?」

綾「な!?!ど、どう言う意味!?!」

陽子「ほめ言葉だよ。ほら、さっき買ったお守りあげるから。」

お守り貰って綾が喜んだ。

忍「確かに3回表情が変わりました。」

圭太「そう言う意味じゃねーよ。」

奈良の大仏では。

穂乃花「カレンちゃん！奈良の大仏だよ！」

浩輔「うっひょー！デツケエー！」

カレン「WOW！超強そうデース！この大仏様は、夜になると奈良の空を飛びパトロールするデース！」

香奈「おい！」

浩輔「嘘吐け！」

穂乃花「えー！凄い！そうなの!？」

浩輔「信じてる!？」

カレン「YES！奈良の大仏様は、奈良の平和を守っているのデース！操縦は私のパ  
パでー・・・」

久世橋先生「コラー!!」

アリス「カレン！嘘教えないの!!」

圭太「周りが誤解するだろ!!」

香奈「・・・」

陽子「香奈。頑張れ。」

香奈「え？あ、はい。(同情の眼差し!?)」

二月堂。

圭太「やって来ました二月堂！」

アリス「ここは二月堂！お水鳥って言う伝統が行われるのよ？」

綾「わあ〜！」

忍「OH！」

春日大社。

圭太「この春日大社は、平城京の守り神として創建されたんだ。」

綾「綺麗ね！」

忍「Beautiful！」



夫婦大国社。

アリス「ここは夫婦大国社だよ。」

綾「ハートの絵馬可愛い！」

忍「Pretty」

圭太「そして向こうが・・・」

忍「Exotic Japan!!」

陽子「逆だよね!？」

圭太「お前日本人だろ!？」

旅館で夕食。

それぞれの班が部屋に入って就寝。

綾「こう時でしか出来ないもの……ねえ、皆起きてる？」  
皆寝てる。

綾「寝てるわ……」

翌朝。バスが高速道路を走る。

烏丸先生「B組の皆さまー！おはようございますー！」

B組生徒「おはようございますー！」

カレン「おはようございます……」

烏丸先生「修学旅行2日目は自主研修です。」

穂乃花「……」

まだ寝てるカレンを穂乃花がジッと見てる。

京都。

圭太「扇子。良いね。」

アリス「うん。」

扇子を持ったアリスを忍が写真を撮った。

忍「アリス イン 京都。」

圭太「お前抜け目ないな。」

カレン「シノー！一緒に行きまシヨウ！」

忍「カレン！おはようございます！」

カレン「オハヨウゴジヤイマース！」

浩輔「おいカレン落ち着けよ。よう圭太。」

圭太「浩輔、お前もここか。」

陽子「カレン達の班も、私達と全く同じ所を回るなんてな。」

綾「偶然じゃん。」

カレン「シノを独り占め出来ると思ったら大間違いデスよ？アリス。」

アリス「もう！カレンってば！」

圭太「俺達って、強い絆で結ばれてるのか？」

浩輔「一心同体だな。」

香奈「さあ皆！時間厳守！」

綾「世界遺産を巡るツアーに出発よ！」

浩輔「よっ！班長コンビ！」

カレン「最初は何処デース？」

忍「清水寺です。」

清水寺へ向かう。

穂乃花「・・・カ、カレンちゃん!!」

カレン「ン？」

穂乃花「し、写真！」

カレン「OH！撮りマスカー！」

デジカメを持ったカレンが忍達の写真を撮った。

穂乃花「ありがとう・・・？」

カレン「どう致しマシテ〜。」

穂乃花（修学旅行の思い出に、カレンちゃんと2人で撮った写真が欲しいのに・・・上

手く言い出せないな・・・昨日も撮れなかったし・・・)

香奈「ううん！今日こそ勇気出さなきゃ！」

心の声を代弁してあげただけ。

穂乃花「何で分かるの!?!カレンちゃん！香奈ちゃんが心を読んでくるよ!!」

カレン「WOW！エスパーカナ！」

香奈「さあ！今がチャンスだよ！」

彼女を後ろを押しあげた。

穂乃花「あ、あの！カレンちゃん!!しや！しや・・・しや・・・」

カレン「ン？」

穂乃花「シャンプーって何処の使ってる？」

香奈「穂乃花ー！」

浩輔「仲良いな。」

清水寺。

忍「良い眺めです。」

アリス「4階建のビルと同じ高さなんだって。」

カレン「高いデース！」

圭太「清水寺行ってみたかったんだよね。」

忍「こう言う所に来ると、俳句を詠みたくなってきましたね。」

アリス「シノが日本文化に触れて、日本人らしい事を。」

圭太「いや忍は日本人だぞ？」

忍「アリスはね 金髪碧眼 プリンセス♡IN 清水寺。」

圭太「清水寺関係ねー!!」

アリス「季語も入ってない……それ所か英語が入っているけれど……何故だろう……」

こんなにも心が動かされる……」

この俳句、10点。

陽子「甘過ぎだろ!!」

浩輔「ただ忍が好きなんだよ君は!!」

カレン「甘いデース！」

楽しい7人組を、穂乃花がジッと見てる。

穂乃花「……」

次に訪れたのは、銀閣寺。

アリス「シノもちゃんと目に焼き付けてる？」

圭太「折角の京都なんだし、世界遺産いっぱい見れて楽しくなれるぞ？」

忍「私はアリスと言う名の世界遺産にクギ付けですよ。」

アリス「シノ？ 私は世界遺産に登録されてないよ？ちゃんと勉強して！」

忍「あ、はい……すみません……」

圭太「大人しくなった。」

カレン「シノー！ あっち行きますショー！」

忍を連れて走り出した。

アリス「ああ！ 待ってー！」

圭太「おいカレン待てよ!!」

穂乃花「あ……」

香奈「!!」

浩輔（頑張れ松原!）

バスに乗り、次の場所へ。

陽子「結構撮った?」

忍「はい!お姉ちゃんにいつぱい撮って来てつて頼まれたので。」

綾「あ!見せて!」

忍「赤と金のコントラストが、美しく撮れました!」

陽子「金髪しか写ってねえ!」

圭太「2人にしか目がない・・・」

綾「勿体無い!カメラは私に任せて!」

忍「き、金髪が勿体無いとはどう言う事ですか!」

圭太「京都に来ててもアリスとカレンばっかり撮ってるお前がそれを言う資格があるのか!」

穂乃花「はあ・・・タイミング逃すとどんどん言い辛くなるね・・・」



香奈「まだ撮れてないの!？」

浩輔「どんだけ緊張してんだよ!!」

穂乃花「だって!想像の中の私に変態っぽくなっちゃうの!!」

浩輔「はい・・・?」

想像の中の穂乃花。

穂乃花「ゲヘヘ。ツーショット欲しいな。」

香奈・浩輔「何で!？」

穂乃花「そこで、名案が浮かんだんだけど。コレ!」

香奈「自撮り棒?」

浩輔「それをどうするんだ?」

穂乃花「コッソリ2人が入る角度で隠し撮りするの!!」

香奈「いや!!正真正銘の変態だよそれは!!」

浩輔「変態が具現化した!？」

金閣寺。

陽子「金ピカだー！」

圭太「金閣寺来たぜ!!」

綾「まるでアリスとカレンの髪みたいだわ！」

浩輔「確かに！」

忍・穂乃花「確かに美しいけれど、2人の金髪はもつと柔らかく品やかな輝きで……」

綾「美しいユニゾン!」

浩輔「金髪同盟の見事なハモリ!」

陽子「神社とお寺って何が違うんだっけ？」

圭太「そんな事も分かんねえのか!」

アリス「神社は神様! お寺は仏様だよ!」

カレン「ホノカ! お参りするデス!」

穂乃花「……!!」

賽銭箱に5円玉を入れる。

カレン「お賽銭デス。」

穂乃花「・・・！」

両手を拝んで願いを言う。

穂乃花「カ・・・カ・・・カレンちゃんと一緒にツーショット写真撮れますように!!」

カレン「!？」

香奈「声に出ちゃってる!!」

浩輔「バラしてどうすんだよ!!」

穂乃花「カレンちゃん!私と一緒に写真撮ってくれないかな!？」

カレン「勿論!喜んでデス！」

穂乃花「・・・!!」

天使の笑顔が、穂乃花を圧倒した。

穂乃花「召されそう・・・」

カレン「ホノカ?戻って来るデース。」

金閣寺をバックにツーショット写真を撮った。

穂乃花「ありがとう・・・神棚に飾るね・・・」

香奈「重いわ。」

浩輔「泣く程？」

綾「カレン！私とも撮って？金閣寺と金髪ってご利益ありそう。」

カレン「確かに！」

圭太「はいチーズ。」

綾、アリス、カレンのスリーショットを撮った。

陽子「・・・次私も！」

忍「私もお願いします！」

香奈「わ、私も・・・」

穂乃花「私ももう1回！」

カレン「行列が!？」

圭太・浩輔「アイドルの握手会!？」

旅館に到着。

アリス「わあ〜！」

綾「今日の宿も素敵ね〜！」

アリス「同じ日本なのに、シノの部屋と全然違う！日本に来てこんなに日本文化に触れた日はないよ！修学旅行Excellent!!」

忍「西洋被れですみません・・・」

陽子「自分で言うなよ！」

すると隣の部屋の戸が開いた。

カレン「ヘイ、アリス！Let's go Hot Spring!!」

陽子「ホット？」

アリス「英語で温泉って意味だよ。」

男湯。

圭太「あ〜。やっぱ温泉は最高だなあ〜。」

浩輔「確かにな〜。今日の疲れが溶けてく〜。」

圭太「今日の松原、ぶっ飛んでたな。」

浩輔「カレンとツーショット撮りたいが為のお願いがようやく叶ったんだな。」

女湯。

穂乃花「はうく・・・」

カレン「ホノカ！居ないと思ったら先に入ってたデスか。」

穂乃花「か、カレンちゃん!？」

カレン「お湯加減如何デスか？」

穂乃花「えへへ・・・いい感じだよ？」

彼女が入ってる湯船にアリスが手を入れた。

アリス「カレン！これ水風呂だよ!？」

カレン「エ?」

穂乃花「・・・」

顔が真っ赤になって水風呂に湯気が出た。

カレン「ホノカの熱で温くなってるです!」

アリス「何で!？」

穂乃花「カレンちゃんと温泉に行くのは、温泉掘り当ててからって決めてたのに!!心の準備が!!」

温泉を掘り当てたイメージ。

穂乃花『掘ったよ!カレンちゃんの為に!』

カレン『OH!!』

女湯・露天風呂。

アリス「露天風呂最高♪」

忍「アリス。前から入りたがってましたものね。」

アリス「本当は、お猿さんとするのが夢だったんだけど。」

忍「残念ながら猿は居ませんね。」

そこに陽子が来た。

アリス「あ!ヨーコ!」

忍「ちよつと来て下さい！」

陽子「何？」

忍「陽子ちゃん猿っぽいので、ウキーって言ってみて下さい。」

アリス「ワクワクワクワク！」

陽子「突然のデイスに私はどうしたら良いの・・・？」

しばらくして、カレン達も来た。

香奈「この温泉は何に効くんだろう？」

カレン「ホノカ！当ててみて下さい！」

穂乃花「え？」

カレン「入ってみて、何か実感ありますか？」

穂乃花「えっと・・・し、幸せ。」

カレン「幸せな湯！」

綾「良いわね！素敵！」

香奈「それ！」

綾・カレン・穂乃花・香奈「はあく・・・」



部屋に戻った。

忍「そろそろ限界なので寝ます・・・」

綾「ちよちよちよちよつと待って！こんなに早く寝たら勿体無いわ！もつと修学旅行あるあるで盛り上がりましょうよ!!」

カレン「その通り!!」

香奈「修学旅行と言ったら枕投げ！」

穂乃花「これをやらなきや旅は終わらないよ!!」

陽子「なくんだ綾。枕投げやりたかったの？」

綾「違うわ!!こんな野蛮な遊び・・・」

カレン「最後まで生き残った人は、何でも命令出来る権利が与えられマス！」

その言葉に綾が乗った。

カレン「それではヨーイスター・・・」

だが持つてる枕が一瞬で消えた。

カレン「あれ？枕は？」



恋バナスタート。

綾「それじゃあ皆で恋バナしましょう！」

陽子「いや、急に言われても特に話題は・・・」

綾「カレンの初恋はいつ？」

カレン「フア!？」

陽子「え!? うわっ! 指名が入った！」

カレン「私のF i r s t L o v eは・・・アリスデス！」

アリス「え!？」

カレン「なんちゃって。」

陽子「おい真面目に答えないと怒られるぞ・・・」

綾「続けて！」

陽子「いいんだ!？」

時間は22時40分になった。

穂乃花「消灯時間が過ぎてるし、そろそろ戻った方が・・・」

カレン「大丈夫デス！布団被って静かにしていればバレマセン！それに先生達、旅行で浮かれてますのでチェックも甘いハズ。」

しかし彼女の予想は外れた。

久世橋先生「誰が浮かれてるって？」

穂乃花・香奈「ヒイイ!?!」

久世橋先生「自分の部屋に戻りなさい！」

カレン「NOーーーーー!!」

香奈の班が行った後。

アリス「電気消すよー。ん？」

忍のカバンからイギリスの旅行本が出て来た。

アリス「これ。」

綾「間違えて持って来ちゃったのかしら？」

陽子「あはは。そう言えばシノは修学旅行の行き先イギリスだと思ってたんだよな。」

修学旅行前。

忍『え!?!イギリスじゃないのですか!?!』

圭太『当たり前だろ。』

忍『そんな・・・私・・・この時の為に英語をマスターしたのに・・・』

陽子『え、英語を・・・』

綾『マスター・・・?』

浩輔『忍が・・・?』

忍『すみません!!ちよつと盛りました!!』

陽子『知ってるよ!?!』

圭太・浩輔『だろうな!!』

忍「えへへ・・・」

アリス「・・・」

翌日の京都タワー。

カレン「コータとミツキー。寂しがつてマスかね？」

陽子「え〜？」

浩輔「そうは思えないな。」

カレン「猫は3日で飼い主を忘れると聞きます。」

浩輔「え？」

陽子「おい止めろ！ウチの兄妹に限ってそんな事！」

綾「そうよ！」

空太・美月『お姉ちゃん誰？』

陽子「ガクツ・・・」

綾「陽子!？」

カレン「ヨーコ!」

浩輔「おい陽子しつかりしろ!!」

忍「修学旅行ももう終わりですね。」

圭太「そうだな。」

アリス「シノは修学旅行楽しかった?」

忍「勿論! 楽しくなかったですか?」

アリス「ううん。シノはイギリス旅行へ行きたがってたから。」

圭太「まだイギリス諦めてなかったのか?」

忍「確かにそうですが、たまには日本文化にも触れたくなります。普段生活や食事スタイルが洋風ですので。今は録画している世界の旅番組が観たくて・・・震えが止まりません・・・」

アリス「禁断症状!?!」

圭太「依存症が抜けてないな。」

忍「でも、私はアリスと圭太君と、皆と一緒になら何処だって楽しいです!」

アリス「私もだよ! じゃあ次は、北の大地に行こ?」

忍「北極ですね！」

アリス「北海道！」

忍「オーロラが見たいです！」

圭太「ハモってない!!」

アリス「冗談だよ。次こそ、皆でイギリス旅行へ行こ？」

忍「え?!良いんですか!？」

カレン「いつ行きマスか？」

忍「来週にも!!」

浩輔「いきなりかよ!!」

陽子「そこは卒業旅行とかだろ！」

綾「まあその前に・・・受験があるんだけどね。」

圭太「受験ね。」

忍「綾ちゃん!圭太君!皆と一緒に受験だって楽しいですよ!」

陽子「ポジティブって言うか。」

浩輔「頭の中が旅行だらけだな。」

7人「あはははははは!」



夜。香川家。

圭太の母「おかえり圭太！」

圭太「ただいま母さん。」

圭太の母「修学旅行楽しかった？」

圭太「もうはしやぎ回ったよ。これ、お土産。」

圭太の母「あらまあこんなに！」

大宮家に忍とアリスが帰って来た。

忍・アリス「ただいま！」

勇「おかえり〜。」

アリス「ただいまイサミ〜！」

買ったお土産を出した。

勇「ちよつと！お土産これだけ？欲しい物リストもつとあつたでしょ？」

アリス「流石に全部は・・・」

忍「お姉ちゃん！両手いっぱい思い出がお土産です！お土産話しなら尽きませんよ  
！」

勇「お土産話も良いけど！」

アリス「あはは。日常に帰って来たって感じがするね。」

忍「あ！まだお土産がありました！」

勇「京都で拾った石とかだったら怒るわよ。」

忍「違いますよ。」

何も入ってないビニール袋。

忍「清水寺の神聖な空気です。」

アリス「いつの間に・・・」

勇「・・・」

清水寺の空気が入ったビニール袋を持った勇が。

“ バァン!!! ”

無惨に割った。

忍 「酷い!!!」

夏の学校。

忍 「綾ちゃんって、前より素直になれましたよね。」

綾 「な、何突然？」

忍 「表情豊かで、柔らかくなりました。」

アリス 「うんうん。」

圭太 「何か垢抜けたって感じ。」

綾 「そうかしら？自分ではよく分からないんだけど・・・」

忍 「凶にするとこんな感じですよ！」

ハイライトに桜の花が咲いてる。

綾 「間違い探し!?!」

忍 「そして今の表情はこんな感じですよ！」

満面な笑みの綾。乙女の季節。

綾 「アホ面になってない!? 聡明さは何処へ!?!」

アリス「見た目だけじゃなくて、綾は中身も成長したと思うよ？」

綾「成長？そう言って貰えると何だか嬉しい。」

陽子「何の話？」

浩輔「話題は何だ？」

忍「綾ちゃんの顔が変わったって話です。」

綾「顔は変わってないわよ!？」

陽子「え？そお？」

ジツと綾の顔を見る。

綾「・・・近いわー！ー!!!」

圭太「突き飛ばした。」

忍「あれ？あんまり変わってないかもです。」

陽子「ってか、もしかして綾寝不足？」

綾「ああ、少しだけ・・・陽子とカレン用にノートを纏めてて・・・」

アリス「頑張り過ぎはダメだよ！夜は寝なきや！」

圭太「いづれ不眠症になるぞ？」

綾「ええ・・・でもやっぱり今は頑張らなきや。」

陽子「頑張るって私達の為にだろ!？綾は綾の勉強を頑張ってよ！体壊したら元も子も

ないんだし！」

綾「・・・だって・・・」

照れながら泣きそうになりそうな顔。

陽子「どう言う表情!？」

浩輔「照れと泣きの中間!？」

綾「何でもないの!!」

教室から飛び出した。

陽子「何処へ!？」

綾「職員室!!」

職員室へ走る。

綾（だって・・・折角同じ志望校なんだもの！でもそう思ってるのは、私だけなのかも知れない。）

陽子『そんな必死にならなくても。』

カレン『滑り止めはありませんし。』

綾（はっ！もしかして私が勉強を教えってるのも・・・実は迷惑!?!）

様子を見に来た陽子が、落ち込んでる綾を発見した。

陽子「（露骨に落ち込んでるな・・・）綾。私も一緒に職員室へ行ってもいい？」  
綾「え？いいけど・・・」

2人で職員室へ向かう。

綾（シノは素直になつたって言ったけど、そんな事ない・・・陽子の前では全然素直になれないし・・・本当は聞きたい事があるはずなのに・・・）

陽子「何？」

綾「あ！何でもないわよ!!バカ!!私のバカー!!あああー!!」

陽子「寝不足なのに元気だなあ。」

しばらく進むと。

香奈「宜しくお願いしましゅ、あー!!」

穂乃花「頑張つて!」

陽子「ほのかのコンビだ!」

綾「カレンも居るわ!」

カレン「アヤヤにヨーコ!」

綾「3人共何してるの?」

穂乃花「面接の練習だよ? 香奈ちゃん推薦入試だから面接あるんだ。」

陽子「推薦!!」

穂乃花「練習なのに嘸み嘸みなんだよね。」

陽子「へえ。以外。」

香奈「あがり症なの。」

カレン「私が面接官だったら、ギャップ萌えて絶対合格デス!」

穂乃花「カレンちゃんのお墨付きなんて羨ましい!!」

香奈「全然嬉しくない・・・」

穂乃花「陽子ちゃんは面接得意っぽいもんね!」

陽子「そお?」

香奈「堂々としてるもんね。」

カレン「聞かれた事には何でも正直に答えちゃいそうデス。」

陽子「それはあるかも。嘘吐けないし。」

綾「あ！」

3人と別れた後。

綾「・・・」

陽子「あれ？職員室はこっちじゃ？」

綾「それより私達も面接の練習をしましょう。」

陽子「え？だって私達面接ないよね？一般だし。」

綾「そうだけど、いずれ必要になるわ！バイトとか就職とか！それに圭太には卒業後は俳優になるんだし、オーディションが待ち受けてるんだもの！」

陽子「え？でも・・・」

綾「でもじゃない！本当にもうこの子つたら!!」

陽子「私が我儘言ったみたいになってるー!?!」



誰も居ない教室で面接の練習。

綾「どうぞ。」

陽子「失礼します。猪熊陽子です。宜しくお願いします。」

綾「敬語陽子かあ。成る程、悪くない。」

陽子「あのおく？」

練習再開。

綾「ではまず、大学の志望理由を。」

陽子「えっと、パンフとか見て良さげだったので。」

綾「それだけ!? そんな浅い理由で・・・」

陽子「じゃあ綾は？」

綾「私は大学行くなら、前からここがいいなって思ってた。よく大学生になった時を妄想していて、その舞台がそこだったから。私も動機が不純過ぎて・・・人の事言えないわ・・・」

陽子「どんな理由!?!」

綾「コホンッ。じゃあ次。あなたには小路綾と言う友人が居ますよね？」

陽子「はい目の前に。」

綾「正直に彼女の事はどう思っていますか!？」

陽子「ええ!?! どうって……」

綾「本当は、勉強を教えられるのも……ありがた迷惑だし……正直嫌いと思ってるのか……ウザいとか無理とか……」

泣いてしまった。

陽子「ネガティブワードが続々と……そうだなあ。綾は友達と言い難いなあ。」

綾「友達ですらない!?!」

陽子「勿論親友だと思ってるよ! それよりも、腐れ縁って感じかなって思ってる。」

綾「それって、良い意味で言ってる……?」

陽子「うん! 出会った頃から、いつも隣に居る気がして。そしたら行きたい大学も同じで。何となくだけど、これからも仲良くしていくんだらうなうって。」

綾「陽子は本当は……一緒に大学に行きたくないんだって思った……」

陽子「何で!?!」

綾「だって、勉強教える時凄く嫌そうなんだもん……」

陽子「それは勉強が苦手だからだよ!! 綾が私やカレンの為に頑張ってるんだから! 私も頑張るよ! 大丈夫! 絶対合格してみせるから! これからも宜しく!」

手を差し伸べた。

綾『当たり前でしょ！感謝しなさいよ!!』

こんな台詞を予想していた。しかし。

綾「う、うん・・・」

素直に握手してくれた。

陽子「・・・！」

綾「こちらこそ。いつも隣に居てくれてありがとう！」

陽子「・・・所で、綾が気付いてない事を言っても良い？」

綾「え？何よ。遠慮しないで言いなさい？」

“キーンコーンカーンコーン”

陽子「もう午後の授業始まつてるみたいなんだけど。」

綾「それを早く言いなさいよ!!バカーーーー!!」

放課後。カレンが外を眺めている。

カレン「私とアリスは、小さい頃からずっと一緒。ずっと・・・ずっと・・・今も

！きつと、来世も一緒です。」

陽子「急にどうした!？」

浩輔「何かを悟った雰囲気!？」

忍「陽子ちゃんは、サマータイムって知っていますか？」

陽子「サマー・・・夏休みのな!？」

忍「あはは。違いますよ。まあ、上手く言う事は出来ませんが・・・」

陽子「絶対分かってないだろ!!」

圭太「何で知ったかぶりしたんだ!？」

アリス「シノつたら・・・」

カレン「イギリスでは、今日はアリスタイムなのデスヨー!」

アリス「え!？」

忍「アリスタイム!？」

浩輔「どんな意味なんだ?それ。」

カレン「今日は1日アリスを独り占め出来るのデス!!」

圭太「何だそれ!？」

忍「ほほ。」

浩輔「それはそれは。」

アリス「ちよつともう！シノとコースケ信じちやうから！」

綾「そうなの!?それは知らなかったわ！」

陽子「へえ〜！」

圭太「信じちやつてる!?!」

アリス「嘘だよ!?!そんな日ある訳ないよ!!」

カレン「まあまあそんな怒鳴らないで下さい。昔パンケーキ焦がした事まだ怒ってる  
デスカ?」

アリス「いつの話してるの!?!」

忍「(何だか、カレンの元気がないような……)成る程!アリスタイムですね!今日の所は、アリスを独り占めして下さい!ただし!明日からは私のアリスフィーバータイムですよ!!」

今日はカレンがアリスを独り占め。

アリス「もおお!私の意志はあ!?!」

綾「喜んでるわね……」

九条家にアリスがお邪魔する。

カレン「髪型！昔Versionデス！」

アリス「わあ！懐かしい！どうかな？少しママに似てきた？」

カレン「う〜ん・・・」

カレン・カレンのママ「5年後に期待。」

アリス「わあ!!親子揃って!!」

その後2人で遊ぶ。

アリス「はあく。久し振りに英語喋ったような気がするよ〜！咄嗟に英語出て来ないね。」

カレン「アリス。日本に慣れ過ぎデス。そんなんじや、イギリス帰った時、あ・・・」

アリス「やっぱり元気ないね。」

カレン「あ！アリスには隠し事出来ないデスね・・・」

アリス「皆気付いてたよ？いつもより目の角度が下がってたよ？」

カレン「そんな細かい違いで!?実は昨日・・・」

昨日の学校。

穂乃花『カレンちゃんは、卒業したらイギリスに帰っちゃおうの?』

カレン『え?』

穂乃花『ご、ごめんね! ちょっと気になっちゃったって言うか・・・』

カレン『進路・・・卒業・・・NGWordだと思ってたデス。』

穂乃花『何が!』

そして今に至る。

カレン「今が楽し過ぎて・・・先の事はあまり考えてなかったデス・・・だから考えてみたんデスが!! oh my Godになっちゃってー!ー!ー!ー!!」

アリス「カレンがそんなに悩むなんて・・・」

カレン「その内に、私は考えるのを止めて寝マシタ!」

アリス「寝ちゃった!? 確かに。未来の事は分からないけど、少し先の事は考えた方が

いいのかも。」

カレン「アリスはキツチリしてて偉いデス。」

アリス「カレンこそ。何が起きてても明るく楽しめちゃうじゃない。」

パンケーキを焦がした時や、くノ一になった時も。

アリス「それに巻き込まれるのは・・・全部私だけどね・・・」

カレン「今から謝っておくデース!!!・・・フフツ。」

アリス「元気出た？」

カレン「デタデタ！出マシタ！高校最後の夏も楽しみデス!!」

すると母親に頭を掴まれ。

カレンのママ「遊んでばかりじゃダメよ？」

カレン「はひい・・・」

アリス「勿論勉強もね。」

一緒にベッドに入った。

カレン「ホノカナは、地元で同じ大学を目指してるって言ってマシタ。」



アリス「アヤとヨーコは女子大だって。コースケも大学、ケイタは俳優だって。」  
カレン「アリスは？ 小学校？」

アリス「何で義務教育に戻ってるの!?! うーん・・・私は何となく決まっってはいるけれど。まだ迷っている最中だから、今は言えないの。」

カレン「エー？ いけずデース！」

後日。アリスの部屋。アリスが母親宛にエメールを書いてる。

『ママ。夏休みは皆でカレンの別荘へ行って勉強合宿をしたよ。花火綺麗だったな。もう夏休み最後の日なのに、シノは外国の旅番組ばかり観ています。卒業後の進路が決まっていないのは、シノとカレンだけ。』

アリス「・・・」

忍『キヤーーーー!!』

アリス「っ!？」

突然の忍の叫び声。

その理由は。

忍「ヒヤアアアーーーーー!!! ヒイーーーーー!!! オオオーーーーー!!!」

それは、忍の母とアリスの母の大学時代の写真を見て叫んでいたからだった。今日は圭太と圭太母が泊まりに来てる。

アリス「あ。それ大学の時の写真？」

忍の母「片付けてたら出て来てね。」

圭太「おばさん若い！」

勇「若いなあ。」

圭太の母「本当ね。」

忍「ウツヒャーーーーー!!!」

アリス「シノしつかり!! 人語を喋ってーーーー!!」

勇「動物園・・・？」

忍「い、1回休憩しましょう・・・過剰摂取は体に毒です・・・ママは1日1回です  
ね・・・」

勇「何言ってるの・・・？この子・・・それにしても、親同士が国境を越えて友達で、

その娘同士も友達で一緒に住んでいるなんて、運命的ね。」

忍「運命・・・とてもロマンティックな響きです。」

アリス「私達が友達になるのは運命だったんだね！」

忍「そしてきつと、前世は恋人同士だったんですよ!!」

アリス「そこは友達同士じゃないの？」

圭太「何？百合なの？」

忍「やつぱり、アリスとアリスママは似ていますね。」

アリス「あ。」

圭太「確かに。アリスが大人になったみたいなた容姿。」

忍の母「私からすると、アリスとママはタイプが違うわね。」

アリス「え？どんな風に？」

圭太「何それ聞きたい！」

忍の母「アリスママは、天然のお嬢様ってイメージね。蝶々追い掛けて戻って来ないような。」

アリス「へえ〜！シノみたいだね！」

勇「一気にイメージダウンしたわ・・・」

圭太「想像に時間費やしたい・・・」

忍「どう言う意味です？お母さん！もっと大学時代のお話聞かせて下さい！」

忍の母「いいわよ。アリスママは、出会った初日から仲良くなっただよね。私から話し掛けて。」

アリス「コミュ力の高さは流石親子だよ！」

圭太の母「私の時も声掛けられてね。」

圭太「凄いなお婆さん。」

忍「アリス。コミュ力とか関係なく、金髪少女を前にしたら話し掛けずにはいられなくなるのです！ね？お母さん。」

忍の母「同意を求めないで。」

大学時代。

忍の母『き、金髪少女！』

アリスの母『ん？』

忍の母『ひゃー・・・!!』

アリスの母『キンパツショウジョ？』

忍の母『ウツヒャー！可愛いー!!』  
これが2人の初めての出会いだった。

忍の母「萌えたわよね。不覚にも。」

圭太「テンション高いな。」

勇「全然娘の事を言えないじゃない!!」

忍の母「国の話や家族の話。親友みたいに色々な話をしたわ。そうそう！恋の相談も受けたのよね。」

大学時代。

アリスの母『あのね、実はこのあいだ告白されて・・・』

忍「一体何処の馬の骨ですか!!!」

突然忍が父親みたいにキレ出した。

アリス「ダツドだよ!!」

圭太「アリスの親父さん!!」

忍の母「大学を卒業して、日本に帰ってから色々忙しくて全然会えなかったわ。住んでる所が違うと中々ね。」

アリス「そ、そうだよね。やっぱりイギリスと日本は遠いよね・・・」

忍「確かにそうかも知れませんが、どこにでもいけるドアがそろそろ開発されている頃なので。」

アリス「そんなものはないよ!?!」

圭太「ドラえもんか!!」

忍の母「あはは。でも、今はこうやって繋がっている。それがとても嬉しいの。」

アリス「会えなくても、心は通じているんだね。」

忍の母「そう!後、インターネットでも通じてる!」

タブレットを出した。

圭太「タブレット!」

アリス「ハイテク〜！」

忍の母「定期的にビデオ通話で情報交換してるのよ？」

アリス「娘達の方がアナログだよ！」

手に持つてるエアメール。

忍の母「さて。そろそろ買い出しに行かなきゃ。」

アリス「私も行く〜！」

忍「荷物持ちしますよ！」

圭太「おばさん、俺も行くよ。」

忍の母「助かるわ〜！」

4人で買い出しに出掛けた。

忍「今日はアリスママのお話を沢山聞けてお腹いっぱいですね〜！」

アリス「そうだね〜！」

圭太「アリスママの意外な一面が見れて新鮮だった〜。」

忍の母「ん？アリスママだけじゃなくて、お母さんについては何かないの？」

忍「あわわわ！違うんです!!」

圭太「今のは誤解だよ誤解!!」

忍の母「今日は夕飯作らなくていいかな？お腹いっぱいだし。」

忍「お母さん!!」

圭太「ごめんって!!」

忍の母「あはは！冗談だよ冗談!」

忍「お母さんは凄いです!!」

忍の母「ん?」

アリス「シノ?」

圭太「どした急に?」

忍「英語も喋れて、大学へ行って、尊敬しているんです!私なんていつもぼんやりしてて、金髪少女の事ばかり考えてて・・・」

忍の母「確かに。」

忍「確かに!?!」

忍の母「でも、悩んでる事は知ってる。だから大学時代の話聞いたんでしょ?」

忍「あ!」

アリス「あ!」



忍の母「忍は実は色々考えている事も、忍の中に答えがあるのかも知っているわ。いざって時に何でも頑張れる事もね！」

忍「私に出来るでしょうか？」

忍の母「出来るわよ！だって、私の娘だもの！」

アリス「シノママー！！」

圭太「おばさーん！！」

何故かアリスと圭太が号泣した。

忍「どうしてアリスと圭太君が泣くんですか!？」

アリス「何だかママに会いたくなってきたよ・・・」

忍の母「じゃあビデオ通話してみる？」

夜。タブレットを操作してビデオ通話開始。

アリスの母『ハイ。』

圭太「アリスママー！お久し振りですー！」

忍「アリスママです！動いて喋ってます・・・！これリアルタイムですか!？」

勇「当たり前でしょ？」

圭太の母「幻だと思ってるの？」

アリス「ヒイイー!!まさかこんなに文明が発達しているなんて!!!」

勇「若者の発言じゃない!？」

圭太「逆ジエネレーションギャップ!」

翌朝。

アリス「ふあゝ・・・シノ起きてる・・・今日から学校だよ・・・あれ?」

起こしに行つたが、ベッドに忍の姿がない。

忍「おはようございます!アリス!」

制服に着替え終えた忍が部屋のドアを開けた。

アリス「シノ!?!シノが自分で起きるだなんて!あ、そつか。これは夢だね。早く起きなくちゃ。」

布団に潜つて夢から覚めようとした。

忍「アリス!!遅刻してしまいますよ!!」

学校。アリスが落ち込んでる。

圭太「アリス。」

アリス「ケイタ・・・」

圭太「どうしたんだ？元気ないけど。」

アリス「うん・・・はあ・・・」

ため息した瞬間。忍がアリスのため息をキャッチした。

忍「アリス！ため息つくとき幸せが逃げてしまいますよ！勿体無いです！ああ・・・貴  
重なアリスの幸せが・・・私はどうしたら・・・スウウ。」

ため息を胸に当てた。

アリス「吸収した!?!」

圭太「貴重なアリスのため息を取り込みやがった。」

忍「アリスの幸せは、私の幸せですの。」

アリス「そんな、お前のものは俺のものみたい・・・」

圭太「何処のジャイアンだよそれ・・・」

忍「代わりに私の幸せを差し上げますよ！」

ギユツと抱き締めた。

圭太「お前アリスをもふもふしたいだけだろ。」

忍「・・・あれ？アリス、今日は何だか元気がないですね。」

アリス「うっ！そんな事ないよ！全然いつも通りの私だよ!？」

忍「いえ！アリスの平熱から金髪の本数を把握している私には分かります！」

アリス「そんな事まで!？」

圭太「ストーカー!？」

忍「それよりも、何か悩みがあるなら言って下さい。」

圭太「何があったのか聞かせてくれ。俺も協力する。」

忍「そうですよ。私達の仲じゃないですか。」

アリス「う、うん・・・あのねシノ・・・ケータ・・・実は・・・『私、高校を卒業したらイギリスの大学に行くの。でもシノと離ればなれになるのは嫌だ。どうしよう

!』

英語で本心を打ち明けた。

圭太「アリス・・・」

忍「え？何て？」

アリス「あうう！伝わらなきや意味がないよ！」

忍「ふふつ。やっぱりアリスの英語は癒されますね。」

アリス「シノ・・・もう1度！『私、高校を卒業したらイギリスの大学に行くの。でもシノと離ればなれになるのは嫌だ。どうしよう！』」

忍「・・・まあ！おわかりありがとうございます!!」

圭太「何が!？」

アリス「違うよー！私のバカバカーーーー!!」

伝われなくてへアバンドした。

忍「アリス!?大丈夫ですか!？」

その後アリスは皆と距離を取る。

綾「確かに様子が可笑しいわ。」

浩輔「でも圭太は理解して傍に居てあげてる。」

アリス「はぁ・・・」

圭太「元氣出せよ。」

カレン「凄く悩んでマス！」

陽子「1年の時、ちよつとホームシックになった時に似ているな。」

忍「ママともビデオ通話で話していますし。それはなさそうですよ？」

陽子「まあそうだよね。」

浩輔「じゃあ一体何が・・・」

綾「だとしたらやっぱり・・・恋の悩み以外考えられないわね!!」

陽子「言うと思ったよ。」

浩輔「恋の悩みって、もう恋まっしぐらだな。」

綾「アリスは恋しているのよ！でも告白する勇気が出ないの！」

陽子「アリスが・・・大人になったもんだ。」

浩輔「んで、告白する相手は？」

綾「恐らく圭太ね。いつもアリスの相談相手になっているし、その時に距離が縮んだとか。」

陽子「まさか。」

浩輔「ないない。圭太に限ってねえよ。」

綾「出会った頃は、あんなに小さかったのに。あんなに……あんなに小さかったのに……」

何故か赤ん坊時代まで遡った。

陽子「その頃は知らないだろ!!」

浩輔「扱い酷くね!?!」

綾「何かショックね。アリスは全世界の妹なのに……」

陽子「アリスの事で皆悩み出した!!」

浩輔「1年の頃の俺かよお前!!」

忍「あの……実は私も、アリスに告白したい事があるんです。」

綾「アリスに告白!?!何そのシチュエーション!?!少女漫画みたいだわー!!」

陽子「ベタだなあ〜。」

浩輔「全くだな。」

綾「そうだわ!アリスが告白する前にシノが告白すればいいのよ!!」

忍「あ、えつと……私は別に愛の告白ではなく……どうえ!?!」

綾「セッティングは任せて!!」

忍「綾ちゃんがイキイキしています!？」

陽子「お、おい!!」

浩輔「待てよ綾!!おい!!」

図書室。

忍（今朝のアリスは、私に何かを伝えようとしていました。圭太君はすぐ理解してくれました。あれは何で言っていたのでしょうか？単語は幾つか聞き取れたのですが…早口はネイティブ過ぎて難易度高過ぎです！）

綾「ねえシノ。勝負服コーデについてだけど。」

着物の雑誌を見せた。

陽子「勉強の邪魔をするな！」

一方アリスと圭太は。



圭太「アリス。おいアリス。」

アリス「はっ！悩んでたらいつの間にかもう放課後だよ!!」

圭太「物凄い時間食ったな。そろそろ帰ろ？」

アリス「うん。」

綾「アリス！圭太！」

アリス「アヤ！」

圭太「お前からどうした？」

綾「今日は私達用事があるから、しのと3人で帰ってきてくれる？」

アリス「え？いいけど。」

圭太「つてか何で俺も？」

2人が教室から出ると。

アリス「うわっ!?!」

圭太「はえ!?!」

忍「はあ・・・はあ・・・アリス圭太君帰りましょう・・・」

苦しい着物が勝負服。

アリス「何で着物着てるの!？」

圭太「よく持って来れたな!それ!」

忍「アリスが好きな服なので・・・」

アリス「好きだけど!!」

中庭。忍が告白のセリフをメモったメモ帳を読む。

忍「月が綺麗ですね。」

※I love youの意。

アリス「シノ・・・」

忍とアリスが同じベンチ。その隣に圭太が距離を取って座ってる。

綾「きゃー!いい感じだわ!」

浩輔「圭太に告白される前の勝負・・・」

アリス「シノ……今日は1日ブーツとしてごめんね……」

忍「いえ。私もアリスの悩みに気付かなくてごめんなさい。」

アリス「……」

忍「伝わりましたよ。アリスの英語。」

2人がベンチから立ち上がって歩き出す。

忍「アリスは卒業したら、イギリスへ帰ってしまうのですね。」

アリス「あ！」

圭太（やつと翻訳したか。）

アリス「わ、私の英語を理解出来るなんて!!何奴!?!」

忍「忍ですけど。正確には言葉ではなく、心を読み取ったのですが。」

アリス「翻訳してない!?!」

圭太（意味ないじゃん!!）

忍「それでアリス。」

アリス「ん？」

忍「私の告白を、聞いてくれますか？」

アリス「ええ!?!何……?」

忍「私……お母さんの通ったイギリスの大学へ行きたいんです!!」

アリス「っ!!」

忍「ずっと考えていたのですが……言い出せなくて……アリス達と離ればなれになるのが怖かったのかも知れません……」

アリス「私も……シノと離れたくなくて言えなかったの!!」

忍「……私達、考えてる事は一緒だったのですね!」

綾「ちよつと!!」

忍・アリス「わああ!?!」

圭太「綾!?!」

綾「告白のベクトルが違うわよ!!」

茂みから他の3人も出て来た。

アリス「皆居たの!?!」

浩輔「すまんアリス!!」

アリス「びっくりさせちゃってごめんね。」

陽子「確かに驚きの大告白大会だったけれど。」

綾「うん。何とか納得だわ。」

浩輔「中学の時にイギリス留学って言ってたもんな。」

7人で下校。忍は制服に着替えた。

綾「それにしても、海外留学ね。」

圭太「中学の頃の伏線が回収されたな。」

陽子「アリスは兎も角、しのは心配だな。」

圭太「通えるのか？お前。」

忍「大丈夫です。私イギリスの料理大好きですので。」

陽子「食文化の心配じゃなくて学力の心配だよ!!」

綾「後進路が決まってるのは、カレンだけね。ん？カレンは？」

圭太「あれ？さっきまで居たんだが・・・」

学校に戻ってカレンを探す。

陽子「カレン何処だー！」

浩輔「カレン出て来ーい！」

教室、廊下、図書室を隈なく探すが何処にも居ない。

居なくなったカレンは、暗い空間に隠れて泣いていた。

カレン「うう・・・」

アリス・圭太「カレン。」

カレン「ギャアアー!!」

蓋を開けてカレン発見。

カレン「な、何故バレたデス!?!」

アリス「こんな不自然な段ボールがあつたら普通気付くよ。」

圭太「屋上にでつかい段ボール。つてかその段ボール、1年の頃にやったかくれんぼの時俺が使った奴じゃねえか。」

カレン「……………」

圭太「何で隠れたのか、話してくれるか？」

段ボールから出て、2人に話した。

カレン「私……アリスとシノのイギリス留学応援したいです……でも……私本当は……アリスと離ればなれになるのは嫌です……なのにアリスは私を置いて遠くへ行くのデス……嬉々として……」

圭太「ブツ！」

アリス「語弊があるよ!!ってカレン……もしかして……」

カレン「いつもなら、アリスがイギリス帰るって言うなら私も付いて行くって言ったと思うデス……でも私……日本での生活が楽しくて……まだもう少し日本でしか出来ない事をやりたいのデス……アリスも好きですが……日本も好き……私はどうしたら……」

アリス「国と天秤にかけられてる……!?」

圭太「それがカレンの本音か。」

カレン「はい・・・」

アリス「カレンはカレンのやりたい事をして欲しいな。それに、日本とイギリスって思っている程遠くないんだよ？」

カレン「OH・・・」

そこに忍達4人が来た。

陽子「居た！」

忍「カレン！居ました！」

浩輔「心配したんだぞ！」

下校中。

綾「それじゃあカレンは日本に残るのね。」

陽子「よく決断したな。」

浩輔「またアリスと離れちゃうのに。」

カレン「寂しくなったら会いに行きます。隔週位で！」

アリス「隔週!?!」



陽子「九条家の財力だったらやりかねない・・・」

忍「私達の方が寂しくなってしまうのかも。」

アリス「それは大丈夫。」

カレン「日本の大学でアリスみたいな小ちやい子と仲良くなっちゃいマス。」

アリス「ちよつと何それ!?カレン!!」

逃げるカレンをアリスが追う。

陽子「弄ばれてる。」

綾「今度はアリスがカレンを追い掛けに行きそうね。」

圭太「そう言やカレン。志望校はどうなった?」

カレン「ん?えつと・・・この大学とか。」

スマホで志望校を見せる。

陽子「つて私達の行きたい女子大じゃん!!」

カレン「大学行っても宜しくデス!」

陽子・綾「軽!!」

浩輔「どんだけ余裕持ってるの君は!?!」

陽子「そうだよ!私と成績変わらないのに!」

カレン「まあ、何とかなると思ってる。」

圭太「心配だ……」

アリス「アヤ。カレンを宜しくね。」

綾「任せて。」

図書室。いよいよそれぞれの進路に向けて、圭太を除いた忍達6人は受験モードに入った。

浩輔「ここがこうで……ここが……これだな。」

陽子「あ……」

綾「あ！」

突然陽子がダウンした。

綾・浩輔「陽子！」

忍「陽子ちゃん！」

アリス・カレン「ヨーコ！」

陽子「あはは……昨日ちよつと頑張り過ぎたかな……？」

HPが残り僅か。

カレン「ヨーコが瀕死状態デス！」

忍「ゲツソリしてますね。」

浩輔「やる気スイッチが限界に達したか!？」

アリス「アヤ！これ以上ヨーコの生気を奪わないで！」

綾「私のせいなの!？」

冬の夜の大宮家。

勇「金髪立ちねえ。」

忍の母「そう。アリスちゃん達に頼り過ぎるからって。」

忍の部屋を覗く。

勇（え？）

忍はまだ勉強をしていた。

勇（いつもならとっくに寝ている時間なのに。）

ドアをそっと閉じた。

勇（忍は昔から好きなものに一直線で……イギリスのホームステイも、私の心配とは裏腹に一回りや二回りも外国愛を大きくして帰って来た。ちよつと羨ましい。）

忍「んん……！……アリス。待っていて下さいね。」

“コンコン”

忍「はい！」

勇「優しいお姉様が夜食を作ってあげたわよ。」

忍「ええ!? あ、あの、あの……」

勇「大丈夫よ！お母さんに手伝って貰ったんだから。」

忍「それならば……ありがとうございます！」

勇「失礼過ぎるわ。……忍の好物にしてみました。」

フィッシュ&チップス。

忍「夜食のメニューじゃないです！」

でも頂く。

忍「あ！でも美味しいです！良い感じですよ！」

勇「当然よ。ま、本場の味には敵わないだろうけど。勉強頑張つてイギリスで食べて来なさい。」

忍「お姉……ちゃん……？」

勇「私だつて一応……応援してるんだから……」

忍「……優しさが怖い!!」

勇「怯える場面じゃないわよ……」

フィツシユ&チップス完食。

勇「つで、金髪立ちはどう？」

忍「頑張つて集中しているのですが……そろそろ金髪少女が……」

金髪少女の人形に手を伸ばす。

勇「ダメじゃない。」

忍「やっぱり私には、好きなものが近くにあつた方がパワーを貰えます。金髪少女。

外国の本。友達。家族。お姉ちゃん。」

勇「私？」

忍「はい！いつも沢山パワーをくれてありがとうございますとございます！」

勇「・・・お、おかわり作ってあげるわ!!」

忍「それはもう結構です。」

勇「ん？何ですってー!?」

忍「ご、ご、ごめんなさーい!!」

リビングで忍の母が紅茶を淹れていると。

忍の母「あ。」

外に雪が降り始めた。

お正月の神社。

烏丸先生「気合入ってますね。」

久世橋先生「はい！今年が生徒達にとって大事な年ですから！センター試験目前ですし。私に出来るのは神に祈る事だけ！」

烏丸先生「ああ！お財布落としちゃった。」

久世橋先生「落ち!？」

烏丸先生「あらあら色々落ちまくり。」

バッグから物を落としてる。

久世橋先生「わざとですか!？」

烏丸先生「まあまあ。先生が受験する訳じゃないんですから。」

久世橋先生「それはそうですが・・・」

烏丸先生「お賽銭幾ら入れます?」

久世橋先生「っ!」

一万円札。

烏丸先生「一万円!? 奮発し過ぎでは・・・?」

久世橋先生「これは九条さんの分! これは猪熊さんの分! これは・・・小路さんの分・・・

これは・・・」

大量の一万円札。

烏丸先生「まさか生徒皆の分!? 止めて下さい! 破産してしまいます!!」

お参り終えた後。

久世橋先生「結局一万円札のみにしましたが……これで皆の願いが叶うのでしょうか……」

烏丸先生「充分過ぎます！ 気持ちは分かりますが、もつと生徒の力を信じて下さい！」  
久世橋先生「そうですね……すみません！ 烏丸先生は受験の時に願掛けとかしました？」

烏丸先生「しましたよ？ 1日1回、合格の舞を踊っていました。」

久世橋先生「合格の舞？」

烏丸先生「実際に合格しましたし。効果はあつたと思うわ。」

久世橋先生「成る程！ 是非教えて下さい！」

合格の舞。

烏丸先生「ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！」

久世橋先生「あ、もう始まってます……？」

烏丸先生「恥を捨て、煩惱を取り払う為です!!」

久世橋先生「は、はい!!」

烏丸先生・久世橋先生「ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！」



合格の舞を踊る。

それを見てる陽子の弟の空太。

美月「空太。何見てるの？」

空太「うん。何か変な踊りを踊ってる人達が居たから。」

美月「あんまり見ない方がいいよ。」

空太「絵馬書けた？」

美月「一応。比奈は？」

比奈「私は女子力アップ！」

空太「そう言えば比奈のお姉ちゃんって、もう受験合格してるんだよね？」

比奈「うん！」

彼女の名前は日暮比奈。香奈の妹である。

美月「優秀ね。」

比奈「美月は何て書いたの？」

美月「え!? えつと・・・身長アップ・・・かな・・・?」

比奈「何で隠すの？」

美月「別に！特に意味はないけど！」

空太（嘘だな。）

美月「もういいから！早くおみくじ引きに行くよ！」

比奈「えー？」

美月の絵馬には、『お姉ちゃんが合格できますように』と書かれてあった。

空太「被った。フツ。」

美月「空太ー！早くー！」

空太「はいはい。」

彼も姉の合格祈願を書いたのだった。

湊「お参り何願った？」

勇「妹の学力が上がるように願っておいたわ。」

湊「あはは。優しい。」

若葉「これをお願い叶えられそうです。」

智流「だからって札束持って来んなよ。」

光明「あはは。若葉ちゃん相変わらず。」

真魚「ねえねえ、おみくじ引きに行くつすよ！」

烏丸先生「カレンさん達は初詣来てるでしようか？」

久世橋先生「いえ！人混みは出来るだけ避けるべきです!!風邪でも引いたら大変!受験生こそいつも通りの生活を心掛けないと・・・」

その時、『H A H A H A H A H A H A』と言う笑い声が聞こえた。

久世橋先生「!？」

陽子「うわあ!やったなー!？」

雪合戦してる陽子とカレン。その近くに忍とアリスと圭太。

久世橋先生「いつも通り・・・カラー!この大事な時期に何してるんですか!!」

カレン「久世橋先生!!」

圭太「烏丸先生まで!!」

忍・アリス「明けてましておめでとうございます!」

カレン「久世橋先生も初詣に・・・へ・・・へ・・・へクチツ!」

久世橋先生「ヒイツ!?ほら言わんこつちやない!そんな薄着で遊んだりするから!!」

自分のコートとマフラーでカレンを温めてあげた。

久世橋先生「全く!受験生としての自覚が足りないですよ!はっ!また私が生徒に

酷い事を・・・」

カレン「3年になって担任の先生が変わったので、何だか久し振りデス。やっぱり久

世橋先生に叱られると背筋が伸びマース!」

久世橋先生「九条さん・・・だったら!!もつともつと叱ってあげます!!」

ギリギリとカレンを抱き締める。

カレン「もう充分デス・・・!」

圭太「先生!カレンが苦しんでます!!」

綾「わーーーー!!」

おみくじを引いた綾が笑顔になって戻って来た。

アリス「アヤ？どうしたの？」

綾「聞いて？さっきおみくじ引いたんだけど、何と大吉だったのー！」

アリス「いいなー！私も引こつと！」

圭太「俺も引くか。」

2人がおみくじを引くと、2人共大吉が出た。

アリス「私も大吉だった！」

カレン「私もデス！」

圭太「俺も大吉だ！」

忍「ヒャー！私もですよ！」

綾「もしかして大吉しか入ってない!？」

陽子「ギヤアアアアアアアアアア!!」

浩輔「ウギヤアアアアアアアア!!」

しかし浩輔と陽子は凶だった。

陽子「凶じゃん!!」

浩輔「最悪じゃん!!」

綾「え!?嘘でしょ!?運だけあると思ってたのに!？」

忍「陽子ちゃん!浩輔君!しっかりと下さい!私去年大凶でしたが、幸せな1年でしたよ?」

圭太「ポジティブだな。」

陽子「受験の年に凶を引いた事が問題なんだよ・・・」

浩輔「どうしよう・・・神様に見放され・・・」

陽子「私は・・・」

浩輔「俺は・・・」

2人が真っ暗になった。

忍「あわわわ!陽子ちゃんと浩輔君が細長く!」

久世橋先生「大丈夫です!良い方法があります!」

浩輔「久世橋先生・・・?」

久世橋先生「烏丸先生の合格の舞です!これを踊れば合格間違い無しです!」

陽子「マジで!?教えて!!」

浩輔「久世橋先生!お願いします!」

久世橋先生「さあ!私に続いて踊って下さい!!」

合格の舞を3人が踊る。

陽子・浩輔・久世橋先生「ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！」

綾「何これ……？」

陽子・浩輔・鳥丸先生・久世橋先生「ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！ホッホッホー！」

周りの参拝客の注目を浴びながらも踊り続ける。

比奈「美月、何見てるの？」

美月「え？何も……」

空太「現実から目を逸らすなよ……」

勇「湊、どうしたの？」

湊「ううん……（何やってるのよあの弟……）」

智流・光明「……」

萌子「智流君? どうしたの?」

直「何だあの踊り?」

智流「何でもない。行こ?」

光明「見なかった事にしとこう。」

数日後の大宮家。

アリス「そわ・・・そわ・・・そわ・・・そわ・・・そわそわそわそわ・・・」

今日のアリスはそわそわして落ち着きがない様子。そわそわアリスを忍がビデオで撮ってる。

アリス「うわああ!? ちょっとシノ!! 何撮ってるのー!?!」

忍「アリスがそわそわしているので、お手洗いを我慢しているのかなって。」

アリス「違うよ!! それで撮るってどう言う事なの!?!」

忍「では何故そわそわダンスを?」

アリス「センター試験だよ。今日でしょ? 私とシノは起きないけど皆が心配で・・・」

忍「ああ、成る程。それならきつと大丈夫ですよ。それより、卒業旅行についてなん



ですけど！」

アリス「軽!? シノ! 今皆はそれ所じやないの!! 全員無事に合格出来なかつたら旅行は無しだよ!!」

忍「え!? お、踊らなきや!! 合格の舞を!!」

アリス「そわそわく．．．」

そわそわダンスと合格の舞のコラボ。

勇「2人共何で踊ってるの．．．?」

女子大の試験が終わった。

陽子「ううう．．．何とか終わった．．．帰りにどつか寄つてく? お腹ペコペコだよ。」

綾「それより、しのとアリスと圭太に無事終わったって連絡しなきや。」

穂乃花「あれ? 彼処に居るのって。」

校門前でバテてる忍とアリスが居た。

陽子「アリス!!」

綾「しのも!」

陽子「何があつた!？」

アリス「ううう……み、皆の為に……私達も何かしたくて……踊り続けたんだよ!合格の舞を！」

綾「どうしてそんな無意味な事を!？」

浩輔「お。皆終わったみたいだな。」

綾「浩輔!試験は終わったの?」

浩輔「まあな。後は合格を待つのみ。」

陽子「丁度良かった。浩輔も一緒にどっか寄つてく?お腹ペコペコで。」

浩輔「頭の使い過ぎで空腹が増したか。圭太も誘うか。」

松原家が営むレストランへ。

アリス「皆お疲れ様々。」

綾「アリスもね。」

忍「センター試験が終わったら、次は二次試験ですね。」

綾・カレン・穂乃花「ウッ！」

浩輔「うわぁ・・・」

陽子「それな・・・」

忍「ああ！陽子ちゃんが細長く！」

圭太「お前が抉ったせいだろ？」

綾「頑張つて陽子！後1ヶ月の辛抱よ！」

陽子「受験が終わるか・・・私が消滅するかのデッドヒート状態だよ・・・」

圭太「凄えバトルだな・・・」

カレン「H A H A H A！ヨーコ消えるデスカ！」

陽子「何が可笑しい!!!」

浩輔「陽子堪えろ!!」

穂乃花「カレンちゃん、いつも以上にテンション高い気が・・・」

綾「まだ受験が終わってないのに緊張感がないわ。」

アリス「んく・・・」

カレン「H A H A H A H A H A！」

アリス「あれは空元気だと思っうよ？」

綾「そうなの？」

圭太「本当だ。目が真っ黒。」

穂乃花「そう言えば、いつもより目尻が下がっているかも。」

アリス「それによく見て！お団子はいつもより逆だし！靴下もバラバラだよ！お団子へアーは逆。靴下は左右別々のを履いている。」

綾「本当だわ！」

穂乃花「分かり易く同様している！」

浩輔「違和感の正体はこれか！」

アリス「カレン！ポーツとしている場合じゃないよ！」

カレン「ポーツとなんてしてマセン！」

アリス「本当？二次試験でうっかり忘れ物なんてしない？」

カレン「アリスが心配せずとも忘れ物なんて！」

アリス「はい。私の鉛筆貸してあげる。これなら忘れないでしょ？」

カレン「？」

陽子「何それいいな！私にも！」

綾「言い値で買うわ！」

圭太・浩輔「必死!?!」

カレン「アリスのエンピツ・・・イギリスに居た時にも貸してくれマシタネ。」

アリス「返すのは、合格してからで良いからね。」

カレン「お守りになりマス！アリガトウゴザイマス！早速エンピツ転がす用に数字を書くだス。」

アリス「止めて!!」

陽子「ん！お守りなら私も持つてる！中学の時に綾に貰ったヘアピン！」

綾「陽子！まだ持つててくれてたの!!」

陽子「私の完璧な計画を聞いてくれ！これを身に付けて綾の生き霊を憑依させる！そして綾に良い点を取って貰うんだ!!」

圭太「憑依させんなよ！」

忍「その間綾ちゃんはどうなるんですか？」

陽子「えつと・・・寝てる？」

浩輔「ダメじゃん!!」

綾「何処が完璧な計画よ!!冗談じゃないわ!!」

穂乃花「私も！カレンちゃんから貰ったリボン着けて頑張るからね！」

ユニオンジャックカラーのリボン。

カレン「YES！カレンPOWERで絶対合格間違い無しデース！」

穂乃花「カレンちゃん大明神様ー！」

圭太「浩輔はお守りあるのか？」

浩輔「これだ！姉ちゃんから貰った合格祈願のお守り！これを肌身離さず合格してやるぜい!!」

圭太「湊さん流石。」

綾「わ、私だけお守りがない・・・ちよつと待って！誰か私にも何か頂戴!!」

お守りがない綾に、忍がお守りをあげた。

忍「綾ちゃん。私の作ったお守りを受け取って下さい。」

綾「しの・・・!」

忍「このこけしの髪飾りに、私の金髪愛を込めました!」

綾「ヒイ!」

アリス「わあー!綾いいなー!」

圭太「欲しいんだ。」

綾「・・・」

忍「あれ?あんまり嬉しくありませんか?」

綾「え!?!ううん、あ、ありがとうしの。きつと力になってくれるわ。」

こけしの髪飾りを着けた。

綾（何だか、邪念が流れて来るような・・・）

陽子「無駄にハンデ背負ってない!」

後日の学校。

生徒「先生！大学受かったよ！」

烏丸先生「おめでとう!!」

職員室。

烏丸先生「ううう・・・合格報告が続々と・・・嬉しいですね！」

久世橋先生「はい。ですが嬉しい報告だけではないのもまた事実・・・運命は神のみぞ知るものです・・・」

カレンのぬいぐるみを見詰めながら悟る。

烏丸先生「それ手作りですか？そう言えば、カレンさん達の二次試験って明日ですよ  
ね？」

久世橋先生「う、嘘おー!？」

烏丸先生「何で把握してないんですか!？」

久世橋先生「合格祈願のぬいぐるみ作りに没頭し過ぎて！」

カレンの他に陽子、綾、浩輔、穂乃花のぬいぐるみも作ってた。

烏丸先生「作り過ぎです!!」

他にも圭太と忍とアリスと生徒達のぬいぐるみも作ってた。

久世橋先生「どうしよう!! 九条さん!! 大丈夫ですか!?! 何とか言っして下さい!!」

烏丸先生「久世橋先生。それはぬいぐるみです。」

後日の大宮家。

カレン「アリスー!!」

アリス「カレン! 皆も!」

二次試験を控えた陽子達がお邪魔した。

忍「どうしたんですか? 今日二次試験の日じゃ。」

カレン「やるだけ頑張ったので、アリスのPOWERを貰いに来マシタ!」

陽子「皆! アリスの学力を吸収するんだ!」

アリス「えええー!?!」



4人がアリスを抱き締めて学力を吸収しようとしてる。

忍「私の金髪愛も差し上げますよ。」

陽子「止めろ！余計なものを入れるな！！」

外に出た。

綾「2人の顔を見ると、緊張が解れたような気がする。」

陽子「やるだけやって来る！」

穂乃花「朝からお邪魔しました。」

カレン「行つて来るデース！」

アリス「皆！待ってるね！」

忍「全力で応援しています！」

4人が二次試験へ向かう。

アリス「大丈夫かな？私の方が緊張するよ。」

忍「大丈夫ですよ。皆すつごく頑張っていましたから。絶対何とかできますよ！」

アリス「相変わらず軽いけど・・・うん！シノが言う大丈夫な気がしてきた！」

忍「はい！」

4人が二次試験へ向かう途中。

陽子「お！圭太！」

前を横切る圭太の姿を発見。

圭太「よう皆。今日は二次試験だな。」

綾「ええ。浩輔は大丈夫なの？」

圭太「ああ。昨日の二次試験を終わった後すっごいグツタリしてた。」

穂乃花「香川君はどう？」

圭太「ああ。卒業後は俺をスカウトした事務所へ所属する。タレントは初めてで緊張するく……そうだ皆、俺からのパワーを分けてあげようか？」

カレン「OH！ケイタPOWER！」

圭太「これを使ってくれ。」

4人に紺色の石をあげた。

穂乃花「石？」

圭太「パワーストーンだ。そいつはソーダライト。学力・理解力・判断力・話術の向

上、理想的な行動に導く意味が込められてる。これで二次試験を突破出来る事を願ってるぜ。」

陽子「凄え！」

綾「ありがとう圭太！」

カレン「ではケイタ！行って来るデース！」

穂乃花「頑張るね！」

圭太「おう！」

女子大。二次試験会場。

陽子「よし皆!!持てる力の全てを出して頑張るぞ!!」

綾・カレン「オーー!!」

陽子「お守りも着けて来た！」

カレン「私はアリスのエンピツデス！」

綾「.....」

カレン「アヤヤ大丈夫デスカ？」

陽子「そして私達には、圭太から貰ったパワーストーンがある！これで絶対合格だ！」

二次試験が始まった。彼女達はお守りの力を借りて次々と解答する。

夕方の大宮家。

忍「お・・・お帰りなさいませ・・・」

それぞれダンスと合格の舞を踊り続けていたこの2人。

アリス「し・・・試験どうだった・・・？」

4人は泣いてる。

アリス「結果が出る前から!？」

陽子「何かもう・・・全然自信ない・・・」

アリス「・・・カレンは？」

カレン「滑り止めは落ちてるし・・・手応えもゼロで・・・何の自信もありません・・・」

忍「標準語です!？」

カレン「もし大学落ちたら・・・遊び人になります・・・」

その場で倒れたが、綾が受け止めた。

綾「嫌よ!カレンも一緒じゃなきゃ!2人が落ちたら私も一緒に落ちる!!!」

陽子「おい!勝手に不合格にするな!まだ分かんないだろ!」

綾「陽子と一緒にの大学行けなかったら、私の女子大生ライフはどうなるの!？」

陽子「そんな事言われても・・・」

忍「大丈夫ですよ。皆あんなに頑張っていましたから。お守りの力を信じましょう!」

綾「そ、そうね。」

アリス「合格発表が楽しみだね。」

忍「そうですね。」

陽子「他人事だと思っ・・・」

カレン「・・・アリス・・・」

アリス「どうしたの?カレン。」

カレン「合格発表・・・アリスに確認して貰いたいデス・・・」

アリス「もう、仕方無いな。」

忍「弱ってるカレンも美しい!何かに目覚めそうですね!」

陽子「しのはもう色々目覚めてるだろ？」

女子大の入試合格発表日。

綾「遂に・・・この日が・・・」

陽子「震えが止まらねえ・・・」

カレン「アリス！宜しくデス・・・！」

アリス「任せて!!」

妖精コスチュームのアリス誕生。

陽子「何だその格好!？」

忍「特製！桜咲くコスチュームです!!全ての受験生へ合格の願いを込めました!!」

陽子「落ちたらどうするんだ!!!」

アリス「行って来る！」

人混みの前に立って、頑張ってジャンプして数字を見ようとしている。

アリス「・・・」

陽子「諦めるな!!」

綾「フアイトーーーーー!!」

人混みの中を掻い潜って合格発表へ目指す。

アリス「!」

後ろでは陽子と綾とカレンが拝んでる。

アリス「・・・!!」

綾「戻って来たわ!」

陽子・カレン「っ!!」

アリスが涙目になりながら戻って来た。

陽子「え?どっちだこれ・・・!?」

戻って来たアリスが泣いてしまった。

カレン「アリス!!はつきり言って下サイ!!」

綾「私達！もう覚悟出来てるから！」

アリス「・・・あつた・・・！番号!!!」

陽子・綾・カレン「・・・!!!」

3人は無事合格出来たのだ。

陽子・綾・カレン「ヤッターーーーーー!!!」

忍「おめでとございますカレン!!!」

アリス「良かったー！カレンー!!」

カレン「私より2人の方が泣いちゃってますデス!!」

陽子・綾「ヤッターー!!ヤッターヤッター!!」

アリス「あ!!ごめんヨーコ!アヤ!2人の番号はまだ見てないの!!!」

陽子・綾「ぬか喜び!？」

確認出来たのはカレンの番号だけで、陽子と綾の番号はまだ未確認。

自分達の番号を確認しに行く。

綾「怖い!陽子見て来て!!」

陽子「こんな序でみたいな感じで良いのか!？」



2人の番号は『363』と『365』。その番号が合格発表にあった。

陽子「あ．．．あ．．．あつたー！ー！ー！！2人共あつたよ綾ー！ー！！」

合格出来て綾を抱き締めた。

綾「な、何するのよバカー！ー！！」

抱き締める陽子突き飛ばした。

陽子「何で!？」

こうして3人は無事合格出来た。

アリス「本当に、皆合格出来て良かったよ。」

カレン「これでアヤヤの闇落ちは免れマシタネ。」

綾「ええ。危ない所だったわ。」

アリス「否定しなんだ!？」

ダークアヤヤ。Lv. 99。

カレン「これで晴れて卒業旅行に．．．ン？何か視線を感じるような．．．あ!」

その視線の正体は、木の後ろから覗いてる穂乃花と香奈だった。

カレン「ホノカ！カナ！」

香奈は手を振り、穂乃花は泣いてる。

カレン「ホノカ！どうしたデス!？」

綾「まさか大学落ちたんじゃ・・・」

穂乃花「カレンちゃん合格が嬉し過ぎて・・・！」

綾「だから紛らわしいんだよ!!」

香奈「穂乃花は皆より前に合格したよ。」

穂乃花「自分の合格より嬉しいよー!!」

カレン「穂乃花は私中心に世界が周り過ぎデス。」

陽子「よーし！今からおめでとうパーティーしようぜ!!」

綾「あ。」

桜の花びらが風に乗って舞った。

綾「桜の花びら・・・季節外れな・・・」

アリス「わわわわ!!」

その花びらはアリスの妖精コスチュームから舞ったものだった。

綾「アリスのスカートがああー!!」

忍「縫製が甘過ぎました!!」

陽子「拾えー!!」

その花びらは、たまたま近くを通った圭太と浩輔にまで飛んだ。

圭太「桜の花びら？まだ冬なのに。」

浩輔「ん？圭太、あれ。」

圭太「ん？」

忍とアリスと無事合格した陽子達を覗く。

カレン「桜！咲きマシタデース!!」

圭太「どうやら皆、合格出来たみたいだな。」

浩輔「俺達、4月から大学生か。」

合格出来た陽子達を、烏丸先生と久世橋先生も覗いて涙を流してる。

そして、遂に卒業式。

アリス「シノ！朝だよ！起きて！もう今日は大切な日なのに！朝が弱いのは克服したんじゃないかったの？」

まだ寝てる忍を起こして制服を着させる。

忍「すっかりイギリス時間に体が慣れてしまったみたいで……」

アリス「ここは日本だよ!!目を覚まして!!」

学校へ走る。

アリス「行つて来まーす」

忍の母「後で見に行くからねー!」

今日はアリスの母も来ていた。

忍「今日って何の日でしたっけ……?」

アリス「え!?寝ぼけ過ぎだよ!!今日は卒業式だよ!!」

駅前で皆が2人を待ってる。

陽子「来た!」

圭太「遅いぞ2人共！」

カレン「シャキーン！九条カレン！卒業式 Formal Mode！」

アリス「おはよう！カレン！ヨーコ！ケーター！コースケ！ん？アヤどうしたの？」

綾「う・・・うう・・・」

陽子「式も始まつてもないのにこの調子だよ。」

浩輔「涙脆いな本当。」

カレン「アヤヤ。沢山泣いてもいいようにトイレットペーパーあげマス。」

綾「いらぬわ!!何で持つて来てるのよ!!」

7人揃つて学校へ向かう。

陽子「一緒に登校するのも今日で最後か。」

圭太「あの頃に戻りたい気持ちだ。」

綾「この道を通る度、思い出すのね。この輝かしい日々を。」

穂乃花「カレンちゃん！皆おはよう！」

綾「あ！」

公園で玉乗りしながら回転してる穂乃花と、それをドン引きして見てる香奈と会つ

た。

穂乃花「見て！いつもより多く回ってるの！」

陽子「あの光景しか思い出せなくなりそう!!」

綾「思い出が上書きされる!!」

圭太「あはは！卒業式よりインパクトあるね〜！」

アリス「日本に来てから3年。長いようであつと言う間だったね。」

忍「そうですね。」

アリス「ちっちゃかった私も、立派な卒業生！富士山位大きくなれたかな？」

圭太「いやデカイな・・・」

陽子「卒業生って言うか、新入生に見えるな。」

忍「初々しいです！」

綾「変わらない素晴らしさもあると思う！」

アリス「ガン!!？」

圭太「最後までアリスの扱い酷くね？」

陽子「しのはちよつと変わった？」

忍「そうですか？」

綾「前より英語が出来るようになったわ。」

陽子「大学の自己アピール英語で出したんだっけ？」

忍「はい！何とか！」

アリス「シノ！すつごくよく書いてたよ！シノの金髪愛が伝わって来るような内容だったよ！」

圭太「変わらねえなあ・・・」

綾「それで受かったのが不思議だわ。」

忍「合格出来たのは、アリスのお陰です。」

アリス「シノが頑張ったからだよ！」

久世橋先生「A組の皆さん！体育館へ移動します！」

A組「はい！」

圭太「行こっか。」

アリス「うん。」

体育館で卒業式が挙行された。卒業生が入場。

カレン「やっ！ドーモドーモ！」

香奈「手を振るな！」

穂乃花「・・・見える・・・見えるよ！カレンちゃんの足元にレッドカーペットが！」

高速拍手。

香奈「穂乃花！後ろ痞えてるから！」

烏丸先生「学校長式辞。」

校長「卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。」

綾「ううう・・・校長先生・・・！」

陽子（校長先生の話でめっちゃ泣いてる・・・）

忍「・・・」

3年間の楽しい思い出とアリスと出会った日の思い出が、忍の頭にフラッシュバックした。

アリス「ううう・・・」



隣でアリスが泣いてる。

忍「アリス、大丈夫ですか？」

アリス「シノ・・・シノは何で笑顔なの・・・？」

忍「色んな事を思い出しました。アリスと出会った日。高校生活の3年間。そうしたら、涙より笑顔の方が出て来ちゃいました。」

アリス「シノらしいね。私もシノに習って笑って卒業するよ。」

笑う所か、また泣いた。

アリス「えへへ・・・ううう・・・」

忍「泣き笑い!?無理しないでいいですよ!」

校歌斉唱。綾はトイレトPPERを持って涙を拭きながら歌ってる。

卒業式が終わって教室に戻った。

陽子「良い式だったな!」

圭太「だな!」

忍「あれ？卒業証書は？」

綾「この後貰えるわよ。」

そこに久世橋先生が、怒った顔をして入った。

圭太「久世橋先生……？」

A組（うわあ……こ、これは……）

久世橋先生「皆さん。ご卒業……お……おめ……お……おめでと……」

陽子「涙を堪えてる!？」

綾「先生！頑張つて！」

久世橋先生「うう……それでは卒業証書を……つて九条さん!？」

何故かカレンがそこに居た。

久世橋先生「あなたは隣のクラスでしょ!？」

カレン「たった今烏丸先生から貰ったデスが、いっぱい迷惑掛けた久世橋先生からも

貰いたくて。」

久世橋先生「ああああ……!!九条さ……ん!!」

アリス「カレン！これ以上久世橋先生を泣かせないで!!」

圭太「早く自分のクラスに戻れ!!」

卒業証書を授与後、外では生徒達が烏丸先生と久世橋先生に花束を差し出していた。

綾「いよいよ卒業なのね。簡単に会えなくなっちゃうのも、寂しくないって言ったら嘘になるけど。」

陽子「まあ同じ地球上に居る訳だし。」

圭太「会いたくなったらいつでも会いに行けるんだし。」

浩輔「俺達は強い絆で結ばれてる仲間なんだし。」

綾「そうね。イギリスって、昔は凄く遠い世界だと思つてたけど、今は近くに感じるのはアリスとカレンが私達と親友になつてくれたお陰ね。」

カレン「YES!」

アリス「卒業しても親友だよ!」

カレン「これからもずっと一緒デース!」

忍「しかし、これで卒業式が終わるのも味気ないですね。異国情緒が足りません。」  
綾「そう?」

忍「海外ドラマでよく見る帽子を投げる奴をやりたいです!」

圭太「海外にハマりまくりだな。」

綾「でも投げる物がないわ。」

穂乃花「帽子の代わりに金髪を投げるのはどうかな？」

金髪のカツラを出した。

忍「名案です穂乃花ちゃん!!」

陽子「台無しだよもう!!」

金髪のカツラを投げた。

穂乃花「卒業おめでとぅ!!」

全員「おめでとぅ!!」

忍「序でにアリスも投げましょう!!」

カレン「OH! 胴上げデスネー!」

アリス「止めて!!」

圭太「あはは・・・」

卒業後のイギリス・コッツウォルズの丘の上。忍とアリスがティータイムしてる。

忍「桜の咲く頃に我が家にやって来て、3年間色んな事がありましたね。」

アリス「そうだね。」

忍「こうしてイギリスに、ホームステイでも旅行でもなく住んでるなんて不思議です。」

アリス「シノ・・・」

忍「アリス。」

アリス「？」

忍「改めて、これからも宜しくお願いします。」

アリス「うん!!」

忍「それじゃあ帰りましょうか。」

アリス「うん!! スコーンの材料買わないと。」

ポピー「ワン!」

忍・アリス「ん?」

遠くから、陽子と綾とカレンと圭太と浩輔がやって来た。

陽子「おーーい!」

カレン「アリース!!」

陽子・綾・カレン「しのー!!」

圭太「忍ー!アリスー!」

浩輔「おーい!」

アリス「カレン!」

忍「陽子ちゃん!綾ちゃん!圭太君!浩輔君!」

再会した7人が喜び合う。

カレン「久し振りデース!」

陽子「つて卒業式から半年も経ってないんだけどな。」

アリス「夕方に着くんじやなかったの?」

綾「思ったより早く着いちゃって。」

圭太「早い便に乗って来たんだ。」

陽子「いやあく、イギリスと日本って近いんだな。」

綾「飛行機で殆ど寝てたからでしょ?」

浩輔「相変わらずだな陽子は。」

7人「あはははは。」

カレン「2人共元気デシタか?」

アリス「うん!」

忍「イギリスは満喫中です！」

綾「こっちの大学は秋からよね。」

陽子「しのは何とかコースに入るんだっけ？」

忍「ファウンデーションコースですね。大学に入る前に、1年間英語の勉強をします。」

アリス「シノと一緒に入学したかったな。」

忍「教室は違いますが、同じキャンパスですから。」

圭太「いつでも会えるんだし良いじゃないか。」

カレン「と言う事は、アリスはシノの1年先輩になるんデスネ！」

アリス「フフツ♪先輩……」

カレン「そして！私はアリスの先輩デス！」

アリス「え!?そこは一緒でしょ!？」

カレン「日本の大学はもう始まってマス！」

丘を下りる。

忍「日本の大学生活はどうですか？」

綾「ようやく慣れて来たわ。」

陽子「うん！大学の近くに部屋借りてさ。」

カレン「アヤヤとヨーコは一緒に暮らしてるんデスヨ！私は入り浸ってマース！」

浩輔「ほぼ居候。」

忍「圭太君と浩輔君は？」

浩輔「楽しいぞ？大学って素晴らしいぜ。」

圭太「俺はもうドラマの主演に抜擢されてな。色んな番組に引つ張り風状態。今はフ

リー貰ってる。」

アリス「今度遊びに行つて良い？」

カレン「勿論デース！」

綾「つてカレンが答えてどうするの！」

圭太「機会があつたらドラマの撮影現場の見学に来るか？スタッフさん達に話しておくから。」

陽子「面白そうだな！」

忍「そうだ！見せたい物があるんです！日本から持つて来た写真なんですけど。金髪と黒髪のコントラストがまるで大聖堂のモザイク画のよう！」

綾「大聖堂の？」



陽子「モザイク画？」

忍「はい！更にドンドン貼って行つて、思い出で壁を埋め尽くすのが目標なんです！」

圭太「金の大聖堂のモザイク・・・きんいろモザイクか。」

浩輔「何だそれ？じっくり来る。」

カレン「WOW！早く見に行きまシヨウ！！」

陽子「あ！待てカレン！」

綾「危ないわよ！」

浩輔「待て待てー！」

圭太「俺を置いて行くなー！」

忍「私達も行きましょう。」

アリス「うん！シノ。」

忍「ん？」

アリス「これからも、いっぱい思い出作ろうね！」

忍「はい！」

『Thank You!!』